



即座に悟りを開く鍵

第一巻

チンハイウーサンズー
清海無上師

即刻開悟の鍵 1

スプリームマスター チンハイ

目 次

スプリームマスター チンハイのプロフィール 愛の道	5
1 真理と間違った道理	11
2 超世界の音	43
3 超世界の光	73
4 「花が開いて仏陀を見る」とは何か	107
5 観音法門の修行の利益	131
6 カルマはどこから来るのか	167
7 すべての修行法門は観音法門である	199
8 智慧眼の奥義	227

9	阿修羅衆生	259
10	悟りを開くとは何か	301
11	仏陀とは何か	335
12	三界以下の概況	371
13	善行や施しだけでは解脱できない	407
14	仏陀を拜んでも仏陀にならない	433
15	ビーガン（完全菜食）がもたらす利益	461
	印心―観音法門	487
	出版物の紹介	491
	私たちへの連絡方法	497

スプリームマスター チンハイのプロフィール…愛の道

スプリームマスター チンハイは、世界的に有名な靈性の指導者であり、芸術家、慈善家であります。彼女の愛の心はあらゆる文化と人種の壁を越えて、世界中の隅々まで届いています。マスターはオウラック（ベトナム）の中部に生まれ、青年期にはヨーロッパに留学し、そこで赤十字に勤務しました。その間、彼女は世界の至る所に、苦難に満ちていることを目の当たりにしました。それで苦難からの救済方法を探し出す決意をし、これが人生の目標となりました。当時スプリームマスター チンハイはドイツ人の医師と結婚していて、幸福な家庭生活を送っていました。別れることは彼らにとって極めて困難な選択でしたが、彼女は最後には、夫の祝福のもと夢を求めて旅立ちました。スプリームマスター チンハイは求道の旅を始め、靈性の開悟を追い求め、最後にヒマラヤで悟りを開いたマスターから、内面の光と音を観るメディテーション法門を伝授されました。これは後に彼女が伝授している「観音法門」です。彼女はある期間、修行に精進し、完全に悟りを開きました。

一九八〇年代に、スプリームマスター チンハイ インターナショナルアソシエーションが発

足されました。そのアソシエーションの主旨はマスターの教理です。そして人々の真摯な要望により、スプリームマスター チンハイは「観音法門」を伝授し、人々に自分の内面の偉大な本質を見付けだすよう、励ましてきました。後にアメリカ、ヨーロッパ、アジア、オーストラリア、アフリカの五大洲と国連の招聘に応じ、現地に赴き講演をしました。

スプリームマスター チンハイは慈悲にあふれ、貧困弱者に力を尽くして援助しています。彼女の慈善活動は世界のあらゆる境界を越え、世界各地の貧しい人々や、苦しい状況にある老人、受刑者、心身障害者、ホームレス、アメリカの退役軍人たちにまで及んでいます。地球温暖化により、さまざまな危機を誘発している現在、スプリームマスター チンハイは数百万ドルを寄贈して、人道的援助を行うと同時に、インターナショナルアソシエーションのメンバーが世界各地に赴き、被災者を助けるよう指示し、数えきれない人々を助けてきました。その他、スプリームマスター チンハイの愛は、地球上の貴重な友である動物や生態環境にまで及んでいます。彼女の慈悲深い愛は、世界の多くの人々を感動させ、人々に無私の愛の手本を示しました。マスターはまた、絵画、ランプのデザイン、ファッションデザイン、ジュエリーデザインなどの芸術創作活動を通して得た収益を、助けを必要とする神の子たちのために使っています。

近年、スプリームマスター チンハイは三部作を出版しました。「バード イン マイライフ」「ドッグ イン マイライフ」「気高い野生動物」この三部作はいずれも国際的にベストセラーに

なり、さまざまな言語に翻訳されました。これらの本はマスターが霊的なコミュニケーションと洞察力をもって、人類の友である動物たちの情感と考えを記録したもので、動物たちの高貴な精神と無私の愛を表したものです。

また道徳を広め、人々に見習うよう励ますために、スプリームマスター チンハイは二〇〇六年三月に「輝く世界の指導者賞」を設け、後にまた、「輝く世界の英雄賞」「輝く世界の愛情賞」「輝く世界の誠実賞」「輝く世界の発明家賞」などを設けました。これらの賞の受賞者は個人もいれば、国家や団体も含まれています。彼らは世界に手本を示し、平和と美しい地球の持続的発展のために大きな貢献をしました。たとえば、スロバニア共和国の第二代大統領ヤネス・ドルノウシエク博士、アメリカの第四五代副大統領アル・ゴア（国連気候変動に関する政府間パネルと共同で二〇〇七年ノーベル平和賞を受賞）、国連気候変動に関する政府間パネル議長、インドのエネルギー研究所の所長のラージェンドラ・パチャウリー博士（二〇一〇年に

UN-HABITAT 都市スピーチ賞を受賞）、NASAゴダード宇宙科学研究所主任研究員ジェームス・ハンセン博士（二〇〇九年にロスビー研究賞を受賞）、イギリスの有名な霊長類学者ジェーン・グドール博士です。

スプリームマスター チンハイも「輝く世界の英雄賞」「輝く世界の知性賞」を人類のよき友である動物たちに授与しました。もって動物たちが危険を顧みず、他の命を助けだした無私で

健全な行動を称え、動物たちの愛に満ちた勇氣と聡明さと思いやりの精神を称えました。

スプリームマスター チンハイは靈的な面だけでなく、物質面でも世界に多大な貢献をしています。彼女自身はいかなる報いも求めていませんが、世界各国の政府や非営利団体は彼女の献身的な奉仕を称えて多くの賞を授与しました。たとえば、二〇〇六年グシ平和賞、二〇〇六年第二七回テリー賞銀賞、二〇〇二年ロサンゼルス・ミュージック・ウィーク表彰状、一九九四年世界精神指導者賞、一九九四年世界市民人道主義者賞などです。この他にアメリカ政府の官僚から、二月二二日と一〇月二五日をチンハイデーと定められました。今でも彼女はこの世界を助けるために全力を尽くしています。数多くの世界のリーダーたちと民衆は、彼女に対し感謝しています。

スプリームマスター チンハイは環境保全の先駆者としても有名です。彼女は智慧と勇氣をもって、気候温暖化問題に対し、警告を發しました。実際、彼女は二十数年前から、すでに環境保全を呼びかけています。彼女が「もう一つの生き方」、「SOS地球温暖化を阻止しよう」という活動を地球規模で展開し、地球温暖化阻止国際会議にも出席し、ゲストとして、基調報告を行い、人々に現在世界的に頻繁に起きている、災害の根本的な原因と解決の道を示しました。それはつまり、慈悲深い、ビーガンライフスタイルです。現在、人々によく知られている「ベジタリアン」になって、平和な世界を創る」これはスプリームマスター チンハイが發案したスロ

ーガンです。

食生活が気候に大きな影響をもたらしていることから、人々に慈悲に満ちた、持続可能なライフスタイルを提供するため、ビーガンレストラン「リビングハット」はスプリームマスターチンハイの呼びかけに応じて大きく発展しています。これらのレストランは大人気を集め、世界各地にチェーン店があり、安くて美味しく、しかも栄養バランスのとれた、様々なビーガン料理を提供しています。人々に健康的な食生活を勧め、最も有効な温暖化阻止の道を示しています。それにより、この地球と住んでいる人々、そして生きとし生けるもの、私たちの子孫を保護し、地球温暖化よってもたらされる、絶滅的な危機を免れるよう最善を尽くしています。

この時代において、スプリームマスターチンハイは献身的に奉仕し、苦勞をいとわず、世界の人々を助け、大事な地球のために、光り輝く未来を切り開いています。

メッセージ

靈性の師であり、芸術作家でもあるスプリームマスター チンハイは、内面の美を表現することとを、こよなく愛しています。そういうわけで、彼女はベトナムを「オウラック」、台湾を「フオルモサ」と呼んでいるのです。オウラックはベトナムの古称で「幸福」を意味し、また、フオルモサの名はその島と人々の美をより完全に表しています。マスターはこれらの名称を使うことで、その土地と住人の靈性を上昇させ、福報をもたらすと感じているのです。

ビーガンのライフスタイル

スプリームマスター チンハイは講義の中で菜食について言及しています。二〇一〇年からは「ビーガン食生活」を人類の理想的なライフスタイルとして力強く、熱心に、強く推進していきます。これも博愛の精神によるもので、ビーガン生活は動物たちが受けている大きな苦しみをなくし、人々が病気による苦しみから免れるためでもあります。また二〇一〇年四月十四日からビーガン食生活を印心の条件の一つに定めています。（ビーガンとは全く動物性成分も含まれていない食べ物のことを指します。つまり乳製品、魚、鶏と卵（受精卵、未受精卵を含む）などです）



真理と間違つた道理

スプリームマスターチンハイフォルモサ・台北

一九八六年十月二十日

法を弘める時、この肉体や車に頼らなければなりません。また、講演を聞きに来る人がいないとできません。人々が講演を聴きに集まって来ても、私たちの車が動かなくなったり、車が動いても運転する人がいなくなったりするかもしれません。また、運転する人がいても聴衆が来ても、私が病気になるかもしれない。みなさんは私が病気のために講演会を中止したと、聞いたことがありますが。まだないですね。そうでしょう。時には病気になつてもしなければならなかったのですが、みなさんは知らないだけです。この世界で法を弘めることは簡単なことではありません。なぜなら、この世界中のすべての物質的なものは魔のパワーから作られたからです。物質的なものとはどんなものでしょう。この肉体、ご飯、飲み水、衣服などすべて魔のパワーから作られたもので、物質的なものを相手に仕事をするのは簡単ではありません。なぜなら、私たちは法を弘めなくてはならないからです。法とは何でしょう。それは触ることのできない

もの、説明したくても容易ではなく、せいぜい少し話せるくらいです。本来、真理は口で言うものではなく、言語で表現することができません。ですから、この肉体で法を説明したり、物質的なものを使って法を弘めたりすることは簡単ではありません。物質的な物は粗雑で、智慧のレベルに属していません。この智慧を持っていないものを使って、大智慧の状況を説明することはあり得ないことです。

第一に、粗雑なもので無限な大智慧を説明するのは難しいことです。第二に、聴衆もまた、物質的な道具に頼って経の講義を聞きに来ているので、高尚で不可思議な最高の教理、大智慧を理解することは簡単ではありません。両方とも容易なことではありません。私が講義をするのも簡単ではありませんし、みなさんが聴くことも簡単ではありません。ですから、真理を理解することは実に容易ではありません。

真理を理解するには自分自身の仏性で認識し、体験すべきであり、真理を伝えるにも言葉ではなく「以心伝心」でなければなりません。歌を歌い、仏陀に礼拝し、念仏したり、経の講義をしたりすることはすべてABCの初歩段階にすぎません。みなさんはまずABCを聞いて、それから好奇心が湧いてきてもっと知りたくなり、もっと自分のレベルを向上させたいのです。毎日ただABCを唱えるだけではつまらなく感じるでしょう。このことを理解するには、「印心」を受けなければなりません。それが私たちの法門です。

法門と言つても何もありません。けれども、印心は非常に重要です。印心とは「以心伝心」のことで、心とは意識のことです。心で法を伝えるのです。法を伝えるとは決して話すことではありません。私が言葉で道理を話して、みなさんにどうすべきかなどと教えることではありません。そういうことは外面的な次元に属することです。

印心の時、私はみなさんに「やつてはいけないこと」を教えます。話の内容はいずれもやつてはいけないことで、何をすべきかではありません。私はみなさんにこれはダメ、あれもダメ、何でもダメと言います。そしてこそ、自分の仏性を見つけることができるのです。これは矛盾しているように聞こえますが、そうではありません。というのは、私たちはいつも外面に向けて仏性を探しているからです。それで私のところに来ると、私はみなさんに、外面的なものに執着しないように、これはダメ、あれもダメと言うのです。しかし、この「ダメ」は法門ではありません。もし私たちは本当に少しでも手放すことができるなら、一瞬にして「悟り」を体験することができるのです。

印心は容易ともいえますが、難しくもあります。容易というのは、印心の時、一瞬にして悟りを開くことができます。けれども、印心を伝授することができる人が必要です。そのような人を見つめることは容易ではありません。印心は面倒なことだと言っているのではなく、悟りを開くことも難しいことでもなく、手に届かないことでもありません。解脱することは決して

て難しくなく、悟りを開くこともみなさんが思っているほど難しくありません。ただ、私たちに悟りを開かせてくれる人を見つけることこそが、一番難しいことです。

印心は多くの人に伝えることもあれば、たった一人に伝えることもあります。これはその印心を伝えるマスターによって決まります。ですから、古代禅師の中には弟子が数人しかいない禅師もいました。老子を知っている人はほとんどいませんでした。菩提達磨には五人の弟子がいました。慧能の弟子は少し多くて、釈迦牟尼仏の弟子はもっと多く、イエス・キリストはたった十二人の弟子がいただけです。彼はもう少し多くの人にも伝法したかもしれませんが、この十二人は最も悟りを開いた弟子たちです。

みなさんはこう自問するかもしれません。印心後はみんな悟りを開いた人になったのに、お悟りを大きく開いた人もいれば、そうでない人もいます。ある人は彼のマスターから引き継ぎ、代わりに伝法することができず、それができない人もいます。それは修行と関係があるのです。印心を受けた後、すぐに完全な仏陀になったわけではありません。仏陀には間違いないです。印心を受ける前から、もともと仏陀でした。印心を受けたから、仏陀になったのでありません。ただ、みなさんはこのことを知らないのです、自分が仏陀であることが分からないから、印心が必要なのです。印心後、すぐに多くの体験をすることはできませんが、少し悟りが開くことができます。悟りが大きい人も悟りが小さい人もいます。けれども、まだ修行を続けなければ

ばなりません。修行すればするほど自分の本性を認識し、自分の本来の姿がわかるようになります。

例えば、ある所に王子がいたとします。小さい頃に宮殿を離れ、物乞いに連れて行かれて、大人になるまで育てられたとします。彼は自分が王子であることは知らず、毎日、物乞いに行きます。国王は毎日王子のことを思い、彼を探しに人を派遣しました。王子の体には特徴があって、それを頼りに探し出すことができます。ある日派遣された人は王子を見つけました。王子に「あなたはもともと物乞いではありません。私の話をよく聞いてください。私と一緒に宮殿に帰って将来国王になるのです」と言いました。王子は物乞いの家庭で育てられ、物乞いの生活に慣れていたので、すぐに役人の話を信用するのは不可能です。そこでその役人は毎日のように、王子に「私はあなたが王子であることを保証します。あなたが証明して欲しいなら、証明して見せます。この服を着たいと思うなら、すぐに着せてあげます。この馬に乗りたければ、すぐに乗せてあげます。問題ありません」と言いました。

けれども、王子は物乞いの生活にすでに慣れていたので、自分が王子であることを認める勇氣がありませんでした。毎日、「自分には無理です」と言いました。役人は辛抱強く説得し続け、「宮殿には真珠や宝物がたくさんあり、豪華な宮殿もあり、そういったものはすべてあなたのものです」と言いました。けれども、王子は小さい時から物乞いの家庭で育ち、自分がそん

なにかくさんのものを持ってることが想像できませんでした。

その役人は彼を王子にしたわけではありません。彼はもともと王子だからです。話し続けている日、物乞いは信じて、「いいでしょう。あなたに私の生活を世話してもらい、私のすべての面倒を見てもらって、本当かうそか試してみましよう」と言い、王子の服を着て馬を乗りました。大勢の部下が王子に礼拝しました。この時、彼は少し信じられるようになりましたが、すべてを信じてはいませんでした。役人もまだ「どうすれば、王子を宮殿に連れて帰ることができるとか」と、悩んでいました。宮殿に連れ戻った後、まだ宮殿の生活や、高尚な礼儀、高貴な態度に慣れるまで長い間、訓練をしなければなりません。彼はそれまで卑しい物乞いの生活を送っていたので、頭を上げて人を見ることができませんでした。しかし、今は前と違って王子になったので、振る舞いや智慧など、多くのことを学ばなければならなかったのです。

同様に、私たちは本来すでに仏陀です。けれども、世々代々魔のパワーにコントロールされ、苦しみが多く、悩みやカルマも多く、それに縛られ、生活も困難ばかりです。今日は少し良くなったとしても、明日はまた困ったことが起きて、明後日は少しよくなっても、明々後日はまた難しいことが起きるのです。いつも苦しいことに会いますが、なぜなのかわかっていません。ご飯もそんなに食べていません。毎日せいぜい三、四杯で、衣服も二、三枚しかありません。しかし仕事はいつも忙しく、朝から晩までやってもやりきれないほどで、いつも時間に追われ

ていますが、なぜこんなに苦しいのかわかりません。

もしマスターや、仏陀や菩薩の化身がこの世界に來たとしたら、彼らは私たちの苦しみを見ただからです。私たちは本来彼らの友達なので、彼らは私たちを救いに來たのです。しかし、私たちが元々高尚な仏性を持っていることを、短時間で分からせることができないため、彼らは多くの励ましの言葉を使って「あなたはもともと高貴なのだ。あなたは仏陀だ」と繰り返し、話していると、私たちはやつとすこし聞き入れるかもしれない。そして、彼らはまた辛抱強く、私たちに「私のそばに来てください。私があなたの仏性を見つける方法を教えます。あなたは本当に仏陀であり、菩薩であり、間違いなく仏性を備えています。あなた自身の本来の面目を見せてあげます」と言います。みなさんはだんだん信じるようになって、印心を受けるのです。印心後に初めて自分のことを少しわかるようになりますが、それでも、毎日のようにみなさんを励まし、みなさんが自分の高貴な品性をより多く知るように、依然として、まだたくさん教えなければなりません。

たとえ王子が宮廷に戻ろうとしても、宮廷までは遠いので、途中で王子は「私は信じない。国王に会う勇氣がない。どうしてそんなことができるのだろうか。私はもともと物乞いで何十年も物乞いなのに、どうやっていきなり王子になれるものか」と言うかもしれません。彼はもう歩きたくないので、戻って前の物乞い生活を続けたいと思っているかもしれません。二、三

十年間の間、毎日、人に抑圧され、臭くて友達はなく、世話してくれる人も、かわいがってくれる人もいなかったからかも知れません。ですから、どうして彼にその勇氣を持てるのでしょうか。短時間の訓練で彼を高貴な国王にすることも、彼の観念を変えすることも不可能です。みなさんは想像できますか。物乞いから国王に変わることは簡単ではありません。

ですから昔から今日まで、大禪師が現れて人に教え、衆生を救うことは生易しいことではありません。彼らは私たちの習慣と戦い、私たちが執着している観念と論争し、闘わなければなりません。というのは、大師がこの世に現れても、すべての人が彼の教えを聞きに来るわけではありません。ある人は聞いても信じないばかりか、帰ってから中傷したりします。そのような人や教理を聞くとうしない人は自分の観念しか信じない人です。古代においては、彼らは大師が話す真理を信じないで、火の神、太陽神、風神などを崇拜したのです。これは古代の信仰です。彼らは自分の本来の面目を見失ったため、とても怖がるのです。保護のパワーが断たれたため孤独を感じ、すべてが怖いのです。なぜ太陽があんなに熱いのか。なぜ物は火で燃やされてしまうのか。なぜ山はあんなに高いのか。海はこんなに深くて広くて、対岸も見えないのか。なぜ風はあんなに強いのか。物を壊し、木を根こそぎ引き抜き、建物を吹き倒すのか。風を恐れ、水を恐れ、火を恐れ、太陽を恐れるのです。このような自然現象を恐れることから、盲目的に信仰するのです。

人間は自分の本来の面目である、大きなパワーと断たれると、とても恐くなり、孤独に感じます。まるで子どもが道に迷つて、家が見つからないかのように、父母や兄弟との関係が切れ、てしまい、一人ぼっちで恐くなるようなものです。迷信的になつて亡霊に拝んだり、鬼神を拝んだり、全く論理的でないことをするので。昔も今も同じです。ですから、大師が現れたとき、そのような迷信的な観念と猛烈に闘わなければなりません。しばらく経つと、そのような観念は少し変わりますが、他人を中傷する人や迷信的な人を変えることは容易なことではありません。けれどもそういう人たちも救わなければなりません。教理を信じる人は比較的簡単に変わります。

迷信的な観念を変えるのは銃で戦うのではなく、思想的な戦いは本物の戦いより激しく、もっと大変です。ですから、衆生を救うことは難しいとよく言われていますが、衆生を救うことが難しいのではなく、頭脳を救うことが難しいのです。というのは、この頭脳はもともと私たちのものではありません。普通の仕事をしている時は、頭脳はよく協力しますが、解脱の話になると、私たちを邪魔したり、反対したりして、決して自由にはさせてくれないのです。そして頭脳は「解脱してどうするのですか。ここの生活するのはいいじゃない。食べ物もあるし、着る服もあるし、夫や妻もいる。メイデーションしてどうするの。解脱してどこへ行くの。この世界は最も綺麗で、上に他の境界（きょうがい）があるなんてわからない。天国は本当に

あるの。それともないの。このマスターは人を騙しているのではないか」といろいろと疑うのです。

ですから、過去の禪師や有名な師はよく弟子にテストをしました。なぜテストをするのでしょうか。弟子の頭脳を慣れさせるためです。まず古い習慣をきれいに洗えば、新しい種を播けます。山の上にある私たちのセンターと同じで、私たちが山に行く前は住む人がいないので雑草が伸びて、道も見つかりません。どこも雑草ばかりでした。それで私たちが行つてから、まず雑草を刈り取らなければなりません。刈り取った後も雑草はまた生えてきます。あまりにも伸びていて完全には刈り取れないので、私たちは少しずつ刈り取り、雑草が短くなったら、鋤で根元から掘り起こしました。今はもう雑草はありません。整地した土地を準備して肥料を施した後、野菜の種を播きました。今野菜が大きくなって、もう食べられます。

同様に何か新しい思想、または真理を伝える場合、まず先入観を取り除かなければなりません。真理と先入観は共存できません。野菜の栽培と同じで雑草と一緒に栽培できません。雑草があまりにも多いと、入って行くことさえできないのに、どうやって野菜を植えるのでしょうか。野菜を植えた後、毎日に世話をしなければなりません。虫がついたり、草が伸びたりするかもしれません。草は地上から生えるだけではなく、空からも落ちて来ます。風がどこからか草の種が運んで来て、菜園に落とすのです。二日間世話しないと雑草が伸びてしまいます。

ですから、印心後は続けて修行しなければなりません。私もまた、毎日のように経の講義に行く必要があります。毎日ではなくても週に二、三回、あるいは三日間リトリート、七日間リトリートを行わなければなりません。こういうことが必要なのです。そうでないと、弟子は自分を見失ってしまいます。

というのは、この社会には非常に大きな誘惑の力があるからです。この世界では魔のパワーが大きいのです。というのは、この世界は魔の世界であり、彼の国であり、彼の領土なので、仏陀や菩薩が高い境界（きょうがい）からここにやって来て、彼の領土に介入すると、彼はうれしくないのです。なぜなら、仏陀や菩薩は降りて来て、住民を上に入れて行き、高貴な人に変えるからです。もともと魔の奴隷である人が、今、魔より高い地位になり、しかももう、この世界に戻って来て苦しみを受けることはありません。このようにして魔は一つの靈魂を失うのです。一人多く解脱すれば三界以下の衆生が一人少なくなります。それで魔はうれしくないのです。

ご覧なさい。昔から今日まで、真の大師が人を救うためにこの世界に来ましたが、いつもとても多くの困難に出会い、すべての衆生を救うことはできませんでした。一部の人たちを救えたとしても、とても多くの災難に会いました。

神秀（じんしゅう）の弟子も仏教徒で出家者でしたが、慧能大師を誹謗し、加害したのです。

釈迦牟尼仏も出現したときに多くの人に誹謗されました。ある人は妊娠を装い、釈迦牟尼仏に無実の罪を着せようと思いました。ある人は釈迦牟尼仏を殺そうとしたり、ある人は彼のことを邪道だと言ったりしました。イエス・キリストは出現して何年もしないうちに、殺されてしまいました。孔子は衛国（週時代の国名）で、足跡を消されてしまいました。老子は彼を信じる人がいませんでした。いたとしても少なかったのです。現在、老子は二千年前より有名ですが、彼の生存中は知っている人はいませんでした。死んでから有名になったのです。

なぜ昔の師は現在の師より有名なのでしょう。それは一人の師がこの世から離れた後、魔がすぐに彼の名前を利用して悪事をするので、師の真理を魔理（魔の道理）に変えてしまうからです。ご存じのように、一人の大師がこの世界に来て、真理だけを教えるのですが、時間が経つにつれ、それが迷信になってしまふのです。

例えば、老子はもともと彼に供え物をして、拝むことや何か物を供えたり、拝んだり、動物を殺して供えることを教えていません。彼は自分は何々を加持すると言うような事は言っておりません。自分が死んだ後、供え物をしなければならぬとは言っておりません。道徳教は「道（タオ）」を探さなければならぬ、この「道」とつながり、この「道」と一緒にいければ、私たちは真理を見つげることができるということの人を人に教えています。これは道徳教の重なる主旨であり、真理であり、高い思想です。

けれども、現在の道教はどのように変ったか知っていますか。道教の寺では豚を殺し、牛を殺し、鶏を殺して供えています。私にはそれを誰に供えるのか全くわかりません。老子も恐くてとつくに逃げてしまったでしょう。彼は本来大師ですが、どうしてそんなにたくさんの肉を食べるといえるのでしょうか。孔子も同じです。もともと学者になりたいなら、道徳的でなくてはなりません。しかし、今の孔子を信仰している人たちは牛や多く動物の肉を供えています。仏教もほとんど同じです。現在多くの国が小乗仏教になり、多くの国の出家者は肉を食べ、結婚する人も少なくありません。末法時代にはなんでもめちやくちやなことができるのです。

中国大陸は何千年の伝統を持つ国であり、文化や道徳を重んじる歴史が長く、仏教が大陸に伝わった後、大きく発展しました。困難な時期もありましたが。かつては燦然と輝いていました。けれども最終的には滅亡に近い状況に陥りました。今は私たちのこの小さなさつまいもの形のフォルモサの地にだけ、本当の伝統的な仏教がまだ残っています。出家者は結婚してはいけない、肉を食べてはいけない、酒を飲んではいけないのです。もし、フォルモサ（台湾）もそうでなくなったら、本当の仏教伝統を守っている所がどこにあるのか、私はわかりません。けれども、フォルモサも本当の仏教ではありません。仏教と道教とが融合して、変形した仏教になっています。昔のインドの仏教では、朝晩のお勤めはありません。今はどこでも朝晩のお勤めは毎日の日課になっています。本来念仏で十分なのに、今はいろんなものを唱えています。

す。これは間違いとは言えませんが、しかし、朝晩のお勤めはもともと出家者だけがするものでした。

オウラック（ベトナム）では、以前も今も、在家者は楞嚴呪（りようごんじゆ）、準提呪（じゆんていじゆ）、あるいは他の呪文を絶対に唱えてはいけません。私は出家する前、すでに菜食し、修行していました。毎日念仏し、仏像を拜んで経を読んでいましたが、私のマスターが楞嚴呪を唱えることを許しませんでした。朝晩のお勤めも許されていませんでした。それが許されたのは、だいぶん後になってからのことです。彼は私に「在家者は夫婦の生活があるのと、家の雰囲気は寺と違うので、唱えても感応がないだけでなく、問題が生じる可能性がある。在家のものはまだきれいになってないので、唱えても感応が得にくく、しかも亡霊に邪魔されることがあるからだ」と言いました。

今はみんなが好き勝手にやっています。ある人は自分で仏像を買に行き、釈迦牟尼仏か、また他の仏像を買って帰った後、毎日拜んで朝晩のお勤めをし、わけのわからない符水（ふすい：護符を焼いて、その灰の粉を入れた水）を人々に飲ませるのです。第一に彼らは飲めません。第二に、もし飲めたとしたら、その後毎日飲みに来ます。このようにもつとたくさんの亡霊を招き入れるので、墓場の雰囲気になってしまいます。私たちには亡霊をコントロールする力はありません。そこで唱え終わった後、精神が不安定になり、ある人は精神病になったりし

ます。

私は多くの例を見て知っています。多くの人が私に助けを求めに来ました。助けるときもありませんが、かかわらない時もあります。というのは、あまりにもひどく、それをなおすには余りにも多くの時間が必要だからです。そういう人は自分から他人の因縁に介入し、大菩薩になったつもりで人を救おうとするからです。それなら、自分で自分を救ってもらいます。私はそんなことにかかわりません。大変煩わしいです。このような人を救うことは、多くの時間とパワーを浪費することになります。最も良いのは私がこのパワーを保持して、より多くの人々を救い、彼らを早く解脱させることです。一人を救うために百人を放っておくことは、パワーを浪費にすることで不公平です。

フォルモサにはこのようなケースがたくさんあります。朝晩のお勤め用の経本を持ち帰っては好きなように唱え、唱えた後は手印を習いに行き、そうすると、餓鬼を救えると思ひ込んでいます。あるいは七日間念仏、七日間座禪に参加した後は、家に帰って自分でまねをしてやるのです。または寺で二、三日拝み、少しばかりのことを学んでは家に帰った後、自ら師になつて人に教えたりします。寺の雰囲気は家とは違っています。家でやるには十分なパワーがなくてはなりません。例えば亡霊に物を供えて、呼び寄せるにしても、彼らをコントロールできる十分なパワーが必要です。自分の精神が侵されないようにしなければなりません。フォルモ

サには衆生を救うことをする人が多いです。私は至る所で、「衆生を救わなければならない」という言葉をよく聞きます。その想いはいいのですが、実際にできるかどうかは別問題です。

六祖壇経（ろくそだんきょう）か金剛経（こんごうきょう）を買って来て家で読んで、座禅がよいと書いているのを見つけ、自分もまねをして座禅します。寺に行つて、出家者が座禅をしているのを見て、自分もまねをして家で座禅をします。これは座禅と言えますか。これはまったくの勘違いです。間違つた座禅をすると間違いを犯し、間違つた道を歩くと多くの問題が生じます。だから多くの人はまねしたため精神がおかしくなっています。それは教えを公に宣伝しすぎたからです。公開できるものできないものがあります。あまり公開しすぎると、人が勝手にまねするので、問題が生じても対応できず、結局は彼らを害したことになります。

ですから、昔の大師は法門を伝える時は非常に慎重でした。まずは「準弟子」にして多くのテストをして、長い間、十分観察してから法門を伝えました。このほうが安全で、弟子も外でいいかげんな批判したりしません。

衆生を救う呪文を唱えると二種類の状況が生じます。一つは長い間呪文を唱えているうちに、精神病になることです。二つ目は、呪文を唱えた後も前と同じように正常です。精神病になる人は福報がないからです。エゴが強く「私」はこんなに良い人で、「私」にはこんなに慈悲の心があり、「私」は衆生を救い、「私」は呪文を唱えて衆生を救うことができ、「私」は毎日餓鬼に

布施しますなどです。エゴがあまりに大きいので、「私」は精神病になるのです。念仏の後、自分が人より高いと感じ、傲慢な心が生まれると、魔の障害が出て来きます。本来魔は悪いパワーに属しますが、しかし、魔も悪い人は好きではありません。それで、そういう人たちの頭脳を混乱させるのです。

二つ目の状況は、死ぬまで念仏していても精神病になりません。どうしてでしょう。それは、こういう人は前世でよく修行し、福報が大きいのです。しかし、まだ修行が足りないのです。またこの世に戻って来たのですが、やはり夫か妻がいて相変わらず世俗に縛られています。けれども、前世で修行したので福報があるのです。

本当に慈悲の心を持ち、心から人を救いたいと思い、傲慢でなく、真心で餓鬼に布施したいと思い、朝晩のお勤めをし、死んだ靈魂を救いたいと思う、そういう人もいないわけではありません。もし彼らが本心から衆生を救いたいなら、魔もそうさせますし、仏陀や菩薩もかわりません。けれども、その人は人を救うことに勤しみ、自分は修行していませんので、死ぬ時には前世の功德をことごとく使い果たしたため、死んだら何もありません。それで低い境界（きょうがい）に生まれ変わる可能性が大きいです。生前は何にも問題はなかったのですが、功德は全部失ってしまったのです。私たちには見えないので、この状況がわからないだけです。

これには二つの状況があります。一つ目は、それほど金を持っていない人がいて、彼は自分

はお金持ちだと装い、毎日毎日お金を借りて他の貧しい人にあげたとします。ただ有名になりたいためにお金をあげすぎて、借りたお金を返済できず、警察につかまり、刑務所に入れられたケースです。二つ目の状況は、本当に貧しい人に布施したいと思う人です。しかし、自分は仕事がなく、親の財産を受け継いだので、毎日少しずつそれを人々に与え、最後に何にも残っていないというケースです。

同様に、福報もお金と同じようになくなります。ですから、私たちが修行するなら、この無量無辺の功德を見つけないけません。無量無辺の功德のあることをしなければなりません。そのためには、無量無辺の福報に頼らなければなりません。どのように無量無辺の福報を見つけるのか知るべきです。それを見つければ、人に何を与えても問題ありません。けれども、無量無辺の福報を見つける前に、無茶なことをしないでください。とても危険です。

この無量無辺の福報には源があり、この源を見つけて、この源と繋がれば、私たちには何でも手に入り、すべてが満ち足り、人にあげても問題がありません。

ですから、私が言ったように、私たちがこの無量無辺の福報の源を見つければ、この福報を無限に布施することができ、しかも自分自身を傷つけることはありません。ただし、この福報の源を見つけた人は読経したり、法会で念仏したり、鐘などをたたいたりしません。必要がないからです。これらは魔のやり方で、釈迦牟尼仏が教えたことではありません。イエス・キリ

ストも人にこのようなことを教えていません。なぜ、呪文を唱えるのでしょうか。本来このようなことはありませんでした。仏教と他の迷信的な信仰との結合によって、現在こんなふうになったのです。これは仏教が別の国に伝わったのと同じで、もう純粹な仏教ではありません。

本当の仏教徒はそんなことをする必要はありません。本来の面目を本当に見付けた人もそんなことする必要はありません。慧能大師が朝晩のお勤めをするとか、衆生を救うなどと聞いたことがありますが。菩提達磨が何かするのを見たことがありますが。彼はただ壁に向かって座禅していただけです。百丈法師も同じで、彼が読経や法会を開いたことがありますが。ありません。私も釈迦牟尼仏が朝晩のお勤めをし、または外面の形式的な事をしたと聞いたことがありません。

もし、釈迦牟尼仏がそういうことをしたとしても、彼にはパワーがあるのでできます。私たちにはできません。私たちは仏陀になっていないのですから、こういうことをしても、何の役に立つというのでしょうか。本来仏陀もそんなことはしません。ただどこかに座っていれば、たくさんのお勤めをすることができました。わざわざ特別な場所に行かなくても、呪文を唱えなくてもできたのです。彼は何かを唱えたとしても、ただ心の中で唱えるだけでした。彼が何をするにしても、パワーで、または化身でします。ですから、私たちは釈迦牟尼仏が何千億の化身を持つていっていると言っています。彼は手を動かす必要は全くありません。

みなさんに言うておきますが、私はどこにも行かないし、どこからも来ません。けれども、ある人は私が彼の代わりに仕事したり、手伝ったりするのを見ました。私は決して山から降りて手伝いに行ったものではありません。今日、私はここに講演に来ました。本物の私が講演に来たのです。もしみなさんが今、私をたたいたら、私のこの肉体は痛みを感じます。けれども時には、この肉体で仕事をするのではなくて化身でします。

ですから、本来の面目を見つけた時は、私は「成就した」と言います。手を動かす必要はありません。その時こそ、本当に衆生を救うことができます。しかも、衆生を救うことを考えることはありません。なぜなら、救われる衆生などはいないからです。その時は、「私」と「衆生」といった区別する心はまったくありません。何も考えず、すべて自然にしているのです。ですから、老子の言う「為無為（何もしない行為）」とはこの意味です。つまり「做而不做、為而不為（しているけれどしていない）」のです。

先ほど、私は言いました。マスターが往生したら、生きている時より有名になります。それは魔がマスターの名前を利用して破壊の計画を進めて、一つの宗教を作っては偽の真理を用いて、衆生にそれこそ仏教であると思わせるのです。その結果、また輪廻を繰り返し、相変わらず魔の住民のままです。それで喜んでいるのです。魔は私たちの心を慰めてくれる宗教を作って、私たちの真理に対する渴望を利用するのです。

なぜなら、多くの人が真理を求めています。どうやって探せばいいのか、どこに行って探せばいいのかわかりません。ですから、誰かに仏陀を拜めば解脱できると教えられると、とても喜んで聞きます。というのは、釈迦牟尼仏は二千年経つても、まだ有名だからです。彼に頼らないで、誰に頼ればいいのかでしょう。喜んで仏陀を拜みに行き、解脱できると思っています。

これはすべて魔の策略です。魔は私たちが内面の仏陀を探すことを邪魔し、私たちに外に向けて仏陀を探すよう仕向け、無茶苦茶なことをさせるのです。私たちはそれらをやらされて満足しているのです。「自分は本当に求道心がある人だ。私は毎日朝晩のお勤めをしている。私は修行ができています」と思うのです。しかし、これらはいずれも魔の策略で、みな三界以下のやり方であることを知りません。このようなやり方では一千億年が経つても解脱できません。

福報があつて誠心誠意な人でも、せいぜい第二界までしか到達できません。第三界以上は言うまでもなく、第三界にも到達できません。第二界はまだ魔の国で、第三界もやはり魔の範囲内です。というのは、この世界は三界以下のパワーで造られたのです。私たちの体や頭脳は三界以下で造られたのです。三界以上では体はなく、頭脳もなく、目、耳、鼻、舌、身、意はまったく使いません。この世界では私たちが多くの道具を使っています。道具が多ければ多いほど面倒です。頭脳はないほうがいいのですが、この世界では体や頭脳を使わなければなりません。この肉体がなければ私たちは生存できないのです。

ですから、衆生を救い、呪文を唱えて多くの衆生や亡霊を救いたければ、まず仏陀にならなければなりません。まず、自分の仏性を見つけ、大きなパワー、根源のパワー、本来の面目、「道（タオ）」を見つければ、仏陀と同じように衆生を救うことができます。なかには「ある呪文はパワーがある。ある人の手印はパワーがある」などという人がいるかも知れません。そこで真似をしても、結局、何の役にも立ちません。

ですから、本当の大師はこんなでたらしめなものを教えません。彼らは私たちに、まず私たちの本来の面目、自分の仏性を見つけることを教えます。その後何をするのかは自分自身の問題です。仏陀のパワーを持った後は、どんなこともできます。どんな人でも救うことができ、どこであろうと、化身（けしん）で衆生を救うこともできます。決してそんなに大変なことではありません。毎日二時間ずつ朝晩のお勤めをしたり、また手印をしたりするのは何の役にも立ちません。自分を傷つけるだけです。東奔西走して本当に修行する時間がなくなり、自分の本来の面目や、自分の仏性を探す時間がなくなるのです。パワーを浪費して、前世の福報を無駄にして、最後には何もなくなつて、「空っぽ」になり、また生死を輪廻し、魔になつたり、亡霊になつたり、動物になつたり、愚かな人になつたり、貧しい人になつたりします。それではあまりに哀れではありませんか。

この肉体があるうちに、早く修行すべきです。仏陀になつたら、無限の衆生、ガンジス河の

砂の数ほど多くの衆生を救うことができます。一つ団体の靈魂や小さい団体を救うだけではなく、すべての天、亡霊、天人、人も救うことができます。ですから「天人導師、四生慈父（天と人の師であり、四生（胎生・卵生・湿生・化生：生物すべて）の父である）」と言います。

これは私が前に話した、王子の話と同じです。例えば、役人が王子に少しのお金と、着る服と、乗る馬一頭をあげたとします。しかし、王子はそれを受け取ろうとしません。少しのお金ですが、それも馬も全部人々に分けてしまったのです。しかし王子はそのお金を使い、その服を着て、馬に乗って初めて自分の宮殿に帰り、後には国王になり、そうすれば宮殿にはたくさん金があるので、多くの人々にあげても全く問題がない、と言うことにまでは考え付かなかったのです。

役人が来たときには、たくさんのお金を持ってきませんでした。ただ一、二枚の服と、いくらかのお金を持って来ただけです。そこから宮殿までの道中は、まずこのお金を使えばいいのです。これは決して王子が利己的で他人のことを構わないのではなく、まずこれを使って宮殿に帰るべきです。帰った後はいくらでも人々に施しできます。ですから、この頭脳で考えないことです。また、あまり人の話ばかり聞かないことです。人がやっているのを見てまねをしないことです。そのことは何の役に立つかどうか、どれくらい役に立つか。その効果は有限か無限か、どうしたら最大の効果が得られて、障害が最も少なくなるか、をよく考えなければなり

ません。

私は出家する前、多くの人を手助けしました。これは誇張して話しているではありません。当時、オウラック（ベトナム）の人は多くの困難に直面していました。彼らはドイツに来たばかりで、ドイツ語を話せる人はいませんでした。英語、フランス語は話せる人がいましたが、ドイツ語ができる人は少なかったのです。私は彼らの通訳で忙しくて、毎日朝七時から夜十一時まで、時にはご飯を食べる時間もなく、歩きながらパンを食べたりしていました。その時、私は本当に自分のことを忘れて、すべて彼らのためにしていました。ある時、頭痛がひどかったのですが、彼らは歯が痛い、お腹が痛いと言うので、私は自分の痛みをこらえて、彼らを医者者に連れて行きました。私は自分の頭痛のことを忘れてしまい、時間がないので、医者からもらったアスピリンも飲み忘れました。夢中に人を世話するうちに頭痛も治ってしまいました。時には一日中何も食わず、とても苦しかったのです。その前、私は出家したかったのですが、当時難民が多くて、出家しても役に立たないと思い、毎日の念仏をして自分で修行していましたが、彼らにはあまり助けにはなっていませんでした。やはり難民たちに直接かわって助けた方が役に立ちました。その時、私はまだ長い目でものを見ることができなく、目の前の困難な人、助けを求める人しか見えませんでした。ですから、朝から晩まで忙しくて、当時は経典を読む時間もなく、助ければ助けるほど、もっと多くの困難な人がやって来しました。

その後、赤十字で仕事をした時は、もつとたくさん不幸な被災民がいて、オウラック人だけではなく、アフリカ人、アフガニスタン人などいました。国際的な事情で、ますます多くの人が来るようになりました。その時、私はこれらのすべての人たちを助けられなかったら、どうしようと思いました。その時、釈迦牟尼仏を思い出しました。彼は「出家は最大の功德であり、仏陀になることができる。仏陀になったら、より多くの衆生を助けることができる。一人の凡人のパワーは限りがあり、多くの人を助けることはできない」と言っています。その時、私は出家を決意しました。

しかし、たくさんのお寺をまわっているうちに、出家してもたいして意味がないと思いました。毎日朝晩のお勤めや、手印、頭印、足印ばかりです。(笑い) また亡霊が来て、供え物を食べているのも見るのがなく、衆生にとって、なんの利益があるのか見えてきませんでした。これらの朝晩のお勤めは、私が小さい時にすでに学びました。たくさん経も読みました。小さい頃から仏教の経典を読み始めました。このままにしても意味がありません。楞嚴経(りょうごんきょう)には、仏陀の弟子には多くの体験があると書かれています。「何か音を聞くことができる。多くの境界(きょうがい)について述べていると書かれています。『何か音を聞くことができる。菩薩の修行をすると多くの妙なる音が聞こえる。梵天の音もあり、目で梵天を見ることができ、何か光を見ることができ』と書かれています。私は今まで修行して来ましたが、なぜ何も見

えないのでしよう。何も聞こえないのでしよう。

私は不満でした。このままではいけないと思いました。それで、私は「マスター」を探すことを決意しました。私は少しでもいいから、必ず仏陀が言っている光と境界（きょうがい）を見たい、仏陀の言っている音も聞きたいと思いました。私は貪欲ではなく、すぐに仏陀になりたいとか、すぐに宇宙のすべてを見たいなどというのではなく、ほんの少しだけでも、仏教經典上の体験が得られれば、自分を安心させられ、この道は正しい道であり、この道に沿って行きさえすれば、必ず家に戻れることを確認したかったです。

証明できるものが見えなければ、この道は本当に家路へと向かうのか、それとも外道なのか、私にはわかりません。家路への途中には特別な「印」があるはずです。例えば、このお寺の本堂の外には大きな橋があります。それが「印」となって、それを見れば本堂に近いことがわかります。

けれども、私には楞嚴經に書いてある体験がありません。法華經に述べられている体験もありません。普門品（ふもんぼん：観音經のこと）には、観音菩薩を唱えれば、「火の中に落ちて、焼かれぬ」と書いてあります。みなさん、マッチで火をつけ、炎の上に指をおいて、観音菩薩を唱えてみてください。焼けるかどうか見てみましょう。指だけでいいですよ。手を燃やさないでください。焼けてしまいますよ。その時、私は「これはいけない、人を騙してはい

けない」と思ったのです。私は本当に体験が欲しかったのですが、方法がありませんでした。私は以前水泳ができませんでしたが、普門品に「観音菩薩を唱えれば、水に落ちても浮かんでくる」と書かれているのを見て、水に飛びこんでみました。沈んでしまいました。その時、もし助けてくれる人がいなければ、私は死んでいたでしょう。

これではいけないと、私は言いました。少しでも証明できるものがないと、私は修行を続けることができません。少しでも私に信じていることができるような体験が欲しかったのです。もし何もなくても往生の時にあって、阿弥陀仏が迎えに来てくれれば良いけれども、万一、阿弥陀仏が来なかつたら、私はどうすればいいのでしょうか。私は今すぐ少しのお金が欲しかったのです。もし今もらえなければ、たとえ死の時に社長から一億円をもらっても役に立ちませんし、もらえないかもしれません。

ですから、その時マスターを探しに出かけました。マスターが見付かれば、本当の体験を得られるかもしれないし、経典に載っている体験を私も得られると思いました。もちろん一日ですべてを体験ができるわけではありません。少しでも良かったのです。というのは、修行には長い時間が必要です。決して一日ですぐに仏陀になることはありません。釈迦牟尼仏も六年修行しました。ですから、少しでも何か証明あれば、私たちは安心するでしょう。私たちは決してこの体験があるから幸せなのではなく、この体験の後は、私たちのレベルが高まり、幸せな

レベルになるからです。私たちはその体験によって変るのです。

まるで役人が王子を見つけたように、その時、王子の心はまだそれほど変っていないかもしれませんが、外見は明らかに変わりました。良い服を着て、お金もあり、馬にも乗れ、奉仕する人も多く、すべて以前と違います。宮殿に帰ったらどのように変身するか、みなさんは分かるはずです。

ですから、少なくとも私たちに、王子のような服を着させて、お金を少し持たせなければなりません。さもないと死んでから、王子になって何の役にも立ちません。しかもその時になってみると、自分が王子であるかどうかもわかりません。

私はすでに幸せな状況を見つけたので、みんなに分けてあげたいのです。通知に来た役人は国王ではありません。彼はみなさんを王子にすることできません、彼はただみなさんに知らせるだけです。みなさんは王子であると告げるだけです。自分の宮殿を探して、帰ったら国王になるのです。私と一緒に学ぶのも同じことです。私の責任はみなさんに知らせることです。ですから、私の外見や行動や、食事をする時どんなふうなのか、話が上手かどうかを気にする必要はありません。これはみなさんの国とは関係ありません。みなさんが国王であっても無関係です。みなさんの社会的地位とも無関係です。私がみなさんに言いたいのは、みなさん自身の本来の地位は高く、この世界で最も高貴であるということです。もし自分本来の地位を見つけ

たいなら、私はみなさんを案内できます。

ですから、マスターに学ぶ時、マスターの行動を評判してはいけません。外見を見てはいけません。何をしているのかを見てはいけません。マスターはただ派遣された役人のようなものです。みなさんを連れて帰り、みなさんの本来の地位に戻らせるのです。みなさんはただマスターについて行けばいいのです。他のことを気にしてはいけません。マスターが着ている服はきれいかどうか、歩くのが速いか遅いか、これはみなさんと関係ありません。みなさんはただマスターについて行けばいいのです。

けれども、ほとんどの人は思い違いをしています。マスターを探して、マスターの外見だけを見て、厳粛でないと学ぼうとせず、女性のマスターには学ぼうとせず、男性のマスターにだけ学ぼうとするのです。または女性のマスターは体が小さいので気に入らず、中国語が下手だからいやだ、彼女は短気で怒りっぽく、自分に合わせてくれないから嫌いだなどと言うのです。それらはいずれも、マスターの本来の面目とは関係ありません、マスターの言うことを聞かなくても、マスターは決して気にしません。

というのは、そういうマスターは人に教える前に、すでにその道は平坦ではないことを知っているからです。衆生を救うのは難しく、多くの困難があることを知っていても、マスターは世々代々やって来て衆生を救います。なぜなら、衆生は親族だからです。たとえ私たちの両親

や兄弟が過ちを犯したとしても、やはり私たちの親族です。私たちは相変わらず彼らを愛し、助けて救うのです。そうでしょう。もし家にいたずらっ子がいて、いつも怒っていて、言うことを聞かないからと言って、私たちは彼を川の中などにほうり投げますか。そんなことをしますか。するわけがないです。やはり毎日世話をし、ご飯を食べさせ、お腹がすいたらすぐに物を食べさせ、服がなければすぐに持って来て着せます。彼は私たちに怒るかもしれませんが、嫌な気持ちになっても、私たちは次の日またいつものように彼の世話をします。

この社会には、甘い言葉で話をする人たちがたくさんいます。とても礼儀正しく、温和に振舞いますが、果たしてその人は、私たちの本来の面目を見つげるための手助けをしてくれるでしょうか。いいえ、できません。甘い話や礼儀正しい話は修行とは関係ありません。私たちは人の外見を見てはいけません。このマスターが良いとか悪いとかの批評は、すべて私たちのカルマによるものです。たとえ、それがみなさんのカルマによるものでないとしても、それはマスターの個性です。マスターはみなさん一人か二人のために個性を変えたりしません。もし変えてしまえば、ある人には好まれますが、他の人に好まれない可能性があります。そうなったら、どうすればいいのでしょうか。一人ひとりすべてに気に行ってもらうことは不可能です。そうでしょう。

ですから、衆生を救うのは確かに難しいことです。彼らのさまざまな習慣や好みと戦わなけ

ればなりません。マスターの黄色の服を着た姿が好きなら、赤い服や、緑色の服が好きなら、好きな人もいます。そこで、たくさん服を買って来て、私に着せようと思います。着ないと彼らは気分が害されてしまいます。私に食べ物を買って来てくれて、私が食べないと、彼らは自分たちが嫌いなのではないかと思うのです。修行にはこのような執着は必要ありません。多くの人はカルマが非常に重く、私と一緒にしばらく学ぶと、私の個性が彼の好みと合わないということ、離れて行ってしまいます。これはその人にとっては不利益なことです。私はどうすればいいでしょう。一人の人がどうやってすべての人に合わせるができるのでしょうか。

動物に対しても同じ様なことが言えます。ある人は小鳥が好きですが、他の人は小鳥が大嫌いで、毎日小鳥が鳴いていると、その人は毒薬を飲ませて、小鳥の口を塞ごうとします。しかし、飼い主は小鳥が好きでなりません。ですから、これはどうしようもないことです。みなさんは修行したいなら、本当に自分で修行しなければなりません。マスターの外見を見てはいけません。マスターはただの指導者で、「道（タオ）」ではありません。この体、この頭脳、この世界、この社会はこうなのです。変えることはできません。

あなたが真のマスターを探し出したら、自分が努力してメデイーションすべきです。しばらくすると、内面のマスターが現れ、高い境界（きょうがい）に連れて行ってきて、本当の真理を学ばせてくれます。これこそ真のマスターです。もし真理を認識すると、この社会のさ

さまざまな観念や伝統に縛られません。長く修行すると、内面に自分自身のマスターが見えます。その時、この内面のマスターはあなた一人だけに向き合います。この世界ではマスターはまだこの肉体を使って、衆生を教え導かなければなりません。ですから、マスターによって個性も違うのです。あなた一人のためだけに、特別にあなたの好みに合わせることはできません。

釈迦牟尼仏もすべての衆生の好みに合わせることはできませんでした。イエス・キリストも同じです。だから十字架にはりつけられました。もし誰もが偉大なイエス・キリストを好きなら、彼は十字架にはりつけられて死ぬことはなかったでしょう。彼は大きな神通力（超能力）があり、多くの非常に不思議なことをしました。病気を治し、死んだ人を生き帰らせ、水を酒に変えたり、たくさんの食べ物に作りだしたりするような偉大な人であり、有名な人でしたが、最後には架に貼り付けられて死んだのです。

ですから、マスターの外見を見てはいけません。みなさんは自分の修行をしていけばいいのです。私はみなさんに証明を与え、一度体験を与えます。信じてもらった後は、自分で修行すればいいのです。マスターの外見を見てはいけません。それは解脱とは関係ありません。



超世界の音

スプリームマスター チンハイ フォルモサ・澎湖

一九八七年四月二十四日

徳の高いみなさん、良き友のみなさん、私たちは初めてお会いしますが、仏教の因果から言
うと、私たちは良き友です。それは前世ですでに良き友だったからです。それで今、再びみな
さんにお会いできてとてもうれしいです。みなさんはうれしかどうかわかりませんが。（聴衆
答える：うれしいです）「甘夏（ガムシャ。マスターは台湾語で感謝と答える）」（笑い）

仏教の言い方によれば、私たちはどうやらとても縁があるようです。縁とは何でしょう。そ
れは前世において、一緒にいて互いに何か関係があったのです。私たちが人間として生まれて
来たのは一回だけではありません。行ったり来たり何回も輪廻を繰り返して来ました。その間、
私たちには多くの友人、親類、夫、妻などがいました。それで、みなさんがここに集まってい
るのです。私たちは決して見知らぬ人ではなく、ただ衣服を取り替えただけです。これ（マス
ターは体を指して）は衣服です。私たちの内在の本当の主人はこの肉体ではありません。毎回

生まれて来るたびに違う衣服を着ているので、互いにわからなくなったのです。でも、私たちがたくさん修行をすると、過去、現在、未来のことは見ることができ、すると私たちは互いに関係があることが分かります。今一緒にいるということはまさに関係があるからです。

ここに講義を聞きに来ている人の中には、さまざまな宗教の代表者や信者がいるかもしれませんが、実はイエス・キリストも「因果」について述べています。聖書で「私は古代のある大師の化身、あるいは生まれ変わりで」と言っています。また「大師たちは常に化身してこの世に来て、私たちと一緒に暮らします。でもみなさんは大師たちを知らないのです」と言っています。キリストの言っている意味は明らかに因果、輪廻を指しています。また「As you sow, so shall you reap.」と言っています。この意味は「汝がまいた種は自ら刈り取らなければならない」です。これが因果でなくて何でしょう。仏教の言い方と違いはありません。

道徳経（どうとくきよう）の中でも因果について述べていますが、古文はわかりにくいので、みなさんはわからないかもしれません、詳しく読めばわかると思います。例えば老子は「この道本来很中立的、但是祂會傾向善良的人」（道徳経第七十九章 天道無親，常與善人。）（この道は本来とても中立であるが、しかし、善良な人に傾いている）と言っています。この意味は因果を指していて、この「道（タオ）」は良い人にだけ援助し、福をもたらす、ということです。

これも「原因があれば結果がある」という意味が含まれています。

ですから、私たちはよく考えればわかります。どんな宗教もみんな同じことを言っています。私の言った道理と違うところはあります。イスラム教も同じことを言っていますが、今日私たちの目的は宗教の討論会を行うことではないので、ここまでにしませう。

なぜ、私は多くの宗教はみな同じであることを最初に話したのでしよう。この重要な点を説明しないと、今日ここにいらした何人かの聴衆は、私がここでみなさんを改宗させて、仏教徒になるようにと勧めているのではないかと思うからです。違います。私はそんなことは望んでいません。私から見た場合、どんな人もみな仏教徒ですが、ただ名称が違うだけである、というものです。私は仏教、キリスト教、道教、イスラム教はみな良い宗教だと思っています。ただし、私が思うに、今日の仏教徒、キリスト教徒、道教徒、イスラム教徒などのほとんどの人が、教主の教理を誤解しているということです。それで多くの宗派に分かれ、論争が絶えないのです。自分の宗教の中でさえ、見解が異なり、論争が絶えないのに、他の宗教間での衝突はもっと激しいことは言うまでもありません。これはとても残念なことだと、私は遺憾に思います。

教主がこの世界を離れた後、真理を伝える高僧がいなくなり、それでだんだん変質して、現在に至り変ってしまいました。私たちはあらゆる宗教はみな同じではないと思っていますが、

実際、本来は同じだったのです。私たちが本当にこの教主たちの教理を理解できたら、真理はみな同じであることがわかります。宗教は異なっているかもしれないかもしれませんが、修行の法門はみな同じです。

私の言っている意味は、どんな宗教を信じるにせよ、みな観音法門を修行できる、ということとです。どうして観音法門を修行しなくてはならないのでしょうか。修行しなくてもいいのではないですか。当然いいですとも。宗教信仰はなくてもいいですが、修行はしなくてはなりません。けれども、もし私たちに問題意識があるなら、「私はどこから来たのか。死んだらどこへ行くのか。どうしてこの世界に来て人間になったのか。人間になるとこんなに苦しいのか。人間になりたくないが、それは可能だろうか。この世界以外に他にもっと良い所はないだろうか。私には自由に選択できるだろうか。この世を離れようとすれば、自由自在に離れ、他の境界（きょうがい）に自由に住みたければ、いつでもそこへ行ける、そんな自由自在のレベルになり、生と死に苦しみがないレベルになれるのだろうかなど」といつも自問するでしょう。

もし、私たちにこんな問題があれば、当然この問題に答えられる人を探します。それでほとんどの人が宗教の指導者を探します。例えば、キリスト教の信者であれば、神父かシスターの所へ行き、仏教徒であれば、僧か尼僧、在家菩薩を訪ねて、彼らに教えを請いたり、勉強したりします。けれども、たとえ私たちがそのような宗教の所を訪れても、ほとんどの人は満足で

きる答えは得られません。それで答えを求めてまた他の所へ行くのです。そこで、私たちは智慧のある人、悟りを開いた師と呼ばれる人に出会って、その人について勉強しようと思います。そういう先生は、はっきりと答えを教えてくれて、私たちの問題の解決してくれるからです。

もし、あなたに生死の問題があつて、答えてくれる人を渴望しているなら、観音法門を修行すべきです。一人の智慧のある人を探し出し、「観音法門」を伝授してもらふことです。観音法門は唯一無二のカギで、あらゆる宇宙と生死の問題を解明できて、私たちが自分で答えを見つけることができるようにしてくれます。答えは必ず自分で悟らなければならず、他人の言うことを聞くだけではいけないのです。また、私たちがこの世を離れたくても、自由に離れられるものでなく、他の境界（きょうがい）に遊びに行こうと思つても、いつでも行けるものでもないのです。

必ず先に最高の法門を探し出し、毎日修行をしなければなりません。私たちはそれから自在になり、解脱して行きたい所へ行けるのです。これは私たちが自由にあらゆる国に行ける、ビザのようなものです。必ずしも永遠にフォルモサ（台湾）に住まなくてはならないのではなく、観音法門を修行すると、私たちは自分がどこから来て、この世を離れてからどこへ行くかを知ることができます。

普段、逆境に出会わない時は、何の問題もないかもしれませんが、病気の時や家族が往生し

た時は、私たちはとても弱く、とても無力で、その人を助けるわずかな力もなく、この世に引き止めようとしてもできません。私たちの両親もいつ往生するかわかりません。誰もそれを引き止めることはできず、彼自身が死にたくなくても止められません。時が来たら、あらゆる人が、貧富、貴賤を問わず、みなこの世を去らなければなりません。その時は選択の余地がないのです。ですから、とても苦しいのです。心の中でこの家族に未練があっても、留まることはできません。

あなたが在世のマスターについて観音法門を修行してこそ、たとえ修行したばかりで、まだパワーが足りなくても、往生の時に自在にこの世を去ることができなくても、マスターは永遠に自在な所へ連れて行ってくれます。観音法門の修行が成就した後は、人を救おうと思えば救えます。この世を去ってから、この世に再び戻って来て、困っている衆生を救うこともできます。その時あなたは自在な人になっていて、完全に自由自在な身で、来たければ来られるし、行きたければ行けます。ですから、観音法門はとても不可思議で、唯一無二の法門です。これは創造主のパワーで、永遠に存在し、最高で最も根源のパワーです。

普段、修行をしていないと、私たちの家族がこの世を去る時、私たちは「どうして行かなければならないのか。どうして他の人ではなく彼なのか」と自問するでしょう。そして、私たちはこの答えを探し出そうとします。というのは、人間になるのは楽しくないことで、特にする

こともなく、毎日ご飯を食べ、仕事をして、寝て、五、六十年、長くて百年たつとこの世を離れてしまうのです。どうしてこうなのかもわかりません。ですから、私たちは解脱して悟りを開かなければならないのです。

悟りを開くとは何でしょう。悟るとはわかるということです。どうして人間にならなければいけないのか、どうして世界はこんなに苦しいのか、どうして戦争があるのか、どうしてこうなのか、どうしてあなののか、ということを知らなければなりません。大部分のキリスト教の信者は、このような問題がある時は教会へ行つて、神父やシスターと一緒に歌を歌い、神の助けを求めたり聖書を読んだりします。こうするしかありません。他に方法はありません。当然、これは私たちの心にとって助けになり、私たちの苦しい渴望の心を慰めてくれます。時には感応が少しあります。私たちが病氣や苦しい時には、より真心を込めて祈るので、状況は少し改善して、少し楽になります。

仏教徒であれば寺院に行つて礼拝します。すると寺院では、朝晩のお勤めをさせたり、呪文を唱えさせたり、阿弥陀仏や観音菩薩を唱えさせたりします。大体こんなものです。少し高いレベルの僧侶は、私たちに座禅や禅問答を教えてください。例えば「私は誰か」という禅問答を出しては、それをあなたが自分に問いかけるようにします。これがいわゆる禅問答です。私が「私は誰か」がわかったら、師を探して尋ねる必要がありますか。そうでしょう。禅問答をしても、

ほとんどの人は何の結果も得られません。相変わらず自分は何者であるかわからないのです。

例えば、今どが渴いて死にそうになっている人がいたとして、水を飲ませてくださいと頼んでいる時に、あなたは水をあげないばかりか、「水とは何か」「水はどこにあるのか」「もうどうでもいい、ほっときなさい、水を考えるな」と言ったら、どどが渴いて死にそうな人に対して、とても残酷ではありませんか。けれども、観音法門のマスターならすぐ水を飲ませます。しかもどこに水を探しに行ったらいいかも教えてくれます。毎日マスターに頼って水を飲ませてもらわなくても、自分で水を探せます。この水でどどが渴いた人を救うこともできます。これが観音法門を修行して直ちに得られる、うれしい結果なのです。

たとえ努力して禅問答をしても、答えのある体験が得られるとは限りません。他の方法で修行しているいろいろな体験があっても、これらの体験はまだ究極ではありません。例えば、見えたのはみな第二流の光で、見えた境界（きょうがい）はみな低いレベルに属しています。これは低いレベルです。これは他の宗教の経典を参考にしてみると、すぐわかります。

そして、誰でも禅問答ができるわけではありません。ごくわずかな人しか修行できません。禅問答を修行したければ、まず先に多くの知識をもっていなければなりません。知識があまりない人は修行できません。今の禅は以前と同じではありません。もし、禅問答をする人について修行するなら、体が健康でなければならず、病気の人は修行できません。あぐらをかくこ

とができないと禪師は受け入れてくれないからです。

私はアメリカでこのようにいわれる「禪師」に会いました。ある人が「禪師」に「私はあぐらをかくことができなくて、金剛座に座ることができないが、あなたについて勉強できますか」と聞きました。禪師は「できません」と答えました。その人はまた「椅子に座って修行できますか」と聞きました。禪師は「できません」と答えました。ですから、私たちが見たところで、今日のいわゆる禅の系統では、今の時代において、修行を渴望している多くの人たちには適合してはいないと思います。あぐらをかくことができない人がいるからです。誰でも生まれつきあぐらをかけるとは限りません。あぐらは長い間訓練してやっとできるのです。年を取り、中年になって、今までにあぐらをかけたことがなければ、今すぐにあぐらをかけといっても、どうやってできるのでしょうか。修行は体だけを使うのではなく、「心」で修行するのが最も重要なのです。

このように体が原因で修行できないのは、実に理にかなっていません。本当に良い法門であれば、あらゆる人がみな修行できるものでなければいけません。子どもも修行できます。私の弟子の中には六歳の子どものもいます。子どもたちはよく修行していて、境界（きょうがい）も高いです。年を取った人も修行できます。私の弟子の中で、最高齢者は八十歳を超えています。修行も良く体験もあります。病気であぐらをかくことができない人でも、同じように修行がで

きます。ある老人が私に「あぐらがかけないのですが、修行することができですか」と聞きましました。私は「できますよ」と答えました。そしてその人は体験があり、智慧を開くことができました。修行できない人などいません。

ですから、どこでも良い師に巡り会えなければ、必ず問題が生じます。年をとった人を受け入れない禅師がいます。私がアメリカで会った禅師もお年寄りを受け入れませんでした。六十数歳になれば大体受け入れません。その禅師と一緒に七日間座禅に参加することもできないし、その禅師と一緒に座禅することもゆるされませんが、そういう年を取った人たちには阿弥陀仏を唱えることを教えます。本当はお年寄りでも修行することができます。お年寄りだから阿弥陀仏しか唱えることができないというわけではありません。

お経や仏陀の名を唱えることはそれなりに効果があります。聖歌を歌ったり、イエス・キリストや聖母マリアに祈ったりしても効果はあります。しかし永遠に解脱したいなら、最高の境界（きょうがい）に達することです。永遠にもう戻って来たくないなら、さっきのようなやり方では足りません。それには観音法門を修行しなければなりません。そうでなければ、釈迦牟尼仏の時代、インドには多くの經典があったのに、なぜ釈迦牟尼仏はお経や仏陀の名を唱えることだけに頼らなかつたのでしょうか。あんなに努力して座禅し、六年も苦行をする必要はなかつたはずです。その後、釈迦牟尼仏は大弟子や衆生に観音法門を修行することを強調しました。

イエス・キリストも同じです。キリストは宗教的な家庭に生まれました。幼い頃からすでに菜食でした。イエス・キリストの生涯を研究すればわかりますが、キリストは Essene clan (エッセネ派) の家庭に生まれました。その宗派は何千年もずっと菜食です。インドのバラモンの家庭と同じで、バラモンの家庭では小さい時から菜食です。イエス・キリストがエッセネ派の家庭に生まれ、菜食なのに、どうしてまたインドへ行って苦行をする必要があったのでしょうか。彼はヒマラヤで十数年修行した後、道(タオ)を得たのです。

ということ、経を唱える、念仏する、祈る、歌を歌う、聖書を読むということだけでは足りないのです。これらは粗いカルマを少し消去することができますが、とても細かな、とても微細な、自分でさえ感じることのできないカルマは消去できません。観音法門を修行しない限り、この永遠に存在する「音流」できれいに洗わない限り、私たちはこの生死輪廻から離れることができません。ですから私が再度にわたって、観音法門を修行すべきだと、強調しているのです。

私たちがどんな名を唱えても、どんな経を唱えても、みなこの世界の言語に属し、この世界のものに属しています。この世界の道具を使って、どうやって超世界に達することができのでしょうか。私の言っている意味がわかりますか。例えば、澎湖(ボンフー…台湾の地名。多数の島からなる諸島)の陸地にいるなら、私たちはオートバイや、自転車や、車を使うべきで

す。しかも歩くこともできます。けれどもフォルモサ（台湾）に行くのなら、必ず海峡を越えなければいけないのです。その時私たちは陸地で使う乗り物が使えますか。当然使えません。ですからフォルモサへ行くのなら、飛行機に乗りかえるか、または船に乗ります。そういったものは空間を越えられる乗り物だからです。船に乗れば海を越えることができるし、飛行機に乗れば大空を越えることができます。

同様に私たちがこの世界を超越しようとするなら、この世界の道具や、この世界の言語を使つてはいけません。身、口、意（体、言葉、考え）に属するものはみなこの世界の道具で、凡人の道具です。南無阿弥陀仏を唱えることや、キリストを唱えることなどはすべてこの世界の言語を使っています。経典もこの世界の言語で書かれていて、これらはみな無常のものです。無常の法門を使えば、当然、無常になつてしまいます。

どうして音はそんなに重要なのでしょうか。今、私はまず凡人世界が私たちにどんな影響を与えるかを説明して、その後また超世界の不思議な影響と比較してみましよう。

みなさんはご存じのように、子どもは生まれた時から、とても音が好きです。子どもが泣くと、母親はゆりかごを揺らして、歌を歌えばすぐ泣きやみます。また泣いたら、母親は小さい鈴を振るか、音の出るものを子どもにあげればすぐに泣きやみます。

どうして子どもはこんなに音が好きなのでしょう。母親のおなかの中で、この超世界の無形

の音と通じ合っていたからです。「神」「道」「根源の大きなパワー」あるいは「仏陀のパワー」と通じ合っていたからです。この音は仏陀のパワー、つまり「創造主」のパワーなのです。胎児はおなかの中で何も食べていません。中には空気もないし、太陽もありません。しかも体が逆さまになっていても死ぬことはありません。胎児は魚ではありませんが、母親の体内の水の中で泳ぐことができ、溺れることはありません。何も食べませんが、この期間の成長は一番速いのです。生まれた後もおなかの中の成長速度と同じなら、すぐに天まで届くほど成長するでしょう。

(笑い)意味がわかりますか。

それはおなかの中にいる時はこの超世界の音と一緒にいて、この音は胎児を養い保護していました。この世界に生まれて来るとこの音と遮断されるので、それで赤ちゃんはとても苦しく、楽しくなく、すぐさま孤独と、恐怖と、苦痛を感じるので、それで生まれるとすぐ泣き出します。生まれて来る時に笑顔で出て来る子どもはいません。みなさんが生まれてきた時泣いていましたか。笑っていましたか。(ある人が答える：もちろん泣いていました)そうです。ほとんど泣いています。それはこの胎児を養うパワーとの繋がりを失ったため、赤ちゃんにとつての最大の慰めと支えを失ったので非常に寂しく、苦しく感じるので、とても敏感な体がこの世界の空気と接触すると痛みを感じるのです、生まれるとすぐ泣くのです。けれども、赤ちゃんは何も話せないのです、私たちにはわからないのです。

生まれたばかりの赤ちゃんは、何かの音を聞くとあの内在の音だと思い、しばらくは慰められ泣きやむのです。精神的に脆弱な人が病院に行くと、医者は精神が安定するように比較的柔らかい音楽を聞かせます。私たちは毎日の仕事でとても疲れています。家に帰って少し休憩し、音楽を聞くとリラックスできるでしょう。ですから、音楽は私たちの世界ではとても重要なのです。昔から今日まで、音楽は人類にとって必要なものです。こんな凡人の声でさえ、私たちにとって重要なのですから、超世界の音は私たちにとってもっと重要で、もっと必要なのです。

週末、家でテレビや、ラジオや、たくさんのビデオテープや、または流行歌を聞けますが、私たちはやはり郊外に行き、大自然の中で、小鳥の鳴く声、水の流れる音、海潮音、風が梢をゆさぶる音、雨が葉をたたく音、カエルやセミの鳴き声などを聞くと、とても気持ち良くなり、音楽を聞くより気持ちが良くなるのです。

ある人たちは都会の味気ない雰囲気には耐えられないので、家で小鳥、子猫、子犬を飼ったり、野菜を栽培したり、盆栽を植えたりします。自然の雰囲気や、自然の音がとても好きだからです。けれども、私たちはいつも森の中へ行って小鳥の鳴き声を聞くわけにはいかないし、風が吹いている小川のせせらぎを聞くわけにもいきません。ですから、そういったものを栽培するのです。少なくとも、そういったものは自然の雰囲気を少し表しているからです。私たちの内在の本性に適していて、私たちの心を慰めてくれるからです。そうでないと私たちは耐えられ

ないかもしれません。ですから、今、どの国でも自然生態の保護を提唱し、自然の景観を守り、多くの国は木の伐採や野生動物の狩猟を禁止しています。これはみな自然生態のバランスを保護するためです。

たとえこんな凡人世界の音でさえ、私たちにとって、こんなに魅力があるのです。けれども、私たちには他に不思議な超世界の音があり、それは「万能」で、しかも私たちのあらゆる渴望を満足させ、あらゆる問題を解決してくれます。どうしてでしょう。私たちと万物はみなこの音から創造されたものだからです。聖書にはこう書いてあります。「初めに言(ことば)があった。言は神と共にあった。言は神であった。万物は言によって成った。言葉によらず成ったものは何一つなかった」*In the beginning was the "Word"(Sound), and the Word was with God, and the Word was God, everything was Made by this, and nothing was not made by this.*

みなさんは帰って聖書を読めばわかります。この意味は、宇宙が始まった時からこの音はあり、「ことば」は音を指していて、この音は神と共にあり、この「音」は「神」であり、宇宙の万物はみなこの音から創造され、この音から生まれてないものはない、ということなのです。

仏教でもこの音について語っていて、楞嚴経(りよんきょう)ではこう述べています。「すべての仏陀はこの『音流』に沿って降りて来て、衆生を救い、菩薩と衆生はこの『音』を頼りに源に帰る」(八巻…如來逆流, 如是菩薩順行而至, 覺際入交名為等覺) 普門品(ふもんぼん

：観音経のこと）では「梵音海潮音、勝彼世間音（梵音海潮音はこの世の音に勝る音である）」
と言っています。法華経の法師功德品（ほつしくどくほん）の中でもその内在の音について語
られています。例えば、鐘の音、鼓の音、シンドルの音などはみな内在の音ですが、それらは
まだ高いレベルの音ではありません。それは初級レベルの境界（きょうがい）の音にすぎませ
ん。高いレベルの音については、私はここで話すことはできません。

高いレベルの音は高いレベルの世界を表しています。私たちはその音を聞くと体全体が変化
します。この音は私たちの生命全体に影響を与え、私たちの生活様式を変えます。私たちのカ
ルマの鎖を解き放つてくれます。私たちが自在に、幸せにして解脱させます。こういった影響
はごく短い時間内に体験でき、何年も待たなければならぬものではありません。私たちは耳で
こういった音を聞いているだけではありません。潜在意識までもこの音によってきれいに洗わ
れて、過去世のカルマや良くない記憶もことごとくみなきれいに洗われます。水流が衣服の汚
れを洗い落とすとおなじで、内在の「音流」も私たちが自身のカルマを洗い落としてくれます。

カルマとは何でしょう。それは良くない事柄を指しています。私たちの過去世において行っ
たいろいろな良くない事、または世々代々、取り巻く環境から影響を受けた、悪い記憶のこと
です。現在、そのことを知っている人は誰もいませんが、私たちの頭脳はそれを全部記録して
います。それを仏教では「カルマ」と言い、キリスト教では「原罪」と言います。私たちは生ま

れた時からすでに原罪、または過去世のカルマを持っています。後でみなさんに講義録を配りましょう。参考にしてください。私は他の所であらゆる宗教はみな観音法門であることについて述べました。ただ彼らが使っている名称が違うだけで、実際みなこの内在の音を指しています。後でみなさんは持ち帰って参考にしてください。今はもう話しません。ただこの音の効用について話しましょう。

どうしてこの音がそんなにたくさんカルマを洗い落とすことができるのでしょうか。それはあらゆるものがみなこの音から創造されたものだからです。この音は振動力であり、大きなパワーですが、振動力が粗い時は音に変わります。高いレベルの音は「内在の智慧」でしか聞けません。比較的低いレベルでは、小鳥の声、水流の音、または風の音、雷の音などが聞こえます。これは私たちのこの世界の音と同じです。もう少し高い世界にはより高い音があります。けれども、私たち凡人はこの世界の住民なので、そのような高いレベルの音は聞けません。聞きたければ、必ず私たちのレベルを上昇させなければなりません。高いレベルの世界の住民と同じになれば聞こえます。

今、私たちはこの部屋にいます。みなさんは私の声しか聞こえません。もし海潮音を聞きたければどうすればいいのでしょうか。海辺へ行かないと聞こえないですね。同様に、私たちが高いレベルの音を聞いて、高いレベルの境界（きょうがい）を見なければ、そこへ行かなければ

なりません。そこへ行くにはどんな方法を使いますか。この「音流」に頼ってこそ聞こえるのです。すべての世界はこの音で繋がっているのです。みなこの音流から生まれて来たからです。カルマもこの音流から来たのです。ですから元々なかったカルマを、私たちは「音」で洗い落とせるのです。

例えば、私たちは何回も生死輪廻を繰り返しました。ですから、多くのカルマがあります。けれども、その最初は、カルマなどあるわけではありません。だからカルマは元々ないのです。すべてのものはこの音から作られたので、私たちが罪を犯したとしてもそれは多くの悪いことに影響されたからです。全てものがこの音から作られたとしたら、「罪」も例外ではありません。ですから、その罪も私たちの過ちではないのです。私の言っている意味がわかりますか。

みなさんは今、私のこんな話を聞いていますが、しかし、みなさんのカルマはそんなに早くは消されるものではありません。みなさんは頭でわかっているだけです。カルマを消すには、やはりこの音で洗い落とさなければなりません。もちろん、私の講義を聞いてもみなさんの粗いカルマを少し除去できません。それはみなさんの目には見えませんが、みなさんが私を信じてくれることを期待してはしていません。でも、みなさんに理解してもらうために少し話すだけです。どうぞ参考にしてください。

私に会った時や私と一緒にいる時は、当然、粗いカルマは洗い落とすことができます。でも

微細なカルマは見えないし、触ることも感じ取ることもできません。そのような微細で、根深く悪い記憶は、必ず目にも見えない、また触ることもできない微細な音流を使わなければきれいに洗えません。それはこの音流には不可思議なパワーがあるからです。もしそれと繋がれば、どんな汚れたところも、ことごとく浄化されます。

いわゆる見えないパワーとはこの音を指しています。普通の目では見えません。普通の耳では聞けません。必ず私たち自身が少し高いレベルに上昇して初めて、あの高いレベルの音が捕えられるのです。この世界では、私たちには普通の音しか聞こえません。例えば、鳥や、虫の鳴き声や、海潮音、または私たちの世界の音楽などです。

高いレベルの音楽が聞きたければ、レベルが高くならなければなりません。レベルが高くなりたければ、必ず、すでにレベルが高くなった人を探して、指導してもらわなければなりません。その人は私たちのために、ドアを開けてくれて中に入れてくれます。まるで環境を良く知っているガイドのように、部屋がそこにあることを知っていて、しかもカギを持っているので、私たちが入りたいと望めばドアを開けてくれるのです。意味がわかりますか。

ですから、私たちはマスターを探さなければなりません。高いレベルに行きたければ、経を読むだけではあまり役に立ちません。ただある低いレベルにしか達することができず、そこに留まるだけです。経を読む利益は、私たちの気持ちを少し楽にしてくれるだけです。けれども

超世界へ行きたければ、必ずマスター、すなわちそのカギを持っている人を探し出さなければなりません。高いレベルのドアを開けてくれて、私たちを入れてくれます。ドアがどこにあるかを知っているのです、その人が開けると、私たちは高いレベルの音とその境界を体験することができますのです。

どうして「カルマ」は私たちの過ちではないと言うのでしょうか。どうしてカルマは元々なかったと言うのでしょうか。先ほど話したように、あらゆるものはみなこの音から出て来たので、カルマもそれ自体が造り出したのです。(マスター笑う)ですから、それ自体に自分の過ちを改めさせなければなりません。これでみなさんは理解できましたか。私たちには元々カルマはなかったのです。罪もなかったのです。

例えば二日前のことです。私たちの修行仲間の医者、私のことが好きで、私が小さい時サボテンを食べた話を聞き、サボテンが大好きだと知って、すぐサボテンを取って来て食べさせてくれました。みなさんもご存じのようにサボテンにはたくさんトゲがあります。医者はサボテンを抜いて、皮をむき、私に持って来てくれました。心を込めて持って来てくれたので食べました。するととても細かい見えないトゲが刺さりました。舌に刺さったのです。その時すぐに痛みを感じました。この痛みはどこから来たのでしょうか。もともと痛かったのですか。違います。そのトゲが舌に刺さっているから痛いのです。今どうやってこの痛みを取ればいいので

しよう。アスピリンを買ってくると良くなりますか。頭痛なら効き目がありますが、これは内側が痛いのではなく、外側の痛みです。それではどうしましょう。トゲを抜き取れば良くなります。

私たちはよく自分にカルマがあると云います。どうしてわかるのでしょうか。それは生活がとても苦しいからです。ある時には何の理由もなく苦しみます。生活は順調でお金もあり、夫もいて、奥さんもいて、息子もいて、見た目ではとても順調ですが、やはり苦しいのです。それは私たちが過去のカルマの影響を受けているからです。その上、私たちはこの源の大きいパワーと繋がりを絶たれ、孤独に感じ、不満足で、私たちにこの世のどんな物をくれても満足できません。たとえ国王になっても満足しません。みなさんは国王が幸せなのを見たことがありますか。とても少ないです。高い地位にいるほど責任も重いので、私たちから見て、世界の地位が高い人はそんなに幸せではありません。

それはこの世界の地位は究極のものではなく、私たちが探そうとしているものではないからです。たとえ一国の元首になったとしても、その地位に五十年いるだけです。私たちは百歳まで生きられればもう最高です。ですから、世俗の物は何一つとして永遠ではなく、永久ではないのです。ですから、私たちの心は相変わらず不安で、毎日もんもんとして楽しくないのです。ただその根源の音と一緒にいる時だけが幸せなのです。

例えば、私たちは本来完全な人間です。もし誰かが私たちの腕を切り落としたとします。腕はうれしいでしょうか。その腕は私たちの腕に間違いなく、腕としては何も変りはありませんが、私たちの体から切り離されて、もう活力がなくなり、とても孤独で、少しも元気がなく、時間が経つと壊死して使えなくなり、腕の活力を回復するには、再び接合しなければなりません。

ドイツでは医者や切子や落とした腕を接合することができます。これはとても難しい細かい外科手術です。一本一本の血管と神経を縫い合わせます。少し時間が経つと、この腕は前と同じように自由に動かして、何の違和感もないようになります。その時私たちの腕はうれしくなります。活力があつて、体のその他の部分も生気を得てはつらつとします。

私たちの霊体も同じです。もし宇宙の万物の大きなパワーとの繋がりを断たれたら、私たちは苦痛を感じます。もしそれが再び繋がったら、うれしくなるのです。私たちがこの大きなパワーとの繋がりを断たれると、多くの問題が起きます。例えば、交通事故で腕が切断されたとします。事故の現場にはほこりや、石ころや、その他の汚物があり、腕は変形して醜くなります。これは決して腕の過ちではありません。その災難でこんなになつたのです。そうでしょう。

私たち人間も同じです。私たちは生まれて、その大きなパワーとの繋がりを断たれてしまいました。それで、私たちには多くの問題が起きます。たとえ嫌でも起きます。問題は

自ら私たちの所へやって来るのです。例えば、ある人がいたとします。盗人ではありません。けれども、家が地震か台風で壊れ、仕事もなく、財産も全部使ってしまった。こんな時どうしたらいいのでしょうか。托鉢にも行けません。ある日とてもおながが減り、息子が奥さんが病気で苦しんだり、おなかをすかしたりして、やむを得ず、食べ物を盗んで家族に食べさせました。これはこの時の状況に迫られたのであり、不本意でやったのです。本来そうしようと思っただけではありません。

同じ意味で、私たちには元々カルマはなかったのです。根源のパワーと繋がるとカルマはなくなりません。ですから私は、カルマは洗い落とすことができると言っているのです。まだこの「パワー」（音流）と繋がる前に、私たちがすでにこの大きなパワーと繋がった人に出会えば、私たちも自然に加護のパワーの影響を受けます。ですから、先ほど私が言ったように、私の講演を聞いても粗いカルマは消されますが、最も良い方法は、自分で川の中へ入って洗った方がもつときれいになります。私は川の流れと繋がっていて、たくさんの水をみなさんにあげることができます。しかし、みなさんには水が少ししかないのです、もし私があげなければ、なくなってしまう。そうでしょう。もし、みなさんが自分でこの水流と繋がれば、水源がわかれば、自分で欲しいだけ持つて帰えることができます。自分が使えるばかりでなく、他の人に分けることもできます。永遠に使い果たすことはありません。

先ほど話をした切断された腕についてですが、もし体と繋ぎ合わせなければ、だんだん醜くなり、色はだんだん黒くなり細胞は徐々に死んでいきます。時間が経つと繋ぐことができなくなり、もう使えなくなります。他の国でこんな精密な手術ができるかどうか知りませんが、ドイツではこうやります。車の事故や災害で腕が切り落とされた人がいると、直ちにそれを氷と一緒にビニール袋に包んで、その人と一緒に切り落とされた腕を持って特別な病院に行きます。ドイツでもこのような病院はあまり多くありません。そしてこういった手術ができる医者もそんなに多くはいません。縫合手術には何年かの勉強が必要ですから。少なくとも十二年勉強してから、あのような精密な縫合手術ができるのです。一本一本の血管と神経を縫い合わせるのです。そうでないと血液が流れず、細胞は壊死して機能が失われます。ですから、そういった仕事をする人は大変努力して学ばなければなりません。ドイツではこのような医者を神のようにとても尊敬し、病人は当然もつと尊敬しています。

そのような専門医はとても少ないのです。努力して学ぶだけではなく、仕事をする時はもつと大変です。立ったままで少しも動けません。十六時間、十八時間、時には二十四時間も全神経を集中して、他の人と交替もできません。時には手術が終わるまで、休憩にも行けないし、食事にも行けません。万一向まく行かなかつたら、その腕はダメになります。ですから、とても慎重でなければなりません。一本一本縫い合わせます。腕の中には骨もあるし、全部縫い合

わせないと機能は回復しません。以前と同じように自由に動かせるのはとても不思議なことではありませんか。縫い合わせると血液が流れ始め、皮膚もだんだん赤くなってきます。

私たちの状況も同じです。長くても百年しか生きないのに、多くの苦痛、多くの悩み、お金はあっても、きれいな奥さんがいても、立派な家があっても、いい仕事があっても、やはり満足できません。それはこの大きな「真体」と切り離されているからです。あの切断された腕と同様に、早く縫合しないと時間が経つと壊死してしまい、廃物になり、ごみ箱に捨てられ、腐って誰も近づけなくなり、土の中に埋めるしかありません。

私たちも同じです。私たちを縫合してくれるマスターが必要です。孤独な私たちを大きなパワーの「真体」と繋げてくれます。この大きなパワーの真体を、ある人は最高の「神」と言い、ある人は「仏性」、「本心」、「道（タオ）」と言い、または「大我」、「大智慧」などと言っています。今、私たちは「小我」で、この「大我」の小さな一部分なのです。あの「大我」と離れているからこんなに苦しく、こんなに寂しいのです。あの切断された腕と同じです。見た目では乾いていて、元気がなく、活力もありません。縫合して、血液が流れると腕は素早く活力を回復します。

「音流」も同じです。「音流」は宇宙全体を繋げ、すべてのものが音流の中に含まれています。しかし、私たちは「音流」との繋がりがほとんど断たれ、ほんのわずかししか繋がっていません。

もし縫合しなければ、私たちはすぐにこの音流と完全に断絶されます。なので、私たちは輪廻を繰り返し、「六道」（ろくどう：天上、人間、阿修羅、畜生、餓鬼、地獄のこと）の中に置き去りにされ、苦しむのです。そして高いレベルの境界（きょうがい）に行くことができません。

このように他人の肢体を縫合する専門医になるのはとても難しいことです。必ず卒業成績が優秀な医者でなければなりません。しかも他人に対して「博愛の心」を持っている人しか選ばれません。選ばれた後も長い間待たされてから、次の訓練を受けます。それはあのような技術を教えらるる先生が少ないからです。万一、学生が多い場合、そばに立って見るだけで、実際に実習するチャンスがないのです。

ドイツではこのような病院は一つしかありません。ですから、とても有名です。国際的にも有名です。そこへ行つて勉強したければ、何年も待たなければなりません。先生の他、学生も実習に行けますが、長い間待たされて一回しか実習できません。人が多すぎるので交替で他人のやるのを見ながら、自分も練習するのです。そしてその後先生になるのです。ですから、勉強することも簡単ではありません。このような専門医になることはもつと大変です。有名になることはもつと難しいことです。一度その技術を身につけると、人を救う能力だけでなく、人に教える能力も身につきます。ですから人々がなぜ専門医を、神のようにとても尊敬しているかがわかります。当然専門医もこういう榮譽を得るに値します。

腕を縫合するのがこれほど簡単ではないのですから、「靈魂」を縫合することは当然もつと難しいことです。こういう医者が手術をする時はとても大変です。一日中立ったままで、一言も話すことも動くこともできません。精神を集中させ、少しの間違いも許されません。時間も限りがあります。腕が病院まで運ばれた時にはすでに時間をたくさん費やし、氷袋の中で長い時間経っているのです、さらに時間を費やすと腕は活力を失い、使えなくなりません。人手不足と時間を争う状況下で、当然ながらとても大変です。立ったまま十数時間、休憩もできず、精神を全部集中しています。本当はその医者はそんなに苦勞しなくてもいいのです。そうでしょう。しかし怪我人のためにあんなに苦勞しなければならぬのです。苦勞して学び、仕事の時はもつと苦勞し、苦勞ばかりしているのもみな、怪我人のためです。

医者が勉強するのは自分のためではありません。自分を縫合することはありません。たとえ自分が負傷しても、自分を縫合することはできません。学んでいる時、頭の中に「私」は存在しません。思いはすべてみな他人のためです。努力して勉強し、卒業後もやはりあんなに苦勞して、手術室で病人のために苦勞しているのです。

これは偉大なマスターと同じです。偉大なマスターが人を救う時も、多くの苦しみを受け取ります。衆生のためにカルマを背負い、衆生のカルマをきれいにします。しかしマスター自身は良くない雰囲気の影響されます。怪我人はだんだん良くなりますが、医者はだんだん疲れて、い

つも精神を集中するので、もつと疲れます。でも医者は何を言いません。これが仕事であり、自分がやりたいことだからです。どんなに苦勞しても縫合手術が成功すれば、医者はとてもうれいのです。

昔から今日までの大マスターも同じです。勉強して卒業すると、自分の智慧、パワー、福報を全部ただで他人に分け与えます。惜しみなく、直ちに分け与えるので、とても苦勞します。もしみなさんが靈魂の医者、または精神の医者になりたければ、私に従って学ぶことを歓迎します。みなさんの方が私よりもうまくできるかもしれません。手先が器用な人がいて、勉強したら、その人のマスターよりもうまくできるかもしれないからです。私はあまりうまくないので、多くの人が学びに来てくれるとうれい입니다。そうすれば、多くの人が利益を得るからです。靈魂を縫合する医者は比較的少ないので、もつと多くの人が学びに来るのはいいことです。まだ多くの人が、私たちが救済に行くのを待っています。

Q マスターにお伺いします。私は一日目に講義を聞いてから家に帰り、講義録を読みながら、マスターが加護してくださいったものを食べました。すると体の中にあるパワーが出たように感じました。お伺いしますが、あの加護してくださいったものの中にパワーがあるのでしょうか。

M もう感じたのに、何で聞くのでしょうか。あなたは自分で答えました。そうでしょう。(笑)

い) 私から貰ったものを食べると当然パワーがあります。さもなければ、どうやって感じたのでしょうか。私の講義やテープを聞いても加護の力があります。私のあげたものを食べるのは危険ですよ。今後はもう食べないように。(笑い) 食べたなら、もうこの世界へ戻れないかもしれませぬよ。もしまだ戻りたいなら、食べないでください。

Q 私は前にメデイテーションを練習したことがあります。ある音が聞こえて来ました。それで直ちにメデイテーションを止めました。悪い影響がでるのではないかと心配になったのです。

M 音にも本物と偽物があります。マスターについて勉強しなければ、本物と偽物の区別がつかみません。ですから、あなたのやり方は正しいです。放っておくことです。もし本物か偽物かを知りたければ、私に従って学べばわかります。でも、私はここで公には話すことはできません。伝法は公開できないのです。ここには学びたくない人がたくさんいるので、その人たちに無理やり聞かせることはできません。伝法はとても荘厳で、とても神聖なことです。安売りするものではありません。そして多くの弟子を獲得するために、いい加減に行うものではありません。人を見て、本当に一世で解脱を渴望している人、智慧がある人で、観音法門の無上の価値を理解し、それを大事にし、修行に励む人は伝法するに値します。私の言っている意味がわかりますか。



超世界の光

スプリームマスター チンハイ フォルモサ・澎湖

一九八七年四月二十五日

今日も観音についてお話しますが、昨日話したことで少し違います。今日は音と光について話します。先ほど私たちは阿弥陀仏讃を歌いました。阿弥陀仏のサンスクリット語は **Amitabha** (アミタバ) で、その意味は無量光です。この无量光はどこから来たのでしょうか。やはりこの音から来ました。ごく細かい音が光に変わります。私たちにとっては光も、とても重要です。昨日、私は音がとても重要だと言いましたが、今日は光もとても重要だということについて話します。このことはみなさんもう知っていると思います。

明かりがないと私たちは生活できません。太陽がないと私たちは生存できません。野菜も育ちません。ビタミンDが不足すると子どもは成長しません。夜でも月が必要です。昔の人は油のランプを使い、今は電灯を使っています。どうして昨日は音について話し、今日は光について話すのでしょうか。それはこの二つのことは関係があるからです。観音法門を修行するには必

ず光の法門を修行しなければなりません。昔から今日に至るまですべて宗派のマスターたちは、みなこの「光」と「音」を強調しています。音については昨日もう話しました。今日は光について話さなければなりません。そうすればみなさんは分かるでしょう。

どんな偉大な修行者もみな光について話しています。「悟りを開く」の「悟」は「明」という意味を含んでいます。明は日と月が一緒になっていて、それは光り輝くという意味を代表しています。光がなくてどうして悟りを開くことができるでしょう。ですから、「悟りを開く」ことは光があることを含みます。光を見るか、自分が発光するか、自分がこの光と通じ合うかです。明かりも重要です。昨日私が話したように、泣き叫ぶ赤ん坊は、鈴の音を聞くとすぐに泣きやみます。時々子どもが泣くのは私たちが明かりを消したために、暗い所に一人で寝ていて怖かったからです。明かりをつけると怖くないのです。また、色鮮やかなプラスチックのおもちゃを与える、色とりどりの、赤や緑のピカピカ光るおもちゃを与える、それを見るとすぐに泣きやみます。

ですから、「光」と「音」は私たちにとって、赤ん坊の時からすでにとても重要でした。どうしてでしょう。それは子どもが母親のおなかの中にいる時から、すでに光と関係があったからです。この光が赤ん坊を養って来たのです。光と音は同じ物ですが、特徴が違います。

例えば、水と氷、あるいは水と空気はみな大体同じ意味です。空気にもH₂Oがあり、水素と

酸素と一緒になっています。水もそうです。でも、水は空気ではありません。空気も水ではありません。でも、私たちはこの両方とも必要とします。私たちには空気が必要です。呼吸をするからです。水も必要です。水を飲んだり、ご飯を炊いたり、お風呂に入ったたりするからです。水には様々な役割があります。ですから、この両方とも私たちに必要なものです。その成分は水素と酸素の結合されたものですが、水は空気ではなく、空気も水ではありません。私たちはのどが渴いた時は、空気を手にして飲むことはできません。呼吸をする時も水を使って呼吸することはできません。水泳の時は、水に触れたりしますが、それでもやはり酸素が必要です。呼吸をするからです。さもなくば、すぐ水におぼれて死んでしまいます。

この世界に住んでいて、たとえばどんなに楽しい生活をしていても、どんなにのんきに過ごしているても、長くは百年の間しかありません。ましてや実際のところ、人生には「苦しみが多くて、楽しみは少ない」のです。何もいいことはありません。けれども、多くの人は大きな家を頑丈なに建てて、内部も豪華に装飾して、永遠にそこに住むつもりですが、結局のところ、そんなに長くは住んでいけないのです。どんな裕福で長生きしても、長くても百年しか住めません。残念なことです。私たち自身の内面の宮殿はとも美しく頑丈で、何でもそろっていませんが、私たちはそれを享受しようとしなくて、みな忙しく外の無常の生活を求めるのです。

光と音は私たちにとってとても重要です。光がなければ私たちは生存できません。太陽がな

ければ、この世界は存在できません。私たちはみなこのことを知っています。子どもでも太陽が大好きで、明るいものが大好きです。子どもが生まれてお祝いに行く時に、鮮やかで明るい色の服を着て行くと子どもは喜びます。そうでしょう。子どものいる人は知っているはずです。私が観察して発見したことです。子どものおもちやの色はすべて鮮やかで、明るいものばかりでした。大人は子どもに灰色や黒っぽい玩具はあげません。子どもの玩具はすべて真っ赤、真緑、真っ白、またはその他のとても強烈な色です。子どもはそういう明るさのものが大好きなのです。

どうしてでしょう。母親のおなかの中で、すでにこの光と通じ合っていました。何も食べなくても順調に成長したのは、この「光」と「音」が胎児を養っていたからです。けれども、赤ん坊は生まれるとすぐに光との繋がりを断たれます。仏教の「胎蔵経(たいぞうきょう)」を読めばわかります。その中には次のように書かれています。子どもが胎内で成熟する前は、靈魂は空間と時間の感覚のない状況で浮遊していて、最後に光があるとところに入り込みます。中へ入ると胎児は成熟して生まれてきます。

母親のおなかの中にいる時、この光はずっと胎児を守ります。けれども、生まれて来ると光はなくなりません。光は母親の胎内ではとても光って輝いています。胎児の目は刺激で痛むことなく、胎児の体、皮膚、生命も痛みというようなものを感じません。この光は「仏陀の光」

「如来光（によらいこう）」「本性の光」だからです。ですから、とても柔らかく、私たちの目を傷付けることもなく、私たちを怖がらせることもありません。胎児はその柔らかな仏陀の光と一緒にいることに慣れていくのです。

けれども娑婆世界に来ると、ここには光はありませんが、太陽の光や空気や、あらゆる物質の光は、赤ん坊の体にはとても痛く感じて、赤ん坊の目には心地よくありません。ですから、赤ん坊が生まれて来る時、目が開けられないのです。まるでたくさんの針に刺されたように感じ、体中もそんな感じがするのです。地球上の空気は、赤ん坊の敏感な体にとつて、とても荒々しく、とても苦痛なので、それで生まれる時に泣きます。泣く原因の体の苦痛とともに、光との繋がりが断たれたからです。光を失った時、赤ん坊は不快に感じ、母親の胎内にいるような、幸せな感じではないので泣くのです。大変苦しいからです。その後だんだん大きくなって、周りの状況に慣れてきます。

多くの赤ん坊が泣き叫ぶ時に小さい鈴をあげたり、部屋の電灯をつけて明るくしたりすると、赤ん坊は気分が良くなって、すぐに泣き止みます。断たれた光が再び現れたと思うのです。小さい鈴の音を聞いて、あの内在の音を見つけたかと思つて、しばらく泣くのをやめて注意して見たり聞いたりします。でも、それが偽物だとわかつて、靈魂を慰めることもできないとわかつたら、また泣き出します。すると大人はたくさん鈴の付いているおもちゃを探してきて、も

つと多くの長い時間、音を鳴らして赤ん坊をあやします。すると赤ん坊はもう一度泣き止みませんが、少し経つとこれもまた偽物だとわかり、再び泣き出します。このように赤ん坊は一日中泣いたり、泣き止んだりしています。

時には理由もなく泣き出す時があります。それは気分が悪いから泣くのです。話すことはできませんが、生まれたばかりの赤ん坊は感覚がとて敏感で、智慧も純粹なので、ちよつとした心地よくないことでも、すぐに感じ取ります。赤ん坊は生まれた後、私たちと同じような生き方を学ばされますが、そのうちに慣れてきます。それでも成長した後も、やはりピカピカ光るものが好きです。ですから、女性を見れば分かるように、彼女たちはお化粧するのが好きです。これも彼女たちが母親の胎内にいる時の、あの光輝く記憶がまだ潜在意識に残っているからです。

ですから、一般的に流行の服飾品は色彩が比較的鮮やかです。また夏は比較的体が楽に感じ、気分も軽やかではないですか。でも冬になると気がふさがります。それは空が薄暗く、光がないので、私たちの体も元気がなく、精神も気落ちしてふさがり込むのです。これはみな外部の光の明るさが違いによるものです。

それで大きくなってから、光るものを探し続けます。赤や緑の鮮やかな色彩の服を探して着たりします。今日私はこの黄色い服を着ています。みなさんに自分の内在の光を思い起こして

もりたいからです。インドではお坊さんはみなこういう服を着ています。それは輝いている人、光のある人、悟りを開いた人という意味を表しています。少なくともインドのお坊さんは太陽の光を意識していて、黄色の服は開悟を表しています。

まだ悟りを開いていない人も、やはり鮮やかな色が好きです。ですから、赤や緑のネオンの歓楽街は色とりどりの色彩で飾っているではないですか。鮮やかな場所ほど人々を引き付けます。客足がそれほどない時でも、明かりをつけて、人を引き寄せられるのです。そうでしょう。最も豪華な居心地のいい場所はいずれも、さまざまな照明で装飾して、私たちの目を引き付けるのです。これは蛾が光を見ると、すぐに飛んで行くようなものです。時には、蛾は火にも飛んだりして、焼け死んだりすることもあります。

どんな衆生もみな光を好みます。ただし、この種の光は外の世界の光です。この他にもう一つの「超世界の光」があります。私たちはこれを修行の光と言います。修行者は多かれ少なかれみな光があります。ですから、釈迦牟尼仏や、観音菩薩や、イエス・キリストの頭上にはみな光があります。その光は彼らの内面の悟りのレベルであり、ある一定程度まで発展すると、そのような光を発するのです。あたかも一本の木が成長すると、とても遠くからでもその木が見えるのと同じです。

普通の人には光はあるのでしょうか。あります。とても暗い光の人がいます。(笑い) コーヒ

一色のような光の人もいます。または青、紫、赤、黄色の光を発する人もいます。けれども、大修行者は金色や、白い光など、いろいろな異なる光を発します。それは普通の色の光ではありません。智慧眼が開いていなければ見えません。智慧眼が少ししか開いていなければ、見える光も少なく、ぼんやりとした光に見えます。

大修行者はなぜこのような光があるのでしょうか。この光はきれいに見せるためではなく、体を装飾するためでもなく、光はすなわちその人の体で、この光の内面のパワーが現れたからです。この光は人を救うことができるし、人を保護することもできます。私たちがこの光の中に入ると、とても心地よく感じます。ですから、光のある人は他の人を心地よく感じさせます。けれども、悪意を持っている人や魔障がとても重い人は、このような光には耐えられないかもしれません。悪意を持つ人たちは心地よくないと感じるので、少し離れた所にいると楽になり、光に近づくと不快になるのです。

一昨日、ある人が私に「私はあなたのそば、あなたの周りに白い光が見えます。でも私はそれに近づくことができません。ただ遠い所から見ただけです」と言いました。その人は近づくのと不快に感じるのです。「もし無理に近づくと、あなたの光に殺されるかもしれません」と言いました。私は「そんなことないですよ。あなたは私のそばに座っていますが、死んでいないじゃないですか。そう感じるだけです」と言いました。中には修行はして、少しの進歩があるも

の、内面には魔の障害があり、まだ暗いカルマがきれいに洗い落されていない人もいます。魔は光っている人は嫌いなのです。決してこの光が彼らを嫌っているわけではありません。私の言っている意味がわかりますか。

例えば、犯罪者や問題のある人は警察を見るとすぐ緊張して、恐くてすぐに逃げてしまいます。警察は犯罪者たちに何もしていないし、まだ犯罪者を発見もしていないのに、犯罪者ももう逃げてしまいます。これは二つの異なる観念、異なるレベル、異なる状況を表していて、一つ黒で、一つは白です。警察は公平、法律を表し、犯人は否定的で、犯罪を表しています。ですから、警察を見ると緊張するのです。普通の人はあの柔和な光の中に入ると、とても心地よく感じますが、犯罪者や、少し魔の障害がある人は、その光の中に入るとすぐに気分が悪くなります。けれども何度も接している内に、だんだん心地よくなります。

それはその光が、その人の汚れている所、つまり「カルマ」または「魔の障害」を洗い落とすからです。洗い落とすとその人は問題がなくなり、心地よくなります。快適に感じるかどうかは、みなこの魔、または「カルマ」によるのです。光そのものが変ったのではなく、本人が変ったのではありません。彼自身は問題ないのですが、もともと純粹な人の内面に、ただ外部から見知らぬものが忍び込んだために、このようになったのです。

例えば、私たちは本来、冷水浴や温水浴をすると、とても気持ちがいいのですが、もし怪我

や、やけどして皮膚が剥がれ、真つ赤な肉がむき出しになっていたら、お風呂に入ると、気持ち良いでしょうか。当然、気持ち良くないです。そうでしょう。私はみなさんがこういう体験をしていないことを祈ります。みなさんが知っているように、どこか少しでも傷があつたら、お風呂に入るのは気持ち良くないです。これは水そのものが人を不快にさせるのではなく、傷があるから、不快になったのです。傷が治った後はどんなに洗っても問題ありません。水は変わっていませんが、傷が治っているからです。

魔に取り憑かれた人や、またはカルマの重い人も同じです。大修行者に近づくと、初めは心地よくないと感じます。ずっと接していると心地よくなり、辛い感じがなくなります。ですから、修行者には警察の保護がなくてもいいのです。自分から呼び寄せなければ、誰も入って来られません。自然に保護壁ができていて見知らぬ人の進入を阻止します。この光が侵入者を追い出すのではなく、自然に追い出されるのです。それは不浄なもの、そのものが光を好まないからです。光があれば暗闇はなく、昼には夜の暗闇がないようなものです。私の言っている意味がわかりますか。

例えば、南極と北極では半年間、暗い日が続きますが、その暗闇が何百年、何千年とどんなに長く続いたとしても、ある日太陽が昇ると、今までの暗闇が消えます。太陽の大きな光によって消えたのです。というのは、この二つの相反する性質は共存できないからです。

同様に、修行者は宇宙の中の純粋な光を代表していて、修行していない人や、カルマが多い人は暗い面を代表しています。このカルマは過去の悪い記憶の影響です。もしカルマがたくさんあったら、当然、光と共存できません。ちょうど昼と夜は二つの異なる面であるのと同じです。従って、修行者は特に警察の保護がなくても大丈夫です。

「それなら、なぜイエス・キリストは人に殺されたのですか」と疑問に思う人もいるでしょう。どうしてなのか、みなさんは知っていますか。これはキリストが自ら受け入れたからです。彼はあの日、自分が殺されることを知っていたのです。弟子たちのカルマを背負うため、自分の体を犠牲にして、弟子たちのカルマを清算しなければなりません。でなければ、弟子たちが苦しい目にあい、修行もできず、解脱もできなくなるからです。これはキリスト在世の時のことで、今私たちがキリストを信じてても大して役には立ちません。というよりもキリストが在世の時ほどには役に立ちません。

それは在世のマスターと過去のマスターとは違うからです。ちょうど生きている医者と過去の医者が違うのと同じです。華陀（かだ）と扁鹊（へんじやく）は当然最も有名な医者です。私たちは二人を尊敬して神医と呼びます。しかし二人はもうこの世を離れました。いくら私たちが二人を尊敬し、崇拜しても、私たちの目の前に再び現れて、病気を治してくれることはありません。私たちの今の病気を治すにはやはり現在の医者を探さなければなりません。

同様に、過去のマスターはとても崇拜していますが、私たちは過去のマスターと話すことはできません。過去のマスターから法門を学ぶこともできません。それで在世のマスターは最も重要なのです。イエス・キリスト、釈迦牟尼仏、老子は最も有名な大師で、他にも彼らと同じレベルの大師たちがたくさんいましたが、有名にならなかったため、あまり人々に知られていません。

例えば一部の医者たちは、ある種の病気を治し、そのことが報道されて有名になっていますが、他にもまだ良い医者がたくさんいます。その良い医者も同じく医学部を卒業して、医療技術も素晴らしいのですが、有名ではないので人に知られていません。また例えば、世界中には億万長者の富豪がたくさんいますが、私たちは、ロックフェラーや、オナシスの他に、何人知っているのでしょうか。ロックフェラーや、オナシスよりもお金持ちもたくさんいますが、有名ではありません。有名になる特別な理由がなかったからか、有名になりたくなかったからか、それとも国際的に特別な物を生産していないので有名にならなかったのです。

釈迦牟尼仏は有名です。それは釈迦牟尼仏が往生した後、大きな影響力のある人がたくさん釈迦牟尼仏を崇拜し、彼らの影響力をもって、釈迦牟尼仏の教理を各地に広めたからです。それで国際的に有名な宗教になったのです。

イエス・キリストもとても有名です。それはキリストの死に方は世界中で最も苦しいものだ

ったからです。キリストが往生した後、弟子たちも各地へ行って教理を広め、徐々に有名になりました。それはイエス・キリストが衆生のカルマを背負って、史上一番苦しい死に方をしたからです。キリストは死んだ後に、また化身して現われ弟子たちや、その他の多くの人に見せたのです。ですから、イエス・キリストはますます有名になりました。彼の他にも、レベルの高い大師がいましたが、そのような悲惨な死に方をしなかつたので、それほど有名にはなりませんでした。

その他の歴代の大師たちはみな釈迦牟尼仏とイエス・キリストのように有名ではありませんが、いつの時代にもそのような大師たちがいて衆生を教え導いてきました。それらの大師たちがいなくなったら、私たちの世界はすでに滅亡していったでしょう。というのも、この世界は道徳心がなく、カルマが福報より多いので、陰と陽のバランスがとれないからです。陰陽のバランスがとれないと、世界は存在ができなくなり、地獄になってしまいます。私の言っている意味がわかりますか。

地獄とは何でしょう。つまり全く道徳がない場所のことです。住んでいる人たちは全員が悪人で、そこには刑罰と苦しみしか存在しません。天国とは何でしょう。天国には楽しみが多く苦しみが少ないところです。仏陀の世界は極楽だけで苦しみはありません。最も良い所です。

私たちの世界を見ると、苦痛もあれば、楽しいこともあります。ですから、陰もあれば

陽もあります。陰は暗い苦しい面を表し、陽は光明、道徳の面を表しています。大修行者は陽の部分に属していて、彼らには道徳、光、パワーがあり、衆生を救うことができるのです。そしてこの世界における善と悪のバランスをとっています。彼らは弟子たちを率いてまじめに修行し、この世界に光をもたらしています。そうでないと衆生の悪いカルマが世界をますます黒く染めていくばかりで、それを地獄に変えてしまいます。釈迦牟尼仏、イエス・キリスト、老子などは何世にもわたり大師であり、光明な品性を代表していて、として、私たちの娑婆世界の善と悪のバランスをとって来たのです。

光は私たちにとつてとても重要です。天国の人、または天使を見ると、みな光があります。魔は当然、暗くて光がありません。魔は暗闇を代表し、仏陀や天使は光を代表しています。娑婆世界には暗闇もあれば、光もあります。昼もあれば、夜もあるのと同じです。しかし、仏陀の場所には光がありません。地獄は全部、真つ暗です。地獄へ行ってみれば分かりますが、そこには全くに光がなく、毎日暗闇です。しかし私たちの世界は暗闇もあれば、光明もあります。苦しみもあれば楽しみもあります。光もあれば暗闇もあります。ある人は夜の暗闇が好きでなく、毎日光り輝くことを望んでいます。もし毎日光が欲しいなら、必ず観音法門を修行しなければなりません。

観音法門には光があります。私たちは音を観るだけでなく、(音も光の一種です)「光」も観ま

す。光がなかったら、誰が私たちを案内してくれるのでしょうか。音だけ聞いて、それに付いて行くとしたら、光の道案内がないのにどうやって行けば良いのでしょうか。真っ暗で道が見えません。ですから、私たちの観音法門には光があるのです。

悟りを開いた人の話によると、悟りを開いたその瞬間に、たくさん光と、大きな光を見るそうです。そうでしょう。その時まるで体全体が消えてしまったかのように感じ、ただ光が存在しているだけです。その瞬間は五分、十分、また一日中続くこともあります。そういう悟りを開いた人は娑婆世界に住んでいます、仏陀の世界に住んでいるのと同じです。その人にとっては夜もとても明るく、そういう光が発散すると、他の人にも見えて、暗い部屋も明るくなり、明かりがなくても物が見えます。これは修行者だけが到達できるレベルです。けれども、その光はこの世界の明かりとは違います。

例えば、私は今ここに座っています。「仮に」私に光があるとします。みなさんも智慧眼が開いていたら、その時みなさんは私の光を見ることが出来ます。私たちが講義をする場所にはたくさん明かりがありますが、この明かりは仏陀の光には及びません。ですから、この明かりがあっても、私たちはやはり光が見えます。私の言っている意味がわかりますか。仏陀の光は物質的な光とは同じではないからです。

どうして私たちはこの仏陀の光を探さなければならないのでしょうか。修行しないで光を探

さなくてもいいのではないのでしょうか。いいですとも。この世界が好きで、黒があり、白があり、昼があつて、夜があるのが好きならば、ここに留まつて修行しなくても構いません。しかし、超世界の光、大きな利益のある、人を解脱させてくれる、妙なる光を求める人は、必ず大きな光がある「観音法門」を修行しなければなりません。この光は人を宇宙の最も偉大な、最も智慧のある衆生にさせてくれます。そうなるためには「観音法門」を修行して、この明るい場所を探し求めに行かなければなりません。

どうすればその場所が探せるのでしょうか。まず「明師（マスター）」を探さなければなりません。「明」とは何でしょう。それはすでに明白な（はっきりとわかっている）人で、日も、月も、光も持っていて、その「光」を人々に少し分け与えることができる人のことです。そうでなければ、私たちはどうやってその人がマスターであることがわかるのですか。どんな人でも自分はマスターだと言えますが、しかし実際のところ、その人自身何もわかっていないことがあります。

ですから、ある人が自分はマスターだ、明師だと名乗ったとします。マスターとは先生と父親の意味が含まれているので、彼は自分の財産を私たちに少し分けてくれるべきです。自分は富豪だと言っても、彼のお金を見たことがなければ、どうやって信じるのでしょうか。私たちは彼の全財産が欲しいのではありません。彼の財産は彼のものです。ただ少しお金を分けて貰い、

私たちが自身の店を経営し始めたいだけです。

彼が私たちにお金をあげると言いながら、何もくれなかったら、彼が富豪かどうかをどうやって判断できるのでしょうか。たとえ彼がほんとうに富豪だとしても、私たちが困窮して餓死しそうになっても、助けてくれるところか、反対に私たちからお金を取るような人であれば、その人が富豪かどうかにかかわらず、私たちには何も役に立たない人です。本当の富豪はきつと私たちを助けてくれるでしょう。

マスターも同じです。あるマスターが私たちに「悟りを開く」手助けをすると言ったとします。しかし、彼について学んでも全く光が見えなかったり、仏陀の音も聞こえなかったりしたら、私たちはどうやって自分が悟りを開いたかどうかわかるのですか。何をもって証明するのですか。以前とまったく同じで何も変わっていないので、そのマスターに「悟りを開くとはどういうことですか」と質問すると、「必ず続けて修行しなければなりません。十年後にわかります」と答えます。しかし万一、私たちが五年後に死んでしまったり、明日往生してしまったりしたら、まだ悟りを開いてないし、光も探し出せてないし、悟りを開きたいという望みを満されてないとしたら、どうしますか。これではただの時間の浪費です。そうしているうちに、とつくに地獄へ落ちてしまうかもしれません。私たちを救ってくれる人は誰もいません。私の言っている意味がわかりますか。

ですから、真のマスターにはみなこの光があるのです。そのようなマスターは伝法する時に、私たちはすぐ開悟の体験をします。私たちはその印として、光を少し観たり、内在の音を少し聞いたりします。マスターの伝法によって、いくらか悟りを開きます。その後必ず毎日まじめに修行すると、この「悟り」はますます発展して、いつかは完全に悟りを開くことができます。印心の後、毎日必ず修行すれば、この開悟の体験が毎日続きます。なぜなら、この光はすでに私たちの財産となったからです。この「光」と「音」があることが「観音法門」です。本当のマスターだけが私たちに体験させることができるのです。

私たちにはもともと光があり、内在の音があるのです。これは私たちの「本性」で、または「仏性」と言っても同じです。イエス・キリストは「天国はあなたの内にある」と言っています。釈迦牟尼仏は「仏陀は心にある」と言っています。老子も類似した道理を述べています。老子は私たちに外へ行って「道（タオ）」を探しなさいとは言っています。山を拜んだり、水を拜んだりすると「道」が見つかるとは言っていません。そうでしょう。道德経の主旨も、私たちは自分の内在の「道」を探さなければならぬという意味が含まれています。

過去の大師たちがこのように強調しているのに、どうして私たちはまだ外へ行って探すのですか。どうして私たちは寺院に行つて探すのですか。どうして「反聞聞自性（自分の本性を聞く）」ではないのですか。どうして私たちが自身の仏性がどこにあるかを見ないのですか。内在の

仏性を見るにはナイフで切り開いて見るのではなく、カギで開けなければなりません。本当のマスターはカギを持っています。もし開けることができなければ、本当のマスターではありません。もしそのマスターが私たちに少し開悟の体験をさせてくれなければ、それは本当の開悟した人ではありません。

観音法門は必ず光があります。光が道案内をして、私たちにどこを歩くべきかを教えてくれます。なぜなら、境界（きょうがい）はあまりにも多いので、光がなければ見えないからです。私たちが内在の境界を見るにしても、内在の宝物を見るにしても、光がなければどうやって見ますか。たとえこの世界でも光がなければ、何も見えません。ましてや高い境界の所ではなおさらのことです。もし光の導きがなければ、私たちには見えないのです。ですから、光はとても重要です。

昔の修行者は悟りを開いた時に、自分の体験を書いて、後世の人に見せるために残しました。ですから、私たちは昔の修行者が悟りを開いた時みな光があることを知りました。多かれ、少なかれ、みなあります。始めた時は少なく、その後大きな悟りを開くと大きな光が見えます。このような光は発散するので、他の人にも見えるのです。ですから、釈迦牟尼仏に光があり、イエス・キリストにも光があるのはこういう訳です。

時には修行やメデイーションもせず、マスターの伝法がなくても光を見たり、突然、音が

聞こえたりすることがありますが、これらは瞬間的に聞こえたり、見えたりするものです。マスターの伝法がなくては継続的に光を見たり、内在の音を聞いたりはできません。

昨日私が話したように、音には二種類あります。一つは「否定的な音」です。これは三界以下の音を代表しています。もう一つは三界以上の音で「解脱の音」に属します。もし私たちが三界以下の音を聞いていると、再び輪廻して戻ってこなければなりません。三界以上の音を聞くとき、その音は私たちを解脱に導きます。しかしマスターの指導がないと、私たちはその音の区別も判断できません。どんな音が本物で完璧で、人を解脱させられるのか、どんな音が偽物で、完璧でなく、人を解脱させられないのかがわかりません。

光も同じです。二種類あります。一つは私たちを解脱させ、もう一つは私たちに輪廻をさせるものです。ですから、聞こえてくる音、見た光がすべて人を解脱させられるわけではありません。これがマスターの指導がなぜ必要かという理由です。なぜならマスターは肯定的な音と否定的な音と光をすべて識別でき、すべて分かっているのです、私たちに本物と偽物の区別を教えてください。そうでなければ、私たちは自分でメデイーションすれば良いので、マスターを探して指導してもらう必要はないのではありませんか。みなさんは自分がメデイーションをし、仏陀の名前を唱えれば十分だと思つてはいけません。もちろん、しないよりはいいですが、これは決していいやり方ではなく、人に大きな悟りを開かせることはできません。

ですから昔から今日まで、大修行者はまだ悟りを開く前に、みな山を越え川を渡り、さまざまな場所に行つて「マスター」を探し回つたのはこういう理由です。もし自分で修行すればいいのなら、マスターを探す必要はありません。話によるとイエス・キリストは生まれた時から、聖人で神の子でした。それなら、なぜインドに行つて、多くの大師に従つて十何年も修行する必要があつたのでしょうか。釈迦牟尼仏は生まれるとすぐに七歩歩きました。一歩歩くと蓮の花が一つ現れ、全部で七輪の蓮の花が足元に現れました。それは釈迦牟尼仏が菩薩として生まれてきたからです。大菩薩として生まれて来たにもかかわらず、やはりマスターを探して学び、その後六年辛い修行をして、ようやく悟りを開いたのです。

六祖慧能（ろくそえのう）は字も読めない木こりでしたが、人々が金剛経を唱えているのを聞いて、すぐに悟りを開きました。けれども、なぜ五祖弘忍（ごそくにん）に伝法してもらわなければならなかつたのでしょうか。それから十六年隠れて修行して完全に開悟し、そうしてこそ他の人に伝法できたのはなぜでしょう。イエス・キリストも多くのヒマラヤの大師たちに従つて修行して多くの道理が理解できました。釈迦牟尼仏には師が六人いました。釈迦牟尼仏が仏陀になつた後、師たちはみな往生しました。釈迦牟尼仏は帰つて師に真理を説いて恩返しをしようと準備したのです。ですから、釈迦牟尼仏には師がいらないと思つてはいけません。釈迦牟尼仏には師が六人いたのです。どんな菩薩も生まれてから、必ずマスターを探して、修行し

て成就するのです。

光は二種類に分けられます。一流の光は仏陀のレベル、神のレベルに属します。この光は私たちを解脱させることができます。二流の光は人をいつまでも繰り返して輪廻させます。もし私たちに本当のマスターの指導もなく、自己流にメデイテーションし、修行したとしても、ある日、突然あの内在の音が聞こえたり、意外にも光が見えたりして、少し智慧が出てくることもあります。

けれどもマスターの指導がなければ、たとえ光が見え、音が聞こえてもそれは二流のものです。しかし、本人にはそれが分からないので、とてもいいことだと思ってしまうのです。その結果この二流の光と音により、低い境界（きょうがい）に縛られて、高いレベルの体験を得ることができません。本当の大智慧を得ることができず、小智慧を得られるだけです。二流の智慧、つまり三界以下の智慧、六道（ろくどう）の智慧しか得られません。六道とは何でしょう。天、人、阿修羅、餓鬼、地獄、畜生（輪廻を繰り返す六つの世界）です。ですから二流の光が見えても、二流の音が聞こえても、私たちは真理を得ることができません。

たくさんの人が私に「ある人たちは肉を食べても光が見えるというのです。どうして人々に必ず菜食をしないとイケないのですか」と質問します。答えはとても簡単です。先ほど私が話した通りです。わかりましたか。肉を食べている修行者でも二流の光が見えますが、真

理を見つけることはできません。行ったり来たりして、みな六道の輪廻の中にいます。けれども、肉食者でも修行している人は凡人よりは少しは知っています。

例えば、汚れているコップがあるとします。私がある中に何を入れても、私にとっては大して役に立ちません。もし私がそれを無理に飲んだとしたら、きっと病気になるでしょう。それはこのコップ自体がすでに汚れているからです。何を入れてもすべて毒薬になってしまいます。言っている意味がわかりますか。牛乳を入れると腐って苦くなります。ブドウ酒を入れるとましくなり、たとえ水を入れても変な味がするでしょう。水がともきれいでも、ブドウ酒の純度が高くて、牛乳がどんなに新鮮でも、このコップが汚れているので、私たちが飲んでしまおうと、良いことがないばかりでなく、反対に有毒な汚いものを飲んでお腹に入ってしまう。

同様に、もし修行者が自分の「身、口、意（体、言葉、考え）」をきれいに準備しなければ、修行がどんなレベルまで達していようと、どんな結果を得たとしても、修行は逆にそのレベルによって、問題がもたらされます。これはコップが汚いと、水を汚すのと同じで、暗い光は自分自身が汚したものです。きれいな明るい光も、完璧な修行によってもたらされるのです。

「身、口、意」はとても大事です。「口」の修行だけでは足りません。人の悪口を言わない、だけでは不十分です。それ以外に、道徳的なことも重視すべきです。体に毒になるものささえなければ、それでいいという訳ではありません。必ず栄養のあるものを食べるべきです。

「意」だけを修行してもいけません。毎日、悪いことを考えただけでは足りません。良いことをすべきです。例えば生き物の肉のような汚い食べ物を口に入れてはいけません。何を食べても私たちの「意」に影響するからです。

見てご覧なさい。小豚は小豚の餌を食べ、牛は草を食べ、馬は馬の飼料を食べ、鶏は鶏の飼料を食べます。私たち人間は人間の食べ物を食べるべきです。つまり植物性のものです。聖書にはこう書いてあります。「神はたくさんの果物と野菜を私たちのために作った」。それが私たちの食料です。

釈迦牟尼仏はあらゆる経典で殺生をしてはいけない、衆生の肉を食べてはいけないと強調しています。「肉を食べて修行している人は仏陀になることはできない。菩薩になることもできない。それは肉を食べる人には慈悲心がなくなり、肉を食べると私たちの慈悲の種子を断つことになるからだ。だから、どんなに修行しても、高くて魔の王にしかなれず、中ほどで魔の市民に、低いレベルだと魔女になる」と言っています。この点について仏陀ははっきりと述べています。

ですから、どんな法門を修行しようと、私は菜食を勧めます。そうすると、少し見込みがあり、将来高い境界（きょうがい）へ行く機会に恵まれるのです。たとえ私について観音法門を修行しなくても、私のことを信じなくても、どんな法門を修行しようと、必ず「身、口、意（体、

言葉、考え」をきれいにしなければなりません。そうすれば、あのような良くない影響を取り除くことができるのです。例えば、ある薬を飲む時、医者はず「薬を飲む間はコーヒーを飲んではいけません。この薬とコーヒーが一緒になると副作用を起こし、病状に悪影響を及ぼすからです」と強調します。時々私たちは頭痛薬を飲んだのに、お腹とか、他の所が痛くなるのと同じです。これはその意味です。

私たちが修行するなら、「身、口、意」をきれいにしなければなりません。私たちは毎日、お風呂に入って外面はきれいにしていますが、内面も必ずきれいにしなければいけません。一般の人はみな忘れていますが、人間は本来肉食でなければなりません。でも毎日肉を食べることが習慣になり、今、肉食に戻りなさいと言っても逆に困難なことになっています。みなさんは豚、鳥、鴨、牛、羊などの動物に近寄りたがらないのに、どうしてそれらの死体を口に入れるのですか。これは道理にかないません。

先ほど私は、肉を食べても光が見える、音が聞こえると言いました。これは間違いありません。けれども、これは本当に人を解脱される音と光ではありません。これは高い境界（きょうがい）の光でもなく、高い境界の音でもありません。

釈迦牟尼仏が生存中、弟子たちはみな出家者で、当然肉食でした。インドは昔から今日まで、ほとんどの人が肉食です。ですから、多くの大師たちはみなインドから来たか、インドと関係

があります。釈迦牟尼仏の在家の弟子たちもみな菩薩です。ですから、楞嚴經（りよごんきよ）の中の二十五菩薩は、その多くの人は在家菩薩です。

どうして彼らを菩薩というのでしょうか。それは菩薩戒律を受けたからです。菩薩戒律では、「菩薩戒律を受けたものは、絶対に肉を食べてはいけない」と規定しています。それらの在家の菩薩たちはすでに菩薩戒律を受けていたので、釈迦牟尼仏は高いレベルの法門を伝法したのです。そうでなければ、普通の在家者にすぎませんでした。在家の菩薩は菩薩戒律を受けると、もう肉を食べてはいけないのです。ですから、レベルはとも高いのです。楞嚴經には彼らが述べた個人の体験が書かれています。修行を始めたばかりなのにレベルはとも高いのは、肉を食べないからです。仏陀の出家の弟子たちはなおさら、当然肉を食べてはいけない。

私たちが知っているように、あらゆる經典の中には出家者は肉を食べてはいけないと書いてあります。本当はそうであるべきです。でも今日の仏教では、肉食している修行者はごく少数で、肉食している仏教徒は、多分オウラック（ベトナム）、フォルモサ（台湾）と中国大陸にいるくらいです。その他、韓国の仏教徒は菜食者は半分くらいで、日本ではもっとひどく、大体八〇パーセントの仏教徒は肉を食べています。

ですから、人がどんな修行をしているか、またはどんなに精進しているか、それだけを見てはいけません。その人の道徳面にもっと注目すべきです。それは「戒律」がなければ、本当の

「禅定（サマデー）」もないからです。本当の「禅定」がなければ、真の「智慧」もないのです。ですから、戒律はとても重要です。戒律とは何でしょう。それは人間として良い人間になり、宇宙の法律を順守することです。自分が殺されたくないなら、動物を殺すべきではありません。人に殺されて食べられるのがいやなら、他の衆生の肉を食べてはいけません。衆生にはみな生命があります。彼らも生きることを望み、死を恐れます。私たちが動物を殺す時、動物はとても怖がり、とても苦しみ、怒りと憎しみが生まれ、体内に毒素を分泌します。

けれども、野菜や草木の意識はまだ生を望み、死を恐れるレベルまで発展していませんので、私たちがそれらを食べても大きなカルマはありません。もちろん少しのカルマはあります。どんな物を殺してもカルマがありますが、野菜や草木には復讐しようという気持ちがないので、私たちはそれらの怒りと憎しみの影響を受けないのです。私たちが観音法門の修行に精進して、毎日少なくとも二時間半修行続けていけば、小さなカルマはすぐにきれいに洗い落とすことができます。

しかし、動物のカルマはそう簡単にはきれいに洗い落とすことはできません。なぜなら、動物には意思があるので、復讐しようとし、離れようとしません。従って衆生の肉を食べる人が高いレベルまで修行できないのはこのためです。というのは、「解脱」の意味は永遠にこの世界に戻って来ないということだからです。もし、私たちが衆生の肉を食べながら、また永遠に戻

って来たくないと願うとしたら、誰がこの「肉のツケ」を払うのですか。意味がわかりますか。もし、肉を食べても解脱できるとしたら、これでは因果応報がないことになります。この宇宙の法律は「原因があるから結果がある」です。肉を食べたなら肉を返さなければなりません。ということ、肉を食べる人は高い境界（きょうがい）まで修行することはできません。

これは經典に基づいて話しているのです。決して私はみなさんを批判しているわけではありません。真理を述べる以上は本当のことを話さなければなりません。知っていることを話すべきです。もし人に喜ばれる話をするのなら、私は何も話す必要はありません。出家することも、講義もする必要はありません。ただ毎日人々に、「今日はとてもきれいですね。その服装はとてもは流行っていますね。好きなことを何でもやっていいですよ。世界を享受したければそれも構いません。ただ帰依すればいいです。肉を食べても酒を飲んでも構いません」というような話をすればいいのです。すると人々は喜ぶでしょう。経の講義をする必要ありません。

肉食者に対しても、「構いません。たくさん肉を食べなさい。健康になりますから」と言うこともできます。しかし、何日も経たないうちに、彼らは病院に行くことになるでしょう。肉食者は多くの人がガンになります。肉食者にはこんな問題はありません。今世紀の不治の病エイズも肉食者の病で、肉食者には絶対にあります。

ということ、みなさんはこのことを知っておくべきです。私がみなさんを喜ばせるために、

経の講義をしたら、私はこれらの道理を話す必要がありません。みなさんに再三にわたる菜食をすべきだと言わなくてもいいのです。菜食はみなさんの現在の生活習慣に反しているので、聞きたくない人もいます。けれども、修行者は必ず真実を正直に語り、それらの智慧を備えた人たちに言いきかせなければなりません。孔子もこう言っています。「君子は竹のように真つ直ぐでなければならぬ」と。ですから、私はみなさんの為になる良いことを思い付くと、それを話さなくてはなりません。人が聞いて喜ぶかどうかは関係ありません。

孔子はまた「己所不欲、勿施於人（自分がいやなことを他人に強要してはいけない）」と言いました。この言葉はみなさん良く知っています。好んで引用していますね。そうでしょう。どうしてみなさんはこの道理が好きなのでしょう。真理は私たちの本性にあるからです。良い道理はみな私たちが望むもので、高貴な言い方や、高貴な考えは本来私たちの内に潜在しているのです。人間は本来最も高貴な衆生でした。みなさんはすぐには菜食できないかもしれませんが、なぜなら、個人の状況により不便であったり、奥さんかご主人に妨げられたり、仕事の環境に制限されたりする人もいるからです。

それにしても、みなさんはやはり道徳のことや、真理を聞くのが好きです。私はみなさんの内面に、最も高貴な物があると信じています。つまりみなさんの「仏性」であり、この「仏性」、または「天国」が内面にあるのだから、真理が嫌いなはずがありません。高貴な思想が嫌いなはず

ずもありません。そうでしょう。(ある人答える：そうです) 今まで一度も真理の話聞いたことがないので、わからないのです。決してみなさん自身がしたくないのではありません。因果律はとても正確でとても厳しいものです。少しの誤差ありません。原因があれば、必ず結果があるのです。少しも逃れることはできません。いわゆる「天網恢恢，疎而不漏(天の網は目が粗いように見えるが、決して何一つ漏らさない)」とはこう言う意味です。

昔、インドにカビールという大修行者がいました。ある日ある人が彼を訪ねて来ました。ちょうどカビールは留守で、彼の修行仲間(前は奥さんでしたが、現在は弟子なので、修行仲間と言います)「墓場へ行って師を探してください。師は今友人の埋葬に行っています」と言いました。その人は「私はどうやってカビール師を探し出すのですか。私は本人を知らないのです」と言いました。インドの人はみな同じような顔をしていて同じ服を着ています。フォルモサの出家者のように同じ僧衣を着ています。

カビールの奥さんはその人に「そこに行って、頭上に光がある人を見つけたら、その人がカビールです」と言いました。その人が墓場についた時、みんなはちょうど穴を掘っていました。棺を担いでいる人も、穴を掘っている人も、埋葬の準備をしている人もいました。彼らはみな頭上には光があり、カビールを探し出すことができませんでした。埋葬の時みんな黙っていたので、聞くこともできず、また戻ってカビールの奥さんに「私はカビール師を探し出すこと

ができません。みんなの頭上に光がありました。どうすればいいのでしょうか」と言いました。カビールの奥さんは「よろしい。大丈夫です。もう一度墓場に行ってください。埋葬が終わって帰る時に、ただ一人だけ頭上に光のある人がいます。その人がカビールです」と言いました。その人はまた墓場に行き、埋葬が終わるのを待つと一緒に帰る時、確かに頭上に光のある人が一人いました。どうしてなのか、みなさんはわかりますか。どうして埋葬の時には全員光があったのに、帰る時は大マスター一人だけにしか光がなかったのでしょうか。

それは死者を埋葬している時は、友人全員がとても神聖なこと、「人はどうして生と死があるのか」というような想いに集中していて、その時一心に解脱のことを考えていたので、内面の良い品性が光として現われたからです。ですから、それでみんな頭上に光があったのです。それはその時、生死輪廻は本当に恐いことだと体験し、この生活はとても無常であることがわかって、その時は娑婆世界に対してあまり未練がなく、一心に修行して解脱しようと思ったから、内在の光明な品性が現れて光が見えたのです。

このような光はどんな人にもあります。でも埋葬が終わって帰る時にはもう忘れてしまったのです。凡人は毎日練習しないと、意思をコントロールすることができません。意思を私たちの思い通りにさせることはできません。わかりますか。時には私たちは北のことを考えようとして、南のことを考えてしまい、西のことを考えようとしているのに、東のことを考えたり

して、頭は雑念で乱れてしまいます。ですから、埋葬が終わって帰る時、死体と棺が見えなくなり、焦点がなくなったので、考えはあちこち飛んでしまったのです。その時は生死輪廻のことを考えず、ただ夫、妻、食事、寝ること、遊びなど、世俗のことだけを考えるので光がなかったのです。

私たちが考えを生死輪廻の問題に集中すると、必ず光があります。みなさんは帰ってから試してみてください。あの人たちは埋葬が終わって帰る時に、心の中ではこの世界の物しか考えなかったのがなくなつたのです。というのはこの世界は暗黒で、低いレベルに属しているからです。怒つた時はとても暗く、その時は地獄のレベルです。世界のことを思いめぐらしている、暗くなります。修行のことを考える時だけ光があります。

カビールは長い間修行していたので、いつでも意思を、修行や高い理想に集中することができたので常に光がありました。私たちはとても高い理想を考えると明るくなり、世界のことを考えると凡人になります。「貪り、怒り、愚かさ」のことを思うと魔になります。

先ほど話しました因果律はとても正確で、少しも間違ふことはありません。私のマスターのマスターが生存中に、ある弟子がいました。その弟子はとても努力して観音法門を修行しました。ある日外に遊びに行き、ミミズがたくさんのアリにかじられているのを見ました。ミミズはとても苦しそうで、もう死にそうで、逃げ出すことができませんでした。慈悲心から、この

ミミズを安全な所に運んで行ってアリの追いかきました。

ところが、その晩メデイテーションしている時に、何万何千ものアリの群れが見えました。アリはあの粗雑な体ではなく、微細な霊体で彼に噛みつきました。アリの群れの霊体を見た時、とても恐かったのです。噛みつきながら恨み言を言い、アリの言葉で話しました。私たちが修行して高いレベルに達すると、動物の言葉がわかるのです。そのアリの群れは、彼に「本当はあのミミズが自分のカルマを受けていて、清算しなければならぬのに、なぜおまえは私たちに造ったカルマを清算しなければいけないのだ」と言いました。

ですから、私たちが何をしても、すべて因果があるのです。私たちが人を救うとしても、その人のカルマを背負わなければなりません。でも大きな福報があれば他人のカルマを負担しても大した問題はありません。もちろん少し病気になるったり、体の具合が悪くなったりということもあります。最も良くない状況はイエス・キリストのように十字架にはりつけにされて死ぬといった苦しい方法で、衆生のカルマを清算することです。または釈迦牟尼仏のように、人々に石を投げられ、誹謗され、釈迦牟尼仏を殺そうとする人がいたり、無実の罪を告げる人がいたりして、さまざまなトラブルがあります。

仏陀になって大きなパワーがあっても、やはり無実の罪を告げられたり、誹謗されたり、殺

害されたりするのです。どうしてでしょうか。それはたくさんの弟子を受け入れ、伝法し、カルマを背負い、凡人から聖人に変えるからです。弟子のカルマはみなマスターが清算してあげなければなりません。

ですから、私たちが布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧を修行する時はむやみに行つてはいけません。本当の状況を把握してからやるべきです。そうでないとトラブルがたくさん起ります。金剛経（こんごうきょう）にはいろいろなことについて書かれています。私たちにそれができないかもしれません。凡人にはパワーがないからです。考えてもらいなさい。たった一匹のミミズを救っただけでもあのような恐い状況を引き起こしました。もし私たちが自分でカルマを作つたとしたら、それはどんな因果になることでしょうか。

もう時間です。みなさん何か質問がありますか。私の最も大きな疑問は「なぜみなさんは修行したくないのか。なぜ修行したくない人があんなにたくさんいるのか」ということです。この世界は無常です。生命はとても短く、せいぜい百年にすぎません。多くの人は生活がとても苦しく、何の意義もない、毎日ただ食べて寝て、仕事して、また食べて寝て、仕事と、愚痴をこぼしていながら、やはりこの世界に未練があり、離れられず、捨てきれないので。どうして人々はこんなに諦めがつかないのででしょうか。これが私の最大の疑問です。



「花が開いて仏陀を見る」とは何か

スプリームマスターチンハイ フォルモサ・台南

一九八七年五月十二日

今日、私はこちらのサトウキビとサツマイモが一番おいしいという話を聞いて、大変うれしく思います。ここから離れたくなくなりました。(笑い) サツマイモとサトウキビさえあれば、私はここに留まれます。(笑い) 台南にいと自分の家にいるように感じます。私の故郷オウラック(ベトナム)にも甘いサトウキビがあります。私の父は漢方医で、毎年多くの人の病気を治していました。父は治療の腕が高いようで、他の医者は自分が見放した患者をいつも父のところへ送ってきました。たとえお金がない人でも、父は全力を尽くし、治療してあげたのです。簡単な薬や、自分が発明し配合した漢方薬と西洋医学の薬と一緒に使ったようで、患者はそれを飲むとすぐ回復しました。ですから、恩を感じた患者が収穫した季節の果物をいつも持ってきてくれました。例えば、サトウキビや、サツマイモや一番おいしいあめなど、子どもの頃、そういった食べ物には私にとって世界一素晴らしいプレゼントでした。

ですから、今でも私は好きです。台南に美味しいサトウキビとサツマイモがあることを聞くと、家にいるように感じます。今日の講演もきつとうまくいくでしょう。(笑い) 私はいつもフォルモサ(台湾)人の聡明さに感心しています。工芸品が優れていて、何でもきれいに作れるので、私はドイツにいた時、よくフォルモサ製の手工芸品を買っていました。安くてきれいで、可愛く、偽物でも本物とそっくりで、見分けられないのです。

フォルモサに来てから、彼らは料理を作るために多くの時間を費やすことに気付きました。決して食いしん坊ではないと思います。食いしん坊なら、何でも食べてしまいますが、フォルモサ人は料理に時間をかけ、色、香り、味のよい料理を準備します。食べるだけではなくて、食の芸術にも気を配っています。これも美を求める心なのでしょう。フォルモサは日本と共に華道の芸術では有名ですが、日本人の場合は豪快さに欠けているような気がします。私は日本人に対して先入観を持っているわけではありませんが、日本人が花をいける時は、花は少ししか使いません。枝も一、二くらいで、花も一輪か二輪でいけます。フォルモサ人は花をいっぱい使います。フォルモサでは何でも豊かに飾りますが、それは心が満ちあふれていることを表しています。

このコップ水のように、水がいっぱいになるとあふれます。これはなぜでしょう。フォルモサの人々が良い所から生まれて来たことを表しています。フォルモサはお寺も大きく、たくさ

ん建てられています。法会を開く時、法師が有名であるかどうか、法を講義できるかどうかにもかかわらず、多くの人が参加して、仏陀の経典を聞き、道徳的な話を聞きます。これは、みなさんがすでに準備できていて、内面のレベルも高いからです。それでそのようなことが好きなのです。これはレベルが高いか低いかによるものです。

私たちは天国が非常に美しく、仏陀の所も阿弥陀仏の所もきれいであることを聞いています。私たちはそこから降りて来ているかもしれません。それで、今でも良いものが好きで、きれいな花が好きで、食べ物もきれいに作り、豆腐でもきれいに、おいしく仕上げるのです。みなさんに美意識があるからです。フォルモサ人はきれいなものが好きで、きれいな衣服を着ます。みなさんでも清潔な衣服やニットの生地を着ます。みなさんの前世が国王や、貴婦人や、官吏でなくても、天国から降りて来たことを表しています。それで、フォルモサには修行者が多く、仏教の伝統が比較的多く残っている国で、他の国ではだんだん衰えて変化してしまい、不純な仏教になってしまったのです。

フォルモサでは、密教の修行、浄土の修行、大乘小乗の修行を問わず、僧も、尼僧もすべて菜食していて結婚していません。仏教は本来こうあるべきです。釈迦牟尼仏が生存中の伝統もこうでした。今はフォルモサでしか純粹な仏教が守られていません。本を読めばわかるでしょう。他の仏教の国では肉を食べたり、酒を飲んだりしても構わないのです。お坊さんが結婚し

でも全く問題ありません。けれども、フォルモサではこのようなことはありません。フォルモサ人には福報があるので、純粹な仏教の伝統を守り続けることができたのだと私は思います。

他の国に行くと、例えばミャンマーですが、仏教が盛んな国に見えます。出家者もフォルモサより多く、どこに行っても黄色い衣を着ている出家者が見られます。大和尚や、小和尚や、老和尚や、小坊主がたくさんいて、とても幸せそうに見えます。こんなにたくさんのお出家の出家者がいるのを見て、私も大変うれしく思います。現状は釈迦牟尼仏の時代とは違い、ミャンマーではどのぐらいの期間でも出家できるのです。三カ月でもできます。何か問題に遭ったら、お寺に行つて髪を剃り、三カ月出家することを誓うのです。毎日出家者のように、托鉢をします。三カ月後にまた帰つて行き、以前と同じように夫婦の家庭に戻ります。七歳の子どもも出家し、一、二年後世俗に戻ります。ですから、出家者がたくさんいるように見えるのです。もちろん悪くはないし、良い影響もあります。けれども菜食はしません。フォルモサ人のように純粹ではありません。

今のスリランカも、タイも、ミャンマーも、日本も、韓国も大体このような状況です。フォルモサだけはまだ比較的本来の仏教だと言えます。私は今出家者のことを話しています。在家者のことはどんな状況なのかよくわかりません。多くの人が私に「マスター、私は朝は菜食しています」と言います。私は「私は、朝食は食べません。みなさんは朝だけ、菜食して何の意

味がありますか」と言います。(笑い) 朝食など食べなくてもいいと思います。目が覚めたばかりで食欲がないし、肉も食べたくないから、自然に簡単に菜食の食事になるでしょう。そうではないですか。それでも構いません。何を食べるかは自由ですから。

けれども、私はやはりフォルモサの仏教は少なくとも比較的純粹であると思います。楞嚴經(りょうごんきょう)で、釈迦牟尼仏は「すべての人、出家でも在家でも、菜食しないで肉を食べるなら、たとえ禪定したとしても、魔の障害があり菩薩になれない。肉を食べながら禅の修行する人は、一番高くて魔の王になり、中くらいが魔の民で、一番低いと魔女になる」と言っています。肉を食べると慈悲の種が断たれ、菩薩の種が断たれるからです。ですから、楞嚴經から見れば、フォルモサの出家者は最も釈迦牟尼仏の教理に良く従っているのです。

今日は経の講義の一日目なので、まずみなさんとざっくりお話しします。少し世間話をしましょう。普段私の経の講義はこのような感じです。私にとって、講義は普通のことです。経典を見ながら講義をするのではなく、あらかじめ原稿を書くこともしません。私は「自然の経」を講義しています。わかりやすい言葉で話し、難しい言葉は使いません。もし文語体で話したら、誰もわかりません。私自身もよくわかりません。(笑い) 講義をするのなら、みなさんの教育レベルが高いか低いかを問わず、すべての人がわかるようにしなければなりません。ですから、私の講義は簡単でわかりやすく、みなさんが聞きたいことを話します。経典を見な

から話すとかえって言いたいことを忘れてしまうのです。私は自然に経典が頭に浮かんでくるのが比較的早く、言いたいことはすぐ講義できます。

これから講義を始めます。今までと同じで、特別なものではありません。みなさんほどの経典の講義を聞きたいですか。(聴衆答える・阿弥陀経)わかりました。大丈夫です。禅の修行をしているから、私は阿弥陀経が好きではないと思わないでください。実際、私は阿弥陀経が一番好きです。インドへ行く前は阿弥陀経ばかりを唱え、阿弥陀仏を唱えていました。阿弥陀仏を唱えるのは非常に簡単で、小さい子どもでさえできます。ですから、私は人に阿弥陀仏を唱えることを教えることは最も簡単なことだと思っています。

これから私は阿弥陀仏を唱える利点を話します。阿弥陀の梵語(サンスクリット語)は *Amitabha* (アマターバ)です。本来この単語には「仏陀」の意味は含まれていません。けれども、中国語に訳されると、仏の一字が加わり、阿弥陀「仏」になりました。*Amitabha* (アマターバ)のサンスクリット語は無量光の意味です。*Amitayus* (アマターユ)は無量寿という意味です。

「無量光」とは何でしょう。私たちはよく「仏光常照(仏陀の光は常に照らす)」と言います。もし仏陀の光が常に照らしているとしたら、もし阿弥陀仏に無量光があるとしたら、なぜ私たちに見えないのでしょうか。それで、私たちはよく『仏光は常に照らす』とはどんな意味なのだ

ろうか。どこを照らすのか。いつ照らすのか。私たちはどうすればこの常に照らしている仏陀の光が見えるのか」と自問するのです。阿弥陀経の中で釈迦牟尼仏は「仏陀はこの『無量光』を含んでいるので、『仏陀の光は常に照らす』と言う」と言っています。

往生の時、よく修行していれば、仏陀が光を放って迎えに来るということを聞いたことがあります。そうでしょう。けれども、私たちには光が見えないので、それが本当なのか疑うことがあるかもしれません。というのは、往生の時、光が見えるかどうか、仏陀の光が照らすかどうか、私たちにはわからないからです。私たちは盲目になっていて仏陀の光が見えません。往生の時、目が見えるかどうか、仏陀の光が見えるかどうかもわからないのです。念仏している人はとても仏陀を信じているにもかかわらず、時々このような疑問があるのです。そうではないですか。

翻訳をする時、「仏」一文字を加えたため、私たちはそれに縛られ、そこに執着してしまうのです。もし当時 *Amitabha* (アマターバ) とそのまま翻訳していたら、阿弥陀「仏」がいるとは思われなかったでしょう。*Amitabha* は「無量光」で、*Amitayus* (アマターユ) は「無量寿」です。私たちは本来この無量光であり、無量寿なのです。私たちはこの体ではありません。けれども、今、この無量光と繋がりを持たれてしまったので、この体に閉じ込められているのです。この状況はちょうどコップを海の上にかぶせたのと同じようなものです。コップの中の水

は、自分は本来こんなに少ないと思い、海の水とは違うと思ひ込んでしまいかもしれません。けれども、もし誰かがコップを取り除けば、コップの中と外の水は全く同じで、すぐに一体になります。本来同質のものだからです。

無量光と同じように、私たちも本来無量光です。今はこの肉体に閉じ込められたので、私たちは外がどんな状況かわからないのです。意味がわかりますか。実際、私たちの内面にも光があります。もし自分の本当の光を見たかったら、それもできるのです。この光がいわゆる私たちの本来の面目です。

本来の面目とは何でしょう。私たちの真の本性は「光」です。もし、ある人が何らかの方法でこの体を開いて、もちろんナイフで開くものではありませんが、ある不思議な方法でこの体の中の「有量光」を肉体の束縛から切り離して、「無量光」と繋げてあげると、それはまるでコップを取り除くと、コップの中の水が自然に海と一体になって、以前の状態に戻ったのと同じです。その時、私たちは自分が「無量光」であることがわかるのです。

無量光の他に、なぜまた「無量寿」と言うのでしょうか。私たちには本来、生も死もないからです。ですから、般若心経に「是諸法空相、不生不滅、不垢不淨、不増不減……」（すべての存在には実体がない。生じることも滅することもない。汚いことも清浄なこともなく、増えることも減ることもない……）」と書かれています。これは無量光、無量寿と同じ意味です。釈

迦牟尼仏は、人々に自分の本性を理解させるために、經典では多くの比喻や、多くの方法を使ったと言いました。衆生のレベルに合わせて、さまざまな比喻を使ったのです。ですから、決して般若心経（はんにやしんぎょう）と阿弥陀経に違いがあるのではなく、実際は全く同じなのです。

釈迦牟尼仏は法華経（ほけきょう）の中で「仏陀がこの世に現れるのは、人々に仏陀の智慧と見解を理解してもらい、人々に仏陀になつてもらいたいからです。人々に仏陀を崇拜するよう、礼拝するよう世界中で最も偉大な人であると世々代々、賛美するように、人に教えるために来たものではありません」と述べています。釈迦牟尼仏は、「仏陀は人々を仏陀にし、人々に仏陀の智慧を理解させるために現れた」と言いました。仏陀の智慧を理解できるようになつたら、仏陀になつたことを表わしています。釈迦牟尼仏はこの目的のために娑婆世界に来たのです。ですから、經典も比喻もすべて人々を仏陀にするためだけなのです。般若心経も阿弥陀経も目的は同じです。その点については後でまた話します。

阿弥陀経の經典に関しては、他にもう一冊あります。それは観無量寿経（かんむりようじゅきょう）です。この經典で釈迦牟尼仏は、私たちはどのように阿弥陀仏を観想するか、観音菩薩と大勢至菩薩を観想するか、を述べています。また西方浄土の光景を説明し、上品上生（じょうぼうんじょうしよう）や、中品中生や、下品下生を得るためにそれぞれ備えるべき必要な条

件と、西方浄土に往生するために十六種類の観想を修行しなければならないと述べています。これらは観無量寿經の大体の内容です。実際、これは阿弥陀經でもありません。

阿弥陀經で釈迦牟尼仏は「一心に阿弥陀仏を念じ、一日、二日、三日、七日と、一心不乱であれば、西方浄土へ行くことができる」と言っています。けれども、唱えてみてください。一心不乱にできますか。一つも雑念がないことさえできません。まして一日、二日、七日はおおさらです。なぜこんな簡単な法門でも、私たちはできないのでしょうか。きっと何か正しくない所があるのです。それは私たちには「無量光」が見えないからです。ただ口で唱えるだけではまだ足りません。「念」というのはいわゆる中国語の「想念」（想う）です。想念二文字には「心」がついています。「心」で念じることを表します。もし「心」で念じるなら、まず見なければなりません。そして「心」で念じることができません。そうでしょう。

例えば、男性が女性に想いを寄せたとします。まず、会ってそれから想うことができます。少なくとも相手の声を聞いたり、手を見たり、通り過ぎるのを見たり、顔を見たりしてから思うことができるでしょう。そうでしょう。相思は二人が互いに想い合うことで、見てもいないのに想えますか。わかりますか。もし私たちが無理やり頭脳に想わせたとしたら、頭が痛くなります。以前女性は家に閉じ込められて、勝手に出られなかったので、愛情の物語も少なく、恋わずらいも少なかったのです。今は比較的多くなりました。男女双方が出会うチャンスが多

くなったので、想うことも多くなりました。

同様に、もし私たちが仏陀を「想う」なら、仏陀を見ないでどうやって想うことができるでしょう。それで一心不乱になるのは難しいです。私たちはそうしたくないのではなく、仏陀が見えないからです。ですから、一心不乱になるには、まず無量光、Amitabha（アミターバ）を見なければなりません。私たちの「有量光」を「無量光」と合わせて一つにして、その時、想い合うことができ、「想う」ことができます。仏陀は私たちと通じ合うことができます。私たちも仏陀と通じ合うことができますのです。

私たちはすでに無量光だとしたら、内面に光があるはずですが、この光が多くても小さくても、この光さえあれば、必ず無量光が見える方法があります。光が見えた時が、いわゆる「花が開いて仏陀を見る」ということです。仏陀は一般人が想像した形をしているわけではありません。当然、仏陀は形を変化させることができますが、それは本来、仏陀はそのような形をしているというわけではありません。仏陀は無形無相ですが、どんな形相にも変化できます。ですから「何千億の化身がある釈迦牟尼仏」、「観音菩薩は三十二相に化身して俗世に遍在する」、「無量光、光の中に無数の仏陀を化生し、無数の菩薩を化生する」と言います。仏陀は本来無量光であり、どんな姿にでも化生（けししょう…卵や母親からではなく、何も無い所から生まれること）ができるのです。

また「花が開いて仏陀を見る」ことについて話しましょう。一体どんな仏陀が見えるのでしょうか。この「無量光」が見えるのです。この光は観音菩薩に変化したり、阿弥陀仏に変化したり、大勢至菩薩（だいせいししぼさつ）に変化したり、何にでも変化できるのです。すべては私たち自身の無量光が化生したものです。ですから「一切唯心造（すべては心が造り出す）」のです。けれども、私たちがまだこの「心」を見つけない前は、「すべては心が造り出す」とは言えないのです。なぜなら、私たちは何も変えることができないからです。病気を治したくても、病気は良くなりません。お金持ちになりたくても、結局お金がありません。西方浄土へ行きたくても、結局東方に行ってしまうからです。（笑い）天国へ行きたくても、結局地獄に行ってしまうのです。これは私たちがまだ「心」を見つけていないからです。ですから、「すべては心が造り出す」と言えないのです。

無量光が見える前は、本当の「念仏をしている」とは言えません。これは私が經典の内容を話しているだけで、みなさんを批判するつもりではありません。みなさんがどのように唱えているのかもわかりません。ただみなさんの参考になるように言ったのです。

私たちの体にはあるドアがあります。ドアと言っても実際はドアではありません。目と言っても目ではありません。いずれにせよ、そこから私たちの智慧を開くことができます。ある人はそれを「智慧眼」と言います。この智慧眼を開くと仏陀が見えます。仏陀の智慧が得られる

のです。ですから、また「仏眼」とも言います。私たちがどうやってそれを開くことができるかがわかれば、すぐに自分の「本性」を見ることが出来ます。私たちが「光」であるのが見えます。最初は「有量光」ですが、いつも見ているうちに束縛している衣服を破った後、「無量光」になります。無量光になった後、「無量寿」になります。その時、生と死から解脱するのです。不生不滅（生じることも滅することも無い）、不來不去（来ることも行くことも無い）「如来」になるのです。

一般の人は多くの法門を修行していても、このポイントを忘れていきます。まずこのドアを開けなければなりません。そこに光があるからです。ドアを開くと路（みち）が見つかります。この智慧眼を開くと智慧が得られるのです。仏眼を開くと、私たちは「仏性」「仏光」、または「自性光」が見えるのです。仏光はすなわち自分自身の光です。私たちは本来仏陀だからです。ですから、釈迦牟尼仏は「衆生はみな仏性がある」と言いました。釈迦牟尼仏は私たちを騙すはずがありません。ただ私たちがわからないだけです。「ドア」が開かないのは、私たち自身の間違いです。この智慧のドアを開けば、釈迦牟尼仏が言った阿弥陀仏がどんな様子なのか理解することが出来ます。その時から、どうにか認識し始めるのです。想うことが出来ます。最初は少ししか認識できませんが、帰ってから、想えば想うほど認識できるのです。その時、真の「念仏」が出来ます。この方法で「念仏」すれば、必ず往生できます。六十歳、七十歳、ある

いは百歳まで待たなくても、今すぐに往生できるのです。

往生というのはどんな意味でしょう。いわゆる「出て行く」ことです。出て行くとは何でしょう。私たちの「真の体」あるいは「真の人」がこの体から出て行くことです。私が先ほど言ったコップのことです。コップを水の中にかぶせると、コップの内に水が閉じ込められてしまいます。コップを取り除くと水は前の状態に戻ります。コップを取り除かなければ、コップの中の水は徐々に変質し、腐敗して臭くなります。流水も同じで、止まらずに流れていけば問題がなく、水はいつでもきれいなままです。もしある人が池を作り、水が流れないようにしたら、何日も経たないうちに、蚊が発生してカエルも生まれ、多くのものが生えてきて、以前のようになきれいではなくなります。水が流れなければ、大きな流れと一緒にならなければ、「死んだ水」になるのです。

同様に、私たちがこの体に閉じ込められたままなら、私たちの光はますます暗くなり、ますます苦痛になります。この「大きな光流」とのつながりが断たれたので、交流できなくなり、孤独になり、苦痛を感じるのです。何をやってもよくなりません。何を与えられても満足できません。私たちはだんだん腐敗して臭くなり、長くても百年しか生きられないのです。腐敗すると光もなくなり、肉体もなくなり、その時どこへ行くのかわかりません。私たちはみな往生を期待しますが、往生したければ、今のうちに練習しなければなりません。そうすれば、その

時が来ると、真の往生ができます。今練習しないと、その時が来てもうすればいいのかわかりません。

例えば、子どもの頃に勉強をしなければ、大きくなって学者になれるわけがありません。もちろん死んだ後、学者になることなどあり得ません。ですから学者になりたければ、まず勉強しなければなりません。勉強しなければなることはあり得ません。農民が死後、医者になれるわけがありません。同様に、今私たちが往生について何もわからなければ、その時になっても往生はわかりません。私たちは強制的にこの世を離れさせられるのであって、本当の意味での往生ではありません。

ですから、念仏も、正しい念仏の仕方です。唱えて初めて一心不乱になれて、往生が保証されるのです。今この方がわかっているならば、現世の因果が終わった時に、私たちは往生できます。ですから、昔から今まで多くの大師たちは往生する前に、自分がいつ去るのかわかっています、それを弟子に伝えました。もし去る日を一日延ばして欲しいと求めれば、延長することもできました。師はすでにわかっています、しかも準備できているからです。まずシャワーを浴びて弟子を集め、みんな一緒にお茶を飲んで、(笑い) 飲み終わると心穏やかに座ったまま往生します。これは師が毎日往生の練習をしているからで、すでに慣れているのです。まるでみなさんが市場に食材を買いに行くのと同じで、毎日行ったり来たりして、道をよく知っているのです、

たとえ目を閉じたままでも市場に行くことができます。だから大師たちにとって往生はとても簡単なことなのです。

もし、私たちが毎日どこにも出かけないで、ドアを閉めたままにしておく、しばらく経つとドアが開かなくなってしまう。そうでしょう。ドアが錆びついてしまい、まるでくっついてしまったかのようになり、たとえ鍵があっても開けられません。私たちの体にもドアがあります。もし私たちが今、毎日少しずつ開けていかなければ、往生する時に開けにくくなります。ですから、今まで修行したことのない人は、臨終の時とても苦しむのです。どうしてでしょう。それはその人の霊魂、霊魂と言えば、みなさん良く分かると思いますが、霊魂すなわち主人、自身の「真の人」が出ようとしても、ドアが開かず、あちこち走り回ったり、ぶつかったり、非常に苦しく、どこから出られるのかわからなくて、出られないのです。例えば火事の時、玄関から出られないと、カーテンを破り、窓を割るか、またはトイレの小さい天窓から飛び降りるようなものです。飛んだ時、手や足、または体をけがするかもしれません。緊急の時、正しい門から出られなくなり、仕方なく窓から、または他の出口から飛び降ります。慌ててむやみやたらにするのでその結果、体を傷つけてしまったり、障害物に当たって死んでしまったりするのです。

同様に、私たちは今、正しいドアがどこにあるのか知りません。ドアをちゃんと開けて、準

備しておかないと、この世を離れる時、当然苦しみます。出たくても出られないからです。正門のドアが開けられないので、仕方なく横のドアに行ってしまうのです。ですから地獄に落ちたり、畜生、餓鬼、阿修羅の境界（きょうがい）に行き付き、死後、地獄に落ちたり、餓鬼、畜生、阿修羅などになってしまうのです。

この他、阿弥陀経で、仏陀はまた「福報が足りない人は、西方浄土に生まれることはできない」と言っています。みなさんは口で阿弥陀仏を唱えれば十分に福報が得られると思いますか。（聴衆答える：いいえ）それに、金剛経で述べている、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧を加えて修行して、初めて福報が足りるのです。さもないければ、釈迦牟尼仏は阿弥陀経を説いただけで十分だったと思います。なのに、なぜ金剛経も説いたのでしょうか。釈迦牟尼仏が阿弥陀経を説いていた時、阿難（あなん）もいました。阿難は釈迦牟尼仏の大弟子です。阿難のために、釈迦牟尼仏は楞嚴経を説いたのです。釈迦牟尼仏が経を説く時、阿難はいつもその場にいました。釈迦牟尼仏が観無量寿経を説いていた時も、阿難はいました。当時、王妃葦提希（いだいけ）が牢獄に監禁されていた時、彼女は目犍連（もくけんれん）と阿難を牢獄に派遣して、経を説いて欲しいと、釈迦牟尼仏にお願いしました。その時、釈迦牟尼仏は靈鷲山（りょうじゆせん・グリッドラクター）において、王妃葦提希の願いを聞き、すぐに阿難と目犍連を派遣し、釈迦牟尼仏自身もそこへ飛んで行って、三人で王妃葦提希に観無量寿経を説いて聞かせました。

釈迦牟尼仏が牢獄で阿弥陀経を説いた時、阿難もその場にいたのです。これは阿難が真の念仏法門を知る機会があったことを表わしています。なのに、なぜ楞嚴経の中には、釈迦牟尼仏はまた阿難に観音法門を学ぶよう説いたと書かれています。文殊菩薩も仏陀になるには観音法門を学ばなければならないと言いました。「念仏」は口で唱えるだけでは十分ではなく、必ず観音法門を修行して、智慧眼を開かなければなりません。仏陀が見えて初めて「悟無生（すべてのものは実体がないことを悟る）」ことができるのです。いわゆる「花が開いて仏陀が見え、無生を悟る」のです。仏陀が見えないと、不生不死にはなれません。仏陀を見ることは無量光を見ることです。頓悟（即座に悟る）の方法ではすぐに無量光が見えるので、観音法門は「頓悟（即座に悟る）の法門」なのです。仏陀を札拜することや念仏などは「漸悟（ゆっくり悟る）の法門」で、ゆっくり学ぶことです。このような法門は神秀が教えていましたが、六祖慧能は「頓悟の法門」、すなわち、どのようにすればすぐに「見性成仏（本性を見て仏陀になる）」ことができるかを人に教えていたので、

このような頓悟の法門は今でも学べます。古代から今日に至るまで、いつの時代にも「頓悟」と「漸悟」の法門を伝授する人がいました。私たちは学びたい法門を選択できます。けれども、「頓悟」の法門を教える人を見つけないのはなかなか難しいのです。ほとんどの人が漸悟の法門を教えているからです。ゆっくり修行し、毎日鏡を拭くこと（身是菩提樹，心如明鏡臺，時時

勤拂拭，勿使惹塵埃：身はこれ菩提樹　心はこれ明鏡台のごとし　時時に勤めて払拭し　塵埃を有らしむることなかれ）を人に教えています。しかし、六祖慧能は「鏡はない。本来何もない。なのは何を拭わなければならないのか（菩提本無樹，明鏡亦非臺，本來無一物，何處惹塵埃：悟りにはもともと樹など無い　明鏡もまた台では無い　本来何もないのには　何処に塵埃があるのか）」と言いました。漸悟と頓悟は外からは同じように見えますが、実際はレベルが全く違います。

阿弥陀経にも観音法門について述べられています。その中には毫光（こうこう：仏陀の体から発する莊嚴な光）について述べられていて、無量光を観ることや、内在の音などについても述べられています。今日は少ししか話しませんが、いわゆる「花が開いて仏陀を見る」というのは、つまり「仏性」が見て初めて、「無生を悟る」ことができるのです。「無生を悟る」は何でしょう。それは不生不死です。すでに生死から解脱したという意味です。先ほど言ったように、阿弥陀経で釈迦牟尼仏が西方極樂世界のさまざまな光景を紹介しました。蓮の花があり、八功德水（極樂浄土の池の水、八つの特質がある）があり、また仏陀が化身した小さい鳥が二十四時間ずっと説法し続けています。衆生がその小鳥の説法を聞き、西方極樂世界の昼夜休むことのない妙なる音楽を聞いたなら、一心不乱に仏、法、僧を唱えることができるのです。

私は先ほど言いましたが、もし私たちが仏陀を見なければ、本当の「想念」ができません。

今、私たちは何も見えなければ、何も聞こえていません。それは非常に辛いことではありませんか。これは「念」仏したことになります。釈迦牟尼仏はつきりと言いました。西方浄土の妙なる音楽が聞こえてから、衆生は自然に仏、法、僧を想念する心が生まれるのです。その時こそ真の「念仏」ができるのです。今私たちは見えないし、聞こえないので、当然一心不乱に念仏することができません。これは私たちの間違いではありません。本当の「念仏」を教えてください。人がいなかったからです。

釈迦牟尼仏はずっと前にこの世から離れました。釈迦牟尼仏の大弟子たちも去りました。今多くの師がいますが、みなさんが一心不乱に念仏する方法を知らないのは、みなさんが求めていないからなのか、それともそれらの師たちが知らないのか、私にはよくわかりません。とにかくみなさんの念仏の方法は一〇〇％正しいとは言えません。まだ五〇パーセントのことしかしていません。無量光がまだ見えていないために、西方浄土の妙なる音楽がまだ聞こえていないので、仏、法、僧を一心不乱に念じる心が自然に生まれて来ないのです。私の話は間違っていますか。みなさんはわかりますか。(聴衆答える：わかります) 仏陀の言った通りにしなければなりません。そうすれば、真の「念仏」ができ一心不乱になれるのです。

また他に「オンマニパドメイウン」という呪文があります。どんな意味かわかりますか。「オン」の文字自体には特に意味はありません。これはただサンスクリット語の発音で、宇宙の音

に似ています。私たちが修行してあるレベルに到達すれば音が聞こえますが、それは「オン」という発音に似ています。ですから「オンマニパドメイウン」は神の呪文になります。「マニ」は何を指しているでしょうか。マニは摩尼です。摩尼珠または如意珠の意味で、この摩尼珠、如意珠は私たちの仏性を指しています。わかりますか。悟った時、この摩尼珠が得られるのです。「花が開いて仏陀を見る」は、すなわちこの摩尼珠が得られたことです。

なぜ仏性が摩尼珠になったのでしょうか。仏性を見ると、私たちは欲しい物をすべて得られ、また、なりたいたいものにすぐになれます。まるで如意珠のようです。わかりますか。望んでいることがすぐに実現します。思ってもいかなかったものが、すでに手に入ることもあります。ですから摩尼珠と言います。摩尼珠はサンスクリット語ですが、中国語に訳すと如意珠です。もし私たちが摩尼珠を持つていれば、すべてを持つていることになります。

「オンマニパドメイウン」の「パド」は蓮の花を指します。ですから、私たちは蓮花生大師を Padma Sambhawa といい、Padma あるいは Padme の意味は同じで、ただ各地で発音がやや違うだけです。ですから「オンマニパドメイウン」の意味は「この摩尼珠は蓮の花の中にあり、蓮の花の中に光のように光る宝珠がある」です。いわゆる「光」と「音」が蓮の花の中にあるのです。意味がわかりますか。阿弥陀経では「花が開いて仏陀を見る」と言っています。この言葉の意味は「オンマニパドメイウン」と同じです。けれども、「摩尼珠」が見える前に、

「仏性」が見える前に、私たちが「オンマニパドメイウン」と唱えてもあまり役には立ちません。昔の大師たちはこの呪文を使つて、私たちに摩尼珠を探し求めることを気づかせてくれたのです。摩尼珠は私たちの蓮の花の中にあります。

なぜ「蓮の花」と言うのでしょうか。なぜ「花が開いて仏陀を見る」と言うのでしょうか。なぜ果実が開いて仏陀を見るとか、手が開いて仏陀を見るとか、耳が開いて仏陀を見るなどと言わないでしょうか。なぜ「花が開いて仏陀を見る」と言うのでしょうか。私たちの体内には生死に関わりのある重要な「チャクラ」がたくさんあり、そのチャクラは蓮の花のように見えます。私たちの体に「チャクラ」がたくさんあるのです。なぜ「チャクラ」と言うのでしょうか。私たちはそのチャクラを修行し、そのドアを開ければ大宇宙と繋がるからです。先ほどのコップの例のように、コップさえ取り除けば、コップ中の水がすぐに大海の水と一緒にになります。ですから、私たちはそこを「チャクラ」と呼んでいます。

私たちの体にはチャクラがたくさんあります。生殖器、丹田、心臓、咽喉、眉間、頭頂などにあります。私たちが修行して智慧眼を開けばわかります。それが蓮の花のように見えるのです。その形は満開の蓮の花のようです。ですから「オンマニパドメイウン」は宝珠が蓮の花の中にあることを表しています。いわゆる「花が開いて仏陀を見る」の意味です。ですから、果実が開き仏陀が見えるとは言わないのです。それは果実に見えるのではなく、蓮の花のように

見えるからです。もしこの花が開けば、私たちは摩尼珠を得られます。従って「オンマニパドメイウン」、「花が開いて仏陀を見る。無生を悟る」はこの意味です。

従って、数々の経典は同じことを言っています。神呪と顯呪も同じことです。時間があつたら参考にできます。修行後、それらの意味は大体同じであることがわかります。けれども、チャクラがそんなにたくさんあるなら、どのチャクラを開けばいいのかを自問するかもしれません。この問題については、すでに開いた人に聞かなければなりません。時間が来ました。みんなで回向（えこう）を歌いましょう。



観音法門の修行の利益

スプリームマスター チンハイ フォルモサ・台北

一九八七年三月七日

釈迦牟尼仏は四十九年間、伝法しました。それは全て解脱の法門でした。すべての仏教の経典では、この観音法門についてふれており、賛美しています。昨日ある修行者が来て私に、「法華経（ほけきょう）は何について述べているのですか」と聞きました。これについては、我々修行仲間はずでに何十回となく私の説明を聞いています。

法華経では観音法門のことを述べており、内在の音について話しています。みなさん帰ってから読めばわかるでしょう。しかし観音法門を修行していない人は、なかなか信じないかもしれません。法華経の中で、釈迦牟尼仏は観音法門を「法華法」「蓮華法」と言い、金剛経の中では「金剛法」と言い、阿弥陀経の中では「浄土法」と言っています。言い方が違うので、私たちは混同しがちです。人々の理解とレベルはそれぞれ異なるため、釈迦牟尼仏が違う名称を使つて、同じ法門を解説したわけです。たくさん法門があるのでありません。この点につい

て私はすでに澎湖で話しました。後で講義のプリントを配りますから、みなさんは帰ってから、よく読んでください。そうすれば理解できるでしょう。今日は繰り返して話しません。

話し始めてから今日でもう四日目です。私は多くのことを話しましたが、その主旨は最高の法門は観音法門であることをみなさんにわかしてもらいたいことです。私はやることなく、毎日好んでここで講義しているわけではありません。講義するのはみなさんに、なぜ普通の法門は究極の解脱の法門ではなく、観音法門だけが最高の法門であるかを本当に分かってもらいたいからです。しかし今までの話は、ただ観音法門を賛美し、紹介し、宣伝したに過ぎません。みなさんはこの法門が何なのかまだよくわかっていません。そうでしょう。

法を伝授する時、私は何も話をしませんが、弟子はこの法門を得られるのです。言葉で伝授するものではないために、經典の中でこの法門を見つけることは不可能です。古代のすべての大禅師たちは「教外別伝、不用經典（言葉や儀式を用いない特別な伝授法。經典も使わない）」と言いました。なぜなら、經典では何も伝授することができないからです。經典はただ一種の記録にすぎません。昔の修行者の体験、考え、悟りを開いた後どんなことを話したか、何を見たか等について書かれていたもので、これは後世の人たちが自分の体験と照らし合わせてみたり、参考にしたり、研究したりするのに使うものです。したがって、經典でもって伝法することはできません。

西遊記には、玄奘大師（三蔵法師のこと）は經典と道を求めて、中国大陸からインドに渡る道中、どれほど苦勞したか、どれほど魔の障害に付きまとわれたか、彼の弟子孫悟空がいかに魔物を退治して、そして最後に經典を手にしたかについて書かれています。彼らが手にした經典は玄奘大師のものではありません。ですから、西遊記の話聞いても読んで、私たちは何の役にも立ちません。その經典を得ることもできません。また、当時玄奘大師の苦痛を体験することもできないし、孫悟空の神通力も得られません。ただ話の内容を想像するだけです。そうではありませんか。

楞嚴經（りよごんきよう）、法華經、金剛經の中で、仏陀は繰り返し返し観音法門を賛美していますが、私たちには観音法門とは何なのかわかりません。多くの人は楞嚴經を読んで、これが究極の法門であることがわかります。しかし、どのようにこれを修行するのかわっている人はごく少数で、大半の人は推測するだけです。

例えば、ある人は海潮音を聞くために海に行き、絶え間ない波の音を聞くことが観音であると思ってしまうのです。また、ある人は観音法門とは「南無觀世音菩薩（なむかんぜおんぼさつ）」と唱えることだと思つています。また、ある人は大悲呪（だいひじゆ）を唱えることが観音法門だと思つています。さらには、是非を見極めることが観音法門だと思つています。つまり、善し悪しはなく、人に罵られても、平然としていられるということです。これは内心

を観ることで観音ではありません。また、観音法門は慈悲の心を観つめることだと主張する人がいます。例えば、そこに座って、自分の前には何があるか、後ろには何があるかと、右側には親戚、友人がいて、左側は見知らない人がいると思いつつと観つめ、彼らに気高い理想と慈悲の心を発して、彼らの幸せを祈り、包み込み、寛容的に受け入れることが観音法門であると思ってしまうのです。

私たちは経を読んで、本当にその教義を理解すれば、ちよつと聞いただけで、先ほど言ったさまざまな推測には根拠がないことがわかるでしょう。そういったやり方はいずれも我々凡人の頭脳で想像したものです。観音菩薩の慈悲は計りしれないものです。観音菩薩は菩薩なので、私たちがそのレベルに達していなければ、決して観音菩薩の慈悲の心を分らないのです。凡人の頭脳には限界がありますが、観音菩薩の慈悲は無量無辺で、言葉でその慈悲の心を表すことはできませんし、人間の頭脳では想像できません。頭脳で想像でき、頭脳を使って観音菩薩になれるなら、修行する必要はありません。

大悲呪を何十万回唱えると千手千眼の菩薩になるなら、フォルモサ（台湾）ではすでに多くの人が観音菩薩になっているでしょう。彼らはとても熱心で何十万回も唱えています。チベット人、オウラック（ベトナム）人もそうです。けれども、観音菩薩になった人はいません。彼らは大悲呪をたくさん唱えましたが、心はまだ平和になっておらず、慈悲の心もまだ足りませ

ん。申し訳ないですが、私は話さない訳にはいきません。これは真実だからです。

彼らはまだ「貪瞋癡（貪り、怒り、愚かさ）」が大きく、唱えれば唱えているほどエゴが大きくなります。というのは彼らはともすると、「私」は修行している、菜食している、「私」は念仏して、仏陀を拜んでいる、「私」は慈悲心がある、「私」は何々であると、いつも思っています。常に「私は… 私は…」と言って、「私」がますます大きく膨らんでしまい、どんな話も耳に入らなくなっているのです、彼らに教えられる人は誰もいません。また、新しい法門を伝授できる人もいません。なぜなら、彼らの頭は「私」でいっぱい、他のものが入る隙間が少しもないのです。彼は「自分は何でも知っている。何でもわかっている」と思っているのです。

ですから、真の法門を理解していないと修行は大変難しく、とても容易に「エゴ」にとり囲まれてしまいます。まだ修行していない人は少し謙虚な心がありますが、少し修行したことで、かえって厄介になっている人がいます。ある人は私に「読経すると福報が得られますか。読経は良いことですか」と聞きます。菩提達磨は「良くない」と言いましたが、私は「良い」と言っています。（笑い）なぜなら、私はみなさんと論争したくないからです。私はみなさんと友達になりたいのです。読経が好きなら、すればいいのです。

例えば、みなさんが酸っぱいものや甘いものが好きなら、もちろん食べていいです。私は反対しません。それと同じで、私が読経を止めさせることはしません。好きならそうしてください

い。読経は人を罵るより良いですし、人の善し悪しを言うより良いでしょう。ですから、私は「読経は悪くない、やってください、福報があります」と言います。けれども、読経は私個人にとつては福報が足りません。そのような福報は俗世間の福報にすぎません。経典の意味がわからなくても、読経すれば利益を得られるなら、テープレコーダーも仏陀になれます。(笑い)テープレコーダーにも福報があるでしょう。テープレコーダーは私たちよりはつきり読経するからです。時々私たちは唱えながら寝てしまいますが、(笑い) 機械は間違つて唱えることはなく、寝てしまうことはありません。

ほとんどの人は、修行とはただ読経すればよい、または仏陀を拝めばよいと思つています。だから、そのような傲慢な態度が生じるのです。もし読経や経を唱えることが、経典を理解したいため、真理を求めたいためなら、たとえ本当に教義がよくわかっていなくても、傲慢にはなりません。経を読んだり、唱えたりすることは悪くありません。少なくとも経典は私たちにとつて参考になり、昔の人がどのように修行していたのかがわかり、だんだんと私たちも彼らと同じように修行し、彼らと同じようになりたいと決意することがあるからです。けれども、読経は福報があると聞いて、その福報を欲しがって、たくさん経を唱えたとします。唱えれば唱えるほど、「私」の福報はこんなにも大きいと思うのです。福報とは何なのかもわからず、見ることすら触れることもできないのに、自分には大きな福報があると思つてしまうので、「エゴ」

は大きくなり、傲慢になります。これはとても危険です。

他の法門についても楞嚴經に書かれています。どんな法門もそれぞれの優れたところがあり、私たちが修行に集中できるように手助けしてくれます。自分の修行している法門を信じるなら、多少は結果が得られます。ないわけではありません。たとえ、自分の名前を唱えても効果がありません。帰ってからやって見てください。集中して自分の名前を一週間唱えても、禪定（サマデー）に入ることができません。しかし、「集中」してこそ有効です。帰ってからやってごらん下さい。しばらく阿弥陀仏を唱えるのを一週間休んで、自分の名前を唱えてみてください。（笑い）このようにしても福報はありません。

当然、阿弥陀仏を唱えたほうが自分の名前を唱えるより福報があります。なぜなら阿弥陀仏のサンスクリット語は *Amiṭabha*（アミタバ）であり、この音は宇宙の振動に似ていて、サンスクリット語の発音は宇宙の振動に近いからです。みなさんは内面の宇宙の振動を聞いたことがないですが、「集中」して仏陀を唱えて、梵天の振動（梵音）が聞こえた時、少しは感じることができません。

中国には昔から大豆を使って「南無阿弥陀仏」と唱える風習があると聞いています。一回唱えるごとに大豆を一粒、片方に移し、たくさんたまったら、それを人に分けて食べてもらい、その人と縁を結ぶ、ということでした。これは私が聞いた物語ですが、あるお婆さんが毎日「南

無阿弥陀仏」を唱えていました。普通は唱えた後、大豆を人にあげて、また新しい大豆を買うのですが、しかし、彼女には大豆を買うお金がないため、使っていた大豆を毎日繰り返し使つて念仏しました。一回唱えたら一粒を片方に置き、全部を使い終わると、また新たに一回に一粒ずつ元のところに戻しました。このように一定期間念仏していると、今度は大豆がひとりでも移動し始めました。彼女が一回念仏すると、大豆は自分で片方に飛んで行くのでした。

みなさんは信じますか。この物語を聞いたことがありますか。なぜこのようになるのか、誰か知っていますか。みなさんはそんなに長く阿弥陀仏を唱えているのに、どうして知らないのですか。フォルモサ（台湾）人で浄土法門を学んでいない人はまれです。彼らは、阿弥陀仏の修行以外には、他に修行法はないと言います。ここにいる人の中で毎日、阿弥陀仏を唱えている人はいますか。（ある人が答える：彼女は念力がとても強いからです）しかし、多くの人が一生懸命唱えているのに、なぜそのパワーがないでしょう。（ある人が答える：感応があるからです）感応はどこから来るのですか。なぜ他の人には感応がないのですか。中国の中で、彼女だけが思いを込めて念仏している、ということはないはずです。中国大陸はあんなに広くて、たくさんの方が念仏しているのに、なぜたった一人だけ念力があり、他の人にはないのですか。修行が良くないので分からないのです。修行すればするほど智慧眼が開き、宇宙には多くの他の衆生いることが見えるのです。大きな衆生、小さい衆生、高いレベルの衆生もいれば、肉

眼では見えない微細な衆生もいます。彼らは行ったり来たりして、時には、「料理が煮えすぎたよ」と教えてくれることもあります。しかし、あなたには見えないし、聞こえないため、彼らの存在が分からないのです。

そのような小さな衆生たちは、私たちが毎日、仕事で疲れているのを見ると、私たちと遊んでくれたり、何か手伝ってくれたりします。どうせ彼らにはやることがないのです。その中にはかわいいのもいれば凶悪なものもあります。彼らは悪意で故意に人を傷つけるものではありません。厳密に言えば、幽霊ではなく、大自然から化生（けししょう：母胎や卵からではなく、何もなしとところから生まれること）した「元素（Element）」です。自然に化生した衆生と言えば、みなさんにはわかりやすいでしょう。ですから、樹木、野菜にそのような衆生がいるそうです。自然から化生した衆生は至る所に満ちています。（仏陀は生命には胎生、卵生、化生、湿生の四種の形態があると言いました）ですから、仏教は非常に科学的なのです。釈迦牟尼仏は二千百五年前にすでに「私たちが一生の内に、目では見えない衆生がたくさんいる」と言いました。釈迦牟尼仏は智慧眼で多くのものを見通していたのです。

私たちの肉眼では見えない、自然から化生した小さな衆生は、比較的善良で私たちの手助けをしてくれます。凶暴だったり、いたずら好きな衆生は事件を起こしたり、けんかさせたりします。ある衆生は善良な人が好きで、彼らと遊ぶのが好きで彼らを助けます。ある衆生は人に

けんかをさせるのが好きです。これは彼らの本性で、災いを引き起こすのが好きです。ですから、時々私たちが話しているところに、多くのそのような小さな衆生が駆け寄って来て、そこを取り囲みます。時にはそこが光っているのが見えます。修行していない人は仏陀や菩薩の光だと思っけていますが、実際は私たちに見える光がすべていいものとは限りません。それは肯定的な光ではなく、否定的な光でネガティブなパワーに属する光です。その種の小さな衆生にも光がありますが、智慧眼が開かなければ見分けられません。

聖書にはこう書いてあります。「神は二種の光を造り出しました。一つは昼間の光で、もう一つは真つ暗な光です」と。真つ暗なのになぜ光があるのでしょうか。神の言う意味は良くないパワーを指しています。わかりますか。それらの衆生はそんな場所に充滿しているので、時には、私たちが線香をあげて願いごとをすると、彼らも寄って来て線香で遊ぶのです。すると私たちは仏陀や菩薩が自分の願を聞いてくれたと思っけてしまうのです。実はこれも大したことはありません。ただ彼らはいたずら好きなので、遊んでいるだけのことです。このようなことはたくさんあります。

例えば、私たちは普通に道を歩いていたところ、突然、交通事故に遭ったりします。これはすべてそれら衆生たちの仕業によるものです。一回交通事故のあった場所では、それ以後もよく事故が発生します。ですから、私たちはよくその場所は「邪気が強い」、そこを通る時は押ん

だほうがよい、さもないければ交通事故に遭うと言うようなことを聞きます。一、二度事故があった場所には、それらの衆生たちがよくそこに集まります。わかりますか。彼らは衝撃的で、悲しい雰囲気や、大混乱の雰囲気が大好きなので、そこに集まり住みつくのです。そして車が走って来ると破壊的な工作をしたりします。すると車は故障して走行不能になったり、または思いがけない事故が発生したりします。すると彼らは側で笑っています。

私たちの中には、憂鬱な性格の人かもしれません。かつとなる短気な人もいます。昨日、私は磁場 (Magnetic Field) のことを話しましたが、良い磁場も悪い磁場も、すべて自分で造り出したものです。いずれも私たちが良い元素 (Element) を吸収したか、悪い元素を吸収したかによって形成されたものです。あるいは、その他の特別な状況によるものです。修行者はそのような災いにあうことは少なく、病気も少ないのです。観音法門を修行する人は最も安全です。これは私自身の体験から言えることです。なぜなら、観音法門を修行すると最高のパワーと一緒にいるからです。昨日、私は「音」について話しました。この「音」は創造主のパワーであり、楞嚴経では「音流」と言い、聖書ではこの音を (the Word) 「言 (ことば)」と語っています。仏陀や菩薩はこの音流にそって下りて行って衆生を救い、そしてこの音流にそって上がって行く (帰る) のです。この「音流」は「道 (タオ)」であり、老子が言っている「名不可名 (言葉で言い表せない名)」なのです。

したがって、この「名不可名」、この「音流」とつながらないと、私たちはとても孤独で、孤立しているように感じます。それは他の助けてくれるパワーがなく、たった一人だからです。しかしこの音流の中に入ると、私たちは自分が大きな団体の中にいるような感じになります。大きな団体そのものは大きなパワーの持ち主です。一人のパワーはとても小さいですが、この自由な大団体の大パワーと一緒にいけば、他の良くないものは入って来られません。この世界には黒があれば白もあり、良いものがあれば悪いものもあります。私たちは良いパワーと一緒にいれば、悪いパワーの影響を受けません。なぜなら、私たちはもう悪いパワーの団体から離れて完全に離脱していることを、彼らも知っているからです。私たちは永遠に彼らから離脱したのです。

ですから、私たち観音法門の修行者には死んだ後、魔や閻魔王は近づきません。それは観音法門の修行者の「磁場」が違うからです。以前とは違って、良いものだけを吸収して、悪いものは吸収しないからです。この「音流」は、私たちの悪い磁場を洗い清めてくれるので良いものだけが残るのです。前は私たちの磁場は穴だらけで、良い場所も悪い場所もありました。良い場所は良いものを吸収し、悪い場所は悪いものを吸収します。今は宇宙の「音流」、つまりこの創造のパワー、源のパワーを使って磁場を修理し、悪い面をすべて洗い落としています。手術を受けるようなもので、悪い組織を取り除いた後、傷口を縫い合わせれば、しばらくすると

病気が治り、体も健康に回復するのと同じです。

観音法門の修行も同じです。この大きなパワーを使って私たちの弱い部分を修理します。それで、すべてのものがきれいになり、災いもなくなるのです。真面目に修行がしなかったり、気がゆるんで真剣にこの法門を修行しないで、マスターの指示に従わなかったりする場合を除いてです。しかし、そのような状況も少ないです。一度あの大きなパワーと繋がれば、永遠に繋がっていて切れることはありません。しかし、そのパワーを大量に使わなければ、当然少しのパワーしかありません。

例えば、父親が亡くなった後、たくさんの財産を残してくれました。けれども、あなたが怠けて、それを使わなかったり、銀行にお金を引き出しに行かなかったり、または財産を置いてある場所まで出かけてお金を取ってこなければ、当然お金はありません。しかし実際、あなたはお金持ちであることは、みんなが知っていて、誰もあなたのことを貧乏人だと言いません。彼らはみんな、あなたが資産家であることを知っているからです。その財産を使うかどうかはあなた次第です。もし、あなたがたくさんの財産を使えば、生活は当然より快適です。いろいろなものを買えるし、さまざまなおいしいご馳走を楽しめます。もし、あなたが怠けて使わなかったり、使う勇気がなかったりすれば、当然あなたが持っているものは少ししかなく、生活は前とほぼ同じです。けれども、他の人たちは、あなたがお金持ちであることを知ってい

ます。親戚、友達や隣人は、父親からたくさんのお金をもらったことをみな知っているのです。

印心を受けて観音法門を修行する人は、マスターからの伝法により、このパワーと繋がります。宇宙の最大の団体に入ったことになりました。しかし、徐々に成長していかなければなりません。印心を受けた後、私たちは本当の意味で人間の品性を発展させていくことになります。以前は半人前でしたが、今は一人前の完全な人間になったのです。しかし、努力して修行しなければ、当然の運命も生活も、個性もそれほど変化はなく、一目ですぐわかるような変化はないでしょう。

けれども、本当に真面目に修行している人なら、短期間で、一、二日または一週間で、すぐに修行の利益や観音のパワーがどういうものかが認識でき、個人の生活、個性の変化や智慧の発展が感じられ、また以前に比べて大きく変わったことが感じられます。これは私がここで大げさに宣伝しなくても分かることです。なぜなら、彼らは言わずにはいられないからです。まるでコップの中の水がいっぱいになって、自然にあふれてくるのと同じです。観音法門の修行は、この宇宙の中で唯一の法門なのです。

私たちは自国の言葉を用いるのは、当たり前のことですが、フォルモサ（台湾）のこの小さなサツマイモ型の国土には二、三種類の言語があります。言語が違うために、世界中では絶えず戦争が起きるのです。みんな「観音」の言語を使うのが一番いいことだと思います。すべ

ての衆生がわかる音です。ですから、仏陀は一つの音、一つの言語だけを使いましたが、すべての衆生が自分のレベルに応じて理解した、というのはまさにこの意味です。この音、この美しい音楽、内在の音楽は電話のシステムと同じで、私たちは長距離の電話交換台と繋がります。すれば、ヨーロッパ、アメリカ、アフリカ、高雄、台南などに電話をかけられます。まったく問題ありません。

いったん電話線が繋がれば、私たちはもう孤独ではありません。話したい人にすぐに連絡がとれるので、相手もすぐに私たちがどこにいるかわかります。万が一私たちに何か問題があった時は、電話をすれば二分以内にすべてわかります。警察や隣人、友達がみな助けられます。そうでしょう。以前電話がない時は、助けてくれる人を一人探すのも容易ではありませんでした。ある人は家の中で死んだ後、何日経っても誰も知りませんでした。ある人が病気にかかって誰も知りません。今はみんなが電話を持っているので便利になりました。たとえ重い病気で行けなくても、電話一本で医者が見に来てくれます。または救急車が来て私たちを病院まで運んでくれます。またタクシーも家の玄関まで来ます。とても便利です。

観音システムも同じです。この音またはこの内在の音楽は、一つのシステムまたは一本の電線のようにすべての衆生を繋いでいます。ですから、一度このシステムに入ると孤独でなくなるのです。というのは、私たちはすべての衆生と繋がっているからです。修行すればするほど、

このシステムを使えば使うほど、より多くの衆生について分かるのです。まるで電話のように、使えば使うほど、たくさんの友達がいて多くの人と交流し、またより多くの人が私たちのことを知り、私たちがどこにいるかを知っていることも示します。すべての衆生はみな、この内在の音を持っているので、一度この音流に入ると、すべての衆生、小鳥、アリ、さらに微細な衆生に至るまで、すべてが分かるのです。

もし、ある人がアメリカで私たちの名前を呼べば、私たちにはわかります。もう一人がフランスで私たちを恋しく思うと、すぐにわかります。私たちは化身で彼らに会いに行けます。修行レベルが高ければ、化身で私たちに会いに来られます。これはテレビの原理と同じです。または最新型のテレビ電話のように、ここで電話している時に、向こうで話している相手が見えるのです。

しかしその種の音のシステム、または観音というシステムは電話より微細であり、もつと効率がよく、電線を使わないのでお金がかかりません。私たちが誰と連絡しているか、誰も分かりませんし、誰に会いに行くのかもわかりません。どこに行くにも航空チケットを買う必要はなく、何もいりませんし、一步も歩かなくてもいいし、何も言わなくてもいいし、何かも考えなくてもかまいません。このシステムは最も自動的に簡単で速いのです。ですから、観音法門を修行した後、上は仏陀や菩薩と通じ合い、下は三途苦（さんずく…地獄、餓鬼、畜生の苦し

み)と通じ合います。ですから「上報四重恩、下濟三途苦(上に対しては四つの恩に報い、下は三途の苦を救う。四つの恩：仏・法・僧、国家、父母、衆生の恩)」と言われていました。その時こそこのように言うことができます。観音法門を修行する前にはこのようにすることはできません。なぜならこの創造のパワーと繋がっていない人は、衆生を救うなどとは言ってはいけません。まだ自分自身さえ救うことができないからです。自分は明日どこに行くのか、いつ死ぬのかもわからない人が、衆生を救うなどと言ってはいけません。

みなさんのほとんどは自国語がわかりますね。少なくとも九九%の人は、私の話を聞いていて理解できると思いますが、わからなくても大丈夫です。みなさんの智慧がわかっています。みなさんの本性、仏性はわかっているのです。実際、目を見れば十分なのです。男女が恋している時、目を見詰め合うだけで十分通じます。だとしたら、私も同じようにみなさんと通じ合うことができます。明日ここに来て二時間ほど私の目を見てから帰ってください。

本当です。修行レベルの高い人は私に会いに来て、話したいことは何もありません。なぜなら彼らはとても私に会いたがっていて、会わないと恋しくて、何か失われたような気がするのです、私に会いに来るのです。私たちは目を見詰め合い、そして帰って行きます。そして私は再びメデイーションします。これが私たち師と弟子の関係です。

ですから、私たちの法門は「静寂」の法門とも言えます。話すことはありません。私が法を

伝授する時も話しません。七日間リトリーないのです。これこそが「静寂」の法門ではないですか。当然、私たちが「観音」をするということはみなさんも知っていると思いますが、私たちはとても静かに、他の人には絶対に聞こえない、この音を観るのです。隣の人も聞こえません。たとえ一緒に住んでいる夫、妻、子どもでも聞こえないのです。この音と修行レベルは誰も持ち去ることはできません。誰も知らなければ誰にも分かりません。無理に私たちをその境界から引き離すことは誰もできません。

例えば、私たちが仏教徒で、廣欽老和尚に帰依して法名をもらったとして、毎日廣欽老和尚の写真を拝んだり、仏陀を拝んだり、念仏したりしていることを、あるキリスト教徒はそれが気に入らないので、私たちの信仰を批判したとします。この種の信仰の形態は、表面的で誰が見ても修行していることがすぐに分かりますが、けれども、私たち観音法門の修行は誰にもわかりません。バスの中でもできるし、公園でもできるし、お手洗いでもできます。いつでも、どこでもできるのです。

しばらく修行した後は、たとえ何もしなくても常にその内在の音楽と一緒にいます。それは永遠に私たちから離れることはありません。私たちに最も忠誠心のある、最も助けになる、最高の友達です。私たちに必要なものがあれば、いつでも何でも与えてくれます。困難な時には、すぐに助けに来てくれます。私たちの代わりにすべての仕事をしてくれるのです。私たちは特

に何かしなくても、何も期待しなくても、自然に仏陀になるのです。ですから、道を歩くのも禅であり、ご飯を食べるのも禅であり、寝るのも禅であり、日常生活の中の起居動作すべてが禅であるとは、つまりこの意味です。

ただし、このレベルに達する前には、「禅」について、禅はこうあるべきか、などと議論しないことです。日常生活すべてが、禅のレベル達している修行者は、禅はこうだああたと議論している人たちを見ると笑いたくなります。しかし、彼らに何かを話したいとは思いません。なぜなら、話しても分からないからです。話を聞いて分かる智慧を持っている人はごく少数で、オープンな心が欠けていても、その最高で、最も簡単で、最も自然な法門を受け入れることはできないのです。

観音法門をもう少し紹介しましょう。当然これはまだ伝法ではありません。伝法の時、話しません。観音法門は、私が話さない時に得られます。私の話をたくさん聞いたから、すでに観音法門を学んだと思っははいけません。観音法門には三つの部分が含まれています。これが一つになって観音法門になります。

第一は私たちの智慧を使うことです。世界中のどんな人の頭脳も、必ず何かを「念じて（想って）」います。例えば、あなたは夫を「念じ（想い）」、彼は妻を「念じ（想い）」、この人は学問を「念じ（想い）」、その人は仕事を「念じ（想い）」、ある人は善し悪しを「念じ（想い）」、

ある人は悩みを「念じ（想い）」、ある人は悪いことを「念じ（想い）」、または名利を「念じ（想い）」ます。けれども、ただ、阿弥陀仏を「念じる（想う）」ことで悩みを少なくすることができますのです。みなさんご存じのように、阿弥陀仏は無限の光を代表し、阿弥陀仏自身は無量光で、人ではありません。もしまだ阿弥陀仏の姿を見たとしても、それはまだ音色のレベルにすぎず、まだ究極の境界（きょうがい）ではありません。

無量光とは何を意味するのでしょうか。それは私たちにもともと備わっている内在の全てが分かる品性を表しています。私たちはたくさんの品性を持っています。例えば貪り、怒り、愚かさ、悩み、悟り、無明、慈悲、悪い心などです。私たちが阿弥陀仏を「念じる」ことは、私たちの潜在意識の光明な品性と、光明なパワーを呼び覚ますことであり、観音菩薩を「念じる」ことは、私たちの潜在意識の中にある慈悲の品性を呼び覚ますことです。大勢至菩薩を「念じる」ことは、私たちの潜在意識の中にあるこのパワーを呼び覚ますことです。私たちが阿弥陀仏を「念じる」ことは、自分のこれらの尊い品性を発展させたいという願いからです。三宝仏を「念じる」というのはこういう意味です。

三宝仏とは阿弥陀仏、観世音菩薩、大勢至菩薩です。私たちは阿弥陀仏のように悟り、光を持ち、大勢至菩薩のように智慧とパワーを持ち、観音菩薩のように慈悲の心を持たなければなりません。ですから、三宝仏は私たちの内面の最高の品性を代表しています。私たちがこの三

宝仏を念じることは、自分の内面の最高の品性を求めていることです。しかし、みなさんがこれらを念じてあまり大して役に立ちません。なぜなら、阿弥陀仏とは誰なのかを知らないの
で、それを「念じる（想う）」ことは不可能ですし、通じないからです。

例えば、私たちは西施（せいし：古代の中国の美人）は絶世の美人であると聞いています。けれども、彼女に会ったこともなく、ただ聞いた話なので彼女を念じる（想う）ことはできませんが、妻なら想うことができます。なぜなら、西施にあったこともないし、彼女の顔も知らないからです。西施は当然あなたの妻よりきれいですが、彼女はもうこの世を去りました。あなたは彼女を知らないし、彼女の髪さえ想像できないのに、どうやって彼女を恋しく想うことができるでしょうか。そうではないですか。

同様に、みなさんが阿弥陀仏、観音菩薩を唱えても何の役にも立ちません。なぜなら本当の阿弥陀仏と繋がっていないので、無量光が見えないからです。この無量光と通じてなく、創造のパワー、私が前に言った「名不可名（言葉で言い表せない名）」と繋がっていないからです。観音菩薩を唱えても、観音菩薩の慈悲心と通じ合っていないければ、唱えてもあまり役に立ちません。もつとも集中すれば悩みが少し減ることはありますが。問題はみなさんがただ口で「唱えて」いるだけで本当に「念じて」いないので、なおさら役に立たないのです。

なぜなら、みなさんがいつも妻を念じる（想う）時、思い出すのは、昨日彼女とけんかした

ことなどです。「とても恐ろしい人だ。私は彼女と離婚したい」などと。(笑い) 彼女のことを想うと自然に悩みが生じます。もし、集中して阿弥陀仏を唱えれば、一心に阿弥陀仏だけを唱えれば、だめな妻や嫌な夫のことを忘れるので、悩みも自然に少なくなります。集中して唱えればこのような助けがあるだけで、他には何もありません。究極の解脱はできませんし、西方浄土に生まれることもできません。たとえアメリカへ行きたくても、飛行機のチケットを買わなければならぬのに、どうやって口で唱えるだけで西方浄土へ行くことができるのでしょうか。あり得ないことです。西方浄土へ行くのはそんなに簡単なことではありません。

なぜなら、唱えることで悩みが減少するので、自然に少し聡明になり、心が穏やかになります。これは唱えることによる福報です。何もないというわけではありません。けれども、なぜ福報があるのかについて、私たちは智慧で観察しなければなりません。盲目的に信じてはいけません。例えば、人が阿弥陀仏を唱えているのを見て、自分も真似して阿弥陀仏を唱えている時に、人に声をかけられると、腹を立てて「何ですか。あなたは」と言うかもしれません。(笑い) またこの時、子どもが騒いだりすると、また腹を立てて数珠を振り上げて子どもたちを追い払うかもしれません。おおよそ彼らの「念仏」はこんな様子です。

阿弥陀仏は無量光で、私たちの光明な品性を代表し、観音菩薩は私たちの慈悲の心を代表し、大勢至菩薩は私たちのパワーを代表しています。この三つ以外に、私たちはまだ多くの品性を

持っています。私たちがこういった品性を発展させることができないので、ある人は八十八の仏陀を唱え、ある人は一万の仏陀を唱え、ある人は三万の仏陀を唱えたりして、より自分の内面の多くの品性を呼び覚ますことを願ってたくさん仏陀を唱えるのです。十方三世仏（じっぽうさんぜぶつ）：現在、未来の全ての仏陀）はたくさんあります。なぜそんな多いのでしょうか。それは一人の修行者が仏陀になると、この自由の世界に入り、自由自在の人になります。宇宙は創生してから、多くの修行者が仏陀になりました。ですから、仏陀はますます多くなり、私も仏陀になると、みなさんはナムチンハイブツダと唱えるかもしれません。（笑い） そうしてみなさんが唱える仏陀が更に一人増えます。

けれども、多くの仏陀を唱えても、なぜまだそんなに多くの悩みがあるのでしょうか。なぜ智慧が開かないのでしょうか。なぜ仏陀になれないのでしょうか。みなさんは知っていますか。あなたが牛乳を唱えれば、牛乳を飲むことができますか。牛乳を飲みたければ、牛乳の売店に行かなければなりません。指で指すだけで、何も言わなくてもお金だけあれば、彼らはすぐに牛乳を手にとってあなたにくれるでしょう。あなたが家で一万回牛乳、牛乳と唱えても、役に立ちません。（笑い） 牛乳はあなたの所にはやって来ないからです。お金が必要な時、家でお金、お金、お金と唱えても、お金は出てきません。あなたは銀行へ行つて、小切手を見せれば、特に何も言わなくても、彼らはあなたの意図がわかるのです。なぜなら、彼らはあなたが銀行に

貯金していることを知っているのです、すぐにお金を渡してくれるからです。

ですから、修行レベルの高い人は、「念仏して何をするのですか」と言います。なぜなら、彼らはすでに仏陀だからです。仏陀の友達なので、何も言わなくてもただ目で見ればわかるのです。例えば、まだ知り合っていない時には、電話をかけたなり、手紙を出したり、家を訪ねたりしますが、二、三回会ったら、次に会った時は見ればわかります。何にも話す必要はありません。同様に、本当の「念仏」とは仏陀を知ることです。これでこそ想念できるのです。今、私たちはたくさん仏陀を唱えましたが、仏陀を知らないと役に立ちません。銀行へお金を引き出しに行かないで、ただ家でお金を唱えると同じです。多くの仏陀を唱えていても、実際は大したことではなく、ただ、ごく一部分の仏陀を唱えるにすぎず、大仏陀を唱えているではありません。私が言っている意味は、この仏陀がああ仏陀より大きいということではなく、彼らの役割が違うということです。わかりますか。

ですから、釈迦牟尼仏は阿弥陀仏を賛美し、みんなに阿弥陀仏の名を唱えさせました。しかし、阿弥陀仏の名は言葉で表せるものではない、ということのみなさんはわかっていないので、ただ「唱えて」いるだけです。みなさんは、阿弥陀仏は口で唱えるものだと言っています。これは私がここでビスケットを宣伝していて、実際私が指しているのは別物なので、今話しているビスケットのことではない、というようなものです。阿弥陀仏は私たちの内面の光明な部分

を代表しています。観音菩薩は私たちの慈悲の心などを代表しています。しかし、私たちまだその他の品性を代表する多くの仏陀を唱えていないので、まだ不足しています。

例えば、昔の軍人はよく矛と盾を使って、自分を保護していました。矛や盾の他に、彼らは鎧を着ました。全身が鎧に包まれ、目だけを出していました。ですから、相手を殺したいなら、まず鎧で保護されていない所を探し、そこを刺します。さもなければ、どうにかして帽子を脱がせて頭を出させます。そうすれば殺すことができるのです。同様に、私たちは口で阿弥陀仏、観音菩薩だけを口で唱えても、まだまだ足りません。この鎧が完璧でないのと同じで、一部しか保護できません。多くの部分がまだ露出しているのです。

なぜなら、阿弥陀仏はただ西方浄土の教主で、東方には薬師仏がいて、南方、北方、上方、下方などに多くの仏陀がいます。東西南北だけではなく、まだ十の方向に過去、現在、未来の仏陀がいるので、私たちはいつ唱え終わるのでしょうか。それぞれの世界には最高の教主がいて、その最高の教主を全部知らないといくら唱えても一部分しかにすぎません。仏陀を唱えれば利益があり、福報も得られますが、しかし、仏陀にはそれぞれ違った役割があります。

例えば、私たちは王宮に行きたければ、王宮のある場所を知らないと行けません。もし王様の所に直接に行かないで、他の部門の役人の所に行くこと迷ってしまうのです。というのも、それは私たちの本当の最高の目的とは違っているからです。阿弥陀仏を唱えても役に立ちますが、

彼は西方浄土の教主にすぎず、その世界全体の教主ではありません。それぞれの世界は東西南北、たくさんの場所があり、あらゆる場所に、過去、現在、未来に仏陀がいます。けれども、どの世界にも一人の最高の教主がいます。もし私たちがこの教主を知っていて唱えるなら、よりパワーがあります。けれども、たとえこの教主を知っていても、紹介してくれる人がいなければ役に立ちません。

ですから、真のマスターを見つけることは非常に重要なことです。真のマスターは最高の教主の友達であり、あなたを連れて行って、「こちらは私の弟子です。こちらは私の友達です」と紹介することができます。これでこそ役に立つのです。例えば、私たちはアメリカ大統領のレーガンを知っていますが、彼の名前を知っていても、彼はアメリカの最高の代表であることを知っていても、私にとつては役に立ちません。なぜなら、私をホワイトハウスに連れて行って、「こちらがスプリームマスター チンハイです。とてもいい方です。どうか彼女の弘法を手伝ってください」と彼に紹介してくれる人がいないからです。そして、紹介した友だちが私に「この方は私たちの大統領です。私の最も良い友達で、何か困ったことがあったら、この方に頼めば、問題を解決できるでしょう」というように、紹介してくれる人がいなければなりません。ですから、阿弥陀仏の名前を知っていても役に立たないのです。阿弥陀仏を知っていてこそ役に立ちます。この名前そのものが阿弥陀仏を代表するものではなく、本当の意味での阿弥陀

仏とは関係ありません。名前は誰でも呼べますし、その名前を付けることもできません。アメリカではレーガンと同じ名前の人もいますが、その人は大統領ではないので、私たちには役に立ちません。ですから、どんな仏陀を唱えるにしても、すでにその仏陀を知っている友達からの紹介が必要です。知り合った後、その仏陀はあなたを保護することができます。さもなければ、何の役にも立ちません。意味がわかりますか。

私もレーガンの名前を知っていますが、私のビザの期限が切れたら、アメリカを離れなければなりません。彼の名前は私を助けることはできません。たとえ、私が家ですつと大統領の名前を唱えても、彼は私を助けてくれません。私は彼を知らないし、彼も私を知りませんし、私が誰なのか知りません。私にも彼に助けを求める権利がありません。けれどももし、ある人があらかじめ手紙を書いて、私のことを大統領に紹介したとします。手紙に「私の友達があなたに会いに行くかもしれません。彼女の名前は何々です。彼女を助けてあげてください」と書きます。そして、紹介者は私に「あなたのことはすでに大統領に紹介しました。彼はきつとあなたを助けてくれます。彼の所に着いたら、彼は必ずドアを開けてくれるでしょう」と言います。私の言っている意味がわかりますか。

みなさんが仏陀を唱えていても、仏陀をまだ見たことがないかもしれません。念仏を教えてください。真のマスターがいるのと、いないのでは違います。ただし、そのマスター本人が必ず、

その仏陀のことを知っていなければなりません。それでこそ、みなさんにその仏陀を念じることを教えらるるのです。釈迦牟尼仏は阿弥陀仏を「念じる」ことを教えていました。彼はすでに阿弥陀仏を知っていたので、弟子を連れ行き、阿弥陀仏に、「弟子たちは良い人で、菜食をし、修行し、メデイテーションをして、道徳があります」などと保証しました。こうすると、阿弥陀仏も彼らを助けなければなりません。ですから、釈迦牟尼仏の当時の弟子たちの念仏は役に立ちました。現在、普通の人たちが口で唱えている念仏はあまり役に立ちません。非常に集中して唱えれば悩みは多少減るかもしれませんが、このような唱え方は多少役に立つかもしれません。

私は先ほど言いましたが、阿弥陀仏は西方浄土の教主で、全体の教主ではありません。ですから、もし西方浄土を念じて、心が南方に縛られていけば、やはり西方浄土へ行くことができせん。ですから、最高の仏陀を念じることが一番安全です。なぜなら、私たちがどこにいても仏陀に会えるからです。仏土は仏土です。どこにしようとして仏陀に会えればいいのです。決して西方浄土にだけが仏土であるということではありません。わかりますか。私たちが集中できなければ、西方浄土にも行けないし、真の阿弥陀仏もわからないのです。

ですから、最高の仏陀の名前を念じることが一番いいことです。けれども、この最高の名前は經典には載っていません。なぜなら「名可名、非常名（名は名でも、言葉で表せる名ではな

い」だからです。言葉で言い表したくてもできません。知りたいなら、先生に紹介してもらわなければなりません。このような先生は仏陀の友達か、または仏陀のスタッフか、仏陀の使用人もおれません、それでも構いません。仏陀の使用人でも仏陀を知っている、私たちが仏陀に会わせることができます。例えば、私たちが国王のコックさんと知り合いでしたら、それも一つのコネであり、それにより国王に会えるかもしれません。他の役人をたくさん知っていてもあまり役には立たず、国王に会えないかもしれません。というのは、彼ら自身も国王に会えないからです。なので、仏陀の使用人を知っているのが一番いいのです。それが仏陀に会う近道です。

ですから、みなさんは私がどのレベルかを推測する必要はありません。仏陀の使用人と認めるだけで十分です。仏陀の食事を作る人であり、仏陀の知り合いだから、私の紹介があれば一番役に立ちます。もし、国王のコックさんと知り合いだと、私たちに何か問題があった時、きっと彼は国王にお願いしてくれませんが、政府の高官の場合は一言も言えないかもしれません。なぜなら、国王に会うと恐れ多くて震えてしまい、何も話せなくなるからです。

盛大な祝典の儀式の時以外は、彼らは国王に会う機会がないかもしれません。国王が危険にさらされないように、国王の安全を確保しなければなりませんからです。彼らは国王を護衛する仕事以外に、国王と話しをするようなことは何もありません。だから、彼はあなたを国王に会

わせると約束することができません。ですから、私たちは仏陀を知りたいなら、すでに仏陀を知っている人を探さなければなりません。例えば、仏陀の使用人は事務員のようなもので、社長とも知り合いで、あなたが社長に会いたいと言えば、彼はきつと会わせてくれるでしょう。私たちが社長を知らないなら、まず、そのような人を探さなければなりません。彼は社長をよく知っていて社長に近いので、すぐに社長に会わせることができます。

観音法門は「根気よく」修行しなければなりません。そうすると少し体験もあり、観音法門に対する認識も深まり、最高教主の名前の意味するものを理解することができます。この「名不可名(言葉で言い表せない名)」が何であるかがわかるのです。なぜなら、写真で見た国王も、聞いた国王の名前も、本当の国王ではないからです。国王は写真でも名前でもありません。本当の国王を知ることが別のことです。同様に、凡人の言語で言う名前も仏陀ではありません。仏陀を知るということは、この真の名前、「名不可名(言葉で言い表せない名)」を知らなければなりません。両者は異なり、簡単ではありません。

私たちは頭脳で多くの物を「念じる(想う)」ことが習慣になっています。夫を「念じ(想い)」、妻を「念じ(想い)」、世間を「念じ(想い)」、悩みを「念じる(想う)」のです。世間のことを念じるより阿弥陀仏を念じる方が役立ちます。けれども、阿弥陀仏は私たちの光明な品性を目覚めさせるだけの役割です。もし念仏したければ、もっと良い仏陀の名前があります。これを

唱えると、私たちの全ての最高の品性を思い起こさせ、それを発展させることができます。阿彌陀仏は唱えることは私たちの光明な品性を発展させる役目で、観音菩薩は慈悲の心を発展させる役目をします。けれども、ある仏陀の名前は私たちのすべての良い品性を発展させるのです。この種の仏陀の名前を唱えることが最も良いですが、この最高の仏陀の名前は言葉では表現できません。しかし、私たちは唱えるのが好きで、何でも唱えたくて、いろんなものを唱えるので、私もみなさんに唱えものを与えますが、私が与えるものは最高で、最もパワーのある名前です。それを唱えれば、私たち自身のすべての高貴な、不可思議な品性を発展させることができます。

観音法門も「念仏」を教えています。阿彌陀仏を念じるのではなく、他のより高く、よりパワーのある仏陀を念じます。念じる時、マスターのパワー（仏陀のパワーはマスターの内にある）がこの名前を加護するので、良い感応が得られるのです。たとえ阿彌陀仏を念じたとしても、もしマスターの加護のパワーがあれば、同じように感応があります。阿彌陀仏を念じるのをやめたくなければ、印心後阿彌陀仏も一緒に念じても（笑い）感応があるでしょう。印心前、口で阿彌陀仏を唱えてもあまり役に立たないのは、事情が違うからです。後ろ盾となるマスターのパワーがないため、まるで電線に電気が流れていないのと同じで、電線は実質的には何の役にも立たないのです。

口でお金、お金と言っても、ポケットの中にお金がなければ、人にいくら言っても信じてもらえません。口で何を言ってもみんなは信じません。自分自身で持っていてこそ他の人が信じるのです。お金があれば十分だと言っているのではありません。私たちの振舞いが豪華な金持ちのようであれば、他人は信じないでしょう。金持ちとそうでない人の話ぶりはまったく違うので、私たちは感じられるし、見てもわかります。そうではないですか。

例えば、あなたを殺したいと思っている人がいたとします。けれども、あなたは非常に落ちていて断固として「あんななんか怖くない。私には銃があるし、あんに負けない力がある」と言ったとします。このような迫力のある言い方をすれば、相手もきつとその言葉を信用して、あなたを殺す勇気がなくなります。けれども、もし、あなたが震えながら「わ、わ、わ、わ、わたしは、こ、こ、こわくありません。私の家に銃があります。あ、あ、あなたは、わ、わ、わたしを……ころしては……いけません」と言ったとしたら、相手はそれを聞くと、すぐにあなたに度胸がないことがわかります。ですから念仏は、マスターの保護のパワーがなければ、魔も怖くないのです。マスターの保護のパワーが後ろ盾になっていけば、念じなくても、ただマスターのこのことを想えば、魔はもう恐れて、あえてあなたに近づくことができせん。

私の観音法門も念仏を含んでいます。本当に最高の、最もパワーのある仏陀を念じてこそ、本当にみなさんを助けることができます。仏陀の名前を念じ終わらないうちに、魔は逃げてし

まいます。仏陀や菩薩を装っている魔は一秒たりといられません。悪い人もあえて近づけません。ですから、彼らは私たちを嫌がり、あの手この手で私たちを攻撃してきます。なぜなら、私たちが念じている仏陀の名前のパワーに堪えられないからです。これこそ真の「念仏」です。

この仏陀の名前を念じると無量光、阿弥陀仏の光と通じ合うのです。毎日、光とともにいて、光の中で生活し、この光を念じ、この光とともに寝て、この光と食事をし、座つても寝ても、光と離れず、私たちがいるところにはどこにでも光があります。これこそが「無量光」なのです。この無量光は計り知れなく、どこにでも遍在します。ですから無量光と言うのです。この無量光と通じると、毎日光が見え、光と一緒にいられるのです。この光が私たちを保護し、私たちの良い品性を発展させ、私たちの智慧を開き、私たちを西方浄土、仏陀の国土、高いレベルの境界（きょうがい）へと導いてくれるのです。

念仏や、光を見る他に、内在の妙なる振動を「観」ます。この宇宙の音流は外の音ではありません。「光を見ること」、「音を観ること」、または「念仏」は、どれもマスターの伝法を通してこそ得られるのです。法を伝授する時、まったく話をしません。ですから「伝心印（以心伝心での伝授）」と言い、「心」で伝えるのです。心とは何でしょう。それは私たちの本心（本性）です。真の心で、意念の心ではありません。ですから、「伝心印（以心伝心での伝授）」の時は言葉はいりません。

私たちはよく禅は言葉を用いないと言いますが、それはつまりこの意味です。言葉を使う必要があるとしたら、それは伝法ではありません。なぜなら、本来伝授できる「法」は存在しないからです。けれども、伝授しないと「法」を得られません。伝授してこそ「法」があるので。「法」と言っても、実際に「法」というものがあるわけではありません。ですから「無相法」と言います。六祖慧能は自分が伝授したのは「無相法」であると言いました。般若心経の中でも同じことを言っています。釈迦牟尼仏はこの法を「諸法空相」と言いました。これは六祖慧能が言った「無相法」と全く同じものです。また仏陀はこの法を「不生不滅、不垢不淨、不増不減、是故空中無色、無受想行識、無眼耳鼻舌身意、無色声香味触法、無眼界乃至無意識界：」（生じること滅することもない。汚いことも清浄なこともなく、増えることも減ることもない。故に色もなく、精神、感覚、意識もなく、眼、耳、鼻、舌、体、心もない、また形、音、香り、味、触感、法、視界、無意識界もない：）と述べています。

何にもないので「無相法」と言いますが、しかし、と言つて何にもないわけではありません。ですから「名可名、非常名（その名は凡人の言葉で表すような名ではない）」と言います。言葉で表現できませんが、しかし、すべて含まれていて、すべてのものが「無相法」の中に、「音流」の中に、この「音でない音」「名不可名（言葉で言い表せない名）」の中にあります。ですから「無相法」と言うのです。けれども、伝授しないと法はありません。伝授の時こそ「法」が得

られるのです。必ず得られるのです。この点については私が法を伝授する時、みなさんは誰でも体験できるでしょう。伝授する前と後はまったく違います。伝法の時、話をしないにもかかわらず、伝授できる「法」はないと言っても、私たちは「法」を得られるのです。これはみなさん自身でわかります。まるで一が二になったようにはつきりわかります。

禅は言語を用いないから、禅がないということではありません。法が無相だから、私がみなさんに法を伝授できないのではありません。もちろん法を伝授できます。けれども、言葉では表現できません。ですから「伝心印（以心伝心での伝授）」と言えば十分です。以心伝心です。その時は心が「開く」ので、何も話す必要がありません。

たとえば、私がここで百年、一万年、一億年の時間をかけて、観音法門の功德を賛美しても、言い尽くすことはできません。本当に真面目に修行する人だけがわかり、すぐにわかります。一日メデイテーションしなかったり、一日観音法門を修行しないだけで、全身が落ち着かなく、さぞちかくなります。ですから、このパワーがどんなに不可思議かがすぐに感じられるのです。

すべての經典で、釈迦牟尼仏は観音を賛美しています。普門品（ふもんぼん…観音經のこと）の中で釈迦牟尼仏は「私たちに観音の名前がわかれば、この功德は他の菩薩の名前を何億回唱えることよりも勝り、他の菩薩を何億回供養するより勝る」と、述べられています。なぜならその名前は観音ではなく、「名不可名（言葉で言い表せない名）」で、この宇宙の音流であり、

全宇宙に永遠に存在する振動力だからです。

ですから、観音法門を修行する人は最も功德のある、最も高貴な人です。印心した人なら、この点をみなはつきりわかっています。



カルマはどこから来るのか

スプリームマスター チンハイ フォルモサ・台北

一九八六年三月六日

今日は「観音法門」のことをみなさんに話そうと思います。このテーマは最後の日に話そうと思っていました。みなさんが早く聞きたいということなので、繰り上げて今日は話します。みなさんが観音法門を知りたければ、まず「音」とは何か、「観音」とは何かを理解しなければなりません。「観」は「観想」のことで、「音」は音のことです。普段、私たちは人を観想する時は、凡人の頭脳でその人を観想するのです。例えば目が大きいか小さいか、背が高いか低い、太っているかやせているか、また相手の個性などを観想するのです。このような「観想」は実際のもので大きな差があります。したがって、私たちが凡人の頭脳で仏性を観察した場合、このような間違いをすることは、言うまでもありません。

ですから、私たちは「智慧」で観察しなければなりません。この智慧はすべての人に備わっ

ているものですが、みんなが智慧の使い方を知っているわけではありません。人類は多くの物を発明し、創造してきました。また、世俗のことをたくさん学んでいます。これらは聡明だということであって、智慧ではありません。しかし智慧がなければ何も学べないし、何も認識できません。聡明さは智慧から来ていて智慧の中のごく小さな一部分にすぎないからです。

まず、この世界の普通の音について話しましょう。それから超世界の音―仏陀の音について話します。昔から今日まで、音は私たちの生活で重要な部分を占めています。この世界に音楽がなかったら、生活がどんなに苦しいか想像もできません。古典音楽は比較的穏やかで、心を幸せに、安らかに、そして和らげてくれます。ですから、古代には多くの気高い君子たちがいました。現代のジャズやロックン・ロールはかなり激しい音楽で、小さい時からこのような音楽に影響されると、教え導くのが非常に難しくなってしまう。というのも、このような音楽は現代人の性質と態度を表しています。精神病院では、医者はいつとも患者に穏やかな音楽を聞かせて、患者の情緒を安定させます。私たちも仕事で疲れた時や気持が悶々としている時に、音楽を聴くとだんだん気分が落ち着いてきます。

宇宙では、すべてのものが振動しています。この振動が音になり、放送局から発信した電波がラジオで受信されて音になると同じです。宇宙万物はすべてが振動していて、それぞれ異なる振動周波数を持ち、石、草木、人など各自が特別の振動周波数を持っているのです。それ

それぞれの振動周波数が違うので、動物と人、人と人、夫と妻の間では容易に通じ合えないのです。

ある人たちの振動周波数は穏やかではないので、その人たちと接すると私たちはとても不安に感じます。反対に、ある人たちの振動や話す時の雰囲気は穏やかで、その人たちを一目見ると、私たちはとても心地よく、良い感じになります。ある場所の振動周波数が自分と近い周波数であれば、そこに入ると大変心地よく感じます。雰囲気の良いくない人が入って来ると、すぐに人を緊張させ、不安や焦燥を感じさせます。それはその人の振動周波数が低く重かったり、またはカルマが重く、邪悪な心を持っていて、魔の障害が多く、陰気な人であったりするためです。私たちは陽の気が強く、このような人とは波長が合わないのです、不安や焦燥感が生じるのです。

この地球上では、どこも同じ振動周波数ではありません。それは地球上にはさまざまな種類の金属鉱石があり、それらの分布によって異なるからです。修行しない人でも住んでいる場所が落ち着かないと感ずることが多いです。しかし、真の修行者にとっては、すべての場所が浄土であり、聖地なのです。こういうことは口で言うのは簡単ですが、実際には簡単なことではありません。実際このような境界（きょうがい）に達した人は何人いるでしょうか。振動周波数が低く、陰気な雰囲気は、ごく少数の無明な人や丸太のように鈍感な人を除いて、修行していない一般の人でも感ずられます。修行をすればするほど敏感になりはしますが、修行して最

高の境界に達した時には、どこも同じでその違いを感じなくなります。

私たちはどんな人と一緒にいても、その人の振動に影響されます。その人の雰囲気や和やかであれば、こちらも和やかになります。その人が興奮していれば、こちらも興奮します。私たちはよく、菩薩は人に代わってカルマを背負うということを聞きますが、それは他の人の体に生じた悪い振動を、つまりカルマを菩薩が自分の体で受け取り、自分の良い振動と交換することができるところです。そして修行のパワーで、そういったカルマをすぐに洗うことができるからです。それにどのぐらい時間がかかるかは、菩薩が収集したカルマの量によって決まります。こういったカルマをきれいに洗い流すまでの間は、その影響で病気になるったり、誹謗されたり、殺されたりすることもあるのです。

例えば、イエス・キリストは衆生のカルマを担うために、十字架にはりつけにされました。釈迦牟尼仏については、人のカルマを背負ったという話は聞いたことがありませんが、経典には「ある人が九十九人殺して、釈迦牟尼仏まで殺そうとしたが、結局は殺すことができず、かえって仏陀に救われ、最後には修行して阿羅漢になった」と書かれています。もし、釈迦牟尼仏がその人のカルマを背負わなかったら、その人のカルマはどこに行ってしまったのでしょうか。そんなに多くの人を殺したのに、阿羅漢になれるとしたら因果律に反していいのではないのでしょうか。いいえ、それは釈迦牟尼仏に非常に大きな功德があり、計り知れない福報があったの

で、その人のカルマを清算することができたのです。問題ありません。決してその人が因果応報の報いを受けなかったのではなく、釈迦牟尼仏が代わりに背負ったのです。

ですから、昔から今日まで解脱したい人は、まずそのような真のマスターを見つけなければなりません。修行し始めたばかりの時は、自分のパワーで多くのカルマを清算するのは難しいからです。けれども、その真のマスターは古代から計り知れない時間を修行して、大きな福報があり、私たちを導きながら、荷物（カルマ）まで背負ってくれます。というのは、そういう真のマスターは十分なパワーを持っているからです。人には人のパワーがあり、修行者には修行のパワーがあります。そのパワーは見えませんが、計り知れないほど大きく、肉体のパワーとは比べられません。みなさんも聞いたと思いますが、マスターから印心を受けると、先祖五代が超生（一つ上の境界引き上げられる）できます。それは修行のパワーで彼らを上に引き上げるのです。ですから、修行のパワーは最も貴重で、お金がどんなにたくさんあっても買えないし、権威がどんなに大きくても、それを持ち去ることはできません。

私が講演をする時、場所によっては非常に流暢にできることもあれば、何かに圧迫されているかのように、話すのが困難で疲れを感じることもあります。印心（伝法の時）も同じで、順調で何も問題もないときもあれば、苦しくて死にそうになる時もあります。これは講演を聴きに来た人や、印心を受けに来た人のバイブレーションはそれぞれ違うからです。それぞれのバ

イブレーションの違いがいわゆるカルマです。こういった異なるバイブレーションはどのように作られたのでしょうか。これは因果の法律によるもので、私たちが世々代々作ったカルマと関係しているのです。

本来私たちはみな仏陀です。イエス・キリストも「私たちはみな神の子である」と言いました。なのに、なぜ裕福の人いれば、貧しい人もいて、また聡明な人もいて、愚かな人もいるのでしょうか。善良な人もいれば悪人もいます。それは私たちが元々仏陀として、この娑婆世界に来た時、どんどん下に落ちて行って、大部分の智慧を忘れてしまったからです。それから、外部の環境の影響を受けたため、こうなってしまったのです。

この世界は高い境界（きょうがい）の世界とは異なります。高い境界の世界は私たちの修行の進歩を助け、私たちをますます楽にさせ、高貴にします。しかし、この世界の環境と言えば、逆に私たちを後退させ、更に愚かに、さらに悪くしてしまうのです。というのは、極楽世界では欲しい物はすぐに手に入り、苦しみは少しもありません。けれども、この世界では生存するために大自然と闘わなければ生存できません。たとえ釈迦牟尼仏でも、ご飯を食べなければならぬ。寒い、熱い、美しい、醜い、男性、女性の区別があります。極楽世界とは違います。

そこは無形、無色で区別のない世界です。だから、私たちがこの世界に降りて来た時、極楽

世界とは全く異なるため、外部に求める衆生になってしまい、食べ物を見たら食べたくなり、物を見たら好き嫌いの気持ちが生じるのです。私たちの心はいつも好きな物に引きつけられるので、自分の大智慧を忘れてしまい、だんだんと宇宙の大きなパワーから離れて、孤独な人になってしまったのです。

本来あらゆる物すべてが私たちのものです。けれども、私たちの心は一つか二つの好きな物に気を取られ、いつのまにか自分を小さい範囲に閉じ込めてしまい、もともと区別をしなかったのに、区別する人間になってしまったのです。（極楽世界では、みな黄金の体で、男女の区別もないのです） 私たちは全身全霊で、一人や、二人の人間や物を愛するので、自分をますます孤独にし、宇宙の大きなパワーとの繋がりが切れて、パワーが小さくなり、すぐに使い切ってしまうのです。これは、ガンジス川に住んでいる人が、四方八方に使い切れない水がありながら、岸の風景に気を取られ、川を離れて行くのと同じです。その風景にすっかり心を奪われたら、どうしたら川に戻れるか分からなくなりました。水が欲しくなっても、付近にある水を飲むしかありません。当然これでは足りません。

そういうことで、私たちはますます軟弱になり、智慧が足りなくなります。智慧が足りなくなると食欲になり、安心感がないのでより多くの物を手に入れようとします。「貪り、怒り、愚かさ」の考えはこのようにして生じたのです。こういった考えが特殊な磁場を形成し、私たち

の周りを取り囲みます。一人ひとりの状況が違うので、磁場もそれぞれ違います。同類は互いに引きつけ合い、異なるものは互いに排斥します。貪欲な人や激しい人は、当然、激しい状況を自分の磁場に引き付け、穏やかな人は穏やかなものを引き寄せます。このようにして、いわゆるカルマが形成されるのです。

何をしていても間違いをってしまう人をよく見かけますが、それはその人の磁場がいつも良くないパワー、障害をもたらすパワー、愚かな考え、魔のパワーを引きつけてしまい、大智慧を身の周りに引きつけることができないからです。動物的な性質が非常に強い人がいますが、これもその人が持っている磁場が原因であり、世々代々の習慣がまだ改まっていないからです。私たちの磁場が徐々に良い方向に変わりつつある時が、上に上り始めた時です。改まるまでにはどれくらいかかるかは、私たちの心の純粋さによります。経典や道徳経には「赤ん坊のような純真な心になってこそ、天国に帰ることができる」と書いてあります。

私たちの習慣や磁場を変えることは簡単ではありません。決して呼吸法やヨーガをすることでは変えられません。なぜなら、習慣は頭脳にコントロールされるので、習慣を変えるためには頭脳を変えなければなりません。丹田に集中したり、骨や水を見つめたり、呼吸に集中したりすることだけでは不十分です。観音法門だけが究極の方法なのです。

なぜなら、この音は「仏陀の音」であり、本性の音です。宇宙万物が誕生する前に「この音」

はずで存在していました。この音は「勝彼世間音（この世の音に勝る音）」であり、凡人の耳では聞こえません。しかし、これはすべての衆生が聞くことができる音です。ただレベルによって、聞こえてくる音が違うのです。宇宙の中ではすべての物が振動しています。それで音があるのです。たとえ石でも音があります。けれども、あまりに微細で耳では聞こえませんが、智慧を使って聞くことができます。ですから「観音」と言い、「聴音」とは言いません。すべての衆生に音があり、智慧があるのに、なぜこの音を観ることができないのでしょうか。それはカギがないからです。音がどこにあるのかがわからないからです。ですから、まずドアを開けてくれるマスターを見つけないけません。

なぜ、この音がそんなに重要なのでしょうか。それは、宇宙万物がこの音によって一つに繋がっているからです。高い境界（きょうがい）から低い境界まで、すべてこの音で一つに繋がっています。先ほども言いましたが、ある人たちのバイブレーションは他の人と調和できないので、うまくつき合うことができません。同様に、私たちのバイブレーションが動物のものとは波長が異なる場合、またはある場所のものと調和しない場合、その動物と一緒にいることもできません、その場所にもいられません。そういう場所に住んでいる人がいたとしても、それは決してその人が私たちより素晴らしいということではありません。その人のバイブレーションが低いか、または動物と同じバイブレーションなので何も感じないからです。

例えば、豚やカエルは汚い場所に住んでいても幸せです。これはまさに、とても汚い場所でも平気に楽しそうに住んでいる人と同じです。なぜなら、その人の雰囲気はその場所に合うからです。私たちのバイブレーションはもつと高くて穏やかなので、そのような低いバイブレーションには合わないから、住めないのです。これは決して彼らが私たちよりレベルが高いと言うことではありません。ということ、善良な人は凶悪な人とつき合うのが難しいのです。

もし、宿命を変えたいと思う人がいたら、この最高の音に頼らなければなりません。今はほんの小さな一部、しかもバイブレーションがそれほど高くない音しかありません。バイブレーションが高くないレベルの、動物と共存する世界に住んでいるのです。すなわち類は友を呼ぶということなのです。

しかし、すべての衆生が持っている、ある種の音が存在します。これが「仏陀の音」、「本性の音」です。私たちがこの音を修行すれば、バイブレーションを高め、レベルを上昇させることができます。それにより、外見は以前と同じですが、体は光を放ち、経の講義をするとみな喜んで聞き、人を救うことも簡単になります。それは私たちのバイブレーションが変わり、より穏やかになると、人を安心させ、解脱させることができるからです。というのは、私たちのバイブレーションで人々のバイブレーションを包み込み、人々に良いバイブレーションを与え、良くないバイブレーションを消化してしまうからです。それはちょうど、医者が良くない血液

の患者に、良い血液と取り換えるようなものです。バケツの水が汚いと、私たちはまずその水を捨てて、そしてきれいな水を入れます。けれども、もし私たちのバイブレーションがまだ良くなっていなければ、他の人の悪いバイブレーションを変えることはできません。さもないと、大変なことになります。ですから、衆生を救うにはまず修行しなければなりません。

先ほども言いましたが、娑婆世界で生活するには、この世界の道具を使わなければなりません。この道具（マスターは自分を指す）は中国語をうまく話せません。その道具（英語の通訳者を指す）は英語がうまくありません。あの道具（フォルモサ通訳者を指す）は完璧に記憶することができません。完璧なものは何一つないので、たいへん面倒なのです。もしみなさんが西方浄土に行つたとしたら、このような問題はないでしょう。みなさんは西方浄土に行きたいですか。（聴衆答える：行きたいです）もし行きたければ、観音法門を修行しなければなりません。これが西方浄土へ行く一番良い道です。

阿弥陀仏を唱えるには、まず阿弥陀仏を知らなければなりません。そうしてこそ、本当の「念仏」ができるのです。もし口だけで阿弥陀仏を唱えるなら、それはA、B、C、のレベルにすぎません。なぜなら、念仏の「念」は想念のことだからです。口で唱えるものではありません。もし阿弥陀仏を知らなければ、どうやって「想念」するのでしょうか。みなさんは、観音法門は念仏法門とは違う、と思わないでください。これは最高の念仏です。本当の念仏は毎日大声で

阿弥陀仏の名前を唱えることではありません。それでは阿弥陀仏に頭痛を起させてしまいます。先ほど私は、宇宙万物には音があると言いましたが、宇宙万物はこの音から作られたのです。

これは道徳経では「名」あるいは「道（タオ）」と言っています。老子は「道可道，非常道。名可名，非常名。無，名天地之始。有，名萬物之母（道と言う道は、普通の道ではない。名は名でも、言葉で表せる名ではない。無の状態から、名によって天地が始まり、創造され、名は万物の母なり）」と言っています。「名」あるいは「道」は、この音あるいはこの振動を指しています。古文と現代の中国語は使用上少し違うかもしれませんが、実際は同じことを指しています。この点はみなさんの方がよく知っていると思います。

宇宙万物はすべて、この「名」あるいは「音」から作られ、私たちもその一部分です。私たち人間は、その最高のレベルの部分なので、それを完全に手に入れることができます。動物はこの音を完全に手に入れるレベルではありません。もし私たちがこの音を修行すれば、それによつて、絶えず自分を上昇させ、さらに高い音に近付き、最終的には完全にそれを得ることができます。その時、私たちは宇宙のすべての衆生と調和することができます。なぜなら、すべての衆生がこの音の一部分だからです。完全にこの音を得たなら、私たちにとつて、すべての場所が浄土になります。そして誰もが仏陀であり、すべての衆生に仏性があることが分かります。これでこそ本当に分かったと言えます。さもなければ、みなただの聞いた話に過ぎず、み

ないずれも耳で聞いた情報に過ぎません。なので、それが本物かも偽物かも分からないのです。

ですから、自分の体験したことと、経を読むことや人の体験を聞くこととは違います。経を読むことは他人の体験を読むことです。観音法門を修行すると、自分自身で体験できます。そして経典に書いてある体験と比較することもでき、昔の人の体験と同じかどうかを確認することもできます。時には、昔の人の体験より高いこともあります。それは昔の人よりレベルが高いということではありません。昔の人がその体験を書いた時はまだ、レベルはそれほど高くなかったのかもしれない。彼らの当時の体験と比べたら、やや、それを超えているのかもしれない。

今みなさんは、その音がどれほど素晴らしいか、これで分かったでしょう。すべての衆生がこの音、バイブレーションを持っていて、互いに影響し合っています。この世界は極楽世界とは違い、動物がいて、悪い人、良い人、激しい人、清らかな人、幸せな人、苦しむ人がいて、さまざまな雰囲気が入り混じっています。私たちはこのような乱れた環境の中では、なかなか安心して修行できません。いろいろな妨害や良くない雰囲気に惑わされます。でも修行に専念すれば、それだけ進歩も早いのです。

したがって、多くの天人は人間に生まれ変りたがります。肉体があつて初めて修行することができますから。よくこの肉体を軽んじる人もいますが、これがなければ修行ができないの

です。この肉体は非常に貴重なので、よく世話して栄養のあるものを食べて、大事にしなければなりません。けれども、貪るように食べるのではなく、体を保護して、あまり冷しすぎないように、暑くしないように、酷使しないように、疲れすぎないようにしなければなりません。苦行は決して良くありません。それは自分を罰することになります。自分を罰することは最大の罪を犯すことです。自分自身は過去の仏陀であり、現代の仏陀であり、未来の仏陀なのです。自分を尊敬しなければなりません。どうして勝手に苦行して、自分を罰するのでしょうか。けれども、もし避けられない状況に置かれた場合はしかたがありません。

例えば、みなさんも知っているように、私がヒマラヤで修行している時、毎日レタスだけを食べていました。そこは標高が高くて、空気が薄く、温度が低く、気圧も低いいため、米を炊くことも野菜を煮ることも難しいので、レタスを食べるのが比較的簡単だったからです。ガンジス川の水でちよつと洗って塩だけをつけて食べました。私はわざと苦行したわけではありません。フォルモサ（台湾）の山のある寺で三ヶ月間トリートした時にも、毎日玄米ごはんはゴマと塩をかけて食べ、少しの水だけを飲んで過ごしました。その時、世話してくれる人がいないからといって、毎日市場へ買い物に行くようでは、それは閉じこもって修行していたことにはなりません。ただ毎日買い物したことにしかありません。（笑い）これは状況に迫られて、簡単に食べただけで、決してわざと苦行したわけではありません。苦行しても仏陀にはなれないので

す。苦行すると苦しい人になります。私たちは生きるだけで苦しいのに、なぜ苦行をするのでしょうか。

仏陀になるには観音法門を修行しなければなりません。智慧を使ってこの根源の音を観るのです。この音が宇宙の万物を創造したので、この音は宇宙のなかで、最も高くで最も大きなパワーで、宇宙の最高の智慧です。この大きなパワーと大きな智慧を修行しないで、何を修行するのでしょう。なぜその小さな暗いお腹（丹田を指す）や、頼りにならない呼吸を修行するのでしょう。万が一メデイテーションをする時、体が揺り動いたり、死んで息が止まったりしたら、そうなったら、どうやって修行しますか。

この大きなパワーに頼って修行すれば、たとえ体が少し動いても、あるいは誰かに殺されたり、怪我したりした時も修行できます。なぜなら、私たちの主人はすでにこの音と繋がりが、解脱していて、この肉体と関係がないので、当然修行を続けられるのです。「主人」は引き続き私たちの面倒を見てくれて、私たちは引き続き進歩することができます。ですから、この最大で最高の根源の音に頼る以外、何に頼っても間違いです。この最初の音は私たちが存在する前に、また宇宙万物が創造される前にすでに存在しているもので、たとえ三界が破壊されたとしても音は依然として存在するのです。この永遠に存在するパワーに頼って修行してこそ、永遠に存在するレベルになれます。無常の呼吸に頼って修行すると、無常のレベルまでしか到達できま

せん。

ですから、楞嚴經（りょうごんきょう）で釈迦牟尼仏は「どんな法門も一時的な修行法にすぎず、永遠の法門ではない。観音法門だけが永遠の究極で最も正しい修行法門です」と言いました。観音法門を修行すれば、みなさんもきっと仏陀の言葉が分かるでしょう。七日間リトリートの時、私はある人に別の方法を教えました。体のあちこちの具合が悪いと言う修行仲間を寝かせ、十回あるいは百回深呼吸をさせました。その人に少し問題や障害があつたので、快適にさせるために、この方法を教えたのです。私は決して別の法門を教えたわけではありません。けれども、知らない人は、私が他の法門を教えたと思うでしょう。

また、お喋りな人が私に、どうしたら、喋らないでいられますかと聞きました。こういう人には、舌を上顎にくっつけておくといいと教えたとしても、それはそのお喋りな人に対して一時的な方法にすぎず、それほど役に立つものではありません。このような便宜的方法で一応、問題を解決した後、やはり観音法門を修行しなければなりません。そのような便宜的方法で一応、呼吸や舌を上あごにくっつけるのは法門ではなく、ただ一種の便宜的なやり方としか言えません。それは食事の時、食卓に青菜、豆腐、グルテンなどがあると、菜食を始めたばかりの人は、まだそのような味に慣れていないため、たくさんの調味料を加えるようなものです。例えば、唐辛子、コショウ、しょうゆなどを使うと、よりおいしくなる可能性があります。けれども、

調味料はご飯の代わりに食べることはできません。同様に観音法門以外の法門はただの調味料で、正式な食事ではありません。

聖書にも「宇宙は初めに音 (Word) があつた。この音は神と共にあつた。この音は神であつた。万物はこの音によつて成つた。言葉によらず成つたものは何一つなかつた。(In the beginning was the Word(sound), and the Word was with God, and Word was God, everything was made by this, and nothing was not made by this.)と書かれています。道徳経にも同じことが述べられています。老子は「道可道、非常道。名可名、非常名。無、名天地之始。有、名萬物之母(道と言う道は、普通の道ではない。名は名でも、言葉で表せる名ではない。無の状態から、名によつて天地が始まり、創造された。名は万物の母なり)と言いました。この「名不可名(言葉で言い表せない)」が始まると同時に、宇宙の万物が創造されたのです。ヒンズー教の最も有名な經典「Upanishad(ウパニシヤド)」でも同じことを言っています。(In the beginning was the word.) 「創造が始まった時にこの音があつた」。この音が現れた時に、宇宙万物が出現したのです。この音が神であり、この音が創造主なのです。みな同じことを言っています。釈迦牟尼仏、老子、聖書、ヒンズー教、イスラム教はみな同じ道理を述べています。観音法門を修行してから、これらの經典を調べれば理解できるでしょう。

大きく悟りを開けば、經典はすべて同じことを言っているのがわかります。ただ宗教が違う

だけです。これは後世の人が教祖の教理を曲解したので、宗派がたくさん出来たのです。仏教であれ、キリスト教であれ、イスラム教であれ、たくさん宗派に分かれています。これらの枝分かれはすべて誤解によるものです。たとえて言うと、今、私は観音法門を教えています、フォルモサ（台湾）では誰もこれを教えている僧侶はいません。それで彼らは私が外道の法門を教えていると誤解しています。

彼らはたぶん、阿弥陀経にある「甚深微妙（奥深くすぐれている）」の意味が分かってないと思います。だから理解できないと思います。なぜ私は人に阿弥陀仏を唱えることを教えないのでしょうか。実は、私が教えているのは、まさにこの阿弥陀仏を唱える法なのです。この点については、みなさんが観音法門を修行したらわかります。私は他の法門を教えているのではありません。念仏法門、観音法門、金剛法門はみな同じです。分かっていない時はこれらの法門は違うものだと思いますが、分かったらみな同じものだと理解できます。

釈迦牟尼仏はただ一つの法門しか教えませんでした。その他の法門は、いずれも私たちが作りだした法門なのです。ですから、仏陀がこの世を去った後、多くの宗派ができました。仏陀がこの世を去った後、彼の高弟が別のところで観音法門を伝授したかもしれませんが、その人たちは一般の人々が知っている、いわゆる仏教のことしか知らなかったのです。高弟がそこで観音法門を教えた時、別の宗派になったのです。例えば、臨濟宗、曹洞宗、浄土宗、天台宗な

どです。実は同じことを教えたのです。私はこれらすべてを修行したことがありますので、よく知っています。私が言っていることはすべて自分自身の体験によるものです。法門が違うのになぜ同じ所があるかについては澎湖ですでに話しました。ここでは繰り返しません、もし聞きたかったら、澎湖の録音テープを持って帰って聞いてください。

Q 念仏は何の利益がありますか。

M 利益はありますが、あまり役に立ちません。けれども、念仏は俗世間の物質的な物を念じるよりはましです。人の頭は何も考えないことが難しく、普段いつも夫、妻、名利など、さまざまな問題を考えています。もし念仏に集中すれば、少なくともしばらくの間この世界の物事を忘れることができ、頭を少し静かにさせることができます。ですから、念仏は俗世間の物質的な物を念じるよりいいです。ただし、念仏の時は「心」で想念しなければなりません。ただ「口」で唱えると、頭の中ではやはりいろいろな事を思いめぐらすのです。これでは何の役に立ちません。唱えれば唱えるほど、嫌な気分になります。(マスターの観音法門を学ぶ前に、念仏をしていた人は観音法門を学んだ後も引き続き念仏してもいいですか) もちろんできます。あなたにはその他に選択の余地がないようですから。

Q 経を黙読するのと唱えるのはどちらがいいのですか。

M あなたの好きにしていいます。もし経の意味がわからなければ、黙読も唱えるのも意味がありません。(私の言っている意味は、唱えることができて、意味がわからないのです。なので、読めば内容が理解しやすくなると思います) もし、読むほうが内容はわかりやすいなら、読んでもいいでしょう。唱える時は速いので、ゆっくり経の内容を考える時間がありません。経の意味を理解してこそ役に立つのであり、黙読しても唱えても功德はありません。また、読んでも意味が理解できなければ、何の功德もありません。ただ読んで意味を理解したところで、実際の体験がなければ何の役にも立ちません。

Q 経を唱えることには功德がありますか。

M それについてこんな話があります。ある日、菩提達磨がある一人の僧侶に会いました。その僧侶は涅槃経をよく唱えていました。菩提達磨は僧侶に「この経を唱えてどうするのですか」と聞きました。僧侶は「この経を唱えると仏陀になれ、生死から解脱できます」と言いました。菩提達磨は「その経を渡しなさい。私が燃やしてしまいます。絵に描いた餅でおながいっばいになりますか」と言いました。これが私の答えです。満足しましたか。これは菩提達磨が言ったのです。私が言ったではありません。私は今、自分の体験談は控えるようにしています。**Q** マスターは経を唱えても功德がないと言っていますが、世の中にはたくさんの人たちが経を唱えています。どうすればいいですか。

M 私は経を唱えてはいけないとは言っていない。引き続き経を唱えればいいのです。私は彼らに経を唱えるのをやめなさい、とは言いません。というのは、言っても無駄だからです。ここには五、六十人しかいませんが、世の中には五、六百万の人々が毎日経を唱えています。私が一人ひとりに声をかけるわけにはいきませんし、そういったことには関心がありません。経を唱えるかどうかは彼ら自身の問題だからです。「天下本無事（天下もともと何事もなしです）」私は自分の修行し、それだけに関心があります。なので、誰かに聞かれたら話しますが、聞かれなければ話しません。

経を唱えることは、「君を愛してる」「私を愛して」などと歌うよりはいいことです。だから経を唱えることは悪くありません。（笑い）小説を読むよりはいいと思います。私は経を唱える人を褒め称えています。なぜなら、少なくとも彼らは仏陀を想い、法を想い、僧を想い、このようなことを忘れていないからです。まだ彼らは良い法門は見つけていませんが、少なくとも仏陀、法、僧を忘れてはいないからです。まだ、少しは覚えているのです。読経もしないで、たくさん時間をあそぶようでは、何もいいことをしません。噂話やお喋りをして、明け暮れるのです。口は何か喋らずにはいられません。なので、経を唱えることは無駄ではありません。経を唱えて疲れてしまって、家に帰った時は、人のうわさ話などしたくなくなるかもしれない。（笑い）

Q 念仏している時、しばらく唱えていると、口で唱えなくても、耳元で念仏の音が聞こえてきます。この現象はいいことですか。それとも良くないことですか。

M 良いことでも、悪いことでもありません。その時、あなたは録音テープになったのです。(笑い) 私たちの六根(ろっこん：眼・耳・鼻・舌・身・意)六塵(ろくじん：色・声・香・味・触・法)が溢れるほど聞いたので、繰り返し再生するのです。コップと同じで、水を入れすぎると溢れてしまうのです。あまり念仏しすぎると録音テープになるのです。お金が節約できますね。録音テープを買う必要がなくなります。(笑い)

Q 三毒(貪り、怒り、愚かさ)の中で、どれが一番、断つのが難しいですか。

M それは人によります。貪りが強い人もいれば、怒りが強い人もいるし、愚かさが強い人もいます。(マスターの場合はどうですか) 私は三つとも断つことが難しいです。最も貪り、最も怒り、最も愚かです。最高のものを貪り、全宇宙をも貪って、仏陀になりたいのです。(拍手) 私はよく怒ります。衆生が無明で、みなこの宝珠、このパワーを持っているのに、使うことができないので、それを見てとても苛立ちます。ですから、私はまだこの怒りを断つことはできません。私は大変愚かです。この「道」に夢中で、もう戻ることはできず、前進し続け、振り返りません。もし、あなたがある女性に夢中になったとしても、ある日目が覚めます。という

のは、ある女性を好きになっても、その女性が年老いて醜くなったら、彼女にもう夢中になれないでしょう。けれども、私はこの「仏道」に夢中になって、永遠にそれをやめることはありません。誰も私を変えられることはできません。ですから、私は「貪り、怒り、愚かさ」をやめることは難しいのです。（拍手）

Q 経を唱えることは仏陀に成ることに役に立たなくても、福報は得られますか。

M 先ほど経を唱えるのは小説を読むよりは良いと言いました。これも福報のうちでしょう。でも、これ以上福報を望むなら、経を唱えることで得られるかどうかは私にはわかりません。それは菩提達磨や釈迦牟尼仏に聞いてみなければなりませんね。経を唱えるのもいいですよ。

Q 私が読んだ本の中に、ある人が災難に遭った時に、阿弥陀経を唱えていると、追いかけてきた兵士から逃げることできたという話がありました。なぜ経を唱えたら災難から逃れられたのでしょうか。

M 彼が経を唱えたから災難から逃げられたか、それとも彼の福報のためか、或いはその時、追いかけて来た兵士たちが、彼を見つけられなかったか、私にはよく分かりません。もし、あなたがそのことを信じるなら、あなたも経を唱えればいいのです。経を唱えるのはいいことです。けれども、福報があるかないかに関しては何とも言えません。こういったことは気にしな

くてもいいです。もし福報があるとしても、せいぜい世俗の福報に過ぎません。あまりにも少なく、小さな福報で、私にとっては足りません。なぜなら、さつき言ったように、私は最も貪りますので、このような小さな福報では、ないのと同じです。福報がないと言っても、やはり少しはあります。どうぞ続けて経を唱えてください。(笑い) 経を唱えることはいいいことです。少なくとも仏陀が何を言ったかを覚えるからです。仏陀が言っていることは、俗世界で言われていることより、いいからです。私たちの頭脳に良い影響を与え、良い観念と考えを学ぶことができるからです。

Q 普門品(ふもんぼん)で老子、孔子の思想を説明できますか。

M できます。道教徒に会ったら、老子の思想で普門品を説明し、仏教徒に会ったら、普門品で老子の思想を説明します。つまり、融通をきかせて応用し、何事にもとらわれず、分け隔てもしません。ただし、完全に分かった後、何事にもとらわれなくなります。さもなければ、勝手に解釈したりすると、人に突っ込んで質問された時、問題が生じます。ですから、まず完全に理解してから、人に話して聞かせることです。例えば、今日、すべての経典は同じであるという私の話を聞いて、帰ってから、すぐ家族に同じことを話しても、いろいろ質問されると、あなたは実際の体験がないので、答えられないでしょう。

Q 別の角度から言えば、道教徒でもキリスト教徒でも、もし修行が高いレベルに達しているのなら、仏教の内容を理解できますか。

M 修行レベルが高い人は当然理解できます。実際は、もともと仏教ありません。釈迦牟尼仏の以前には、仏教はどこにありましたか。仏教はどこにでも存在しています。仏陀とは何でしょう。完全に悟った人が仏陀です。ですから、完全に悟った道教徒も仏陀と言えます。すべての人が仏教徒です。良いことをする人、道徳的な人、修行している人はみな仏教徒です。決して法名があり、僧侶に帰依することだけが仏教徒と言うものではありません。仏教に含まれる範囲はそんなに小さくありません。仏教にしても、道教にしても、キリスト教にしても範囲はとても大きいのです。私たちが宗教の範囲を狭くしてしまっているのです。これはすべて私たちの誤りで、教主の本意がそうなのではありません。

Q マスターが言った「音」は、私たちが普段聞いている音と同じように具体的なものですか。

M 違います。この音は法を伝授しなければ聞こえません。普通の人には聞こえません。

Q 在家者はこの法門を修行することができますか。

M できます。釈迦牟尼仏には多くの在家の弟子がいて、楞嚴經に二十五人の菩薩が自分の修行の体験を述べています。その大部分は在家修行者の体験です。在家者ほどこの法門を修行す

べきです。

Q カルマは修行することによって消し去ることが出来ますか。または病気になる、カルマを消し去ることが出来ますか。

M 努力して修行すれば、カルマを消し去ることが出来ます。もし修行しなければ、たとえ病気がかかっても、カルマを消し去ることはできません。なぜなら病気になることでは、あれだけの多くのカルマを清算することができないからです。カルマの半分はサマデーの火（禪定の状態）で焼くとかなり速く清算できます。観音法門を修行すれば、カルマをとでも速く清算できるのです。なぜなら、マスターがあなたの代わりにカルマの半分を背負ってくれるからです。

Q 観音法門を修行するには必ずマスターの伝法が必要ですか。もしマスターに会うチャンスがなければ、永遠に修行することができないのでしょうか。

M そうです。もし真のマスターに巡り会わなければ、修行ができません。偶然に少し音が聞こえるかもしれませんが、それが何かわかりません。また次の日に聞きたくても、聞こえないかもしれません。けれども、法を伝授された後は、この音は永遠に存在するのです。

Q マスターが法を伝授するには、何か条件や規則がありますか。

M これから菜食すればいいだけです。この人に（マスターが自分を指す）帰依するのではな

く、この音、この大きなパワー、あるいは本来の面目に帰依するのです。私はただのように修行するか教えるだけです。ですから、規則などはありません。私はみなさんを弟子にしたいのでも、供養してもらいたいのでもありません。この法門を知っているの、あなたに教えるのです。本当の修行はやはり自分自身に頼らなければなりません。一部の人たちは先生に帰依してから、永遠にその人の弟子として、離れられないことがあります。別の法門を習いたくてもできません。これではまるで縛られたようです。私はこのような帰依は望んでいません。必要とする人には法を伝授して、自分で自分の財宝を見つけてそれを使うようにしています。その財宝はもととみなさんが持っているものなので、私がそれをみなさんにあげることはできません。私はただ智慧を開くことを手伝うだけで、みなさんが自分のパワー、宇宙のパワー、本来の振動のパワーと同じ合い、無尽蔵の宝物を自分で享受するのです。ですから、私に帰依する必要はありません。この凡人に帰依しても、少しも役に立ちません。

Q 先ほどマスターは「観音法門を修行するなら、必ず菜食しなければならぬ」とおっしゃいましたが、私たちは娑婆世界で生活しているので、現実の生活状態に合わせるために、菜食ができないなら、どうすればいいですか。

M 言い訳はできません。衆生の苦しみにかまわず、衆生の肉を食べる人がどうして菩薩にな

れるのですか。菜食ができなければ、私にはどうしようもありません。このような質問には答えたくありません。衆生を救うことを決意するならば、自分の好みを多少は犠牲にすべきです。小さな障害物を突破しなければなりません。今日、どこにでも菜食レストランがありますし、自分で豆腐やグルテンの料理を作って食べるのです。こういったことは小さなことです。インド人の半数以上は菜食していますが、豆腐やグルテンがないので、豆類を煮て食べています。まったく問題はありませぬ。

Q マスターがおっしゃる観音法門は楞嚴経の円通法門と同じですか。

M 同じです。けれども、楞嚴経にはどのように観音法門を修行するのかは書いてありません。ただ観音法門を賛嘆しているだけです。もし観音法門を修行したいならば、それを教えてくれるマスターを見つけないければなりません。

Q マスターに伝授するマスターはいますか。

M います。釈迦牟尼仏から始まって、ずっと伝授して来たのです。

Q マスターのマスターはこの国の人ですか。

M インド人です。けれども、ベトナムにもいます。ベトナムには観音法門を修行する人がたくさんいます。

Q 私の生徒で、母親が中絶し人がいます。どうすればいいですか。

M すでに中絶したなら、今話をしてどうするのですか。（このような場合、水子供養をする
と役に立ちますか）もし、あなたが人を殺した後、警察に行って懺悔したら、役に立ちますか。

警察はあなたを救えますか。たとえ大統領か裁判官に懺悔しても役に立ちません。警察や大統領や裁判官はあなたを刑務所に入れます。そうするのがあなたを救うことなのです。自分自身で罪を償うのです。水子供養とは何をするのですか。凡人の心で懺悔して、どうしてカルマを除去できますか。凡人の心はすでに汚れています。汚れた水で汚れものをどんなに洗ってもきれいになりません。

Q 釈迦牟尼仏も苦行をしていたのに、なぜマスターは苦行が役に立たないと言うのですか。

M 釈迦牟尼仏は苦行をして、やっと苦行は何の役にも立たず、理になっていないことが分かったのです。釈迦牟尼仏は死にそうになった時、はっと目が覚め、後悔しました。そして物を食べ始め、ミルクを飲み、ビスケットを食べて、体はだんだん回復しました。私はわざと苦行してやせたのではありません。私は食べられないので普段少ししか食べません。時々昼食も食べたくななく、ご飯を食べるのも水を飲むのと同じで、味がありません。ただこの体のために心配して、無理に少し食べるのです。

Q 修行する時、普通の人と同じように暴飲暴食したり、楽しんだりしてはいけないのですか。
M 楽しめるものがあるんですか。一日に三食でも多過ぎます。私たちの胃袋には限界があり、たとえあなたがもつと食べたくても入りません。洋服でも一回二、三枚しか着られません。すべて物事は中庸にすればいいのです。観音法門を修行した後、高いレベルに達した時、他の人が何かくれても、たとえお金をくれても、欲しいと思わないでしょう。あるものを使い、心は貪りません。もし間違つて肉を口に入れたら、気分が悪くなったり、おなか痛くなったり、嘔吐したりします。ですから、どうしても食べたくないのです。

Q マスターのレベルで経典を読むと、どんな感じがしますか。

M 私は小さい時から経典を読み始め、今ではほとんど暗誦できます。私も経典を読みかえすことがあります。なぜなら、参考にしなければならぬからです。例えば、どのような修行が正しい修行なのかを教える時、イエス・キリストや、釈迦牟尼仏の言葉を用いて証明しなければ、みなさんは信じてくれないからです。私は法を広め始めてまだ間もなく、こんなに若いので、私が何を言っても人に容易には信じてもらえないのです。ですから、私は楞嚴経、聖書や老子の話で証明するのです。みなさんはそうしてこそ信じるのです。これは私たちの習慣です。古代の大修行者を信じているので、今、生きている菩薩がみなさんの前に立っていても、尊敬

しないし、全く信じないのです。

Q マスターが読んでいる経典は何語ですか。

M 私は何でも読みます。これはあなたと何の関係がありますか。(笑い)(なぜなら、中国語の楞嚴経は大変深いので、マスターが読んでもわからないと思うからです) 私はオウラック(ベトナム)語は読んではいけないのですか。(笑い)(私は法華経と楞嚴経に大変興味があります。これについて説明していただけますか) 今どうやって法華経の講義をするのですか。今はその時間がないので、日を改めて話します。

Q 法華経の法師功德品に音のことが述べられていますが、マスター、それについて話してください。

M 法師功德品以外、普門品にも「梵音海潮音、勝彼世間音(この世を超えた音)」のことが述べられています。法師功德品に「法華経を解釈できるレベルに達した修行者であれば、八百の鼻の功德、千二百の耳の功德、八百の眼の功德を備えているはずだ。この功德によって、凡人の耳で梵天から地獄までの音が聞こえる。鐘の音、太鼓の音、海潮音、外の音、内在の音など、すべての音が聞こえる」と述べられています。内在の音とはどんな意味でしょう。これがすなわち普門品でいう「勝彼世間音(この世を超えた音)」です。法華経はあまりに長いので、もしそれを話すなら、別の日にしましょう。



すべての修行法門は観音法門である

スプリームマスターチンハイ フォルモサ・澎湖

一九八七年二月十二日

今日は金剛経（こんごうきょう）について話します。どんな経（法）もみな金剛経（金剛法）です。金剛経は金剛経典のことではありません。ただし言葉で言い表さなければならぬため金剛経と言うのです。

ある日、私はある人に法を伝授しました。彼女はまるで魔に取り付かれた様子でした。みなさんは魔に取り付かれた人はどんな様子か知っていますか。魔に取り付かれた人は、修行ができてなかつたり、自分で勝手に修行したり、良くないマスターに出会って良くない法門を修行したりしている人です。或いは純粹でない人が修行すると、魔に取りつかれます。魔に取り付かれるとは、魔に侵入され体を占拠されることです。体は本人のようですが、意識は魔によつ

て追い出されてしまい、魔が体を使って、さまざまなたらめなことをするのです。何かの手印、脚印、頭印を組んだり、または変なことを言ったり、耳元で人の話し声が聞こえて、彼にいろんなことを指示するのです。行為や振舞いが正常な人とは違い、時にはこう言い、また時にはああ言い、自分でも何を言っているのかよくわかっていません。時には、魔に強制的に何かさせられ、自分自身をコントロールできません。これを魔に取り付かれたと言います。

ある日、私は魔に取り付かれた人に伝法しました。私がそうしなかったのではなく、事前によく知らなかったのですが、ある修行仲間が友達を連れて来ました。私は弟子をよく同修と呼びます。私と一緒に同じ法門を修行しているので同修と呼ぶのです。

その友達は何年も前から魔に取り付かれていました。彼女は私にその友達を紹介しました。彼女は私の弟子なので、私はこの魔に取り付かれた人に伝法したのです。長年魔に取り付かれてはいましたが、良い人で、菜食し、仏陀に礼拝し、念仏し、しかも座禅して、解脱したいと願っていたのです。けれども、以前良くない法門を修行したためか、良いマスターに出会わなかったためか、そのようになっていたのです。

私が彼女に伝法した時、いくつかの魔が同時に出て来ました。彼女は外見からすると普通の人で、初めて会った人は、彼女が魔に取り付かれていることがわかりません。普段話す時も特に違うところは何もありません。けれども、印心の時、いくつもの魔が出て来て、互いにやり

合い、とてもひどいものでした。当時、そこにいた他の修行仲間はみんな非常に恐がりました。魔が出て来る時は普通の人とは変わってしまい、彼女の顔は変形してしまい、とても恐ろしく見えました。その中の一つの魔の声は犬が吠えるような声で、他にもライオンのような声の魔もいました。とても耳障りな声でした。客家（ハツカ）語を話す魔がいれば、大陸の方言を話す魔もいました。彼女自身は客家語などを話せない人なのです。

私が彼女に仏号を唱えさせても、彼女は怖がって唱えようとしません。阿弥陀仏を唱えることはできませんが、私が教えた仏号や法門を唱えさせても、それを恐れていて、しかもどうしても唱えることができないのです。彼女自身も唱えたりません。私が彼女に、無理に唱えさせると、声がまったく変わってしまい、その場で聞いていた修行仲間は、鳥肌が立ちました。唱えると犬が吠えるような声になってしまふのです。なかには比較的善良な魔もいて、他の魔に向かつて叱るものもいました。やめなさいとか、しつかり唱えなさいとか、この先生は良いマスターだから礼拝しなさいとか、と言っていたのです。その日の伝法はまるで賑やかな宴会を開いているようでした。またなかには「このマスターを私は敬服できない。ただし彼女には金剛法門があるので、このマスターの前では恭しい態度で従うべきだ」という魔もいました。魔はすごいもので、なんと私の前で法要をしているのです。

どうして私はみなさんにこの話をしたのでしょうか。私はあまりこのようなことを話したく

ありません。みなさんが魔に取り付かれた人をたくさん私の所に連れてくると困るからです。私はこんなことをしたくありません。正直言って、魔に取り付かれた人を救うのは大変で、簡単ではなく、多くのパワーを使わなければなりません。正常人さえ救うことができない時もあるのに、魔に取り付かれた人はもつと難しいのです。わかりますか。正常人でも私の話が耳に入らない人がいます。魔に取り付かれた人は正常人より障害が多いので、私を信じるのは容易ではありません。

なぜ、私はこの話を話したのでしょうか。先ほど言いましたが、すべての経典は金剛経であり、釈迦牟尼仏も「すべての法門は金剛法門である」と言っています。この魔も金剛法門を知っていました。金剛法門はすなわち観音法門です。釈迦牟尼仏は金剛経の中で「金剛法門を修行すべきである」と弟子の須菩提（しゅぼだい）に言いました。けれども、釈迦牟尼仏は他の人には観音法門を説きました。昨日私は「普門品（ふもんぼん：観音経のこと）は衆生を救う法門とし、浄土宗の阿弥陀経では阿弥陀あるいは浄土法門とし、六祖壇経では般若波羅蜜多法門と称している」と言いました。なぜ私がこのように言ったのか説明しましょう。

昨日、私は言いました。阿弥陀経にもこの音、内在の美しい音楽について述べられています。みなさん覚えていますか。楞嚴経でもこの観音、つまり音を観ることにについて述べています。二十五の菩薩もそれぞれ自分が開悟した時にどんな音が聞こえたかを述べています。普門品に

も「梵音海潮音、勝彼世間音（この世の音に勝る音）」とあります。もし釈迦牟尼仏が外界の海潮音のことを指したのなら、澎湖に住んでいる人たちは全員悟りを開いているはずです。（笑い）というのは、澎湖の人は毎日、海潮音を聞いているからです。そうではないですか。釈迦牟尼仏は当然このような意味を指したわけではありません。

もし、海潮音が外の世界の海潮音を指すのなら、梵音は何を指すのでしょうか。どうすればこの梵音が聞こえるのでしょうか。山に探しに行きますか。それとも海に探しに行きますか。どこに行っても見つけることはできません。梵音は梵語の梵で、梵語（サンスクリット語）は昔のインドの言葉です。そうするとインドに行つて、梵語を聞けば、悟ることができるのでしょうか。当然違います。だったら、一体何が「この世の音に勝る音」なのでしょう。どこで見つけることができるのでしょうか。どこで聞くことができるのでしょうか。

釈迦牟尼仏が言っていることは内在の音であり、悟りの音であり、仏陀の音です。これが観音菩薩が修行していた法門であり、普通の外界の音を言っているわけではありません。ですから「この世の音に勝る音」と言います。これは第一の証明です。今、私はみなさんにはつきりわかっただけで、いろいろな音に勝る音に、普門品、阿弥陀経、般若波羅蜜多経、楞嚴経はみな同じことを言っていることを話しているのです。

楞嚴経は楞嚴経ではなく、ただの紹介にすぎません。本当の楞嚴経ではありません。金剛経

も金剛経ではなく、本当の金剛経ではありません。それは伝法の時にだけあるものです。なぜ私はこのように言うのでしょうか。六祖慧能（ろくそえのう）は初めて金剛経を聞いたとたん悟りを開いたのですが、それでも彼は五祖弘忍（ごそくにん）の所に行つて、再度五祖弘忍に金剛法門を伝授してもらいました。

金剛経と金剛法は違います。例えば、私がビスケットの宣伝をして、「このビスケットは最高で、誰が食べても体にもいいし、このビスケットは甘くて、品質が良いのでとても高くして普通の人には買えません」と言ったとします。もし、みなさんがテープレコーダーで私の話を録音していても、私がビスケットについて話しているのが聞けるだけで、食べることはできません。たとえ何回同じことを言っても、このビスケットがどういふものかわかりません。わからなければ、私が言っているビスケットはただのビスケットで、みんなが知っているビスケットだと思つてしよう。

經典に「甚深微妙法（奥深くすぐれている法）」とありますが、それが分かっていないのです。釈迦牟尼仏は二千五百年前にこの世を去つたので、彼に聞くことはできません。私たちは金剛経を唱えるだけで十分で、それには全てが含まれていると思つていますが、それは違います。金剛経は金剛経ではありません。もし言葉で唱えることができるのなら、それは真の経ではありません。目で見えるのは本当の經典ではなく、耳で聞こえるのは真の経ではありません。

真の金剛経はマスターの伝法がなければ得られません。本当の般若波羅蜜多経はマスターの伝法があつてこそ理解できるのです。本当の普門品はマスターの伝法により聞こえるのです。本当の阿弥陀経はマスターの伝法があつてこそ体験できるのです。

私は今日は、経の講義などほしくない方がいいと思いました。なぜなら、私の知っていることは言葉でみなさんに話すことはできないからです。本当です。先ほど話している時に自分でも首を横に振り、どのように話したら、何を説いたら、私が知っていることを、みなさんにわかってもらえるのか、と考えていました。これは簡単なことではありません。例をあげて説明しましょう。例えば水ですが、水はいろいろな言い方があります。フォルモサ（台湾）語、中国語、フランス語、ドイツ語、英語、スペイン語……などです。もし、私がドイツ人に出会ったら、*Wasser*、*水*、フランス人に出会ったら、*L'eau* と言ひ、イギリス人に出会ったら *Water* と言ひ、中国人に出会ったら水 (*shui*) と言ひます。

釈迦牟尼仏も同じように、ある人たちは金剛法門の名前が好きなので、「金剛法門」と言ひました。ある人たちは阿弥陀仏が好きで、西方浄土に往生するのが好むので、釈迦牟尼仏は「浄土法門」と言ひ、この法門を修行すれば、必ず西方浄土へ行くことができると言ひました。実際に西方浄土へ行くことができます。というのは、この観音法門により、私たちは妙なる音を聞くことができ、これは阿弥陀経で述べられていることと同じです。ある人たちは観音菩薩が

好きなので、釈迦牟尼仏は「観音法門」と言い、この法門を修行すれば、観音様に近づくことができ、観音菩薩のように「梵音海潮音、勝彼世間音（この世の音に勝る音）」を聞くことができる、と言いました。

これを聞いた人はとても喜び、ぜひ観音法門を伝授してくださいと言います。阿弥陀仏が好きな人たちは、無量光の法門を伝授してください。私は無量光が大好きで、西方浄土の妙なる音楽が大好きなので、早く私に伝授してくださいと言います。ある人たちは禅の修行をしてきたので、釈迦牟尼仏は「これは般若波羅蜜多法門で、最高のパワー、最高の智慧の法門です。この法門を修行すれば、すぐに悟ることができます」と言いました。

禅の修行者は、往々にして阿弥陀仏は普通の人が修行するもので、自分たちは禅の修行者であると思っています。だから、釈迦牟尼仏は人々に、「この修行法門は禅の修行法門でこれを修行すれば、必ず悟りを開き、大智慧を得ることができる」と言ったのです。摩訶般若波羅蜜多のサンスクリット語は *Maha prajna paramita*（マハーブラジユニヤー パーラミター）で、大智慧という意味です。大智慧が好きな人には、釈迦牟尼仏は、「これは大智慧の法門で、この法門を修行すれば必ず大智慧が得られるのです」と言いました。

釈迦牟尼仏はこのような言い方をするので、衆生を救っていったのです。水というものをどんな言葉で言っても構いません。違いはなく、その水が飲めれば、それでいいのです。名前

の違いは関係ありません。ですから、釈迦牟尼仏は多くの人に対してさまざま名称を使って話しましたが、彼が伝授した法門はすべて「同じ」ものです。

法門は經典の中では見つけられないのは、書くことができないからです。というのも、伝法の時、言葉を使わないからです。私が伝法の前と後に、少し話すのは法門の紹介のためです。けれども本当の伝法時、私は何も話しません。ただ座っているだけで、動きませんし、一言も話しません。伝法の時、目、耳、意、頭脳、体など、何も使いません。身、口、意（体、言葉、考え）を全部忘れて、そういうものは一切使いません。この体は寝るのに使うし、耳はいろんなことを聞き、人がビスケットの宣伝をしているのを聞くことなどに使いますが、実際にビスケットを食べる時は、六根（ろっこん：眼、耳、鼻、舌、身、意）を使いません。何も使いません。

すぐに信じることが出来る人は大きな善根（過去世で良い行いをして、徳を積んだ人）があり、心が純粹であることを表しています。そこで私を見るとすぐに信じます。何も言わなくても信じているのです。善根があり、縁があるからです。ただし、私たちはすぐに誰かを信じるべきではありません。信じるには根拠がなければなりません。

みなさんは六祖慧能が有名な禅師であることを聞いたことがあろうでしょう。彼は法を求めするために五祖弘忍の所に行きました。八ヶ月後のある日に、五祖弘忍は慧能を自分の部屋に呼び、

夜中に伝法し、金剛法を伝授しました。伝法の後、六祖はそこを離れ、身を隠し、黙々と十六年間修行しました。十六年後、彼は出て来て、他の人に伝法したのです。

六祖壇経の第一章に、彼は一千人にこの法門を紹介した、と書いてあります。彼は「私の法門は『摩訶般若波羅蜜多』の法門です」と言いました。これはいわゆる金剛法門と般若波羅蜜多法門は同じであることを表しています。観音法門は般若波羅蜜多法門とも同じです。般若心経の冒頭には「観自在菩薩行深般若波羅蜜多時、照見五蘊皆空、度一切苦厄……（観自在菩薩が般若波羅蜜多に深く入った時、五蘊（色、受、想、行、識）はみな空なりと悟った。全ての苦しみから救われた）」とありますが、これは何かというと、深い禅定に入った時、智慧の光で悟ったのは五蘊（色、受、想、行、識）はすべて空だと分かり、すべての苦しみから救われたということです。これは観自在菩薩が摩訶般若波羅蜜多法門で禅定に入った時、悟りを開いたことを示しています。

今、私はみなさんに聞きたいのですが、観自在菩薩とは誰でしょう。（答える…観音菩薩です）観音菩薩はどんな法門を修行していましたか。（答える…観音法門です）そうです。そうなら、摩訶般若波羅蜜多法門はすなわち観音法門であることを表わしていませんか。観自在菩薩が深い般若波羅蜜多に入ったということは、「観音菩薩が観音法門を修行する時に、五蘊皆空（色、受、想、行、識）は、すべて空であると悟り、全ての苦しみから救われた」という意味です。

これは何を意味しているのでしょうか。摩訶般若波羅蜜多法門は観音法門と同じ法門であるということですから。六祖慧能も同じ法門を修行し、五祖弘忍が修行していた金剛法門は、六祖慧能の般若波羅蜜多法門と同じ法門なのです。ここから、五祖弘忍、六祖慧能と観音菩薩はみな同じ法門を修行していたことがわかります。

観音法門は耳で修行するのではなく、目で修行するのでもなく、意で修行するのでもありません。ですから「観音」と言います。「聴音」とは言いません。「観」は目で物を見るということではありません。智慧で観るという意味です。私はさつき言いましたが、観音には眼、耳、鼻、舌、身、意を使いません。中国に曹洞宗の師がいて、彼は曹洞宗の修行に関する本を書きました。本の名前は中国語で何と言うのかわかりませんが、その中には「曹洞の修行には耳根、眼根、鼻根、を使わない。身、口、意も使わない」と書いてあります。これこそ真の曹洞です。観音法門を修行している人はこの意味がすぐわかります。私たちは六根で修行するではありません。これは、曹洞法門は観音法門と同じであることの証です。

その他に道德経でも、老子は「名不可名（言葉で表せない名）」（Wordless word）は万物の母である、と述べています。（第一章：名可名，非常名。無，名天地之始，有，名万物之母）老子が言う意味は、本来は何もない無の状態で、「名不可名」（言葉で表せない名）つまり言葉では表現できない「道（タオ）」のが始まりによって、宇宙万物が創生されたということなのです。

キリスト教の聖書でも同じことを言っています。聖書には「宇宙の最初は一種の音であり (Word)、この音は神と共にあり、この音がつまり神であった。万物はこの音より創造されたので、この音から作られないものはなく」(In the beginning was the word(sound), and the word was with God, and word was God, everything was made by this and nothing was not made by this.)と書かれています。論語を読んだことがある人は知っているでしょう。孔子はある日、音楽を聴いて、渾然と無我の境地に入りました。三カ月たつてもまだその美しい音楽に陶醉していました。これは内在の音であつて、この世の音楽には、こんなに人を引き付ける大きなパワーはありません。

インドの経典ヴェーダや他の経典でも述べられています。宇宙最初の音はオームの音に似ていて、それを *Shabd* (音) と言います。玄奘の物語を読めばわかりますが、彼は他の僧侶たちとは別の時期にインドに行きましたが、そこで *Shabd* (音) 法門を学びました。イスラム教のコーランの中で、マホメットも宇宙の音のことを話していますが、ただ違う名前を使っています。宗教経典によって、他のいろいろな違う名前が使われています。例えば *Naam, Anhad-naad, Udgiti, Kalam-i-qadim, Bang-i-ilahi, Nida-i-asmami, Saut-i-sarmad, Katha, Kirtan rag*……などです。

実際、全ての大師たちはみな同じ事を言っています。私は観音法門を修行してから分かった

のです。観音法門を修行する前は、どこが同じなのかどこが違うのかよく分かりませんでした。

ある日、私はある僧侶に伝法しました。彼は本来天台宗を修行していましたが、あるレベルに達した後、なかなかそのレベルを超えることができず、そこに停滞していました。彼はとても真摯に、謙虚に私に三回礼拝して法を求めました。私は最初、彼に伝法したくなかったので。なぜなら大抵、僧侶は尼僧よりも修行レベルが高いと思いついでいることが多いからです。私はなぜこの僧侶は私のところに来て礼拝し、伝法を求めめるのか、と恐縮しました。私が彼に伝法しても、理解できるだろうかと心配でした。結局、彼は理解できました。

彼に伝法した後、彼はこの法門は天台宗に似ていると言いました。私はそうだと答えました。本来同じ法門なのです。真のマスターがいれば、それは天台宗であったり、曹洞宗であったり、観音法門であったり、禅、阿弥陀、普門なのです。もし真のマスターからの伝法がなければ、ただ口で唱えるだけで、外面の物を念じるだけです。この伝法のパワーがなければ、何も得られません。どんな法門でも、もし自分が半分しか知らなければ、人にも半分しか伝えられません。それでは完璧な法門とは言えません。人を上へ連れて行くパワーが足りなく、途中までしか連れて行けません。さらに高い境界があることを知らなければ、どうやって上へ上がるかもわからないのです。

天台宗、曹洞宗、臨済宗についてですが、先ほど私は、慧能は臨済宗であると言いました。

浄土宗、観音法門、般若波羅蜜多法門などは全部同じですが、真のマスターによる伝法のパワーがあるか、ないかにより違いが出て来ます。真のマスターによる伝法のパワーがあれば、どんな法門もみな同じです。伝法の時は何も話しません。どんな法も口で言っ、言葉で伝えられるようなものではないからです。けれども、伝授しなければ、法を得られません。ですから、六祖慧能はこの法門を「無相法門」と言いました。

昨日、私は言いました。どの宗派でも本来同じですが、大師たちがこの世から去った後、高いレベルの弟子がいなく、伝法できる良い弟子がいなかったため、法門がとぎれて、失われてしまいました。その後、他の所に良い弟子が出現して、その人がインド、フォルモサ（台湾）または大陸などで修行し、また別の場所で修行し、悟りを開き、引き続けて伝法をすることもあります。彼のマスターと同じ所で伝法するとはかぎりません。また彼のマスターと同じ言葉を使うともかぎりません。他の言葉、他の名前を使ったかもしれません。

例えば六祖慧能ですが、五祖は彼に金剛法門、金剛經、真經を伝授しました。けれども、彼は伝法の時、この法門は般若波羅蜜多法門であると言いました。観音菩薩は本来観音法門を修行しましたが、観音菩薩は舍利仏（しゃりほつ）に言った時には摩訶般若波羅蜜多法門になっていました。けれども、みな同じ意味です。この法門が大陸に伝わった後、臨済宗、曹洞宗になりました。臨済は臨済宗教祖の名前です。釈迦牟尼仏がこの世から去った後、私たちは仏教

と言い、イエス・キリストがこの世から去った後、私たちはキリスト教と言いました。老子が去った後、私たちは老教（道教）と言いました。実際は全部同じです。

真のマスターはみな同じ教理を教え、人を救い解脱させ、同じ法門を伝授するのです。人を解脱させることができる法門はただ一つです。それは即ち観音法門です。それを浄土法門と言つても、普門法門、般若波羅蜜多法門あるいは金剛法門と言つても何法門と言つても構いません。全部同じです。人を解脱させることができるものは、いずれも観音法門です。

内在の仏陀の音が私たちを解脱させることができます。ですから、楞嚴経の中で釈迦牟尼仏は、観音法門は不思議なパワーを持っていると讃えています。そして彼は、十方三世仏（じつぼうさんぜぶつ：現在、未来の全ての仏陀）はみな観音法門を修行してこそ、阿耨多羅三藐三菩提 *Anuttarasamyak sambodhi*（あのくたらさんみやくさんぼだい）を得られると言っています。それはいわゆる最高の無上正等正覚（むじょうしようとうしようがく：究極の悟り）を得るという意味です。キリスト教ではこのレベルを神と言います。彼らにとつて神は最高ですし、仏教徒にとつて無上正等正覚は最高です。無上というのはそれを超えるものはない、それより高いものはないという意味です。キリスト教徒にとつては、神は最高であり、私たちが言う無上正等正覚と同じ意味です。いずれも究極の解脱の最高境界（Highest Ideal）、最高の智慧を指しています。

けれども、後世の人は悟りを開いていないので、經典の内容を理解しないまま、誤って翻訳し、凡人の考えが經典に加わってしまったので、宗教はますます真のマスターの本意からかけ離れてしまったのです。みなさんご存知のように、仏教の中にもたくさん宗派があります。他の宗教も同じです。もしそれぞれの宗教の真義が分かれば、互いに言い争ったり、戦争したりすることは無いでしょう。

オウラック（ベトナム）では、観音法門に似たものを教えている僧侶がいて、彼は阿耨多羅藐三菩提のことを「虚空大定」と解釈しています。彼の言う虚空の意味は、その時、その場所に何も無い、という意味です。人がいない、私がない、彼がない、あなたがいない、衆生がない、仏陀がない、深く禅定に入ったという意味です。ですから虚空大定と言うのです。けれども、多くの人は仏教を信仰しているので、彼の教えが理解できないので、彼のことを外道と言っています。私は彼が外道であると思いません。彼も人に布施、持戒、忍辱、精進、禅定、智慧を教えています。

彼は金剛經を使って、説いたものではありません。一冊の金剛經を手にとって、經文通りに、第一は布施をなさい、第二は戒律を守りなさい、第三……のように、解釈したではありません。自分の言葉で法を説き、「人に良いことをなさい、殺生をしてはいけない、盗みをしてはいけない、酒を飲んではいけない、邪淫をしてはいけない、嘘をついてはいけない等」と説

きました。ただし彼は五戒を守らなければならないという、はっきりとした用語を使っています。ただ人に道徳的な人になりなさい、殺生をしてはいけない、他人の奥さんと浮気をしてはいけない、などと言っています。これは五戒の内容と同じなのです。

彼も観音法門を教えていました。良いマスターに教わったかもしれませんが、他の人に伝法しています。彼は観音法門という名前は使わないで、「仏教無為玄秘法門」と言いました。彼が言っている無為は道教の無為と同じで、どちらもエゴで物事をするのではなく、何をするにしても執着しないことです。

私は彼に教わったことも、彼に会ったこともありません。けれども、彼が書いた法門についての本を読んで、すぐに観音法門であることがわかりました。もともとこの法門は書き記すとはできませんが、彼が所々漏らしたので、私は、彼が教えているのが観音法門であることがわかったのです。もし私が観音法門を修行していなければ、彼の言ったことは理解できなく、私は彼を外道であると言ったかもしれません。けれども、観音法門を修行すると、真の智慧が開き、すべてのことがはっきり見えます。まるで鏡のようにすべてのものははっきりと映るのです。鏡には少しのほりもないので、はっきり見えるのです。

さもなければ、私たちはいつも人を攻撃し、仏教がいい、カトリックはよくないとか、あるいはカトリックがよい、仏教はよくないなどと言うでしょう。もし自分が理解できていなければ

ば、何を信仰しても分ならず、無駄なのです。物質的な福報が得られると言っても、せいぜい自分に少しの慰めになるだけです。けれども、自分が誰なのかもわからず、自分は本来仏陀であることがわかりませんし、仏陀になることもできません。ですから、何の役に立ちません。

ある禪師は、経典などは役に立たないから、燃やしてしまったほうがいいと言いました。時々、私もこのようなことを言います。なぜなら、私は経典を読むとがっかりするからです。経典を読むだけでは人を解脱させられません。経典に縛られている人もいます。彼らは私に会いに来て法を求めるのではなく、論争に来ているのです。彼らは「金剛経には、金剛経を唱えれば悟りを開き、仏陀になれると書いてあります」と言うのです。違います。金剛経には、金剛経を「持するれば（法を得ていれば）」と述べているのであって、金剛経を「唱えれば」とは言っていない。持戒（戒律を守ること）と戒律を唱えることは同じではありません。したがって「経を持する（法を得ている）」のと経典を唱えることは同じではありません。

菩薩の戒律を受けて、毎日家でそれを唱えるだけでいいと思っただけではありません。そんなはずはありません。菩薩の戒律を守り、菩薩の行いをしなければなりません。経典の場合も同じですが、金剛経を唱えても役に立ちません。仏陀に向かって唱えても、仏陀はすでに分かっている、何の意味がありません。もし唱えて人に聞かせても、人は分からないので何の意味もありません。ですから、修行して初めて経典の意味が理解できるのです。

私は小さい時から金剛経を唱えていました。みんな金剛経を唱えると役に立つと言いましたが、私は何十年唱えても何も悟りませんでした。六祖慧能が経を唱えた時は、何を得たか分かりませんが、私は経を唱えても役に立ちませんでした。法華経を唱えても、涅槃経を唱えても何も悟れず、經典の中で釈迦牟尼仏が説いていることがわかりませんでした。

けれども、観音法門を修行してからまもなく、經典を読むとよくわかりました。經典を読んだ後、燃やしてしまいました。あまりにもよく理解できたからです。すでに理解してしまっただけで、燃やしてしまってもいいと思っただけです。理解していない時は、經典を頭にのせて、一步一步、二歩三歩しても何の役に立たず、悟りを開くことも、自分が誰かもわかりません。ただ仏陀を拝み、仏陀の弟子になり、仏陀の靴を磨くだけのことです。これでは何の意味もありません。仏陀は「仏陀になるべきであって、拝むのではない」と言いました。拜んでも構いませんが、まず仏陀が誰なのかを知らなければなりません。将来の自分の奥さんになる人の顔が分からないのに、どうやって毎日彼女を想うのでしょうか。

ですから、釈迦牟尼仏は「仏陀を信じながら、仏陀を知らない人は、仏陀を誹謗することである」と言いました。菩提達磨は涅槃経を唱える人見て、彼に「どうしてこれを唱えるのですか」と言いました。彼は「涅槃経を唱えれば、悟りを開くことができますし、仏陀にもなれます」と答えました。菩提達磨は「その經典を渡しなさい。人をもてあそぶものは、私が燃やし

てしまう」と言いました。いわゆる「絵に描いた餅で飢えは満たせない」とはこの意味です。というのは、經典の中には伝法のパワーがありませんし、法門ありません。經典は法門を紹介しているだけです。伝法の時、言語は使いません。「禪は言葉はいらない」というのはこの意味です。

例えば、今日私が観音法門を賞賛して、一時間以上観音法門のことを話しました。もし、誰かがこの観音のことを知っているとしたら、意味を知っていたら、計り知れない功德があります。私の言っている意味は、観音法門を修行すれば、計り知れない功德が得られると言うことです。帰って私の講義の録音テープを聞くことは福報がありますが、それだけでは究極の解脱をすることはできません。ですから、観音法門、観音、普門品を「持する（法を得る）」べきです。「持」するというのは、つまり法を得て、実際にそれを修行することです。

「戒律を唱える」ことは役に立ちませんが、「戒律を守る」ことこそ役に立つのです。五戒とは「殺生をしない。盗みをしてない。邪淫をしない。嘘をつかない。酒を飲まない」ことです。家でこの五戒を唱えるだけで役に立つのでしょうか。いえ、そうではありません。ほとんどの人が、自分は仏教徒であり、十人、十五人、五十人の和尚に帰依し、五十個の法名があり、さまざまな法名をもらったと自慢します。しかしながら、いまだに肉食をして、酒を飲んでいきます。殺生しないと言う意味がわかっていないからです。たとえ十五人の僧侶から戒律を受けて

も、帰ってからそれを守らなければ役に立ちません。なので、こんな帰依の証明書などは燃やしてしまった方が、比較的真実の人と言えるのです。さもなければ、それは人を騙すことであり、これは仏教徒とは言えません。

仏陀はとても慈悲深いので、人々がそのように遊んでいるのを見て笑っているかもしれない（笑い）。仏陀は「みんなは何をしているのでしょうか。五戒の意味も分かっていないのに、もて遊んだり、僧侶の所に行っているいろいろな法名をもらって、何に使うのでしょうか。」と言うかもしれません。わかりますか。ほとんどの人は戒律を受けた後でも肉食をしています。昨日私は肉食の問題について話しました。肉を食べる事は間接的に殺生することです。殺生を見て喜ぶのも殺生です。肉を食べる人がいなければ、殺生して肉を売る人もいなくなるでしょう。釈迦牟尼仏は楞嚴経の中ではつきりと「大慧、およそ殺生する人がいるというのは、人が肉を食べたいからです。もし人が肉を食べなければ、殺生することもないだろう。だから、肉を食べることと殺生することは同じ罪を犯しているのだ」（佛言・「大慧、凡殺生者、多為人食、人若不食、亦無殺事、故肉與殺同罪云云。」）と言いました。

Q この法門を修行するには条件がありますか。

M 昨日言いましたが、特に必要な条件はありません。どんな人でも修行できます。けれども、

戒律を守らなければなりません。戒律と言っても戒律ではありません。本来戒などありません。法律にも盗んではいけないとあるように、修行をするから盗みをしないと言うわけではありません。殺生をしない、は本来守るべきことです。孔子は「己れの欲せざる所、人に施すことなかれ」と言つて、彼も同じことを教えていました。中国では昔から言われていることであつて、修行始めてから知つたことではありません。

私たちは自分が殺されたくないのに、なぜ食べるために人に殺生させるのでしょうか。殺される時は大変苦しくて、動物も生きたいと思ひ、死を恐れます。このことを私たちはみなわかっているのに、どうして、動物の苦しみを楽しんでられるのでしょうか。私たちは動物の苦しみでもって、食欲を満たし、楽しんでいっているのです。もともと殺生すべきではありません。ですから殺生をしないことは戒律とは言えません。私たちの家族が死んだ時、その死体を食べるわけにはいきません。それなのに動物の死体を食べるなんて。

動物は本来非常に汚いのです。普段私たちはブタ、トリ、ウシ、ヒツジなどを抱いてキスしたり、一緒に寝たりすることは想像もできません。なのに、どうしてそれらの死体を私たちの高貴な口に入れて食べるのでしょうか。口は本来道徳のことを話すことに使ひに、高尚な詩や文学を学ぶために使うのです。なぜお墓の入り口になつてしまつたのでしょうか。私たちは自分の高貴な肉体を動物たちの死体の墓場にしてしまひましたのです。人は墓場では怖くて寝ら

れませんが、毎日自分のお腹の墓場を抱えて寝るのは怖くないのです。動物も生きたいと思いを貪り、死を恐れます。もし彼らが生きたいと思わず死を恐れなければ、まだ殺してもいいかもしれません。彼らは死にたくないのに、私たちは無理やり殺しています。これはあまりにも不公平なことです。

草木や野菜は話しはできません。しかし、智慧眼を開いたらわかりますが、それらはあなたが食べてくれるのを喜びます。彼らは「私はもう準備できましたので、摘み取って料理してください」と言います。けれども、動物は死にたくなく、殺されたくないのに、私たちは無理やり殺します。これはよくないことです。暴力を使ったことになります。人間は聡明で強いので、弱い小さな動物をつかまえて体を切り刻んでいます。これは君子の振る舞いと言えるのでしょうか。

みなさんは兵法のことを知っていますか。戦争の時、両方の勢力が大体同じでなければ、戦争になりません。もし弱い方が負けたら、それ以上殺さないことにしています。しかし、私たちは弱い小さい動物を殺すのです。動物は私たち人間より弱く、自分を守ることができません。人間を見たときに怖くて逃げるのに、私たちはまだ彼らを追いかけて行って殺すのです。魚は海で生活していて、私たち人間には何の危害も加えないのに、私たちは網で魚を捕ります。動物も山の中で生きていて、私たち人間には何の危害も加えないのに、私たちは狩りをして、

殺して家に持ち帰って食べてしまいます。これは本当に間違っていて、「道（タオ…真理）」に反することです。

野菜は生きたいと思ったり、死を恐れたりすることはありません。野菜にはそういう感覚がありません。九〇%以上水なので水分が多く、感覚の成分が少なく意識も少ないのです。動物の意識はとても強く、人間とかわりません。ですから、馬や犬はとても忠実で主人をよく知っていて、忠誠心があり、愛も持っていて人と同じ感覚を持っています。主人が死んだら、悲しくて物も食わず、数日後に主人の後を追って死ぬのです。犬や馬には本当にこのように忠誠心があります。

ですから、彼らを食べてはいけません。動物の意識と聡明さは人に近いので、私たちは無理やり殺してはいけません、また他人が殺した動物たちを喜んで食べたり、動物たちの苦しみを楽しんだりしてはいけません。何のために菩薩になるのでしょうか。苦しみから解脱すると同時に衆生を苦しみから救うためです。もし今現在、目の前で苦しんでいる衆生を救わないで、いつ彼らを救うのでしょうか。自分の目の前の苦しんでいる衆生を今、救わないで、いつ救うのですか。あなたが菩薩になるまで待つていたら、衆生はとつくにあなたに食べられてしまつて、救いを待っている衆生などいなくなります。（笑い）

ですから、菩薩になりたいのなら、慈悲の心を持たなければなりません。すべての衆生を家

族のように扱ってこそ、菩薩になれるのです。今、慈悲深い菩薩に学ばなければ、以後どうして西方浄土へ行けるのでしょうか。西方浄土は大功德、大慈悲の菩薩が住むところです。阿弥陀経には「小さな福報で西方浄土へ往生することはできません。修行には慈悲が最も重要です」と書いてあります。すべての宗教がこの点を強調しています。なのに慈悲の心なしで、どうやって西方浄土に往生できるのでしょうか。

私が小さい時、曼珠沙華の花を植えたことがあります。曼珠沙華に、花をたくさん咲かせた場合は、ある程度大きくなったら、花の芯を摘んでやると、花は大きく成長し、たくさん花をつけます。そうしないと、二、三輪の花しかつかないばかりか、枝も二、三本しか生えませぬ。しかし芯を摘むと大きくなり、太くなり、枝もたくさん生えて、花もたくさん咲かせます。そうでしょう。

その他、香菜も同じで、すべての野菜は一枚を摘むと、二枚、三枚、四枚と増えます。そうではないですか。ほとんどの野菜がこうです。ですから、みなさんが肉眼で見てもわかるように、私たちが食べれば食べるほど、野菜は喜んで大きく育ち、たくさん繁殖します。私たちが食べなければ野菜は伸び悩み、一つの株に一つしかできないので、それを食べてしまうと無くなります。みなさん、明日にでも家で、曼珠沙華を一株植えて芯を摘んでみてください。その後とても大きくなるでしょう。二株植えて一つは芯を摘んで、一つは芯を摘まないと、どんな

違いがあるのか発見できるでしょう。

ですから、野菜や草木は人に摘まれ、食べられるのを喜んでします。枝を一本切ると、間もなく新しい枝葉が出てきます。けれどもニワトリやウシを切り落とすと、引き続き成長することはありません。切り落とせば死んでしまいます。これは智慧眼が開いてなくても、肉眼でも見て分かることです。野菜や草木は人に食べられるのを喜ぶかどうか、動物は人に殺されることを喜ぶかがわかります。

観音法門を修行するには、毎日に二時間半「観音座禪（メデイテーション）」をしなければなりません。そうすると十分なパワーが得られ、カルマを洗浄でき、西方浄土へ行くことができます。私たちのあまりにもカルマは多く簡単に行けるわけではありません。一心不乱に仏陀を「念」しなければなりません。しかし、方法がわからなければ、いくら念じても心が乱れます。ですから、一心不乱になるには、二時間半メデイテーションしなければなりません。これこそ真の「念仏」です。

念は想念の「念」です。私たちは二時間半の間、真に仏陀を想念します。これが念仏であり、一心不乱に「念」じることです。なぜなら、メデイテーションの時、この世のすべてのものを忘れ、この二時間半は本当に身、口、意（体、言葉、考え）を仏陀に捧げるのです。一日は二十四時間がありますから、二時間半、仏陀に捧げる時間は一日の十分の一にすぎません。しか

し、多くの人はさまざまな口実を言うのです。私は忙しいから、私は在家者だから、夫、妻、子どもがいるから、私は仕事がありますからなどと言うのです。

観音法門を修行するには、二時間半、身、口、意を仏陀に捧げなければなりません。真の「私」で仏陀を想念するのです。ですから一心不乱に「念」仏できるのです。禅定に入った時に一心不乱になるのではなく、今すぐ誠心誠意に、毎日メデイテーションし、私たちの「心」を仏陀に捧げなければなりません。少なくとも一日に二時間半は必要です。これこそが本当の意味での一心不乱なのです。

禅定に入ることとは決して簡単なことではありません。まず最初は練習が必要です。そうしてある段階の禅定の境界（きょうがい）に達することができます。毎日、口で南無阿弥陀仏と唱えると、ある日突然一心不乱になるということはありません。これはあり得ないことです。仏陀を捧げる練習しなければなりません。「心」で念仏し、仏陀を想念して、毎日十分の一の間を仏陀に捧げること、このようにする事こそが、「念」仏することであり、こうして初めて一心不乱になれるのです。

これが観音法門の修行法です。つまり菜食して毎日二時間半メデイテーションをすることで。他は何もありません。メデイテーションする時は仏陀を「想念」しますが、「想念」するにも方法があります。どのように「想念」するのか、その方法を知らなければなりません。私が

みなさんに話していることは、やはり表面的なもので、ビスケットの形とか、コップの形について話したにすぎません。水はコップの中にあり、みなさんはまだ水を飲んでいなければ、まだビスケットも食べていません。



智慧眼の奥義

スプリームマスター チンハイ フォルモサ・澎湖

一九八七年二月十六日

釈迦牟尼仏はなぜ、「私たちすべての人には仏性がある」と言ったのか、今日私はこれについて話します。私たちはなぜ仏性を見つけれないのでしょう。また私たちは「仏陀は心の中にある」と聞いているのに、なぜ探し出せないのでしょうか。釈迦牟尼仏は「あらゆる衆生はみな仏陀である」と言いました。けれども、なぜ悪人もいれば、善人もいるのでしょうか。今日はこういうことについてお話しましょう。

二、三日前、私は浄土と穢土（えど…汚れている現実世界）の問題について話しましたが、みなさん覚えていますか。浄土と穢土との間にもう一つの世界があつて、それが両者を分けているのです。その世界はとても暗くて路（ミチ）もなく、光もありません。私たちは浄土とは阿弥陀仏の国土で悪い行いがなく、男、女も性別もなく、地獄もなく、悪いことはない、と聞いています。カトリックではこれを天国と言います。この天国を釈迦牟尼仏は仏性、または本

来の面目と言っています。イエス・キリストもこれを天国と言い、彼は「天国は私たちの内面にある」と言いました。それなのに、なぜ私たちには探し出せないのでしょうか。ある人の内面に天国があるとしたら、その人は善良であるはずで、そうでしょう。しかし、私たちが見ている人間は決してみな善良というわけではありません。そこで私たちはなぜそうなのかと思うのです。それは浄土と穢土が互いに繋がっていないからです。

宇宙の状況はこうです。三界以下は、人、天、阿修羅、地獄、餓鬼、畜生の世界です。三界以上は浄土で、仏陀の場所です。私たちはいつも「仏光常照（仏陀の光が常に照らす）」と言いますが、これは「無量光（無限の光）」という意味です。どこにでも光がありますが、どうして私たちのいる三界以下にはこの仏陀の光がなく、乱れた世界になっているのでしょうか。それは二つの世界の間は、真つ暗な世界によつて隔てられているためです。（章末図参照）それでは宇宙について話しましょう。みなさんは、宇宙は私たちの外にしかないと思つてはいけません。宇宙は私たちの内面にもあるのです。つまり、私たちは小宇宙なのです。外の宇宙の状況がすなわち私たちの内面の状況です。ですから、私たちの内面にも暗黒の場所があるのです。

頭のでっぺんから手足の間に、一カ所真つ暗な場所があります。その場所が私たちの智慧を妨げて通過させません。たとえ通過させても、正しくないものになってしまうのです。ですから、私たちの頭が良いことを考え、智慧も良いことを考えたとしても、行動すると悪い結果

になってしまふのです。この真つ暗な場所はまるで閉まっているドアのようです。ドアを開ければ智慧が湧き出てきます。そして、このドアをもう少し大きく開けたら、「仏陀の光」が見えます。仏陀の光とはすなわち私たちの智慧なのです。

ですから、ある人はこの場所（マスターは額の中央を指す）を、私たちの「智慧眼」または「第三の眼」または「仏眼」と言います。ただし気をつけなければならぬことは、ここにはドアが二つあることです。一つは三界以下の最高の場所に通じることができるドアで、仏教ではこれを「梵天」と言っています。このドアを開けると、いくらかの智慧と福報が得られます。もう一つのドアは三界より上の無量無辺の境界（きょうがい）に通じることができます。今私がお話している「智慧眼」は三界を超えることのできるドアを指しています。

ほとんどの人はこの二つのドアが閉ざされたままです。ある人は三界以下のドアが少し開いていて、もう少し大きく開けると、光や境界を見ることが出来ます。でも、それらはすべて三界以下の光と境界です。（二流に属します）観音法門を修行している人だけは智慧眼が開き、仏陀の光が常に照らすようになります。もしそのドアを完全に閉めてしまったら、仏陀の光が浄土から照らしても届きません。たとえ届いても真つ暗な世界によって黒く染まり、汚れてしまいます。ですから、額より下は穢土で、額より上は浄土または天国ということが出来ます。（章末図参照）何と呼んでも構いません。用語が違っただけです。けれども、観音法門を修行し

た人は智慧眼が開き、仏陀の光が常に照らすようになります。修行を続けければ続けるほど、私たちはますます自分の主人となるのです。智慧は二度と真つ暗な場所に染められることはなく、間違つた情報に変わることもありません。

ですから、浄土は浄土、穢土は穢土で互いに通じないのです。なぜなら、この真つ暗な壁で隔てられて、三界以下の人を外に出られないようにし、浄土とは何か、本当の天国とは何かと、いうことをわからせないようにするのです。三界以下はまるで監獄のようです。その真つ暗な世界は、外の自由な世界と牢獄を隔離し、越えることのできない高い壁なのです。

浄土と智慧は、私たちの体と関係があります。例えば、浄土は私たちの体の上の方、つまり脳にあり、ここ（マスターは智慧眼を指す）より下の方は穢土です。ですから、私たちは智慧のある人を「頭が良い」と言います。そうでしょう。頭脳は私たちの総司令部で、もし、頭脳が出す命令を伝達ができなければ、間違つたことをしてしまいます。それで私たちはよくこの人は頭が空っぽだ、または頭脳が明晰でないなどと言います。智慧眼から上の方は浄土であり、仏性であり、天国であり、三界以上の世界です。智慧眼から下の方は穢土で、三界以下であり、生死輪廻がある世界です。とても頭の良い人は、ここ（額を指して）が比較的広いです。額から下はすべて排泄の系統なのです。

もし、マスターの指導があれば、修行者はますます智慧を持ち、マスター指導がなければ、

間違った修行をする可能性があります。間違った「ドア」を開けてしまうからです。一人で修行する場合、神通力がつくこともあります。というのは、私たちの体にはたくさんの「チャクラ」があるからです。ここ（智慧眼を指して）は総司令部で、次はのど、心臓、丹田などの場所にあります。ある修行者は舌を巻き上げて上あごを支えるようにつけると、甘露水が得られると言っています。これは本当の甘露水ではありません。観音法門を修行した人なら、舌を動かさなくても本当の甘露水が得られるのです。もし、智慧眼より下の「チャクラ」で修行したなら、神通力はありませんが、これらはみな三界以下のもので、まだ、「成住壊空（発生、成長、破壊、消滅）」の段階から出ることはできません。ですから、智慧眼より下のチャクラをいくら修行しても、決して三界を超えることも、永遠の解脱をすることもできません。

三界を超える修行をしたいなら、まず智慧眼から修行を始めなくてははいけません。けれども、一番下のチャクラから徐々に一つずつ上のチャクラに修行する人もいますが、これでは実に遅すぎます。彼らは一生をかけて苦労して、やっと上にはい上がるのです。私たちのシステムは智慧眼から修行を始めます。昔のインドのヨギは時間がたつぷりあったので、修行したいものは何でも修行しました。現在、私たちにはそんな多くの時間はありません。修行しながら、お金を稼いで家族を養わなくてはなりません。年老いた牛に車を引かせるような修行方法では、まだ上に達しないうちに死んでしまうことでしょう。ですから、修行したいなら、良いシステ

ムを見つけないければいけません。

マスターの指導がなく、自分で修行したら、どこかのチャクラが開くことがあります。例えば丹田が開いたとすると、その結果、体が熱くなったり、短気な性格に変わったり、性欲がとも強くなったりします。どこかチャクラが開いたら、自分で閉じることはできません。いわゆる魔がそのチャクラに進入して、体を占領してしまいます。私たちが自分でそのチャクラを保護することができないからです。ですから、修行は必ず保護してくれる法門でなければいけません。本当のマスターの加護があつて初めて安全なのです。

たくさんの人が私に「修行をする前は、別に何の魔障もなかったのに、修行後は、すればするほど魔の障害があり、たくさんの靈魂が入り込んだような感じで、それで困っている」と言います。これは、むやみにチャクラを開いたからか、または彼らの先生のパワーが足りないからです。修行するとチャクラは自然に開きます。例えばあなたがこのようにメデイーションをすれば、どこかのチャクラが開きます。呼吸をコントロールする修行をする時、ちよつとした不注意で、体の熱い場所（丹田）にふれて、気が荒くなったり、怒りつぽくなったり、男女関係を非常に好むようになつたりして、自分でコントロールできなくなります。

西方浄土と私たちは互いに関係があります。私たち自身が一つの小宇宙であり、その外は大宇宙です。智慧眼より上は浄土で、それより下は三界以下の穢土です。智慧がここ（マスター

は額を指して)にあるので私たちが何を思っても、何をしても、頭脳を使わなくてはなりません。何か物事がわからないとき、眉をひそめますね。例えば、この人どこかで会ったことがあるけれど一体どこだったのか。懸命に思い出そうとするときなどは、眉をひそめてしまおうでしょう。こんなとき、私たちは思いを第三の眼(すなわち智慧眼)に集中させているのです。こうすれば早く問題が解決できるからです。ここが智慧のある場所なのです。ですから、ここを智慧眼と言ったり、第三の眼、法眼、仏眼、菩薩眼などと言ったりします。

釈迦牟尼仏の額の中央にもこの眼がありますね。それは彼の智慧眼が開いているからです。私たち凡人は修行をしなかったり、マスターの手助けがなかったりすると、この智慧眼は閉じたままです。この閉じている場所は、さっき私が話した宇宙の真つ暗な世界と関係あるのです。この壁の役割は浄土と穢土を分け隔て、浄土の無限の光が下の世界を照らさないようにすることです。けれども、いったんその智慧眼が開けば、この無限の光(つまり仏陀の光)は何の障害もなく下を照らせるのです。それはまるでふさがれていた道が再び通れるようになったのと同じです。もともと道があったのに、障害があつてしばらく通ることができなかったようなものです。

智慧眼が開けば、智慧は上から下の手足まで体の全体に直接行き届くようになります。そうなれば、私たちは何をしても非常に正しく、はつきりと物事がわかるようになります。それは

智慧と体全体がつながって何の障害もないからです。

ですから、この智慧のチャクラを修行することは最高です。他のチャクラはすべて排泄のシステムで、目は涙と目やにを出し、鼻は鼻くそや鼻水を、耳は耳垢を、口は唾液や痰を、肛門は排泄汚物をと、下に行けば行くほどに惨めですね。私たちの体にある九つの穴はすべて汚物を出すのです。それは成住壊空（発生、成長、破壊、消滅）と同じく排泄システムだからです。ですから、こういった排泄システムのチャクラを修行することは安全ではなく、しかも、永遠のものではありません。

今、私は大まかにお話したのですが、法を伝えるときはもつと詳しく説明をします。どんな世界にどんな状況があるのかをすべて説明します。今はこの法門を公開することができません。公開しても何の役にも立たないからです。みなさんが帰ってから自分で勝手に試したりすると、魔に取りつかれてしまうからです。法を伝えるときははっきりと伝えるべきです。まず、身、口、意（体、言葉、考え）をきれいにして準備したら、私は法を伝えることができます。これはみなさんよく知っていると思います。今はこれ以上話せません。さつきは少しだけ話して聞かせただけです。

頭のいい人は前世でたくさん修行をしたので、現在でもその一部分が少し残っていて、智慧のチャクラが完全に閉じてなく、まだ少し開いているのです。それで頭がよく、道德的なので

す。前世で修行のレベルがもつと高かったら、この智慧眼はさらに開いています。智慧眼で、人のどこが開いていて、どこが閉じているかを見ることができません。たとえ智慧眼が完全に閉じていたとしても問題ありません。ただ、真のマスターを探し出せば、マスターが私たちの智慧眼を開いてくれます。とても早いです。まるで鍵穴に鍵を入れるように、一回廻せば開くのと同じです。鍵さえあれば問題はありません。

ですから昔から今まで、西洋でも東洋でも修行者は在世のマスターのことを尊敬しています。今、私たちが過去のマスターを礼拝するのは、彼らを尊敬し崇拝しているからです。そして、いつか自分たちも釈迦牟尼仏のようになりたいと願っているのです。けれども、釈迦牟尼仏はすでにこの世を去っていて、私たちの智慧眼を開くことができません。釈迦牟尼仏はすでにその鍵を在世のマスターに渡しています。ですから、智慧眼を開きたいなら、往生したマスターではなく、在世のマスターを探さなければなりません。そうして初めて、私たちの智慧眼を開けてもらうことができるのです。

浄土と穢土の間は連結がありません。繋がりを求めるなら、この鍵を誰かに浄土から穢土に持って来てもらわなくてはなりません。なぜなら、この鍵は浄土から直接落ちて来るものではないからです。たとえ落ちて来たとしても、前に話したように宇宙のあの暗黒世界で無くなってしまう。仏陀の光がそこで消えてしまうのと同じようにです。もし、智慧眼が開いてい

なかったら、私たちの智慧は両手両足に達しようがなく、自分の心をコントロールすることもできません。ですから、時には怒りたくもないのに怒ったり、何かをうまくやろうとしても、できなかつたりするのです。この原因は真の智慧が真つ暗な世界に邪魔されているからです。

同じように、純粋な仏陀の光をこの娑婆世界に持つて来たいと思うなら、保護する道具を使わなければなりません。例えば電線と同じように、電線がなかったら電気はここまで来ません。電気は存在していても私たちはつかむことができません。道具を使って初めて電気を保持できます。また、山から流れ出た水は、水道管で保護しなかったら、汚れて飲めなくなります。ですから在世のマスターは、水道管と同じように水源から安全に私たちの家まできれいで純粋な水を運んでくれるのです。

私たちはこの智慧眼（仏眼、法眼）が開くと仏陀になり、「花が開いて仏陀を見る」、または「本性を見て、仏陀になる」と言うのです。実際これはとても簡単なことで、何も複雑なことではありません。けれども、ほとんどの人は信じくれず、「そんなに簡単に仏陀になれるのだろうか」と思うのです。それは簡単なことです。釈迦牟尼仏は『仏陀は心の中にある』と言っているではないですか。仏陀が心の中にあるなら、すぐに見つけられるはずです。「仏陀は心の中にある」とは、ポケットの中にお金が入っているのと同じようなもので、そのポケットがどこにあるのかわかれば、すぐお金が入ります。仏陀が心の中にあることも同じように、心が

どこにあるのかがわかれば、すぐに仏陀を見つけることができるのです。

イエス・キリストも「天国は私たちの中にある」と言いました。もし、この話が間違っているのなら、彼らは嘘をついたことになりす。それはありえませんが、彼らは今日に至るまで最も偉大なマスターです。もし彼らが嘘をついたとしたら、私たちは今なお彼らを崇拜することはないでしょう。釈迦牟尼仏、キリスト、それに老子は最も有名な大師ですね。二、三千年経っているにもかかわらず、今なお有名で、ますます多くの人々が彼らを信じて崇拜しています。

これは彼らの教理が正しいということを確かに表しています。すべての人がみな愚かであるわけではありません。修行者もいれば悟りを開いた人もいます。彼らは釈迦牟尼仏やイエス・キリストの話した道理が正しいかどうかを理解しています。もし間違っているとすれば、何らかの反応があるでしょう。けれども二千年以上経った今でも、どんな人でもどんな修行者も、大人も子どもも、みな彼らを崇拜しています。これは、彼らの言ったことがすべて正しいということを表しています。

講義の最初に、私はなぜある人は聡明である人は愚かで、ある人は善良で、ある人はあんなにも凶悪なのかについて話しました。それは智慧のドアが開いているかないかに関係があります。浄土と穢土との間が繋がっているかどうかと関係があるのです。ある人は「どうして修行しなければいけないのですか」と聞きます。それは私たち人間が小宇宙であり、大宇宙と関

係しているからです。もし私たちの小宇宙が安全ではなく、大変乱れていたら、その外も同様です。私たち小宇宙が大宇宙と通じ合って一体となれば、私たちは調和がとれるでしょう。これは仏教でいう「一切唯心造(すべては心が造りだす)」です。イエス・キリストは「I and my Father are One」(私と父は一体である)と言っています。老子も「一」のレベルについて話しています。(道德經第三十九章：昔之得一者，天得一以清，地得一以寧，神得一以靈，谷得一以盈，萬物得一以生，侯王得一以為天下貞)《昔一を得た者は、天は一を得て清らかに、地は一を得て穏やかに、神は一を得て靈的になり、谷は一を得て満ち、万物は一を得て生をなし、諸侯、王は一を得て世界の主となる》

ですから修行とは、私たちが自分の小宇宙を整え、それを自分自身の主人にすることです。よくこのようなことがあります。怒りたくなくてもどうしようもなく、自分の口をコントロールできず、穏やかに言いたくても、かえって相手を傷つけたり、耳障りに思わせてしまったりすることです。また殴りたくないと思っても、智慧の反応よりも殴る動作の方が早いのです。智慧は人を殴ってはいけなないと叫んでいても、智慧がその真つ暗な壁を通るときに殴ってしまい、暴れてしまいます。それで私たちは自分をコントロールできなくなり、自分の主導権を失ってしまうのです。

私たちが自分をコントロールできなければ、外の世界も乱れます。自分をコントロールでき

れば、世界も平和になるでしょう。「一切唯心造（すべては心が造りだす）」というのは、まさにこの意味なのです。

ですから、私たちはよく「心浄則國土浄（心がきれいなら、国土もきれいである）」と言います。夫をコントロールすれば、家庭が平和になるというわけではありません。奥さんに暴力をふるったり、強要したりすれば、家庭が平和になるわけでもありません。平和を手に入れたいなら、まず自分が変わらなければなりません。そうすれば奥さんも変わるでしょう。たとえ奥さんが変わらなくても、私たちの心は安定した状態でいられます。イエス・キリストはかつて言いました。「右の頬を打たれたら、左の頬も向けよ」と。その時、心は恨みもなく、相手を打ち返す気もないからです。心はいつも喜びに満ちているので、少したたかれたり叱られたりしても、何も悲しくありません。

同様に修行をする前は、一発殴られたら、すぐに何発も殴り返したりしても、修行してから殴られたら、こつちも殴ってください、両方殴られた方がバランスがとれますと言うでしょう。同じ殴られる場合でも心境が違うのです。それは決して私たちがこの世界を変えたということではなく、私たちの心が安らかになったからです。世俗的なことに捕らわれなくなるので、影響されなくなります。私たちは絶対的に自分自身の主人であり、怒りたければ怒り、怒りたくなければ怒らないのです。六根六塵（ろっこん：眼・耳・鼻・舌・身・意識、ろくじん：色・

声・香・味・触・法）に左右されることもなく、また真つ暗な世界にコントロールされること
もありません。私たちは自分で自分をコントロールして、したいことをするのです。

ですから六祖慧能は、浄土はそれほど遠いものではなく、西方浄土は遠くないと言いました。
西方浄土はここ（マスターは智慧眼を指して）にあるのです。私たちが良い法門を修行すれば、
体験が得られます。あらゆる境界（きょうがい）がすべてここ（マスターは智慧眼を指して）
にあります。決して高い所に上ったり、空を飛んだりすることで、極楽世界に到達することで
はありません。実際、私たちには行かなければならない場所など存在しません。ですから「心
浄則國土浄（心がきれいなら、国土もきれいである）」というのです。それはこの小宇宙と大宇
宙は関係があるからです。老子は「修行者は門を出なくても、世界に何が起きているのかわか
る」（道徳経第四十七章：不出戸，知天下）と言いました。修行をすると小宇宙と大宇宙が繋
がるからです。だからどんな所もみなわかり、彼がいない場所はないのです。

ですから、仏陀になった人を、私たちは「如来」と呼びます。如来とは来もしないし、行き
もしないが、ここにいながらどこにでもいるのです。その時、私たちはその人を「仏陀」にな
った、または「如来」になったと言います。釈迦牟尼仏だけが如来になったわけではありません。
現在の人々も、私たちも如来になることができますのです。私は聞いた話をするではありません
ん。私個人の体験から話しているのです。ですから保証できるのです。

真の如来の状況というのは、こういうことです。例えばここに「道」を得た人が座っていたとします。しかし他の人も別の場所で、彼が法を伝えていているのを見たり、天国で人に教えているのを見たりするのです。ですから、私たちは仏陀を「天人導師（天と人の師）」であり、「四生慈父（四生（胎生・卵生・湿生・化生）生物すべて）の父である」というのはこの意味です。たとえば浄土でもその人に会えるし、突然思い付きで地獄を見に行っただとしても、そこでまたその人に会うこともあります。なぜなら、「如来」なので、どこでも見ることができます。彼は来ることもなく、行くこともないのです。その場合はこの肉体ではありません。法界と一体になり、法界の真体になり、法界と同じで空間や時間は彼と衆生を隔てることはできません。彼は衆生と一体になったので、衆生はどこでも彼を見ることができのです。けれども、彼は衆生ではありません。

西方浄土の境界（きょうがい）と三界以下が繋がらなければ、三界以下は大混乱になるでしょう。同様に、私たちの上の智慧が額から下の部分と通じ合わなければ混乱が生じます。たとえば、家に主人もいなく、電話も通じないのと同じです。この時、たとえと使用人が家にも、彼らは聡明でなく、いつも主人の指示や命令で仕事をしていたため、突然主人が留守で、電話も通じない、手紙も書けない事態になると、彼らはパニックになって、何一つきちっとできないのと同じです。

私はある人たちから聞いたのですが、メデイテーションをしてサマデイーに入った時に、世界を回遊して、アメリカがどんなだったか、世界の混乱状態がどんなだったか、と見に行ったら聞きましたが、これは普通の体外離脱です。如来ではありません。英語でアストラルプロジェクトエクシオンと言い、「如来」とは関係ありません。全く違います。

今、私が簡単な図で表しましょう。(章末、図三を参照) 例えばこれが人間だとすれば、外側は何層もの体で覆われています。一番内側が私たちの本来の面目であり、私たちの主人、または真体、仏性、天国、靈魂など何と呼んでも構いません。私たちの仏性は、一番内側に縛られていて出て来られません。体外離脱で出ることができませんが、これは、仏性を得たことではなく、アストラル体(この内面には、また何層かの体と真体がある)を使って出て行き、肉体を残しているだけにすぎません。この一層一層の体は全部で七層あり、キリスト教では「七重大」といわれ、イスラム教でも似たようなことを言っていますが、これはいずれも、私たちの体と関係があります。

ですから、これはまだ如来ではなく、まだ仏性でもないのです。仏性を使ったのなら、どこにも行く必要はなく、ここにいるだけで起きることがすべてがわかるのです。食事をしていても、寝ていても、道を歩いていても、話をしていてもすべてがわかるのです。どこの場所にも存在しているのです。例えば、私は今ここで話をしていますが、ある人は台北にいる人がメ

デイトーションをしていて、またはしていないかもしれませんが。（これは個人の修行のレベルによって決まります）その人は、私がどこにいるのか、わかります。また助けを求めると、私の化身がその人を助けに行きます。これは体外離脱の状況と同じではありません。なぜなら、体外離脱するには、肉体だけを残し、必ず体の各層を全部持って、色々な所に行き、帰って来たら、再び元の肉体に入ります。これは、壁に掛けた服を着たり、門を開けて帰って来ると同じで、この家や建物はまだそこにあって、出発の時に荷物を持って出て行き、遊び終わって帰ってくる時に、荷物やお金をすべて持って帰って来るのと同じです。

けれども、これは如来とは違います。如来はメデイトーションをしたときだけ、出て来るのではありません。如来ですから、どこにでも存在しているのです。ですから道を歩いたり、食事をしたり、寝たり、話をしたり、講義をしたり、普通の行動をしています。同時にどこにも存在し、あらゆる物事を解決することができ、衆生を助け、修行仲間の手助けなどもするのです。

これは普門品（ふもんぼん：観音経のこと）にも述べられています。さて、「普」とは何でしょう。「普遍」は広く行き渡ること、「普渡」は広く救うことであり、どの場所にもあるという意味です。「門」とは法門です。釈迦牟尼仏が言っている意味は、観音法門を修行すると、どの場所も知り、あらゆる場所に存在するということです。ですから、「如来」となり、自分自身

もこの普門となり、観音菩薩になるのです。どこでも衆生が何を求めようと、すべてわかって、すぐにその人を助けに行けます。何が起きても、みんな聞こえて、みんな見えるのです。これは自分の智慧眼を使って見るのです。天耳通や天眼通と混同してはいけません。天耳通や天眼通は普門ではなく、如来のレベルではありません。「如来」は如来心、仏心の知覚によって全てのことを知ります。だから「普」というのです。観音法門を修行すれば私たちも観音菩薩になれるのです。ですから、この門を普門というのです。

「普門」とは衆生を広く救う法門であり、観音菩薩になる方法を教えるものです。ただし、それは紹介だけであって、法門については触れていません。もし、観音菩薩の名前に含まれる本当の意味がわかれば、私たちも観音菩薩になれるのです。私たちはいつも観音菩薩を唱えています、それは観音様の名前ではありません。観音菩薩の名前は、特殊な聴力を使って、初めて聞きこえるのです。「名可名、非常名（その名は凡人の言葉で表すような名ではない）」ということなので、普通の言語で言えるような名ではありません。本当の名前は観音菩薩ではありません。観音法門の修行を積んでこそわかるもので、言葉で話したり、書いたりできるものはすべて本当の名前ではないのです。

昔から今に至るまで、マスターはみな同じことを言っています。ですから、私たちは言葉上で論争する必要はありません。私たちは自分の身を正し、良い人となり、マスターたちの教理

を学べば良いのです。どちらの「道」がより優れているかを言い争う必要はありません。「道」が何であるかも分かっていないのだから、どの宗派が良いかを論争する必要はありません。どの宗派がよいか分からないのですから。「道可道、非常道（道は道でも普通の道ではない）」この「道」を見つけたら、初めて言うことができます。まだ見つかっていない時は、みな無明の人にすぎず、当てずっぽうに言い、口が災いしてカルマを造るだけです。「道」を見つけたら、どの道が良くないかはつきりとわかるので、分かっている内は何も言わないのが一番良いでしょう。老子は「知道的人不講、講的人不知道（わかっている人は言わない。言う人はわかっていない）」（道徳経第五十六章）と言いました。

ですから、ある論争の好きで、弁論好きで、「道」はこうであるべきだと言ったりする人がいたら、その人はまだ「道」のことを分かっていることを示しています。「道」は話せるものではありません。法を伝える時、私も何も言いません。今、みなさんにお話しているのは、法を伝えているわけではありません。法門の紹介だけです。内面の状況を少し紹介しただけで、これは体験ではありません。体験は私個人のことです。私自身だけが知っていて、みなさんには分かりません。

「道可道、非常道。名可名、非常名（道は道でも普通の道ではない。名は名でも普通の名ではない）」なので、このことから観音菩薩は本当の名前ではないとわかります。観音菩薩の本当

の名前は非常に美しく「勝彼世間音（世間の音に勝る音）」です。とても美しい音です。その「勝彼世間音（世間の音に勝る音）」は、とても私たち凡人の耳では聞こえません。ですから、普門品は普門「法」ではないのです。普門「法」は伝える人がいて初めてわかりますが、普門品は普門法の体験を紹介しているだけなのです。

今日ある人が私に、阿弥陀経を読んだと言いました。そこには西方浄土の境界（きょうがい）が描かれていて、土は黄金で、木の葉は宝石で、また小鳥が歌を歌い、八功德水、蓮の花などがあつたと話しました。彼はそんな境界（きょうがい）は自分にとっては何の意味もなく、そこには行きたくないと言いました。私も同感です。阿弥陀仏の国を見て、これ位のものかと分かれれば、私だってそこには行きたいと思わないでしょう。地面が黄金だろうが泥土だろうが、私には関係ありません。私は金や宝石は欲しくありません。この世界でも欲しくないのに、浄土にまで行って欲しがることはありません。ですから、私たちが浄土に行くのは決して宝石が欲しくて、または美しい境界を求めるからではありません。これは釈迦牟尼仏が、衆生が後にそこに行ったら、分かるようにと、浄土を紹介したにすぎません。私たちは決してそのこの境界（きょうがい）に執着して修行しているではありません。

修行をして西方浄土に行くと、私たちは幸せになり、自分にとっても、世界にとっても役に立つ人になります。そして、衆生を苦しみから救う大きなパワーを持つでしょう。観音菩薩や

大勢至菩薩や無量光の阿弥陀仏になります。ですから、私たちはそのようなレベルになるように修行しなければなりません。決して西方浄土の美しいものを求めて修行するものではありません。もちろん仏陀の国土はどれも荘厳で、西方極楽世界では泥土や藁ぶきの宮殿などありません。(笑い) 私たちがいる所は、まるで汚い野菜市場のようなものですが、そこは非常に荘厳で、美しく、清潔で、靈妙で、光り輝き、素晴らしいものがたくさんあります。

釈迦牟尼仏も話しましたが、それでもまだ描写が足りません。凡人の言葉でどうやって浄土を語れるでしょう。けれども、ほんの少し話すことで、人々に多少理解してもらうことはできます。実はこれは釈迦牟尼仏が話したのではなく、その弟子が座禅をした時に体験したものです。釈迦牟尼仏が弟子を連れて浄土に行き見たものを、その弟子が帰って来てから書いたのです。阿弥陀経は釈迦牟尼仏がこの娑婆世界で話したものではありません。

「観無量寿仏経」を読めばわかります。韋提希(いだいけ)皇后が西方浄土を見たのは、釈迦牟尼仏が化身で彼女を連れて上がったからです。私たち修行者はメデイーションをしている時に、意識が高い境界(きょうがい)に達して初めて、体験できることを知っています。これは凡人のレベルではありません。韋提希皇后は修行してすでに高いレベルだったので、仏陀の化身と一緒に高い境界まで行くことができました。戻った後でこの体験を書いたのです。ある人はこれを仏陀が肉体で牢屋に現れて教えたたと説明していますが、この説は論理にならな

ていません。なぜなら第一に仏陀には何千億の化身があり、肉体を使って行く必要がないからです。第二に仏陀の弟子はとも多いので、一人のために自らそこへ行く暇がないからです。

先ほど、私は「如来」のレベルはどこにでも存在すると言いましたが、それはこういう意味です。私たちが誠心誠意であるなら、化身のマスター（如来）を見ることができ、この時化身のマスターは、私たちの修行レベルに応じて、それにふさわしい境界に連れて行くのです。阿彌陀経も同じことで、仏陀の弟子が浄土に行つて戻つて来た後、その体験を書いたもので、一種の修行日記です。

例えば、私が法を伝える時、みなさんはどんな体験があつたか、どんな境界を見たかを書かせます。法を伝える時は、個人的な体験ですから、みなさんはこんなふうに書くでしょう。何月何日、スプリームマスター チンハイが観音法門、浄土法門を伝授してくださいと書くと、阿彌陀仏や、浄土の境界（きょうがい）や、七宝池や、八功德水などを見たときと書くでしょう。後に、観音法門を修行していない人がこれを読んだとしても、その人にとつては、こうした体験は全く意味がありません。なぜなら、「八功德水」と書いた言葉だけでは理解できないからです。八功德水とは非常に美しく美しいもので、浄土を見るのは最も幸せな時です。普通の人には浄土のものを見ることはできません。浄土を見ることができたというのは私たちのレベルがすでに非常に高くなったことを表し、すでに不退菩薩となり、自分にとつても衆生にとつても、大變利益が

あることを示します。この時は大きなパワーを備えているので、人を救うのはとても簡単です。ですから、浄土は追い求めて行ける所ではありません。浄土に行けるのは、私たちが菩薩になった証です。この菩薩の境界こそ私たちが求めるべきものです。菩薩のレベルを獲得すると、当然莊嚴な場所に住みます。例えば大学を卒業して医者になったら、以前のように小さくて暗い家に住むわけにはいきません。医者になったからには、比較的良く、清潔な場所に住むのは当たり前のことで身分相応です。ただ、医者は衆生や患者のために医学の勉強をしたのであり、この見栄えの良い家のために勉強したわけではありません。医者になってから良い家に住むのはごく自然なことです。

例えば、私が法を伝えた時、西方浄土の妙なる境界（きようがい）を見て、それを書き記した人がいたとします。しかし、他の人がそれを読んでも何も感じません。その人が見た時とは、状況は全く違うのです。彼の心の状態はまるで違い、レベルも違うのです。彼はとても心地がよく、幸せと安らぎを覚え、智慧が大きく開いたのです。これこそが最も重要なことです。見たことが重要なではありません。その人が浄土を見たことによって感じたことなどは、他人にはわかりませんし、理解もできません。どうしてその人にとつて、見た境界がそんなに重要だというのでしょうか。というのは、彼がそれによって変わったからです。西方浄土を見た時はとても幸せで、今までの自分とは全く違って、大きなパワーや神通力や大きな智慧を得たからで

す。私たちはただ人の体験日記を読んだだけです。何の意味もないと感じ、西方極楽世界の記録を見ても何とも感じません。それは私たち自身がそのレベルを体験したことがないからです。

例えば印心を受けた時に、観音菩薩を見た人がいたとします。しかし、他の人は「観音菩薩なんかを見たくない」と言うかもしれません。そういう人にとっては観音菩薩を見ることは何の意味もないことです。しかし観音菩薩を見た人にとっては、観音菩薩だけが見えたのではありません。その他にも観音菩薩が住んでいるきれいな所、美しい宮殿なども見えたのです。そして、体も意識も変わったのです。この状態は言葉では表現できません。観音菩薩を見たから素晴らしいというのではなく、観音菩薩を見た時、体全体と意識が全部変わって智慧も開き、自分の内面にある変化が起きたのです。これこそが最も喜ばしいことなのです。

智慧が開いたのでとてもうれしいのです。花が開いて仏陀を見て、無生を悟ったのでとてもうれしいのです。仏陀を見た時は、まさに「無生」です。「無生」とは生も死もなく、つまり生死輪廻をしないという意味です。仏性を見て、仏陀になることも同じです。私たちは仏性を見たいためではなく、仏陀になりたいのです。どうして仏陀になりたいのでしょうか。それは智慧とパワーがあれば、苦しむ衆生を助けることができるからです。もともと私たちもその一人だったので、そういう苦しみがどんなものが理解できます。もし、私たちが苦しむ衆生を

助けるパワーがあつたら、なんてうれいことでしょう。それが私たちの責任であると感じるのです。こういう正しい考え方があつてこそ、初めて仏陀になることができます。だから、仏陀や菩薩を見て、仏陀に従つて学ばなければならぬのです。

私たちは決して浄土の美しき、仏陀のレベル、神通力、パワー、智慧を追い求めて仏陀になりたいではありません。私たちは宇宙の良き市民の一人、良き道具となつて、この大宇宙と小宇宙が一体となつて平和になることを助けるのです。なぜなら、私たちが見るこの世界は現在非常に乱れていて、互いに殺し合ひをしています。人類は本来この世界では最も高貴な存在でなければいけないのですが、ほとんどの人々は飲食や遊樂に時間を費やし、毎日働き、ご飯を食べて眠り、また眠つてご飯を食べて働き、そして死にます。これでは何の意味があるのでしようか。

実際、生活もそう簡単ではありません。ほとんどの人の生活は、苦しく、言い争い、競争に満ちています。夫や妻が不仲の人もいれば、破産した人、殺された人、告訴された人もいます。誰も生、老、病、死から逃れることはできません。これは決して生易いことではありません。一生涯飲み食いして遊んで、最後になつて氣楽に死んで行くことはありえません。もしそうであれば、それに勝つことはありません。解脱したいとも思わないでしょう。実際は生、老、病、死が私たちを支配していて、人間の生活は動物の生活とほとんど大差ありません。動物も食べ

て、寝て、子育てをしています。私たちは動物より聡明ですが、私たち自身の智慧を完全には使っていません。ですから、動物と大差ないのです。実に残念なことです。百年の時間をまったく無駄にしているのです。

もし、この百年の時間をうまく使って修行するのであれば大菩薩になれます。宇宙全体が私たちのものになり、したいことは何でもでき、助けたい人を助けられます。飛行機のチケットなしで行きたい所へ行けます。もちろん、この肉体で移動するならチケットは必要です。例えば、仮に私に空を飛ぶ神通力があって、こちらに飛んで来てみなさんに会ったり、他の場所へ飛んで行って修行仲間（マスターの弟子）に会いに行ったりすることができるとしたら、私は今日まで生きていられなかったと思います。なぜなら、人は私を鳥に間違えて、銃で撃って食べってしまったかもしれません。（笑い）

ですから、神通力は大して役に立ちません。神通力を使わなくても行けるのです。この肉体はここに居るけれども、化身はどんな場所にもいるのです。ですから、釈迦牟尼仏は何千億の化身があるというのです。如来と同じです。孫悟空のように毛を一本抜いて息を吹きかけ、大勢の孫悟空が現れるようなものとは違います。それは何千億の化身ではなく、人を騙す神通力です。なぜなら、頭の毛一本、あるいは猿の毛を一本使って化けた孫悟空は、二、三分もすれば消えてしまって元の毛髪になってしまいます。ですから、これは何千億の化身ではありません

ん。ぜひとも混同しないようにしてください。

何千億の化身とは、行きもしないし、来もしないのです。ここに居るけれども、どこにもいるのです。あらゆることを知っていて、特に何かする必要はなく、毎日食事したり、眠り、話をしたり、普通の人と全く同じです。みなさんは孫悟空になりたいですか。それとも、釈迦牟尼仏になりたいですか。当然、釈迦牟尼仏になることが究極です。それこそが永遠なのです。孫悟空はやはりこの三界以下にいて、まだ如来仏の手のひらから出られないのです。

けれども、仏陀になったからといって、食事や睡眠を取る必要がないわけではありません。仏陀の外見は凡人と同じで、食事もし、睡眠も取り、仕事もします。けれども、食事をする時も、睡眠を取る時も、衆生を助けているのです。メデイテーションする時も、話をする時も衆生を助けているのです。私たちが食べたり、寝たりする時は誰の利益にもなっていません。自分にさえたいて利益になっていないかもしれせん。ましてや他人の利益になることはありません。

ですから、仏陀になっても見かけは衆生と同じですが、実際は違うのです。仏陀は食事や、睡眠や、仕事をしていても、同時に無形の仕事をたくさんしています。私たちには見えないのです。私たちが食事をしたり、睡眠を取ったり、話をしたりするのは、ただ食事をして、眠って、話をしているだけで、それ以外には何もありません。私たちがここに居る時は、何千

億の化身になることも、如来のように自在に行き来することも、観音菩薩になることも、衆生を救うこともできません。ですから衆生と菩薩とは大きな違いがあるのです。そうでなければ、何の違いもないはずです。どんな衆生でもみな如来になることができます。ただし、鍵がある場所を知って、ドアを開けて修行に精進すれば、同じく成就することができます。釈迦牟尼仏は六年修行し、慧能は十六年修行して仏陀になりました。私たちもなれます。

釈迦牟尼仏は「どんな衆生にも仏性がある」と言いました。その意味は、動物にも仏性があるということですが、どうして動物は仏陀になれず、人間だけが仏陀になれるのでしょうか。それは人間には「意識」と「潜在意識」があつて、判断する能力があるからです。高いレベルの判断力と智慧を持っているからです。動物も判断ができますが、ただ、あそこが危険だとか、どこに行けば食べ物や水があるのか、くらしいのものです。動物の嗅覚は人間より敏感ですが、道徳、悪い行い、善悪を判断できません。けれども人間には判断できます。私たちは天国に行くか、地獄に行くか、あるいはこの娑婆世界に留まるのかを選択できます。けれども、人によって智慧が違つたので、天国に行くことを選択したくても結局地獄に行つてしまつたり、解脱を選択しようとしても、結局間違つてしまつたりして生死輪廻することになります。

ですから、もし自分でよく分からなければ、善知識（真理が分かっている人）を探して指導を受けなければなりません。ただし指導を受けるのも初めのうちだけで、その後は自分で歩き、

自分が善知識、マスターにならないければなりません。なぜなら、私たちはみな自分自身のマスターだからです。これはどんな人でも医者になれるのと同じで、医師に従って学ぶと医者になれるのです。

仏陀も同じです。ですから、釈迦牟尼仏は「あらゆる衆生には、すべて仏性がある」と言いました。私たち人間はこの一世で仏陀になれます。釈迦牟尼仏はうそをつきません。これは本当のことなのです。私は十分な個人的経験から、仏陀が言っていることは真実だと保証します。もし、この一世で仏陀になれなくても、少なくとも菩薩になれます。必ず大菩薩摩訶薩になれることを保証します。

Q もし、ある人が修行して仏陀になったとしたら、その仏陀は釈迦牟尼仏と同一の仏陀ですか、それとも違う仏陀ですか。

M 彼らのレベルは同じですが、同一ではありません。しかしながら、二つでもありません。

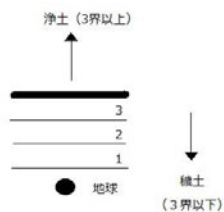
Q 印心を受けていない人、修行もしていない人は、そのような奇妙な音を聞くことがありますか。もし、似たような境界（きょうがい）を見たとなると、それが本物か偽物かをどうやって見分けるのですか。

M 修行していない人でも音が聞こえることがあります。それは本物の音ではありません。いつでも聞こえるのでもありません。またそれがどんな境界を表しているのかもわかりません。けれども、私たちの法門は完璧な法門で、本物と偽物を見分けることができ、保護のパワーがあり、魔に取りつかれて困惑するようなことはありません。修行すればするほど境界が高くなるのです。

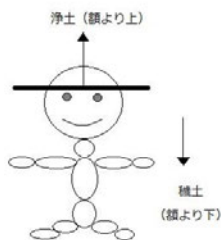
観音法門の修行者はいつでも内在の音があり、境界も見えます。今日は見えて、明日は見えなくなるのではありません。それが続かないということは、それは本物の境界ではありません。本物の境界というのは、今日は見えて、明日もまた見えるのです。例えば、このお寺は本当に存在していて幻ではありません。いつでもここにきて同じものを見ることができません。もし夢か幻想なら、今日は見えても明日は見えなくなります。

真のマスターについて学べば、どんな境界にはどんな音があるのがわかります。マスターがあなたに法を伝えた後、あなたは毎日聞こえるようになるので、聞きたいと思えばいつでも聞こえるのです。伝法は内在の音が聞こえることを保証するものです。私たちが修行に精進すれば、境界はますます高くなります。聞こえてくる音から自分がどんな境界にいるか、レベルはどうか判断できます。というのは、伝法の時、マスターがはっきり教えてくれるからです。まるで地図のように各所に標識があり、どこを見てもすぐにわかります。ですから、人の体は

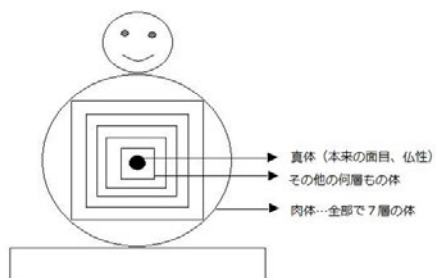
大変貴重です。マスターは犬に伝法しません。犬にも仏性はありますが、ないようなものです。たとえ犬に伝法しても犬には使えないのです。私たち人間は違います。言葉の意味がわかるし、たとえ言葉がわからなくても潜在意識でわかるのです。マスターは話をしなくても伝法できません。伝法の時、まったく話しません。話は伝法の前の紹介くらいで、実はこの紹介はなくてもかまいません。私がしていることを真似すればいいのです。こうするだけでもみなさんはこの法門を得ることができます。一言も言わなくても動かなくてもいいのです。なぜなら、「諸法空相(すべての存在は実体がない)」だからです。六祖慧能が伝授していたのはこの「無相法(実体のない法)」であり、私が伝授している法と全く同じです。



〈図1〉



〈図2〉



〈図3〉

注釈：マスターは「身体は本来説明できるものではありません。みなさんに分かりやすいように、この回と言葉で説明します」と言いました。



阿修羅衆生

スプリームマスターチンハイ フォルモサ・台北

一九八七年三月十三日

みなさんお久しぶりです。今日は阿修羅についてお話します。みなさん聞きたいですか。フォルモサ(台湾)には座禪を教える人や、さまざまなことを教える人がたくさんいるそうです。聞くところによると、初めは少し感応もあるようですが、時間が立つとみな問題が起きて、多くの人が魔に取り付かれたり、気が狂ったりするそうです。たくさんの方が私の所へ来て、そういう問題について質問しています。一部の人は神通力があって、人々にあちこち跳びまわる方法を教えたり、滅茶苦茶なことをやらせたりしています。しかし、こういうことに興味を持っていて、好きな人がいます。というのは、今まで結べなかった手印が、そこで習うとすぐ手印を結べるようになるからです。手印が結べなかつたとしても、少なくとも跳びまわることや、体を振動させることができるようになりますが、その後しばらく経つと、多くの問題が生じるのです。そこで多くの人が私の所へ来て質問し、このような目に会ったことについて私に訴え

ます。けれども、一部分の人がいまだにそういうことを信じているので、私は今日特別にこのテーマについて話します。とても面白いテーマです。

フオルモサでだけこのようなことが発生しているではありません。私がドイツにいた時にも、こういった人にたくさん出会いました。彼らは真の師について学んでいないので、家に帰ってからも一日中、音が聞こえてくるのです。この音は美しい音ではなく、人が話をしている声です。とてもうるさくて、その音を聞くと食べられなくなり、寝られなくなるのです。その音は私たちを眠らせず、聞き過ぎると大変疲れて、体は弱り神経もおかしくなります。実際これは何も神秘的なことではなく、大抵、低いレベルの阿修羅衆生たちの仕業です。

私たちが往生した後、大きな福報がなければ、天に上ることはできません。福報が少し多ければ天人になり、福報が最も多い人だけが菩薩になれます。仏陀になれる人はほんのわずかです。今、私は仏陀になる話をしていいるではありません。生前はあまり多くの福報もなく、大きな罪も犯さなかった人は、死後は地獄に行くことはなく、ふらふらさまよう魂になることもなく、彼らは低いレベルの阿修羅になり、阿修羅の場所に住みます。そこは私たちの地球に一番近い所です。それより少し高い所が天です。

阿修羅の場所は二つのレベルに分けられます。天国と地獄です。しかしこの地獄は天国とあまり差がなく、両方とも阿修羅の領域にあります。地獄にいる人はそこから出られません。ま

るで犯人が刑務所に入っているようで自由ではありません。けれども天国に住んでいる阿修羅は自由で、行ったり来たりできるのです。彼らには神通力（超能力）もあり、戦うのが好きで、人をからかったり、トラブルを起こしたりすることができません。また人を操って何かさせたり、悪さをして人間と遊んでいるのです。時には悪意がないこともあります。

ある人たちの霊魂は比較的敏感です。ここで言う霊魂、または主人とか言うものはみな同じものを指します。霊魂は私たちの体から外へ出て行くことがあります。この時、他の衆生が私たちの体をしばらく借りて住む可能性があります。この体を借りて何かしたいと思うかもしれませんが。悪い事をしたり、あるいはいろいろなことを楽しもうとしているのかもしれない。体に多くの衆生が住みついた時、私たちはその人を「魔に取り付かれた」と言います。そういう人はさまざまに変な声を発したりします。一人の人間が話しているのではなく、本人は話しなくとも口はコントロールできず、いろいろな変な声を発するのです。それはたくさんの阿修羅の衆生がその体を借りて住みついているから、でたらめを言ったり、でたらめなことをしたりしますが、自分自身でそれをコントロールすることはできません。

けれども、阿修羅には比較的善良なものもいます。やって来てしばらく遊んでから出て行くこともあります。こんな時はいいのですが、ある阿修羅はとても貪欲で、人の体を操って、永遠にそこに住みついて自分のものにしたがり、一旦住みついたら、なかなか離れようとしま

せん。まるで人が住んでいない空き家を見つけたかのように、そこに住みつき、追い出そうとしても追い出せないのです。阿修羅は強制的にこの家を独占しようとするのです。

もし正しい修行していなければ、しかも霊魂が比較的に敏感な人は、良いマスターの指導がなければ、また良いパワーの保護力がなければ、こういう低いレベルの阿修羅衆生に出会います。彼らが入ってくる時は、私たちもわかりません。耳で誰かが話しているように聞こえることがあります、しかしそういう人は見えません。時には見えることもあります、これはその人の敏感さによります。というのも、幽霊が見える人は阿修羅が来ても見えるのです。

けれども、阿修羅が来る時、阿修羅は私たちに自分が阿修羅ではないように見せるのです。彼らには神通力（超能力）があるので、とても荘厳な姿に変身したりします。例えば釈迦牟尼仏とか、阿弥陀仏の姿で現れることもあります。ひどい場合は私の姿で現れることもあります。けれども、修行者は良いマスターの指導があれば、すぐに本物か偽物かを見分ける方法を持っています。

例えば阿修羅は私の姿に変身してみなさんに話しかけます。私の弟子であれば、すぐに阿修羅が変身したのか、本当のマスターの化身であるかを見分けることができます。でも私について学んでいない人や、良いマスターの指導がない人は、阿修羅が阿弥陀仏や、イエス・キリスト、観音菩薩、その他の仏陀や菩薩に変身した姿を見分けられなくて騙されてしまいます。そ

の阿修羅は彼らを操り、何かをさせると、彼らは本物に仏陀や菩薩が見えたと思い、とても尊敬して礼拝し、阿修羅の言う通りにやります。こういう場合は往々にして、普通でない異常なことをさせることが多いです。人を操って説法をさせたり、法を弘めさせたり、さまざまな手印を結ばせたり、興奮させて、あっちこつちと跳びまわらせたり、耳元で人間の話し声で、何かをするように指示するのです。しかし、これらはいずれも無意味なことです。その偽物の仏陀が言ったことは大抵間違っています。時には小さな予言をしたりしますが、それらはほとんどは偽りで間違っています。例えば明日何か発生すると予言しても、実際はなにも発生しません。でもなかには、百のうちの一つ位は、当たっているかもしれません。

そのような魔が来た時、本当の修行者にはわかりませんが、そうでない人にはわかりません。そのような阿修羅の衆生が、私たちの体に住みついたり、あるいはしばらく体に入っている時に、魔は私たちに多くのことをやらせたり、他人とけんかをさせたりします。

八ヶ月前に私がドイツに行った時、お寺に住んでいました。あるオウラック（ベトナム）の奥さんは一日中声が聞こえてくるのだそうです。息子の悪口やお嫁さんの悪口を言って、二人が彼女に対してどんなに悪さをしているかを言うのです。実際にはそんなことはありません。これはトラブルを起こして、故意にけんかさせようとする仕業です。後にはまた彼女に仕事をするように指示しました。その時彼女に、職場で本当に暴力をふったり、ナイフを持って人を

追いかけて殺そうとしたり、そういうことまでさせたのです。人を殺していませんが、たびたびこのようなことを起こすので、もちろん仕事を失いました。彼女は家にも落ち着かず、息子もお嫁さんもこんなお母さんが嫌いなので毎日けんかしていました。彼女は誰でも疑うのです。というのは、阿修羅が彼女の耳元で「みんながあなたを疑っている。あなたのことを良く思っていない。あの人は今こんなことを考えている。彼はあなたを悪い人だと思っている。五分後にはあなたを殴りに来る。または二時間後に彼はあなたに悪い事をしに来る」と言っているからです。いつもこう言うのです。魔に取り付かれた人はそれをみな信じます。信じてその人とけんかするのは、実際にはそんなことは全くありません。

それらの魔は人とけんかするのが好きです。というのは、彼らは阿修羅で本性は戦いが好きなのです。戦いが好きな人は生存中は良くけんかをして、死ぬと阿修羅になります。ですから、彼らの戦いが好きな性質はなかなか抜けません。そこでかれらは敏感な人や、あまり智慧のない人、または簡単に他人を信じてしまう人を利用して、けんかをさせては、そばで阿修羅の衆生は面白がって笑っているのです。

時には阿修羅は釈迦牟尼仏、観音菩薩、済公（さいこう…宋代の僧）、あるいはその他のいろいろな無名の神に変身しては、自分は何々神、何々仏と言って、ここへ人を教えに来たと言い、人々に礼拝するよう指図するのです。時には経の講義もします。言っていることはもつともら

しく、それは彼らもいろいろと学んでいるからです。私たち人間も学んでいるのですから、魔だつて学んでいるのです。彼らはまず經の講義を聞きに行つて、聞いたことを人に話して聞かせます。そして人々に礼拝させたり、供養させたりします。時には人々に何人もの奥さんをもらうように指示します。それは彼ら自身が女好きで、大変好色ですが、自分には体がないので、この世のことが享受できないので、人に何度も結婚させたり、人に肉食をさせたり、何か珍品を食べさせたりします。これはいずれも阿修羅自身が好きだからです。自分に体がなくて楽しめないで、目的を達するために人の体を借りてそれを利用して楽しむのです。

タバコを吸つたり、酒を飲んだりするのも、阿修羅に影響されているからです。本人が求めているわけではありません。修行者で智慧眼が開いている人には、タバコを吸っている人、麻薬を使っている人、賭博をする人、酒を飲む人たちが多くの無形の阿修羅衆生に囲まれているのが見えます。阿修羅はタバコの匂いがとても好きで、その匂いをかぐだけでもとても楽しくなるのです。体がないので、自分でタバコを吸うことも、賭博をすることも、麻薬を使うことも、酒を飲むこともできないので、意志が弱くて敏感な人を利用してタバコ吸つて、酒を飲むように催促するのです。

ですから、お酒を飲んでいる人は、もつともつと多く飲むようになります。それは阿修羅が一人だけではなく、友だちを三、四人連れて来て、それぞれ少しずつ分けてもらつて飲んでい

るからです。阿修羅がたくさん集まると、もっとたくさん飲むようになります。それで、お酒を飲んでいる人は簡単にやめられないのです。やめようと思ってもやめられません。タバコを吸う人も簡単にやめられません。麻薬を使う人や、賭博をやる人などみな同じです。ですから、中国語では彼らを「賭鬼酒鬼」と言います。私は冗談を言っているのではなく、一般人の先入観ではなく、これは真実の比喩です。

観音法門の修行者はすぐにやめられますが、修行をしていない人はとても難しいです。私たちの所には多くの修行仲間がいて、なかにはそれほど多くはありませんが、何人かの修行仲間のもとと一日三、四箱のタバコを吸っていました。今、一人がここにいます。私は誰とは言いません。彼は人に知られたくないかもしれないからです。もともと毎日煙草を三、四箱吸っていました。印心後はすぐにやめました。今は一本も吸いません。彼だけではなく、友だちも影響されて吸わなくなりました。もともとタバコをたくさん吸う人で、修行をしたいと思う人はそんなにはいません。

酒を飲む人も同じで、五十歳までずっと酒を飲んでいた人も、印心後はすぐにやめました。私たちの法門を学ぶとすぐにやめられます。今はタバコも吸わなければ酒も飲みません。肉も食べません。とても速く、とても自然に全部やめました。私が伝法した後は、タバコはまったく吸わず、酒も一滴も飲まなくなりました。友だちは彼の見違えるほどの変化に驚いて、なぜ

突然こんなに変わったのかと言いました。これは現代の実例です。昔の物語ではありません。

酒を飲むのは阿修羅の影響を受けたからです。みなさんは信じますか。このようなことを見たことのある人はいますか。阿修羅衆生はとても荒々しく、悪さが好きで、タバコを吸ったり、酒を飲んだりすることが好きなので、私たちは影響されることがあります。どんな阿修羅に影響されたかは、自分でわかるはずです。

修行がしっかりできていない人や、正しくない法門を修行している人、または修行の目的が正しくなかったり、修行していても、自分が清浄でなかったりする人、例えば、より多くの名声や利益、神通力を得るために修行する人や、修行すると言いながら、欲を断ち切ることができず、相変わらず好んで衆生の肉を食べ、酒を飲んで、邪淫をする人たちは、度が過ぎると阿修羅に体を利用され、悪いことをしてしまいます。これは比較的ひどい阿修羅です。小さい阿修羅は、人とけんかをさせたりするぐらいです。もつと小さい阿修羅は私たちに酒を飲ませたり、タバコを吸わせたりします。

阿修羅は修行者を利用するだけではなく、どんな人でも利用します。ひどい阿修羅衆生が最も利用したがる人は、修行が清浄でなく、目的が不純な人です。小さい阿修羅は敏感で意志が比較的弱い人を利用して、タバコを吸わせたり、酒を飲ませたり、麻薬を使うようにさせ、その人の体と精神を壊すのです。そういう人たちは本当にかわいそうです。本来そんなことを

するのが好きではなく、する必要もないのです。自分が軟弱なため利用されるのです。

このようなケースはとても多く、しっかりとしないと多くのトラブルを引き寄せます。そういった阿修羅たちはその人たちに、自分が仏陀や菩薩であると信じさせます。本来ならば、私たちは普通の人はそれを判断できる知恵を持っているので、そういう時、仏陀や菩薩なのになぜこんなことをしたがるのかと疑います。仏陀や菩薩は最も崇高で、高貴で、大智慧があり、大慈悲であるのに、どうして何人もの奥さんを欲しがるのか、どうして動物の肉を食べたがったり、酒を飲みたがったりするのかと疑うのです。しかしそういった場合は、阿修羅たちは自分なりの道理で、私たちに釈明するのです。その体を阿修羅たちに占領された人たちは、「それ信じます。一度阿修羅にコントロールされるともう逃げられません。阿修羅の言うなりになり、自分の主権を失い、だんだん軟弱になり、だんだん自分の能力を失い、何でも必ず阿修羅に頼らなければならなくなります。自分の存在が全く無くなり、そして自分も阿修羅になってしまう。」

もし、私たちの中に主人が住んでいなければ、この体は役に立ちません。この主人を私たちは靈魂、あるいは本来の面目と言います。あるいは智慧と呼んでも構いません。もし、この主人あるいは靈魂が住んでいなければ、私たちの体は何の役にも立ちません。一度阿修羅にこの体を利用されたら、阿修羅になってしまいます。

この世界にはたくさんさんの阿修羅やその他の衆生が充満しています。私たちの智慧眼が開いたら、ここに座って経の講義を聞いている人はみなさんだけではないことを見えます。私が講義をする時は、仏陀や菩薩、私の本来の面目が講義しているのであって、私の体が講義しているわけではありません。みなさん以外にその他の衆生、天人、阿修羅もみな講義を聞きに来ています。けれども、みなさんは智慧眼が開いていないので見えません。ここにはみなさんしかいないと思っっているのです。

この世にはたくさんさんの阿修羅がいます。幽霊も魔もいます。ですから、人間として見える人は必ずしも人間ではないのです。けれども、私たちは智慧眼が開いていないので、それを見分けることはできません。誰が人間で、誰が幽霊で、誰が魔で、誰が阿修羅かわかりません。もし見えたら怖いでしょう。その人が人間でないことがわかるのは怖いことです。

阿修羅衆生は自ら私たちに悪さをするだけでなく、時には家族を利用して私たちを困らせませす。例えば、私たちが修行しようとする、阿修羅は私たちを困らせませす。もしその目的を達成できない時は、私たちの家族、お父さん、お母さん、子ども、奥さん、夫などを使って私たちを煩わせ、私たちの修行を妨げます。これはみな阿修羅の影響を受けた結果です。比較的高いレベルの阿修羅だとしても三界以下のものにすぎませせん。私は「非想非非想天」等、仏教の用語は使いませせん。大変面倒くさいからです。私は比較的簡単に第一界、第二界、第三界、

第四、五、六などとわかりやすく説明しています。

第一界は阿修羅の衆生でいっぱいです。第二界には比較的に善良で、知識のある人が行ける所です。第二界はたくさんのレベルに分かれています。仏教の経典で説明してあります。私はみなさんの時間を浪費したくないので、そのような境界（きようがい）の名称を研究したければ、自分で仏教辞典や経典を読めばわかるでしょう。

第二界はたくさんのレベルに分かれています。ですから、第二界の衆生にもそれほど善良でない衆生もいます。私たちが少し高いレベルまで修行した時、例えば第二界のレベルに達した時、第二界の衆生たちの影響を受けます。阿修羅よりパワーがあるので、私たちの困惑はもつとひどくなります。第二界まで修行するのは大変難しいことです。仏陀や菩薩に出会うのはもつと簡単ではありません。それは道の途中にはさまざまな関門があり、そこには多くの衆生たちが通過させまいといろんな妨げをするのです。

阿修羅衆生にはいくらか神通力があります。なので、私たちに天眼通の能力を貸してくれることもあります。体がないので、体のない人は私たちより自由です。あつちこつち飛びまわることができ、素早くどこにでも行けます。阿修羅衆生には無形の衆生が見えます。もともと彼らも無形だからです。ですから、目は私たちより良く見えて、時には人の心を見通すこともできます。そして一つか二つの事柄を言い当てることもできます。けれども、これも大したこと

はありません。もしある日その阿修羅が出て行ったら、私たちは相変わらず、何も知らず、何も分からない人間に戻るので。しかも前よりもっと愚かで、もっと軟弱になります。それは今、この体に慣れていないので、どうやって使って良いかわからないからです。阿修羅が私たちの体を使う時は、私たちの靈魂を追い出して、私たちはまるで死んだようになり、靈魂はそばに立ったまま、何が起きているかは分かかっていても、阿修羅に完全に押え付けられているので、自分自身をコントロールすることができないのです。

先ほど私は言いましたが、多くの敏感な人は魔に利用されます。これは彼らが比較的天真爛漫で、容易に人を信じるからです。それで阿修羅に利用されるのです。これがその一つのケースです。もう一つのケースは、修行する時に良いマスターの指導がなく、良い法門の保護がなく、あるいは目的が不純な場合です。例えば、修行すると神通力があって、名利も獲得できて、多くの人に崇拜されるなどということを目的としているのです。もしそういう考え方で速く神通力を獲得しようとする、阿修羅はとても喜びます。こういう人の貪欲な心を利用して、神通力を示して見せ、彼らを信じさせます。本当に仏陀や菩薩が教えに来たと思ひこませ、阿修羅はそのふりをして「あなたはとても修行が好きだから、教えに来ました」と言うのです。阿修羅も経の講義ができます。いろんな話して、そして偽物の境界（きょうがい）に遊びに連れて行くこともできます。

ですから、私たち修行をする時は良い目的を持たなければなりません。これが最も重要な点です。いわゆる高い理想とは自分が解脱を求めることであり、同時に、衆生の生死からの解脱を助けることでなければなりません。この高貴で純粹な目的の他に、最高の法門と、最高のマスターがなければなりません。そうすれば、修行は安全です。毎日一、二、三、四と呼吸を数えて、これも修行だと思っただけではありません。これは初歩の方法にすぎません。

先ほど言いましたが、もし修行者が神通力を貪欲に求めたら、阿修羅が偽装した仏陀や菩薩の格好に騙されて、そして偽物の境界に連れて行かれます。例えば西方浄土、この西方浄土は当然偽物で、本当の西方浄土ではありません。阿修羅の所にも、そのような創造の能力があつて、少し福報がある阿修羅は、偽物の境界（きょうがい）を造り出すことができ、ほんの少しの西方世界の景色を造り出すこともできます。そしてその人を連れてそこへ遊びに行くこともできます。私たち凡人はまだ本当の西方浄土に行つたことがないので、本当に自分が見た景色が本物か偽物かを全く見分けることができません。

その状態はまるで人が催眠術をかけられたか、酔っ払っているかのように、他人が何を言おうと、「はい」「はい」「はい」と答え、自分には本当の智慧がなくて、明晰な頭脳もなく、他人が何を言っても混沌としていて、見えているのが仏陀だと思い、本物か偽物かもわからずにすぐに礼拝し、近づくこともできません。これではどうやって本物か偽物かを見分けることがで

きるのでしょうか。

その偽物の仏陀があなたに「あなたは今、仏陀になりました。阿羅漢になりました。何々菩薩になりました。あなたの今の任務は人を教えることです」と言うのです。偽物の仏陀が私たちに一つの方法を教えては、こうしなさいと指示します。それで私たちは今、多くのいわゆる人を教える「先生」を見かけるのです。彼らも人に感応を与えたり、跳び跳させたり、ゆらさせたり、さまざまな手印をさせたり、耳元で人の話し声が聞こえたり、明日、明後日に何が起きると予言したりするのです。また阿修羅の人は病気を治すこともできますが、パワーに限界があるので軽い病気だけ治せます。けれども私たちはますます信じ、信じてしまえば、彼らが何を言っても私たちはその通りにするのです。

時には、阿修羅はUFOを作り出すことができます。一人か二人を中に乗せて、遊びに連れて行きます。私たちは天人が来たかと思いますが、実際はUFOなのです。阿修羅が私たちを遊びに連れて行く所は阿修羅の世界だけです。でもみなさんに言いますが、阿修羅の場所もとてもきれいで、そこへ行くと本当の天国に来たかと、本当の究極の涅槃に来たのかと勘違いしてしまいます。私たちには本物と偽物の区別ができません。阿修羅の世界は私たちの世界より百倍もきれいで、その女性もとてもとても美しいです。ですから、本当の良いマスターがいなければ、良いガイドがなければ、自分の修行の力で行ったにしても、阿修羅が連れて行った

にしても、どちらにしても迷子になります。あの美しい景色を見ると、私たちはそこが本当にすばらしい、良い所だと思ってしまう。もし今阿修羅を信じたら、死ぬ時阿修羅は私たちを連れて行きます。

生前に福報がなければ、死んだ後は当然すぐに地獄へ行きます。少し福報のある人はあの「一流の地獄」、つまり阿修羅の天国に行けます。他にそこには「二流の地獄」があります。これが本当の地獄ですが、二つとも地獄と言えます。それはみな阿修羅の場所にあるからです。たとえ阿修羅の世界にいても長生きでき、ある人は千年生き、あるいは二、三千年生きることができます。時には何百万年も生きられることさえあります。もしそういう状況に出会うと、私たちはもう究極に達したと思いい、不老長寿となり、永遠に存在する場所だと思いい、西方浄土の極楽世界だと思いいのです。まだもつともつと高い境界（きょうがい）があることがわからないのです。

ほとんどの人はしばらく修行すると、自分は仏陀になったと言います。彼らは「あらゆる仏陀が自分の所へ教えに来た」と言うのです。仏陀に出会うことはそんなに簡単なことではありません。修行に精進し、誠心誠意で、純粹でなくてはなりません。その純粹さの純度はまるで透明な琉璃（青色の美しい宝石）のようで、まったく不純物も含んでなく、ただ誠心誠意に解脱を求め、智慧を探すため、衆生を救うために修行するのです。しかし、必ず本当の「マスタ

」を探し出さなければなりません。そのマスターに従って何年か修行してこそ、一人か二人の仏陀に会うことができるのです。ほとんどの人が修行はとも速く、仏陀を見たければ、すぐに見えると思っています。自分は特別だと思っっているからです。それは不可能なことです。

この娑婆世界ではたとえ医者になろうとしても、長い間勉強しなければなりません。教師になろうとしても、先生について何年も勉強して、豊富な経験を積んでから先生になれるのです。何を勉強するにしても長い時間努力が必要です。この世のものを学ぶのでもこんなに簡単ではないのに、仏陀になることを学ぶのはなおさらです。そんなに速く成功するのは不可能なことです。そういう人は、この宇宙の法律は自分とは関係ないと思っっていますが、どうして関係ないのでしょうか。どんな衆生も、この娑婆世界に住むなら、誰であろうとみな娑婆世界の法律を守らなければなりません。たとえ釈迦牟尼仏でも例外ではありません。

ですから、釈迦牟尼仏は生存中に、「私たち仏陀から衆生に至るまで、みな衆生の四重の恩、つまり国家の恩、父母の恩、師の恩、友の恩を受けている」と言いました。娑婆世界にいれば、仏陀でも、菩薩でも、衆生でも、すべてこの四重の恩を受けるのです。この恩恵を受けるのは、修行者も同じです。その恩を忘れない態度が必要で、この世界の決まりに従わなければなりません。そうでないとトラブルが起こります。

釈迦牟尼仏やイエス・キリストも同じことを教えています。まず、人に道徳を重んじること

を教えています。道徳心と慈悲心がなければ修行はできません。たとえ修行しても、道徳心のない仏陀になってしまいます。この世界において、道徳心がなければそれだけで人に嫌われるのに、どうして西方浄土に行つて、浄土の道徳心のない菩薩になるのでしょうか。楞嚴經（りようごんきよう）の中でははっきりと述べています。肉を食べる人、酒を飲む人は修行すると魔になり、菩薩にはなれません。

私が言っているのは小さな例にすぎません。ほとんどの人がでたらめに修行していて、自分たちはもう宇宙の法律より高くなつたと思ひ、衆生の肉を食べても、夫や、妻を何人も持つても、嘘をついても、人を騙しても、人から金をたくさん取つても大丈夫だと思つています。自分はまだもう仏陀になつた、自分の成就は宇宙の法律より高いと自認しているからです。

解脱しても五戒は守らなければなりません。しかもしっかりと五戒を守るべきです。この五戒尊重してこそ解脱ができるのです。さもなければ仏陀や菩薩も落ちてしまいます。もし道徳心が失せたり、道徳心が足りなかつたりすれば、すぐにおろされてしまいます。例えば一国の大統領にしても、その国の最高の代表ですが、もし法律を犯せば同じように警察に捕まえられ、法の裁きを受け、裁判所の判決により刑務所に入れられるのではないですか。大統領だからやりたいことは何でもやるといふことはできません。仏陀や菩薩の場合も同じです。

時には、個人の事情で菜食ができないとか、自分は凡人なので、まだできないとか、本気で

修行ができないといった場合は、私はまだ理解できません。これは故意にしたことではないですが、かといってカルマを避けることはできません。故意にしても故意でなくてもカルマはあるのです。原因があれば結果があります。例えば夫が妻が、あなたが修行するのを好まず、菜食の食事を作ってくれなかったり、菜食を食べる場所がなかったりといったことは、実際によくあることですが、これは人を騙すようなことではないのでまだ理解できます。

けれども、ある人たちは肉を食べ、酒を飲み、邪淫をしていながら、自分は仏陀だと自認していますが、それはありえないことです。先ほど言ったように、菜食できない、本気で修行できない人たちは、自分の事情がよくわかっているのです。例えば、仕事の関係や、それとも夫か、妻が反対しているなどです。けれども、ある人たちは、何を食べても何をしても構わないと思っていて、邪淫をしたり、殺生をしたり、肉食をしたり、飲酒をしたり、金を盗んだり、人を騙したりなど、でたらめな行いをするのです。その人たちはもう仏陀になっていると自認していますが、どうしてそんな仏陀がいるのでしょうか。私たち凡人でも、そんな人を受け入れられないのに、どうしてそんな仏陀に礼拝できるのでしょうか。私たちの先生として相応しいでしょうか。これは道理に合っていないません。

たくさんの方が修行していますが、仏陀になった人はとても少ないのです。この宇宙の法律を理解していないので、阿修羅の衆生に騙されるからです。「私は何々仏です。あなたを教えに

来ました。あなたは今すでに仏陀になりました。こんな些細なことにこだわる必要はありません。修行にあまり執着しないことです」などと言います。このような話をして、私たちに自分は大した者だと思わせ、自分のレベルはもう相当高いので、宇宙の法律など気にしなくてもよいと思わせます。もし、本当にこんなふうなふうに思ってしまうと大変なことになります。ですから、修行者は智慧がなければ、容易に騙されるのです。そしてそこから脱出することができません。そういう魔の力がとても強いからです。私たちが脱出しようとしても離れられるものではありません。阿修羅は私たちを引き戻します。私たちを行かせないばかりか、大きな石を置いて、私たちの前を遮るのです。

ですから、修行者には必ず良いマスターの指導が必要です。在世のマスターであることが大変重要です。その理由は二つあります。第一にマスターは私たちに、修行の最も基本的な規則は何なのか、修行の道徳はどうあるべきか、心は必ず純粹であることと、理想と目的はとて高くなければならない、などと指導してくれます。そうすれば魔に取り付かれることもなく、魔に騙されることもありません。

第二に、例えば私たちがメデイトーション中に、現在のマスターが見えたら、私たちはマスターを識別することができます。私たちはマスターの外見を知っているので、私たちのメデイトーション中に、現れても同じ容顔で現れます。けれども、もし現在のマスターがいなくて、

メデイテーション中に過去のマスターが現れて私たちを連れて行くことしたり、講義をしたりしても、私たちはその人が本当に過去のマスターかどうか知る方法がありません。私たちは過去のマスターに一度も会ったことがないからです。釈迦牟尼仏は死後すでに二千五百年経ちました。イエス・キリストもほぼ二千年前に往生しました。普段私たちが見るイエスや釈迦牟尼仏の外見はみな人々が想像して描いた絵か、写真です。ですから、もしメデイテーション中に、イエスや釈迦牟尼仏が私たちの前に現れても、私たちは本物か偽物かわかりません。ただ現在のマスターを見た時だけ、本物か偽物かわかります。

私たちがメデイテーションをして高い境界（きょうがい）に行くと、本当のマスターに会うことができます。私たちに煩わしいことがあると、解決してくれます。私たちに障害があると、助けてくれます。マスターは私たちを高い境界に連れて行き、その時に本当に過去のマスターに会うことができます。さもなければ、自分の正しくない修行によって見えた過去のマスターは本物かどうか定かではありません。私たちはイエス・キリストや釈迦牟尼仏の容貌がどんな風か知らないからです。しかも阿修羅の場所は、そういう人を騙す偽物に満ちています。

ですから、私たちが修行する時には、必ずマスターの指導がなければなりません。それは阿修羅の場所を通る時にこれを見てはいけない、目を閉じて、速く通りすぎなさいとマスターが教えてくれるからです。あるいは、マスターは何かを使つて、あの良くない境界（きょうがい）

を遮って、私たちに見えないうにします。なのでメデイテーションする時に目の前が暗かったり、あるいはカーテンがかかってあるような明るさを感じたりするだけです。このようにして、マスターは私たちの手をとって阿修羅の場所を通過するのです。阿修羅の場所を通り抜けてからカーテンを開けて、私たちに見せるのです。もし私たちの修行のパワーが足りなければ、人間の世界より美しいあの阿修羅の境界を見たら、それが究極の場所だと思い、そこに留まってみたくありません。そうなると阿修羅に引っ張られてしまいます。引っ張って行かれる時に、たとえマスターが真相を話してもあなたはもう聞きません。阿修羅は「あなたのマスターは大了したことはない。いらつしやい。私が阿弥陀仏に会いに連れて行こう」などと言います。阿修羅はこういう言葉で誘惑して騙します。騙されたと気が付いた時にはもう手遅れです。

ですから、本当の法門を修行すると、すぐに境界(きょうがい)が見えないかもありません。というのは、もともと低い境界だったら、マスターは私たちに見せないからです。でも、全く見えないわけではありません。例えば光が見えるとか、道が見えるなどです。そして私たちがどこまで歩いて来たかわかりますが、ただ境界は見えません。境界が見えることが良いこととは限りません。とても低い光景が見えても阿修羅に誘惑されて迷子になり、そこに陥ると離れられなくなります。というのは、そこが大好きなので、当然彼らは私たちを連れてそこに行きます。すると阿修羅はさまざまな手段で私たちを信じさせ、彼らの部下にしてしまうのです。

たとえ仏陀を見たとしても、私たちはそんなに喜んではいけません。これはまだ究極の場所ではなく、この音と色の境界を越えなければなりません。そうしてこそ私たちは本当の主権を見つけることができるのです。というのは音があつて、色があつて、仏陀がいて、私がいるということとは、まだ二元論の次元で、まだ「私」が「仏陀」を見たことであつて、まだ「私は仏陀だ」と言うのではないからです。ですからメデイーション中に仏陀が見えたり、マスターが内面に現れたりするのは、みなさんを少し高い境界に連れて行くこととするにすぎないのです。しばらく修行して、ある境界に到達すると、私たちは天井にぶつかつたかのように、どんなに努力しても、それを乗り越えることができません。その時は、マスターだけが私たちを連れて、そのしばらくの間の障害を乗り越えて、通り過ぎることができ、そこから私たちは引き続き進むことができます。これ以外はいかなるものも私たちを連れて、障害を乗り越えることはできません。

ですから、私たちを導くマスターがなくてはならないのです。メデイーション中に内面にマスターが現れて、私たちをもっと高い境界に連れて行ってくれるのを見て、もう大したものだと思つてはいけません。このようでは、まだ私にマスターがいる、私はマスターを崇拜するということで、まだ「私はマスターである」ではないのです。私たちはマスターにならなければならぬのです。私たちはマスターであり、このレベルに到達したら、最高の境界（きょう

がい)と言えます。自分自身がすなわちマスターであることを、まだ認識できてない段階では、他のマスターに、ガイドしてもらわなければなりません。だから、禪宗では「佛来佛砍、魔来魔砍(仏陀が来ても、仏陀に執着しない、魔が来ても魔に執着しない)」と言います。しかし多くの人は言葉で言うだけで、自分は体験してないのです。彼らは仏陀になろうと思わないで、何も祈願しないことが最も素晴らしいことだと思っっているのです。そうではありません。自分の体験がなくてはいけません。そしてこそ、仏陀が来ても仏陀に執着しないと言えるのです。もし本当に仏陀を見てもないのに、それに執着しないと言えますか。仏陀に執着しないと言うのは、もっと高い境界に行くためです。

インドにとても有名な修行者がいました。何十年も修行してやっと大マスターになりました。まだ仏陀になる前に、まだ金剛三昧、つまり最も究極の阿耨多羅三藐三菩提(あのくたらさんみやくさんぼだい)になる前に、女神を崇拜していました。これは私たちが観音菩薩を崇拜するのと同じです。その女神を大変崇拜していて、女神に会うのがとても好きでした。しばらく崇拜していると、その女神像が生きかえって、彼は毎日女神像と話をすることができました。そのお寺に行くと、その女神像は降りて来て彼と話をしたり、何かを教えたりしました。とてもうれしくて、女神像と親しくしました。けれども、その後マスターに出会って、マスターの講義を聞いてから、これは大したことではないとわかりました。

例えば、私たちは観世音菩薩や、イエス・キリストや、聖母マリアがとても好きなので、彼らと通じ合って、話しをしたり、彼らが見えたりすることがあります。その時、私たちはきつととてもとても素晴らしいことだと思うでしょう。けれども、私たちがどんなに彼らに近づいても、崇拜しても、やはり外面のことで、彼らを見たとしても、それでもって、自分が誰なのかを知ることができません。私たちに本来どんな能力を持っているか、どんな権力があるか、この宇宙の本当の状況はどうであるかを理解することもできません。

そのインドの修行者はマスターに会ってから、すぐに自分が見たのは究極の世界ではないことがわかりました。マスターは彼に修行の法門を教え、彼は一生懸命修行しました。進歩も速かったのですが、ある段階に到達すると、それを突破できませんでした。なぜなら、その境界を通り抜けようとする時に、いつも以前崇拜していたあの女神が前に立って、通らせてくれないからです。長い間、この有音有色の障害を乗り越えることができなかったのです。

ある日マスターに文句を言いました。マスターは非常に激しく、どうして突破できないのだと叱りました。マスターは尖った石を持って、尖った先端を弟子の額の中央に、血が出るまで強く押しつけました。もし私たち普通の人が見たら、このマスターはなんて残酷なのか、殺してしまうのではないかと思うでしょう。けれども、マスターは、「おまえはわかっているはずだ。乗り越えなければならない」と言いました。その時、弟子は本当に心を込めてメデイテーショ

ンしました。そしてあの女神が来たのを見た時、智慧を使って女神を真つ二つに切りました。それで乗り越えることができたのです。話すことは容易ですがみなさんはまだこのような境界に到達する前にはまだ想像できません。実際はそんなに簡単なことではありません。

本当に良いマスターは、低いレベルのチャクラ（体の経絡）の位置を教えません。私たちの体には多くのチャクラがあり、それで修行することができます。たとえ私たちが丹田で修行しても、心臓のチャクラで修行しても多くのパワーが得られます。どこで修行してもパワーが得られます。たとえ鼻のチャクラで修行しても得られません。けれども、みな究極のチャクラではありません。智慧眼以下のチャクラの修行では、高い境界に達することは難しいです。なぜなら、私たちの「心」（意識）を低いチャクラ集中することに慣れた場合、なかなか上に行くことができません。ですから大マスターたちは「心」を低い境界に置くことを教えません。智慧眼から下はみな排泄器官で、見てもわかるようにそれほとともとても汚い場所です。排泄器官を使って修行した境界はやはり成住壊空（発生、成長、破壊、消滅）の世界の中にあります。成住壊空は永久ではありません。

私たちはたくさんさんの修行の法門があると聞いています。けれども、どの法門が一番良いのかわかりません。多くの人が自分は最高の師だと言います。ある人は呼吸を修行していて、ある人は丹田を修行していますが、それでも何かを得られるでしょう。しかし、それらは決して究

極のものではありません。この点については経典を参考にすればわかります。自分で修行しても、その方法が究極でないことがわかります。

高いレベルの修行者は、テレビも映画も見ませんし、音楽も聞きません。どうしてでしょう。私たちの心は本来すでに外面に置かれ、いろいろな場所に置かれているのです。目を開くと、外面の世界が見えて、耳も外界のいろいろな音が聞こえてきます。ですから容易に「反聞聞自性（自分の内面なる本性の声を聞く）」ことができないのです。内面に集中することは簡単ではありません。もし音楽を聞いたら、私たちの心を全部外面に分散させてしまうでしょう。ですから私たちが修行しようとするれば、必ず私たちの心を持ち上げて、内面に置き、「内面の修行」をしなければなりません。だから大修行者は音楽を聞きません。世俗の娯楽のことも考えません。せつかく心を内面に置いたのに、なぜまだ音楽を聞いて、外に分散させるのでしょうか。

先ほど私が言ったように修行法はたくさんあります。ほとんどは意識を「智慧眼」以下のチャクラに置いて行いますが、そういったチャクラはみな成住壊空（発生、成長、破壊、消滅）の世界の行であって、永遠に存在する境界に達するためのものではありません。私たちの体の中で智慧はどこにあるか、みなさんはわかりますか。智慧あるいは神通力の問題はさておいて、私たちにとって最も重要な場所は頭脳ですね。私たちが何を考えるにしても頭脳で考えます。頭脳を集中して、さまざまな問題や障害を解決するのです。したがって最も重要な頭脳の意識

を下の方のチャクラに置くということは、道理に合わないのではないのでしょうか。

例えば、私たちに何かの問題があつて解決できない場合、私たちは眉をしかめますね。そして意識をここ（マスターは額の中央を指す）に集中するでしょう。時には、頭を使いすぎたら、少し横になって、血液が脳へ流れるようにすると、続けて考えることができます。というのは、私たちの頭脳はとても重要で頭脳の中には智慧があり、脳の中にはある種の構造があり、それが私たちに考えさせる役割をしているからです。この能力は生まれつき持っているのです。それなのに意識を鼻、のど、心臓、丹田に置いたり、生殖器官に置く人さえいますが、これでは本末転倒なことをやっているのではないのでしょうか。

仏教の経典に書いてあるように、死んだ人が、最後にお腹の部分が温かかったら餓鬼に生まれます。心臓の部分が温かかったら人に生まれます。ひざの所だったら畜生に生まれ、額が柔らかかったら天に上り、額のてっぺんだったら仏陀になると言われています。もしそうなら、私たちはどうして額から修行しないのでしょうか。意識を下の方へ行かないようにしなければなりません。元々ここ（マスターは智慧眼を指す）にあるものですから、ここで物事を考えることがのできるのです。どうして修行する時にこれ反して下の方に意識を持つていくのですか。このお腹は食べ物を消化する所です。心臓は血液を全身に送る役割をしています。ある人は生殖器官に意識を置くいわゆる修行していますが、これを修行してどうするのですか。そこはもの

を考えることはできません。ただ子どもを作るとか、大小便を排泄するだけです。けれども、インドや、フォルモサ（台湾）や、アメリカでは生殖器官の場所を修行している人がいます。それは「道（タオ）」とは何かがわかっていないので、どのように修行していいのかわからないから、いろいろと考えた末、一番快樂な場所を修行しているのです。

ある人は「仏陀は心にあり」と聞いて、心臓の位置を修行します。ここは本来血液を送る器官にすぎません。思考の能力は少しもありません。もし丹田の場所を修行すれば、それこそ消化されてしまいます。（笑い）それからは意識はいつもお腹の方に行ってしまうでしょう。鼻を修行する人も同じです。鼻は何をするものなのか、皆さんはご存知だと思えます。舌は本来菜食をするものですが、ある人はあの汚い肉を口の中に入れます。ある人はそれで酒を飲みます。そして、でたらめなことを話し、多くの災いを作り出しています。舌は自分で考えることはできません。この頭脳がなければ舌も動きません。頭脳がなければお腹も消化できません。頭脳がなければ心臓の動きは停止します。ですから、人は死んだら、体はそのままです。目も、耳も、心臓も、お腹など各種の器官もそのままありますが、それらは働きを停止しています。もう動きません。どうしてでしょう。それは主人が離れたからです。

ですから、修行するなら、必ず頭脳から始めなければなりません。頭脳は本来高尚な場所にあります。もし無理に引き下ろして低い位置におくと、その結果、それは野菜、酒、肉と一緒に

に外面へ排泄されてしまい、ますます頭脳がなくなってしまう。これで智慧があり得るのでしょうか。

ある人は呼吸法門を修行していますが、頭脳がなければ呼吸もできません。私たちは死んだら呼吸をしませんし、生まれてくる前も呼吸をしません。呼吸は本来無常なものです。ある人は呼吸をコントロールします。もし私たちに頭脳がなければ、私たちは呼吸をコントロールできません。すべては頭脳に頼らなければなりません。だとしたら、なぜ最初から頭脳を修行しないのでしょうか。なぜ意識をお腹や、鼻や、心臓や、生殖器官などに下ろして、呼吸をコントロールさせたりして、頭脳を疲れさせるのでしょうか。なぜ直接頭脳を使わないのでしょうか。なぜ、そんなに働かせるのでしょうか。これではどんなに働いても役に立ちません。私たちはただ頭脳に働かせるだけで使わないから、さまざまな問題が発生するのです。

私たちが本気で修行しようと思うなら、必ずこの頭脳に頼らなければなりません。私たち普通の人は頭脳のごく一部しか使っていません。私たちはいつも、大修行者には大きな智慧があると知っていますが、彼らはより多く頭脳を使っているからです。なかには頭脳を一〇〇%使っていて、完全に機能を發揮する人もいます。ですから、あらゆる事を知っていて、全宇宙のことを知っています。私たちはこういう人をすでに「仏陀になった」と言います。仏陀になることは、本当は何も神秘的なことではありません。たださらに多くの頭脳を使うことなのです。けれ

ども、私たちはあまり使っていないので鈍感で、仏陀は賢明なのです。

この頭脳がある人は「智慧」と言い、ある人はそれを「霊魂」と言っています。それは額の中心の内側にあります。ですから、修行したければ、額から下の部分を忘れるべきです。呼吸も無常なので、忘れるべきです。自分で智慧を使つて修行し、智慧の所から修行し始めるのが正しいのです。けれども、何を修行するのでしょうか。それは法を伝授されてから、初めて修行が始まるのです。今日私は講義をするだけで法を伝授しません。ですから、みなさんにはわからないでしょう。講義をするのはみなさんに参考にしてもらうためです。しかし、法を伝授する時はみなさんはすぐにわかります。伝法する時は今のようによく話したりはしません。伝法の時は無言のうちに行われます。何も話をしませんがその時が最も重要で、最もパワーがあり、最も多くものを得られるのです。今、私はたくさん話していますが、みなさんはまだ何も得ていません。ただ少しだけ理解したにすぎません。私は何も言わない時に、みなさんは本当に「法」を得られるのです。今、話していることは紹介にすぎません。冗談を言ったり、話をしたり、議論をしたり、友だちのようにしているだけです。

私たちの体の中で一カ所だけとても役に立つ所があります。そこが私たちの智慧です。私たちはよく、額の中央にいわゆる第三の眼、智慧眼、仏眼、法眼、菩薩眼などがあると聞いています。それを眼と言っていますが、実際そこには眼はありません。けれども、そこから何でも

見えます。ですから、私たちはそれを「眼」と呼んでいます。この眼は何でも見えて、何でもわかり、何でも聞こえて、何でも触ることができます。知らないことはないのです、それを「智慧眼」と言っているのです。この智慧眼を使うにはカギで開けなければなりません。開けてから使えるのです。開けなければあっても役に立ちません。

けれども、私たちの「意念」で考えるものではありません。高い境界は私たちの「智慧」が、自ずからわかります。頭脳で考えるものではありません。意図的に仏陀を考え、法を考え、僧を考えるのではなく、自ずから仏、法、僧の本当の意味を体験するのです。このようにしてこそ智慧が開いたというのです。けれども、みなさんは今はまだ分かりません。だから、私たちは必ず、仏陀にならなければならぬ、仏陀を見たい、仏陀のいるところに行きたいと思うのです。仏陀の国の景観はどんなでしょう。仏陀はどんな格好をしているのでしょうか。もし、私たちがこういったものを見たいと望むなら、それはまだABCのレベルにあります。本当に智慧が開いた時、私たちは自分で見ることができません。考えなくても見えるのです。望まなくてもわかるのです。何も参考にしなくても理解できるのです。こうなることを智慧が開いたと言います。そういう智慧は私たち一人ひとりに備わっています。けれども、開かないと使うことができません。たとえあってもどこにあるかわからないのです。

けれども、真のマスターは知っています。私たちに智慧がどこにあるのか、どのようにこの

智慧を使うかを教えてくれます。毎日使って完璧に使いこなしてから、頭脳または智慧が全部私たちのものになります。その時に私たちは「仏陀になった」と言います。今私がここに智慧があると教えても、みなさんはどう使うかわかりません。これは伝法の時にわかります。ここでいくら話しても役に立ちません。それは本当に伝法する時は何も話をしません。

ここで私はみなさんに言っておきますが、額以下のどのチャクラにも智慧はありません。智慧は額の中央に「第三の眼」（智慧眼、または法眼という）ここに智慧があります。けれどもみなさんはそれを開けることはできません。それで分からないのです。ただ真のマスターを探し出せば、マスターが開けてくれます。それですぐ使うことができます。このようなマスターは専門家のようなもので、専門に智慧眼を開けてくれる人です。智慧が開く時、私たちは「悟りが開いた」と言います。

先週の日曜日に小学校の先生が四、五十人の小学生をメデイーションセンターに連れて来ました。みな子どもですが、悟りを開くことができました。私は彼らに少しばかり、悟りを開く体験を与えたら、全身体験がありました。体験がない子は一人もいませんでした。私はとてもうれしかったです。子どもでも修行できるからです。もし、どこでドアを開けるのがわかったら、子どもでも体験があるのです。衆生はみなこの智慧を持っています。けれども、開けてないので使えないのです。本当に惜しいことです。

Q マスターにお伺いします。この生命の Key point はどんなキーポイントですか。

M キーポイントは伝法の時にあなたにあげます。今私が話しても役に立ちません。伝法の時には私は話をしません、しかしあなたはキーポイントを受け取ります。(マスターはいつ私に伝えてくれるのですか)(笑い) 今は時間がありませんが、あなたが伝法を求めるのであれば、難しいことはありません。

(違います。私がさっき言ったのは、マスターはいつ私のこのドアを開けてくださいますかという意味です) これは状況を見て、もし希望者が多ければ、私は時間を見つけてみなさんに伝法しましょう。ただし、みなさんはまず法を受ける準備として、自分を浄化しなければなりません。普通の衆生として生きるのであれば準備の必要はありませんが、もし菩薩や仏陀になりたければ慈悲心が必要で、衆生の肉を食べる悪い習慣を断ち切らなければなりません。そうしてこそ菩薩になれるのです。

普通の法門を修行する場合は、何を食べても問題ありません。例えば、呼吸法、丹田を修行する場合は、菜食しなくても良いとしています。けれども菩薩になりたければ、すぐに菜食を始めなければなりません。絶対に衆生の肉を食べてはいけません。これは最も基本的なこと、最も重要な道徳的観点です。菩薩になりたいと言いながら、衆生を救うこともしないうちに、彼らをことごとくお腹の中に入れて「救う」としたら(笑い)、もう救う衆生がいなくなつてし

まうでしょう。私たちはもともと仏陀や菩薩になってから、衆生を救うつもりで修行するのですが、その前に彼らを自分のお腹の中に入れてしまうのは、いかにもおかしなことですね。

Q 修行者は仲人をして良いですか。

M してはいけません。他にすることはいいですか。(笑い) それは仕事でやるのですか。(違います) もし違うなら、やらなくていいでしょう。自分たちで結婚相手を探せばいいでしょう。多くの人は仲人がいなくても、結婚しているじゃないですか。(笑い) (隣の人が息子はとても良い人だけど、女性と交際するのが苦手なので、もう三十一才になってもまだ結婚できないと言っているのです) 結婚相手が見つからないことは良いことです。出家すればいいでしょう。(笑い) フォルモサにはこんな人が多いのに、まだ結婚したいのですか。子ども達はもう、食べ物が無くなってしまいそうです。出家者は一日に一食しかたべないので、国にとつては比較的節約になります。(笑い) 子どもが少なくすれば国は破産しません。出家を勧めたらいいでしょう。仲人はしないでください。

奥さんが見つからないのは彼自身の因果です。奥さんがいない方がいいかもしれません。奥さんがいて何になるのですか。奥さんがいると、菜食をしたくても料理を作ってくれないし、修行をさせまいとし、智慧を發展させる修行を妨害します。夫と一緒に修行する奥さんほど

も探しくいものです。大多数の場合、奥さんが修行しようとするれば、夫が阻止し、夫が修行しようとするると奥さんが妨害するのです。ですから、仲人はしないほうがいいです。自然に任せたほうがいいです。夫や奥さんがいなくても何の問題もありません。結婚は大事なことでありません。自然であればよいのです。私たちは人の因果に介入しないことです。これは自分にカルマを作ることになるからです。

Q マスターが先ほどおっしゃったように、私たちの修行の基本条件は修行者本人に道徳があり、心は純真で、しかも崇高な理想がなくてはいけませんとおっしゃいました。マスターにお伺いします。いわゆる崇高な理想とは何でしょうか。

M 最高の理想は自分で分かるはずで、私に聞くことではないでしょう。(あまりよくわかりません。どうぞマスター、具体的な例をあげて説明してください) いいでしょう。それならあなたの修行の目的は何ですか。あなたは仏陀になりたいですか。それとも何になりたいですか。(基本的には仏陀になりたいです。けれども、仏陀になるとどんな状況かわかりません。仏陀とは一体何でしょう) いいでしょう。今教えましょう。私たちが修行するのはこの世界が苦しいからです。パワーを備えて人々を助けるためです。例えば、西方極楽世界に行きたいと思っている人がいたら、仏陀になると、すぐにその人を連れて行きます。誰でも行きたい人はす

ぐに連れて行けます。仏陀になったら、あるいは大きな智慧を得たら、誰かが智慧を開いてくださいと頼んでも、すぐに智慧を開いてあげることができません。これこそ崇高な理想です。仏陀になる、何かになるということにこだわる必要はありません。この名詞は重要ではありません。例えば、医者になろうと思っていたとします。多くの人が病気に悩んでいるのを見て、病気の苦しみから救おうという気持ちが起こりました。ですから、私たちはその人を医者と呼びます。その他の名称でも、何と呼んでも構いません。最も重要なのは、病気の苦しみから救ってあげたいという理想があることです。

今、あなたはなぜ修行したいのかと、自分に聞いてみてください。自分が苦しいためか、三界から解脱したいからか、衆生が苦しんでいるのを見て衆生を救って、上に連れて行きたいのか、三界を越えてもう輪廻をしないためなのかを自分に聞いてみてください。このような理想があるなら、これは崇高な理想と言えます。自分で自分を救って三界を超えるのです。それはこの不公平な世界がいやになって、もっと高い境界に行きたいからです。生、老、病、死のない所、永遠に幸せな場所です。それから、私たちは自分の親戚や、友人や人々をも連れて行くことができます。これが崇高な理想です。何になろうと、ただこんな理想があれば十分です。

Q いわゆる三界とは一番高いのですか。それとも三界以上にもっと高い所があるのですか。

M もちろん三界以上にもっと高い境界があります。そうでないと、私たちは三界を超えたらどうするのですか。三界以下はみな成住壊空（発生、成長、破壊、消滅）の世界で、早かれ遅かれ、壊れる日が来ます。ですから私たちは三界を越えなければなりません。三界の上こそ永遠に存在する、永遠に幸せな場所があるのです。

Q 私は友だちからよく人間世界のすべての現象はいずれも人間個人の心境によって発生したものと聞いていますが、そうなのでしょいか。

M ですから、私たちは身、口、意の修行をしなければなりません。それは身、口、意がカルマをもたらずからです。私たちがカルマを作ります。心の中の考え、口で話した言葉、私たちの行動が、みなカルマを作ります。修行して阿羅漢になり、菩薩になったらもうカルマはありません。カルマはもうきれいになったからです。阿羅漢や、菩薩はカルマを超えて、何にも影響されません。自分が戻って来て衆生を救う願いがあれば、自分の願いによって、この世界に降りて来ます。これはカルマと関係ありません。

Q マスターに伺います。心のパワーはどのぐらいの大きさですか。三界が含まれているのですか。それとも私たち人間界にだけあるのですか。

M 三界以下にはまだこの心の影響があります。けれども第三界に着くと、カルマはなくなりません。しかし、まだ成住壊空（発生、成長、破壊、消滅）の世界にいます。三界はいつか破壊されます。私たちの世界だけでなく、三界全体が破壊されます。ですから、三界以下にいても永遠の解脱はできません。（それなら、どうすれば解脱できるのですか）

解脱とは三界以上、例えば第四、第五、第六、第七……三界を超えて、三界以上に行くことです。けれども第四界でもまだ永遠の解脱ではありません。ここは無色界で、元々三界以下にあるものではありませんが、かといって三界以上とも言えません。それは境界域（きょうがい）いきき）なのです。例えば、第三界はここにあるとします。その境にもう一つの世界があります。それを第四界と言い、無色界に属します。この無色界にも多くのレベルがあります。先ほど言った第三と第四界の境界は無色界の中の最低レベルに属しています。本来それも三界以上にあります。あまり意味がないので、それを三界以下としています。

もし、あなたが将来そこへ行ったとしても大した意味はなく、まだ解脱できていません。何でもできません。下に降りることができますが、上に上ることはできません。その状況はちょっと特別です。ですから三界以下だと言っているのです。けれども三界の中ではありません。釈迦牟尼仏は比較的簡単な方法で、区分けしています。釈迦牟尼仏は三界以下あるいは三界以上と言っています。けれどもこれは重要ではないので、私は論争したくありません。私はた

だみなさんに言いたいのは、みなさんが修行するとわかりますが、第四界はあまり役に立つ所ではありません。ですから、ある人は三界以下だと言い、ある人は三界以上だと言っています。これは何の区別もありません。伝法の時に私は詳しく説明します。天の機密は公の場でもらすべきではないからです。

Q 普段修行の時、座禅をする時や念仏をする時に影像が見えたり、音が聞こえたりしたら、どうすればいいですか。

M あなたは何仏を唱えているのですか。(観音菩薩) それなら、あなたは続けて唱えなさい。(眠れない時はどうしたらいいですか) 眠れなかったら、寝なくてもいいです。それを唱えるだけでは修行とは言えません。これは念仏をしているだけです。釈迦牟尼仏は人にこんなことを教えていません。私たちは釈迦牟尼仏の法門を誤解しています。私たちは観音法門を修行することは、南無観音菩薩の名前を唱えれば良いと思っていますが、そうではありません。「観音」を修行することはとても高いレベルです。とても高い法門です。観音菩薩を唱える時も口で唱えるではありません。今ここで私はあなたをどうすることもできないので、引き続き、続けて観音菩薩を唱えるように言えるだけです。本当に解脱を望み、印心を受けたければ、私のところに来て伝法を求めることです。ただ私たちの法門は公の場で教えることはできません。

私たちの法門は話をしません。話をしませんが、「法」を得ることができます。でもあなたが観音菩薩を唱えるのが好きであれば、続けて唱えなさい。何かが見えたら、見ればいいでしょう。私はこれしか言えません。なぜなら、見えた境界が本物か、偽物かを見分けることはあなたには分からないからです。かといって今すぐあなたに説明することもできません。というのはあなたが歩いている道は私たちの道ではないからです。必要でしたら、こちらの方に来て歩いてください。そうすれば助けることができます。または、今の修行を止めたらいいでしょう。



悟りを開くとは何か

スプリームマスター チンハイ フォルモサ・台北

一九八七年三月五日

私たちは、多くの人が「仏陀が見えた。菩薩が見えた」と言うのを聞きますが、そんなに簡単でしょうか。私はそんなことはないと思います。広欽和尚が在世の時に、一人の僧侶が彼に「観音菩薩を見たことがある。彼女の容貌はとても莊嚴だった」と言いました。広欽和尚は笑いながら「本当ですか。そんなに容易く見えたのですか」と言いました。広欣和尚の修行レベルはとても高いので、彼は「仏陀が見える。菩薩が見える」ことはそう簡単ではないことを知っているからです。花が開いてこそ仏陀を見ることができません。花が開くとは智慧が開くという意味です。今日はどうやって智慧が開くのかを話しましょう。

私たちはいつも「花が開いて仏陀が見え、無生を悟る」と言っていますが、花はどのように開くのでしょうか。花とは何でしょうか。みなさんには花がありますか。花はどこにあるのかわかりますか。花とはどんな花ですか。（ある人が答える：花とは私たちの心です）心はどうやって

花開くのですか。実際はそれも正しいです。私は冗談を言ったのです。自分の心はどこにありますか。(ある人が答える…宇宙に満ちています) あなたの心はそんなに大きいのですか。私は信じませんよ。全宇宙を満たせる、そんな大きな花はありません。(ある人が答える…仏祖の心と私たちの心は同じです) 同じはありますがありません。(答える…仏陀の心は平等です) 仏陀の心は平等ですが、みなさんの心は平等ではありません。もし平等なら、あなたが女の人を見ると、男の人を見ると同じでなければなりません。あなたは今同じ感覚ですか。(答える…その本質、本来の面目は同じです) そうです。けれども、あなたはまだそれを見つけていないでしょう。そうでしょう。(答える…はい) それでは、今私たちは一緒にその花を探しましょう。

私たちの体の中にたくさんの花がありますが、私は下の方の花については話しません。下の方の花については昨日話しました。それぞれのチャクラはみな蓮の花と同じです。ですから、釈迦牟尼仏が楞嚴呪(りょうごんじゅ)を講義した時に、彼は千の花弁の蓮の花の上に座っていました。この千の花弁の蓮の花は第一世界にあるものです。私たちがもし第一界の最高レベルに達した時、つまり第一界の頂上に達した時に、こういう千の花弁の蓮の花が見えます。けれども、私はそのような内在の体験は話したくありません。みなさん自身が修行して、自分自身で理解してもらいたいのです。私が主にみなさんに言いたいののは、私たちの内面にたくさん

の蓮の花があることです。ここにも(マスターは智慧眼の所を指して)蓮の花がありますが、

智慧眼でなければ見えません。この肉眼では見えません。下の方にも蓮の花がありますが、今日は話しません。後で時間があれば話ししましょう。

この（智慧眼を指す）蓮の花の中には摩尼珠（まにじゆ）があります。この花が開くと、摩尼珠または仏眼、智慧眼が花が開いたように見えます。花が開くとはすなわち智慧眼が開く、または悟りを開くという意味です。古代のマスターたちはいろいろな実在のものにたとえて形容しました。今もし私がここで（智慧眼を指して）花が開くと言っても、みなさんには花がわからないし、花がどこにあるか見えません。けれども私が弟子に言うとなんか彼らはわかります。彼らはずでに花が見えて、ここで花がどのように開くかも見えたからです。

今、たとえ私がここで、ここに蓮の花があり、花が開くと仏陀が見える、と言って、みなさんがそれを信じたとします。そこで見えた仏陀は決して阿弥陀仏の姿ではありません。当然、阿弥陀仏の姿が見える可能性もありますが、観音菩薩の姿が見えることもあります。けれどもこれらは本物ではありません。花が開いて仏陀が見えるとは、どんな仏陀が見えるのでしょうか。私たちの仏性、私たちの本性、私たちの本来の面目が見えるのです。それで、花が開いて仏陀が見えると言います。この仏性とはどんなものか、みなさん誰か知っていますか。

みなさんは、仏教に「オンマニパドメイウン」という一種の呪文があるのを知っていますね。

この意味は何でしょう。摩尼珠が蓮の花の中にあるというのがこの呪文の本来の意味です。「マ

二」は摩尼珠です。「パド」は蓮の花です。チベットには蓮花生大師がいます。彼の名前は Padma Sambagwa です。Padma は蓮の花の意味です。「オンマニパドメイウン」の意味は「この摩尼珠は蓮の花の中にある」ということです。

なので、私たちが「オンマニパドメイウン」という呪文を唱えると、靈感があるということではありません。私たちは呪文に含んでいる奥深い意味を知らなければなりません。古代の禪師、大師たちがこの呪文について講義したのは、弟子たちに宝珠は蓮の花の中にあることを忘れてはいけない、毎日この法門を修行しなければならぬ、この宝珠のある場所、つまりこの蓮の花の中で毎日修行しなくてはいけないということを喚起するためです。例えば、私がある話をする時、私の弟子たちは分かっていますが、それをここで話してもみなさんは分かりません。時には私が何も言わず、手振りをしただけでも、弟子たちはすぐに私が何を言おうとしているかが分かります。それはマスターと弟子の間では多くのことが暗黙のうちに通じるからです。

法を伝えた後、マスターは特別何も教える必要はありません。もし彼らが何か問題に出会った時は、私が少し手振りするだけで彼らは分かれます。問題はすぐに解決し、何も話す必要はありません。また、ある弟子に問題がある時、私は彼に「念仏」と言います。まだ印心していないみなさんには、きっと私が彼に南無阿弥陀仏を唱えるように言ったと思うでしょう。みなさんもずっと南無阿弥陀仏を唱えているでしょう。実は、私が「念仏しなさい」と言ったのは、

私の弟子に言ったことです。というのは、どの仏陀を、どのように唱えるかを知っているからです。それは決して口だけで唱えるものではありません。それは本当の念仏ではありません。ということ、学んでいない人には当然理解できません。

同じ道理で、今の人々は経を黙読し、「オンマニパドメイウン」と心の中で唱えています。そして、これはとても神秘的な呪文で、唱えるべきだと思つて、し長い間唱えています。何の感応もありません。ある日集中して唱えるのと少しの感応があるかもしれませんが。これは集中したからです。この呪文に何かの霊感があるわけではありません。古代、大師たちがこの呪文を伝えたのは、彼の弟子に修行するよう喚起するためでした。どうして秘密の呪文なのでしょう。それは彼らの弟子だけがわかることで、外部の人には理解できません。ですから秘密の呪文になったのです。

例えば、私が「念仏」と言うと、私の弟子にとっては、それは秘密の呪文です。例えば、私の弟子に問題があつたとします。しかし私に会いに来られなくて、他の修行仲間に頼んで、自分の問題を私に伝えたとします。その時、私は「帰ってから彼に念仏するように、これが秘訣だと伝えなさい」と言います。彼が帰ってから、友だちに念仏するように、私たちのこの法門の修行をするように伝えます。または、私は彼に「心を中心に置いて集中しなさい」と言います。このように言うと彼らはわかるのです。

けれども他の人に言っても、心を中心に置くとはどんな意味かわかりません。どこが中心なのか、心はどこにあるのか、なぜ心を中心に置くのか、まったく意味がわからないでしょう。ですから、私たちにとってはその言葉が秘密の呪文になります。とても役に立つからです。もし毎日この秘密の呪文を覚えていたら、彼の修行の進歩はとても速いです。彼はずっと「心を中心に置く、心を中心に置く、心を中心に置く」と唱えるではありません。このように唱えることが秘密の呪文になるではありません。彼はこの秘密の呪文を覚えていて、しかも意味がわかっているのです。これこそが呪文を唱えるということなのです。

同じ道理で、古代の禪師たちが彼らの弟子たちに「オンマニパドメイウン」を教えたのは、マスターと弟子たちの間にだけわかる、簡潔なサインのようなもので、一種の秘密の言葉だったかもしれません。弟子たちに問題が起きたり、修行がうまくいかなかったり、どう修行しなければいけないかを忘れてたり、修行の時に心が乱れたりした時に、弟子たちに、「オンマニパドメイウン」つまり宝珠は蓮の花の中にあり、心を蓮の花に置いて集中してこそ、宝珠が見つかるかと教えたからです。この意味は禪師の法門、つまりこの宝珠が蓮の花の中にある法門を修行するようにということです。

けれども、今私たちはその深い意味がわからないのに、一日中「オンマニパドメイウン」と唱えても何の役にも立ちません。本当に役に立たないのです。私は役に立たないと明言します。

この奥深い修行法門を知らないため、古代の大師たちの奥深い意味がわからないので修行に役立たないのです。しかし、私たちが七日間リトリートをする時に、大勢の人が一緒にメデイテーションをします。私はこの人にはこんな問題が、あの人には違った問題があるのがわかります。私はそばに行つて、その人に「念仏しなさい」と言うと、彼らはすぐ念仏をします。というの、私はその時、彼の心が乱れているのを見たので、「念仏しなさい、心を中心に置きなさい」と言いました。また他の所では、私は何も言わないで、こんなふうに（マスターは五本の指を出す）して見せます。これは、私が決して違う法門を教えているのではなく、この人には念仏しなさいと言い、別の人には心を中心に置きなさい、また別の人には、このような手振りで、また人には違った形で教えていますが、これらはいずれも同じ法門を指しているのです。

その時、彼らにはそれぞれ違った問題があつたけれども、私がこのように言うとき彼らにはすぐに助けとなります。彼らに修行を喚起させ、集中することを喚起させるのです。その時に彼らには違う指摘が必要です。私が別の法門を教えたものではありません。もしその時にちよつどもまだ私に従つて修行していない他の人がいて、一緒にメデイテーションしていたら、彼らは自分の法門を用いて鼻を覗いたり、丹田を覗いたり、呼吸を覗いたりしていたら、この人たちには、私が何をしているか分からないでしょう。どうしてこの人には頭を叩き、あの人には心を中心に置きなさいと言ひ、この人にはこうしなさいと言ひ、あの人には心を中心に置きなさい

いと言っているのかわかりません。マスターはなぜでたらめを教えているのだろうと思うでしょう。そうではありません。彼らは自分が理解できないので、当然私が何をしているか分からないのです。

同様に、悟りを開こうとするなら、法門がなくてはなりません。自分で分かっているまま修行したり、自分の好みで修行したりして、悟りを開くことができると思っただけじゃありません。悟りとは何であるかを知らなければ、たとえ修行したとしても無意味です。それが本当に悟りを開くことなのかも分からないのです。ですから今、私は悟りを開くことは何かを話します。

悟りとはどんな意味でしょう。悟りとは「明白（はつきりとわかること）」です。明は日と月からできています。中国の文字はとも分かり易いですね。私は古代の中国人は修行レベルがとても高いと思います。だから彼らが書いた字はみなとてもわかりやすいです。例えば、明には日と月があります。これは何を表わしているのでしょうか。光があるということです。悟りを開いた時も内面に「明白」があります。悟りが「明白（はつきりとわかること）」であるなら、日があり月があるはずです。ですから、悟りを開いた人にも月と太陽が見えます。この点について、みなさん禅の修行者はわかるでしょう。時には、僧侶は禅の会場を走り回り、一対の警戒（けいさく…座禅中に修行者の肩などを打つ棒）を持って、「太陽はどこにありますか」とあなたに聞きます。彼はあなたにどうやって太陽を探すかを教えないで、自分で探すように言う

のです。これは本当に困ったことです。

もし、あなたが「今は冬なので、今日は太陽が出てない」と言ったら、あなたは打たれます。「太陽は西にある」と言うと、彼は「違う」と言います。「今は朝なので、太陽は昇って来たばかりで、太陽は東にあります」と言っても打たれます。何と答えても間違いです。太陽はどこにありますか。誰かわかる人はいますか。ここには禅の修行をしている人はいませんか。こういう太陽を探すことは小さな禅にすぎません。本当に修行して悟りを開くと太陽が見えます。月が見えます。ほんの少し話しましょう。あまり多くを教えることはできません。

みなさんは外の太陽を見て、自分は悟りを開いたと思っただけではありません。違います。それは悟りではありません。これはこの世界における一種の認識です。開悟には「明白（はっきりとわかること）」という意味があります。「明白」には太陽の光があり、月の光があります。私は古代の中国人の修行はとても高かったと思います。少なくとも太陽と月を見たいと思います。なので彼らはすでに悟りを開いたと思い、「開悟（悟りを開く）」と言いました。この人たちは月の光と太陽の光を見ましたが、太陽と月が見えてもやはりまだ三界以下、まだ三界以下のレベルに過ぎません。三界以上の状況については、私はここでみなさんに話すことはできません。伝法の時を除いては話せないのです。

ということ、私たちは「開悟（悟りを開く）」と言います。ある人が光が見えた、光に接し、

光と繋がったということを示しています。それでは古代の人たちは開悟すると光が見えたのでしょうか。そうです。ですから、私は先ほど開悟とは「明白（はつきりとわかること）」という意味だと言ったのです。彼らが悟りを開く時、光が見えて、仏陀の光、すなわち自分自身の光が見えたということを表しています。これは私たちの仏性です。仏性は凡人の品性とは違い、形もなく特質もなく、掴むことも触ることもできなく、においありません。この光はとても純粋でとてもはつきりしています。この光の中にはあらゆるものがあり、あらゆる智慧があり、宇宙の万物、あらゆるもの、すべてのが分かれます。それらはいずれもこの光から作り出されたものです。

比較的きめの粗い光は音に変わります。この音とは話をする時の声ではなく、まるで音楽と同じような音で、とてもやさしいもので、私たちはその音を聞くと心がとても静かになり、心地よくなり、智慧が開き、個性が変わります。そして、この世界における苦痛は徐々に少なくなり、私たちはますます幸せになり、ますます宇宙万物を理解し、経典を理解し、自分がわかり、その他のあらゆる衆生のがわかるのです。

ですから、私たちが光と通じ合い、この光を見た時が、仏陀を見た、仏性を見た時なのです。というのは、仏陀は無形無相（むけいむそう…姿、形がない）だからです。仏陀がこの肉体で娑婆世界に現れるのは、みな衆生を救うためです。決して仏陀はみなさんが思っているような

ものではありません。もし、私たちが一つの境界（きょうがい）に行つて、ある状況あるいはある様子を見たとしても、たとえそれが本当の仏陀の国土であつても、やはり本物ではありません。これは第二の示現（じげん：仏陀や菩薩が衆生を救うために姿を変えてこの世に現れること）です。最高の示現は、最高の真理で無形無相であります。心が動くとき有形有相に変わり、有音有色に変わります。

けれども私たちが凡人から最高の境界に至る前は、まだこの音、色（しき：色、形のあるもの。物質的存在や現象）を越えることはできません。ですからまだ音、色があるレベルです。けれども決して物質的な音、色を指しているのではなく、内在の音、色、高い境界の音、色です。とても微細な音、色で、凡人の目では見ることができず、凡人の耳で聞くことができない、そういう音、色です。外界の音、色ではありません。たとえそういう微細な音、色でも究極ではありません。しかし、もしこの階段に頼つて一段一段とゆつくりと這い上がらなければ、私たちはすぐに凡人から阿耨多羅三藐三菩提（あのおくらさんみやくさんぼだい：最高の悟り）に跳び上ることはできないのです。ですから、その光とその内在の音、やさしい音は私たちが上に登つていく階段なのです。

楞嚴経（りょうごんきょう）の中にも「音流」のことが書いてあります。釈迦牟尼仏は「仏陀はこの音流に頼つて降りて来て、衆生を救い、菩薩、衆生はこの音流に頼つて上に上つて仏

陀になる」と言っています。みなさん読みましたか。とても短い語句ですので、読んでも注意しないと見過ごすかもしれません。「音流」とはこの音の道です。釈迦牟尼仏はとてもはっきりと言っています。でも凡人は体験がないので、当然ながらわからないのです。例えば、飛行機を見たことがない人に、飛行機と言う名前を言っても想像することができません。

楞嚴経の中にも、二十五人の菩薩の修行の体験が書いてあります。彼らはみな悟りを開いた時に、光が見え、同じ光ではないけれど、みな光があつたと言っています。これでこそ悟りが開いたと言えるのです。ある人は音も聞こえました。例えば雷の音、太鼓の音、鐘の音、海潮音、梵音などです。これらはみな彼らが悟りを開いた時の体験です。光と音を除いて、その他の状態は悟りを開いたことではありません。ある人が動き回ったり、手でさまざまな印を結んだりすることはいずれも悟りを開いたことではありません。私はどの経典の中にも手で印を結ぶことが開悟である、と書いてあるのを見たことはありません。全くありません。

キリスト教の聖書にも光を見たことが書いてあります。その記載によりますと、彼らが神を見た時、神は光と同じように明るくて、あたかも大きな火のようで、神の声は雷のような音、海潮音のようなものであると書いてあります。これは仏教の経典とほぼ同じです。悟りを開いた時の体験はみな同じで何の違いもありません。ヒンズー教の経典の中にも、悟りを開いた時にはやはり光が見えて音が聞こえた、と体験が書いてあります。体が激しくあちこち動いたり、

自動的に手でいろんな印を結んだりすることが、決して悟りを開いたことではありません。

私が読んだ経典の中にはみなこう書いてあります。それで私は真実を話してみなさんに聞いてもらっています。決して私個人の体験を話していません。けれども、私個人の体験も経典の中で書かれていることと同じです。ですから、私は個人の体験と経典の中の体験を総合して、「光が見えたことはほんの少しの仏性を見たことである」という結論を出すことができます。光の中にはまだ多くの境界（きょうがい）、多くの智慧、多くのものがあります。ただ光だけがあるわけではありません。けれども悟りを開いた時、この光と通じ始めます。ですから、必ず光が見えて、初めて悟りを開くことができます。

悟りは「明白（はつきりとわかること）」です。明白とは光があつてこそはつきりわかるので、暗い所でどうはつきり分かるのでしょうか。暗い所でどうやって宇宙万物が見えるのでしょうか。私たちは元々すでに暗い所にいます。私たち凡人の視覚はせいぜいここからあそこまで見わたせるくらいです。聴覚もここからあそこまでしか聞こえません。宇宙万物が見える、高い所の音が聞こえる、とても美しい超世界の音が聞こえるような無量無辺の能力はありません。

まだ悟りを開く前に、もし振動率がとても高い音を聴いたとしたら、私たち凡人の耳は傷むでしょう。科学者は、「音の振動率があまりにも高いと、私たちの耳は堪えられない」と言っています。同様にあまりにも強い光は、私たち凡人の目を傷めてしまいます。けれども悟りを開

いた時、その大きな光を私たちは受け取ることができ、その高い振動率の音も私たちは聞くことができるのです。耳を傷めることはありません。「法華経」の中にはつきりと書いてあります。これこそ本当に悟りを開いたことです。

けれども、光にも多くの種類、多くのレベルの光があります。ですから、光が見えたからといって、それでいいということではありません。ある光は阿修羅の光です。阿修羅の場所にも光があります。だから阿修羅の光を見ても、悟りが開いたとは言えません。ある人は開悟の時に阿修羅の光が見えることもあります。阿修羅の境界（きょうがい）は見えません。そのような光が見えたのは、彼のレベルがすでに阿修羅のレベルに達していたことを表しています。もし彼がしばらく続けて修行すれば、このレベルを越えることができます。阿修羅は第一の世界でしかありません。第一の世界を越えると、第二の世界に到達できます。それから第三の世界、第四、第五、第六、第七、第八へ到達するのです。

本来仏陀の光には影がありません。例えば、私たちが電灯の下に立っていると影ができます。私たちが月や太陽の下に立っても影ができます。けれども私たちが仏陀の光を見た時、仏陀の光の境界にはそういう影はありません。ですから「佛光無暗（仏陀の光に暗闇はなし）」と言うのです。多くの修行者はこのことを論争するのが好きで、この短い言葉についてあれやこれやと研究しています。それは自分に体験がないので、「佛光無暗」とはどういう意味か分からない

からです。悟りを開けば分かります。それほど論争する必要はありません。経典はなど焼いてもかまいません。役に立たないからです。

彼らは自分が悟りを開いていないのに、毎日そこで「佛光無暗」とは何か、「いわゆるコップとはコップではない」とはどんな意味なのかと論争しています。口々に「色即是空、空即是色」（存在は無であり、無の中に存在がある）」と言つて論争するのです。「色即是空、空即是色」と言いながら、一方ではある人が彼を叩くと、彼はすぐに怒ります。色即是空なら、どうして痛いのですか。経典を理解していないのに論争が好きで、多くの人と弁論をしています。私たちはちよつと聞くと、すぐにその人はまだ開悟していないことがわかります。悟りを開いた人は弁論好きではありません。弁論を最も嫌っています。最もつまらないことです。

今日ここでみなさんに講義をするのは、私が出家者だからで、これは私の責任です。しかも弟子が山に登つてやつて来て、泣きながら私にここへ講義に来くださいと頼んだのです。私はやむなく、ここへ来て講義をしているのです。本当は講義をしたくないのです。何を話したらいいのでしょうか。何を話せば彼らに私の内在のレベルが分かるのでしょうか。象を見たことのない人に象の話をして、象とは何だか分かりません。飛行機を見たことのない人に、私はどう話したら、彼らに飛行機とはどんなものか分かってもらえるのでしょうか。

この限界のある凡人の言葉で、みなさんに何を話したらいいのでしょうか。講義をすることす

ら嫌なのに、時間を浪費してまで人と弁論などする気はまったくありません。弁論好きの人はそのレベルはすぐわかります。レベルの低い人ほど最も弁論が好きです。いわゆる「色即是空、空即是色」とは一体どういう意味なのかと論争しているうちに、顔も耳も真っ赤になって、二人とも自分こそ正しいと思いい、その結果互いに敵になってしまいます。これはみな悟りを開いていないため、そうなるのです。

悟りを開くと、すぐに「佛光無暗」とはどういう意味か、「色即是空」とはどういう意味かが、わかります。論争する必要はありません。何も話したいと思いません。話したことも少なく、たとえ話しても、他人はわからないからです。悟りを開けば開くほど、話したくなくなり、今日私は大変疲れていて山の上で寝ているほうがいいと思います、私は彼ら（マスターの弟子を指す）に、「どうして私に、講義に行ってもらいたいのですか。何を話したらいいのですか」と文句を言いました。けれども、君子はたわ言は言えません。あの日彼らの誠心誠意な要請に感じ、彼らが言い出すと、私はすぐに一週間の講義をすと答えたのです。口に出した言葉は撤回することはできません。

時々私は、何も考えないで承諾してしまうのです。後からとても後悔します。澎湖に行ったことを後悔しています。あそこに行っても疲れませんでした。何も話したくありません。何を話したらいいのでしょうか。でも承諾した以上は行かなければなりません。毎回承諾した後に、後

悔し始めます。けれども、私は毎回忘れてしまって、またすぐで承諾してしまいます。毎回講義が終わると、もう次回はやらないと決心するのですが、彼らが来て、「マスター、マスター」と頼まれると、私はまた忘れてしまって、すぐに要請に応じ、「いいですよ、私は講義に行きます。私は講義に行きます」と答え、しばらくすると、また山の上で寝ていたほうがいいと思うのです。

先ほど、私は光には多くの種類があることを話しました。それぞれの世界には独自の特別な光、特別な色、特別な品性があります。もしマスターの伝法、指導がなければ、私たちは光が見えた時に、自分のレベルがどこなのか、そこはどの境界なのか分かりません。例えば、私たちが第一界の光を見た、あるいは第二界の光を見たとしても、大したことはありません。あるいは思いがけず何かの音、例えば、雷の音、太鼓の音、鐘の音、海潮音、ライオンの吠える声など、仏教の經典に述べられている、このような音を聞いたとしても大したことはありません。

聖書にも「彼が神に出会った時、神の声は雷の音のようで、神の目は大きな火のようだった」と書いてあります。この意味は大きな光があったということです。言語が違うために、時にはその表現方法が違うのです。ですから、光が見えた、あるいは音が聞こえたことが悟りを開いたということなのです。キリスト教の言い方で神が見えたと言うことです。私たちが仏教では「花

が開いて仏陀が見える」と言います。仏陀とは仏性のことです。もしあなたがマスターの伝法を受けてなく、私が先ほど言った雷の音、太鼓の音、海潮音、ライオンの吠える声などを聞いたとしたら、たぶん本人は自分は悟りを開いたと思ひ、素晴らしと思うかもしれませぬ。しかし翌日になると、これらの音は消えてしまうのです。その悟りは偶然のものです。

私たちがオウラック（ベトナム）に「犬があくびをしたら、ちやうどハエが飛び込んできた」ということわざがあり、これは偶然に起きたことを表します。突然、そんな音が聞こえたり、少しの光が見えたりしたら、私たちは悟りを開いたと思ひますが、そうではありませぬ。悟りと言えなくないですが、このような一秒間の悟りでは何の役にも立ちませぬ。不十分なものです。例えば、乳はとも良いものです。たとえスプーン一杯だけ飲んだとしても、それでも乳とは何なのかわかります。どうにか乳の味を味わえます。今まで乳を飲んだことのない人と比べるとよほどましです。少なくとも彼は乳とは何なのかわかりました。けれども、これでは栄養になりませぬか。あなたは子どもにスプーン一杯の乳をあげて、一日あげて、二、三日あげないとすれば、これで子どもは生きていけませぬか。当然ダメです。

同じ道理で、本当に悟りを開いたとしたら、それは毎日続くはずです。いったん開くと永遠に閉じることはありません。それでこそ悟りを開いたと言えるのです。音が聞こえると、永遠に聞くことができます。それでこそ悟りを開いたと言えるのです。ここの私たちの修行仲間以

外で、みなさんの中でこういうことを体験した人がいますか。いませんか。それはまだ悟りを開いていません。偶然に思いがけず光が見えたり、菩薩が見えたり、音が聞こえたりしても何にもなりません。みな幻想です。これは目の見えない猫が死んだネズミにぶつかつたようなもので、努力して得たものではありません。前もってネズミがどこにいるか知りませんでした、偶然に捕まえたのです。

本当に悟りを開いた人は毎日ネズミを捕まえることができます。いつでも一匹、二匹、三匹と捕まえられます。これこそ悟りを開いたと言えます。たとえこのように悟りを開いたとしても、やはり大したことはありません。例えば、毎日雷の音、海潮音など聞こえても大したことではありません。これはまだとても低い、とても低いレベルの音です。やはり三界以下のものです。三界すらまだ行っていないのに、三界以上のことは言うまでもありません。三界以上にはまだ他の音、その他の光、その他の境界（きょうがい）があります。けれども方法がなく、先生がいなければ、私たちは知ることができません。經典を読んだだけでは足りません。どうして足りないのでしょうか。それは經典の中に書いてあるのは、古代の修行し始めたばかりの人が書いた体験だからです。

例えば釈迦牟尼仏が五人、六人あるいは百人に伝法して、彼らはその当時、自分の体験を書きました。伝法の時に彼らは何が見えたのか、何が聞こえたのかを書いて、それが經典になっ

たのです。經典は他人の体験、古代人の体験ですから、それを読んでも何の役にも立ちません。しかも私たちが読んだ經典は依然、低い境界の体験に過ぎません。それは彼らが釈迦牟尼仏に学び始めたばかりで、その体験は伝法の時に書いたものだからです。というのは伝法の時に悟りを開いたので、それを「頓悟(とんご)」と言い、すぐに悟りを開くということです。悟りを開いた時、彼らは自分が見たものを全部書きました。ですから、まだ高い境界ではありません。

高い境界に行きたければガイドが必要です。先生が私たちを連れて行くか、あるいは私たちに高い境界には何があるかを教えてくれます。後に私たちが修行する時に比較できるのです。実際、比較しなくてもわかります。第三界まであるいは三界以上に着くと、私たちはすぐにわかります。開悟は開悟です。ビスケットを食べることは実際にビスケットを食べているので、それを疑うことはありません。三界の上に行くとき精神状態が異なり、智慧も異なり、とてもはっきり分かります。本当に大きな悟りを開いたのです。何も疑うことはありません。その時は不退菩薩(ふたいてんぼさつ)、あるいは八地菩薩になっているのです。永遠に後退することはなく、懷疑心もなく、とてもはっきりと分かります。

近代中国に一人の大師がいたそうです。聞いたのですが、彼は悟りを開いた時に、ある人が壁の外でお小水をしているのが見えたそうです。これはどういう意味でしょう。みなさんわかりますか。実際これも悟りを開いたことです。みなさんは彼にはどうしてそんな状況が見え

たのかわかりますか。壁があるのに、どうして彼には僧が外でしているのを見えたのでしょうか。これはどんな意味でしょう。(ある人が答える：開眼です) 何の眼が開いたのですか。(ある人が答える：天眼通です) 天眼通(てんげんつう)：全ての物や事象を見通す力)は悟りを開いたことではありません。天眼通は神通力です。

みなさんに言っておきますが、私たちがここに座っている時に、この肉体の他にまだもう一つ別の体があります。その体は眼を使わず、耳を使わず、鼻を使わず、口を使わず、体も使いませんが何でもわかります。これこそ私たちの霊体です。その霊体がこの肉体を離れる時、私たちはいろんな所に行くことができます。体を離れて外へ出て行くことができ、人々がどこで何をしているかを見ることができます。そして自分の体も見ることができます。私たちが死んだ時の状態に似ています。

けれども、これは少し悟りを開いただけです。私たちの第二の体が出て行ったことを表しているのです。決して大きな悟りを開いたわけではありません。本当に悟りを開いたら、この世界のことを見るだけでなく、またもつと高い境界(きょうがい)のことも見えます。高い境界の光、高い境界の音、高い境界の風景も見えます。それこそ悟りを開いたと言うのです。この霊体を使って、体から外へ出て行くこと、靈魂が出て行くことは *Astral Projection* (体外離脱)で、悟りを開くこととは違います。

悟りを開く時は光が見えます。これは靈魂が外へ出て行った状況です。といっても、實際に外に出て行ったわけでもありません。靈魂は別のものです。私たちにはたくさん体があります。これ（肉体を指す）が一つで、この中にもう一つの比較的微細な体があります。もつと中にまた一つのもつと微細な体があります。またその中にもう一つのもつと微細な体があるので。その中にまたもう一つのもつともつと微細な体があります。そして最後に一番中にまた一つの最も微細な体があります。それはもう体ではなく、私たちの本来の面目です。私たちの靈魂です。靈魂は私たちの何重もの体の中に閉じ込められているのです。

もし、私たちがこの最も外側の体（肉体を指す）をここに置いて、その他の体を全部連れて出て行って、外へ行って遊ぶと、この時私たちの靈魂、最後の体はまだその他の体に閉じ込められているのです。ですから、これはまだ悟りを開いたものではありません。ただ少し自由になって、この体を離れて行ったり来たりすることができるようになったことです。けれども大修行者は、完全にすべての体を離れて自由に出て行けます。その他の体を残しておいて、私たちの本当の主人が自由に離れることができる時、それこそ本当に悟りを開いたと言えるのです。

この最後の体、私たちの主人あるいは本来の面目とも言いますが、もしそれが私たちの体から少しだけ離れたとしても、まだ完全に離れたのではなく、少しだけ上のほうに向かって出て

行っただけです。例えばここからここまで、本来私たちの霊体は完全に閉じ込められているのですが、もしそれが上の方へ少し動いても、半分はまだ中にあり、半分が外にある時、その他の違った境界が見えるのです。例えば私たちが第一のレベルに達した時に、第一境界の光が見えます。もしもう少し高く行くと私たちは第二レベルの光が見えます。

けれども、永遠に解脱してこの世界を離れても、また戻って来ることができません。また、前と同じように再び出て行くこともできません。行きたければ行き、来たければ来ます。その時こそ「如来(によらい)」なのです。来ることもなく、行くこともないのです。とても高い境界(きようがい)でこの体を操り、この六根(ろっこん)：眼、耳、鼻、舌、身、意、六塵(ろくじん)：色、声、香、味、触、法)を操って仕事をします。そういう人はすでに如来になり、とても高く、全宇宙が見えるのです。全世界すべての場所を知っています。

ですから、私たちがそういう人に祈れば、その人はすぐにわかります。その人はこの小さな部屋の中にあるのではなく、彼は屋根の上にいるからです。山頂から見下ろしたら、台北中が見えます。飛行機から下を見るとあらゆる家が見えます。ある人は望遠鏡を使うでしょう。海で事故にあった時に、私たちが旗を振ると、飛行機の中の人はすぐに発見できて、直ちに繩梯子を下ろして私たちを引き上げてくれます。

如来(によらい)の境界も同じです。ここに来る必要はありませんが、何でも知っています。

行く必要はなく、何かを下ろして私たちを上を引き上げます。それは彼が如来だからです。とても高くして最高の境界にいるのです。ですから、至る所がすべて見えて、至る所からの声もすべて聞こえます。それが観音菩薩の境界（きょうがい）です。あなたがどこで救いを求めても観音菩薩はすべてわかります。もし観音菩薩が一人の人間だとしたら、世界中の人々が彼に助けを求めたら、彼は忙しくてたまらないでしょう。そんなに速く走ることができないからです。しかし彼は如来なので、どこにも行かなくても聞こえて、どこにも行かなくても見えるのです。それが如来の境界です。

如来の境界とは靈魂がすでに解脱していて、主人がすでに最高の境界に行っていることです。これはまるで社長が工場にいないようなものです。社長がいなくても事務室はそこにあり、労働者や秘書は依然としてそこにいます。ただ社長がいらないだけです。けれども社長は他の所にいて、電話をかけることができ工場の労働者にどうやるかを指示できます。これはまるでオートメーションの機械のようで自動的に仕事ができます。主人はいなくても機械の機能はいる時と同様に発揮できます。これが如来です。

体から外に出て行き、見るのは如来とは言えません。違います。そのような状態は遊びに過ぎず、この肉体をここに置いて外に出て遊ぶ場合、素早く移動できます。出て行それは亡霊と同じようなものです。みなさんが外国の本を読むと、わかるでしょう。アメリカの医者が死ん

だばかりの人を専門に研究しています。ある人は死んですぐ戻って来ることが出来ず。一時間か二、三時間後にまた戻って来ます。ある人は三、四日後にまた戻ってきます。みなさんそういうことを聞いたことがありますか。(ある人が答える：あります) フォルモサ、オウラックでもこんなことがありました。彼らは生きて帰ってから多くの話をしました。ある人は話そうとしますが、ある人は話しました。

アメリカではこういう報道がありました。ある人が交通事故に遭って死にました。死んだ時に彼はまるで別の体が上に乗って行くような感じがして、自分がそこに横たわっているのが見えました。多くの人があちこち走り回り、警察もやって来て何か書いていました。医者も来ました。彼はすべての事を見ることができたのです。彼が生き返ってから、お医者さんに話し、警察に話しました。これは本当のことです。その時他の人はみな、彼は死んでしまっていたのに、どうして何でも知っているのか、不思議に思いました。

それはこの肉体がそこに残り、その他の体が上に乗って遊びに行つたのです。他人を通り抜けても、他の人が彼を通り抜けても、何も感じません。私たちはこの世界において、時には亡霊が通り抜けますが、自分では少しもわかりません。死んだばかりの多くの人も同じです。その人たちが死んだ時、自分が上に乗って行く感じがします。上に行つた後、自分がそこに横たわっているのが見えます。あるいはそこに座っていたり、恐ろしい交通事故に出会つたりし

ているのが見えます。

ある人は手術の時に靈魂が出て行くことがあります。実際それは靈魂ではありません。もしそれを靈魂と言わなければならぬなら、いわゆるこの種の靈魂は私たちの智慧とは同じではありません。智慧あるいは私たちの主人は、これとは別のものです。智慧は最も内側、最も内面にあります。内面と言っても、実際内面はありません。まるで手術するように一層、一層、内側を探せば、私たちの本来面目を探し当てられる、という意味ではありません。内面と言っても内面ではなく、適当な言葉がないので内面と言っているのです。外面にあると言ったら、みなさんは外側にあるのと思うので、内面にあると言わざるをえません。けれども内面でもないのです。みなさんは後から開けて見たりして、最後に本当に本来面目があるかどうか調べたりしたら、それは大変困ります。(笑い) 見つかるはずがありません。

手術を受ける人も、時には自分が上に乗って行くのを見ることがあります。他のたくさんの部屋へ行つて遊び、他の病人がどんな状況かを見て、それからまたこの体に戻つて来ます。そして他の人にそれを話すのです。彼らは何でも知っていて、すべてをはつきりと、まるで他の人を観察したかのようにです。それは私たちが死んだ時の状況ですが、そういう状態はやはりとても低いレベルで、普通の人が死ぬ時の状況です。大修行者が死ぬ時の状態はそうではありません。彼らが死ぬ時はすぐに西方浄土へ行きます。あるいは如来になります。それこそ私たち

がなりたいと思うものです。

私たちは亡霊のように成りたくありません。亡霊の状態はたとえ普通の人でさえ知っています。ひどく凶悪な人は死んだら地獄に落ちるので、彼らはわかりません。彼らは娑婆世界に留まることができず、あちこち行ったり来たりできないので、自分の体を見ることも、親族を見ることもできません。ある人は死んだ後、相変わらず家の中を走り回り、親族に話しかけたり、彼らに触れたりしますが、親族にはそれがわからないのです。ですから、彼らはとても苦しむのです。

彼らには自分が死んだという感覚はありません。彼は自分の体が以前と同じように見えるので、死んだがわかりません。しかし、彼が話をしてても他の人には聞こえません。彼が何か食べたいと言っても誰もわかりません。彼が何をしてても人にはわかりません。それで時に彼は大きな力を使うので、私たちはそれが聞こえますが、それは誰か何かをしていると思うのです。それで亡霊がいると言ったりもします。これらの亡霊はドアをいじってバンバン音を立てたり、コップをいじってガチャガチャ響かせたり、私たちのベッドの上で飛び跳ねたりします。これは実際にあることです。その時彼はとても怒っています。一日中話しかけても聞いてくれる人がいないからです。(笑い)

彼は自分の奥さんを抱こうとしますが、彼の奥さんにも何の感覚もなく、もしかしたら他の

男性を連れて帰っているかもしれません。(笑い)彼の目の前で何かするかもしれません。それで彼はとても怒って、自分の全力を尽くして何か音を出すのです。こうして私たちは彼の存在を知りますが、彼を見ることはできません。福報が比較的に大きい人は、パワーも比較的に大きいので、一瞬肉体に変わって人に見せることができます。そこで私たちは「わっ、亡霊がいる」と言うのです。(笑い)これは実際にあることです。

私たちはそんな孤独な亡霊になりたくありません。毎日、人に話をして誰も聞いてくれず、誰かに報告したくても人々もわかりません。今死んだばかりなのに、彼の奥さんはもう他の男を連れて帰って来ています。で、彼は当然とても苦しむのです。または夫が他の女を連れて帰って来ても同じことです。ですから、亡霊になるのはとても辛いことです。口があっても話せません。体があっても使えません。何かしたくてもできません。とても苦しいです。私たちはそんな状況になりたくありません。私たちが望むのは死ぬ時に自分で自分をコントロールできることです。私たちには選択の権利があり、行きたい所に行けます。亡霊にコントロールされることではありません。とても孤独でどうしていいかもわからず、誰にもわかってもらえないので、墓場に行って他の亡霊たちと話をし、一緒に住むほかありません。本当にとっても不幸せなことです。

けれども、良い修行者は自在に往生できます。離れる前にもう分かっています。どこへ行く

かもう知っているのです。これはまるで自在な君子のようです。行きたければ行き、来たければ来ます。魔や亡霊に連れていかれるようなことはありません。それは君子の気高い風格ではありません。私たちは人間になって、何も悪いことをしていないのに、なぜまるで犯人のように、魔に捕まえられるのですか。私たちは決してそういうことは好みません。私たちは修行して、この主権を握らなければなりません。行きたければ行き、いつ往生するかを前もって知り、自分の奥さん、夫、息子、弟子に、「私は三日から五日後に往生します。準備してください」と告げます。これこそ立派な人間の風格です。来るなら来る、行くなら行く、自由自在です。魔に捕まることもなく、話しても聞かない人もなく、もし自分に生死の主権がなければ、本当に人間としての価値がありません。

本来亡霊のレベルは私たちより低く、彼らは私たちの使用人です。けれども、もし私たちが悪い人になれば、彼らも私たちを逮捕して処罰することもできます。これはまるで、警察は本来大統領の部下ですが、もし大統領が国の法律に違反した場合は、やはり逮捕されて刑務所に入れられて処刑されるのと同じです。その時大統領は何の権力もありません。私たちが言う三途とはどういう意味でしょう。それは餓鬼、地獄、畜生です。ですから亡霊は本来私たちより低いのです。けれども、私たちが死ぬ時、彼らに引っ張られ、捕まえられてひどく罵られて殴られるのです。こんなことでは、面目を失ってしまいませんか。気高い風格がなくなりません

か。私たちはこういう事態にならないようにしなければなりません。

本当の大修行者は最も高貴です。彼は往生する時は仏陀について行きます。音楽に迎えられ、天使が歓迎します。仏陀や菩薩が歓迎します。不退菩薩に付いて行けば魔に連れて行かれることはありません。もし修行しなかったり、良く修行しなかったりすると、彼らに捕まえられて、殴られ、罵られ、縛られます。これは君子の生活ではありません。人間の生活ではありません。

私たちはこの世界で生活して、自分の体につけて仕事に励み、少しお金を貯めれば、年をとってから、老後の生活費になるのです。それなら、私たちは同じように功德を積んでおいて、死んでから使えるようにするべきではありませんか。これは老後のためのお金より重要です。老後のためのお金は使えないかもしれません。もしかしたら私たちは明日死ぬかもしれないからです。まだ年老いていないのに死んでしまかもしれないのです。死は避けて通れないことです。いつかは必ず死にます。死ぬ前に功德を積み、修行に励めば、私たちが死ぬ時には使うことができるのです。これこそ人生で最も重要なことです。老後のためにお金をためることより重要です。

MQ マスターにお伺いします。あなたが修行する時、どんな大きい魔の障害がありましたか。私が修行する時にも魔の障害がありました。ないはずがありません。(答える…話してく

ださいませんか。」私の魔の障害をあなたに聞かせてなんの役に立つのでしょうか。（笑い）

（答える：それなら伺います。あなたの修行の助けとなる縁は何ですか）私の弟子は私の外力、私の助けとなる縁です。彼らは私を行かせてくれないからです。魔の障害といっても大したことではありません。おもしろいです。少なくとも私にとっては、おもしろいです。なので特に話すことはありません。何でもありません。魔の障害は私たちのパワーを深めてくれます。克服できれば私たちにとって助けとなり、もし克服できない場合は煩わしいことになります。実際、魔の障害といっても何の魔障でもありません。私にとっては何でもありません。ただ一種の世界の現象にすぎません。何でもありません。私はあらゆる所で修行することができます。

Q メディテーションの時に、とても微細な音が聞こえてきます。本には音に執着してはいけないと書かれていましたが、これは正しいですか。

M ある音は良くないですが、ある音は良いからです。もしあなたの好きな音がとても低い境界の音だったら、あなたにとっては当然良くないのです。だから執着してはいけないと言うのです。例えば私の弟子が私に「マスター、私はいくつかの音が聞こえてきました。とてもきれいな音です」と言ったとしたら、私は「ある音はレベルが低いので、聞いてはいけません。他の音を聞きなさい」と答えます。けれども、彼はそうしたくないので、「この音は他のよりきれ

いです」と言いました。この時私は「執着してはいけない。他の音はきれいでも、境界は高いのです」と彼に言います。

ですから本を読んでもあなたには立ちません。本は修行した人が書いたものなので、彼ら自身にとっては役に立つのです。それは彼らがマスターの教えを書き留めて、後から読み返すことができます。あるいは彼らのマスターが彼ら宛に書いた手紙で、中に教理があるものです。しかし、あなたには聞こえてきた音が何なのかは分かりません。マスターの指導がないからです。あなたは観音法門を修行していますか。（答える：修行していません）自然に聞こえたのですか。（答える：私は大悲咒を唱える時に聞こえたのです）時には、私たちは思いがけず何かの音が聞こえる時もあります。けれども先生の指導がなくては、私たちはこの音の良し悪しがわかりません。ですから、やはり執着しないのが最も良いことです。音はたくさんありますが、あなたはその境界（きょうがい）が分からないのです。

Q 光の色彩とは何ですか。どういうふうに光のレベルをわけるのですか。

M この質問については、ここでは話すことはできません。それはたいへん多くの状況があるからです。私はこんな短い時間内にこれの一つ一つ説明することはできません。法を伝えてから、個人の状況に合わせて指示をします。これは内在のことです。私はここであなたに話すこ

とはできません。

Q 私の姉は黒い色あるいは白い色の服を着た修行者が見えると言っています。けれども私たちは肉眼でそれを見ることはできません。

M こういうことはたくさんあります。空中にはたくさん無形の衆生がいて、ある人には見えます。たとえ犬でも魔が見えます。犬がワンワンと吠え続けるのを見ると、周りには人はいないのに、犬は誰かに飛びつかんばかりに大声で吠えているのは、犬の目には無形の衆生、または魔が見えたに違いありません。あなたが言っている「黒い」もの、「白い」ものが見えたのです。けれども、もし黒いものだったら、それはきつと修行者ではありません。修行者はとても明るいのです。

Q 在家の人はどんな法門を修行すればいいかわかりません。どのように修行すればいいですか。観音法門はどのように修行するのですか。

M 修行の第一は道徳です。五つの戒律を守ることです。殺生しない、盗みをしてない、邪淫をしない、嘘をつかない、酒を飲まないことです。酒を飲まないの中には麻薬を使用しない、タバコを吸わないこと、あらゆる過激なるポルノ、暴力の映画、ポルノ雑誌などを見ないことが含まれます。殺生しないの中には、間接的な殺生もしてはいけないことが含まれます。この意味はビーガン（完全菜食）でなければならぬということです。そして阿弥陀仏を唱えます。

在家の人は他の法門を修行しても構いません。それはあなたの自由です。私の在家の弟子たちはみな観音法門を修行しています。もしあなたは本当に解脱を望むなら、学びに来ていいです。私が教えますよう。



仏陀とは何か

スプリームマスター チンハイ フォルモサ・台北

一九八七年三月十日

昨日、私に真理とは何ですかと質問した人がいました。私はそのことは話したくありません。みなさん、どうしてだかわかりますか。真理とは本来話すことができないものだからです。説明しようとしても言いつくせません。実際、うまく話せません。真理とは自分で体験してこそわかるものです。弁論が好きの人や真理について語るのが好きな人は、まだ真理が分かっていないこと表しています。と言うのも、老子は「知者不言，言者不知（知るものは言わず。言うものは知らず）」（道德経第五十六章）と言っています。もし、真理とは何かをどうしても知りたいということなら、それは一種の生活方式であるとかろうじて言うことができます。なので、釈迦牟尼仏は真理を代表し、老子は真理を代表しています。イエス・キリストも真理を代表しています。なぜでしょう。それは彼らの行き方こそ真理だからです。

本来私たちも真理を代表していましたが、多くのカルマに取り巻かれたため、自分が真理で

あることも知らず、自分の本来の面目、主人、純粹な心や天国が見えないのです。仏陀や菩薩は真理を代表しているので、真理とは何かを知りたければ、仏陀や菩薩に聞かなければなりません。釈迦牟尼仏は「佛在心（仏陀は心にある）」と言っています。どんな衆生も仏性があるとしたら、なぜ誰にでもそれを聞くことができないのでしょうか。なぜ必ず一人のマスター、または仏陀や菩薩に聞かなければならないのでしょうか。仏陀や菩薩はすでに真理を認識していて、もう彼らは真理になっているからです。ですから、私たちが真理は何かと質問したければ、一人のマスター、または在世の仏陀や菩薩に会いさえすれば、自然に答えを受け取ることができるようです。

真理とは説明しようがありません。何時まで話しても話しきれないのです。釈迦牟尼仏は四十九年間、これを説きましたが、しかし、彼は弟子たちに対して「私が知っていることは森林の木や葉のように多いですが、私があなたたちに話して聞かせたことは、私の手のひらにある木の葉くらいです」と言いました。釈迦牟尼仏でさえ完全に全部の真理を説明することができないのに、どうして私にできるのでしょうか。

質問する人の中には、真理を渴望し、智慧を求めているわけではなく、ただ弁論して人々に自分がどんなに偉いか、自分のレベルが私よりも高いと見せたいだけの人もいます。彼は自分は執着がないから、肉を食べるのも菜食するものと同じだと言います。これでは肉を食べるの

も人間を食べるのと同じだと言ふことになります。というのは、彼にとつては、肉食するものも同じだからです。将来食べる動物がいなくなつたら、同じように人を食べるかもしれません。そういう人ほど、こんなことをするのは、ただ弁論だけが好きで、本心から勉強したいのではありません。誰かがある場所で講義をしていると聞くと、すぐに論争しに行きます。決して心から謙虚に道を求めるようとしていないのではありません。エゴがあまりにも大きく、すぐに断ち切ることが難しいのです。

ですから、私たちは質問内容を聞くと、すぐにその人のレベルがわかります。それで古代では一人の大師が弟子に法を伝える前に、弟子はいつも数多くの試練を受け、多くの質問に答え、大師がその弟子にエゴがなくなつたと確定できるまで質問しました。傲慢でなくなつた時、法を伝えることができます。

およそ四、五百年前、インドに大変有名な大師がいました。彼にはとても多くの弟子がいました。彼の名前はカビールといい、とても貧しい人でした。インドには四つの階級があり、彼が一番下の労働者階級に属していました。その階級の人はインドでは、取るに足りない存在ですが、彼はとても有名で、とても智慧があり、大きな悟りを開いた人であり、彼は仏陀なのです。ですから、多くの人が彼のところへ来て学びました。彼の弟子の中に一人の王子がいました。高貴な地位を放棄し、彼について学び、彼と一緒に何年も住みました。けれども、カビー

ルは彼に法を伝えませんでした。他の人が法を求めて来たら、彼はすぐに法を伝えたかもしれませんが。あるいは少ししたら、法を伝えたいでしょう。

けれども、彼はその王子に法を伝えませんでした。何年たつてもまだ法を伝えませんでした。毎日彼に洗濯させたり、掃除をさせたり、便所掃除をさせたり、ごみの処理をさせたり、ご飯作らせたりしました。ある日カビールの奥さん（以前は彼の奥さんでした。後にカビールは彼女を修行仲間に導きました。夫妻関係はありませんでした）は、彼に「この王子はこんな長い間あなたに奉仕しているのに、あなたはどのようにして法を伝えてないのですか」と聞きました。

カビールは「彼はまだ純粹ではない。まだ清浄ではない」と答えました。彼の奥さんはそれが信じられなくて「そんなことはないでしょう。彼は私たちと一緒に何年も生活しました。彼はとても謙虚です」と言いました。カビールは「ちよつと試して見ればわかります。明日朝、彼がここを通る時に、あなたは彼の頭の上にごみを捨ててごらん下さい。そして隠れなさい。彼には、あなたが誰だかを見えないようにしなさい。そして彼の反応がどうか、見ればわかります」と言いました。彼の奥さんは指示通りにしました。その結果、王子はとても怒り、「もし、私が誰だかを知っていないながら、あえてこんな事をしたなら、どんな事になるかわかつてますか」と言いました。カビールと奥さんは後に隠れて、笑っていました。カビールは「ごらん下さい。私が言ったことに間違いはないだろう」と言いました。この時、彼の奥さんはもう何も

言えませんでした。

何年か過ぎて、カビールの奥さんはまたあの王子がかわいそうだと思いました。彼は何をしても忍耐力あり、すでに長い間先生に奉仕していますが、まだ正式な伝法はなく、ただ彼に初歩の方法、たとえば呼吸、念仏、礼拝などしか教えていません。本当の観音法門を彼に伝えていません。彼の奥さんは「今なら、彼に法を伝えてもいいのではないだろうか」と言うのと、カビールは「明日、あなたはもう一回試してみなさい。明日の朝、彼があなたの部屋の前を通る時に、あなたは尿瓶の汚物を彼の体にかけてみなさい。そして、どんな反応をするか見ればいい」と言いました。翌日、彼の奥さんはその通りにしました。彼女は尿瓶の汚物を彼にかけてから、自分は隠れて見ていました。その結果、王子は頭を左右に振りながら、「私の内面はまだこれよりも汚い。私は最高の神に感謝します。今日、自分がこの尿瓶の汚物よりも汚いことを気付かせてくれました」と言いました。その時彼は跪き、空に向かって三回礼拝してから、風呂に入りに行きました。

その時、カビールは「今日、伝法できる」と言いました。伝法する時、もし彼のエゴがあまりにも大きければ、何の役にも立たないからです。たとえ無理に伝法したとしても彼は消化できません。消化できたとしても高いレベルに達することはできません。ただ魔王の部下か、魔王になれるだけです。

古代から今日まで、伝法の前に大師たちはまず道徳を教えます。まず弟子の傲慢な心をきれいに洗うのです。というのは、私たちはこの世界においてさまざまな地位にあるからです。ある人は医者で、ある人は部長、ある人は校長先生をしています。もし、私たちの社会的地位がとても高ければ、多くの人に尊敬されています。そういう人が一人の法師に礼拝し、彼の弟子になり、頭が鈍重で、世間のことは何も知らないような人間になることは、とても困難であり、容易なことではありません。時には、大師たちは必ず厳しい方法で訓練しなければなりません。毎日キャンデー、ビスケットをあげればよいものではありません。ここでは講義が終ると、私はビスケットとキャンデーをみんなに分けていますが、本当にマスターの弟子になるとしたら、そんなに簡単なことではありません。当然キャンデー、ビスケットもありますが、まだ他の事もあります。苦い薬もたくさんあるし、他に辛い贈物もあります。

私たちが病気にかかったら、いろいろな薬を飲んでこそ病気はよくなります。重病であれば、手術をしなければなりません。手術をしなければ死んでしまうからです。ですから、早く手術したほうがいいです。生きられれば生き、生きられなければ死にます。治療の時間を引き延ばしてはいけません。同様に、試験に耐えられない人は、早く離れたほうがいいのです。それがその人にとって良いことです。

釈迦牟尼仏が「法華経」を説いた時に、五千人の人がその場を去りました。というのは、彼

が説いた法門は最高の法門で、それまで彼らは聞いたことも学んだこともなかったからです。ですから、多くの傲慢な人は「私は経典をすべて暗誦している。あれだけの僧侶を訪問した。どんな法門もすべて学んだ。なのになんと、これまで聞いたことのない法門がもう一つあるなんて、私は信じられない」と思ったのです。ですから、五千人の人が帰ってしまいました。その時、釈迦牟尼仏は少しも失望しませんでした。彼は「よろしい。私たちの法会には、今本当に良い種だけ残りました。悪い種は逃げてしまい、風に吹き飛ばされました」と言いました。

私は以前は人を信じすぎていました。いつもすぐに人に法を伝えました。今になってみると、多くの人はそれほど求道心もなく、渴望もなく、レベルもそれほど高くないために、この奥深い法門に対して誤解しています。ですから、私は今はもう簡単には法を伝えません。講義をしてもう一週間になりますが、まだ何も伝えていません。以前は一日か二日講義をすれば法を伝え、または友達で紹介だけで来た人にも法を伝えたのです。今はそうはいきません。無理に伝えしません。悪い種が離れて行ってから伝えます。

「法」は安売りできません。私たちの法門は決して多くの人に知ってもらいたいのではなく、多くの弟子を集めて知名度を上げるためのものでもないのです。そうではありませぬ。観音法門はそんな安っぽいものではありません。安いものは多くの人が買うことができます。貴重なものはそう簡単に買えるものではなく、それほど多くの人に売れるものでもありません。です

から、徐々にやりましょう。みなさんに忍耐力があれば手に入れることができますが、忍耐力がなければそれまでです。頭が良すぎる人もやめた方がいいでしょう。私は純粹で、一見愚かそうに見える人や、本当に謙虚で道を求め、真理を学びたい人に教えたいのです。多くの事を知りすぎている人は、すぐここから離れて行っても構いません。多くの事を知っていると、頭脳にはあまりにも多くの石が埋まっています、私たちの宝石を置く場所がないからです。

昨日、私は石の話をしました。ある人の頭に石があまりにも多く詰まっていたので、家に帰って、自分でその石を消化して取り除くよう勧めました。そうして初めて、自分の内面の高貴なものを見ることができるようになりました。どうして彼らにはあんなに傲慢な態度をするのでしょうか。それは彼らが経典に囲まれ、多くの先入観に囲まれ、複雑な生活により汚染されているからです。ですから、彼らは真理を聞いても消化することができません。ある人は講義を何回か聞きましたが、いまだにあんな愚かな問題を抱えています。それは耳を貸そうとしないからです。人はそこに座っていても、智慧が開かないと役に立ちません。例えば、雨が降っている時、レインコートを着て自分をおおったら、大雨が降っても私たちはちっとも影響されません。レインコートにおおわれているからです。

同様に、私たちは多くの経典を読んで、自分でもう良く分かっているつもりでいますが、実際は何も分かっていないのです。経典の中で釈迦牟尼仏は「私たちは必ず仏陀に出会ってこそ、

仏陀になれる。仏陀について学んでこそ仏陀になれる」と言っています。けれども、仏陀に出会うことはそんなに容易なことではありません。最も福報のある人だけが、仏陀に出会うことができるのです。仏陀の名前を聞いたり、仏陀を一目見たりすることすら、簡単なことではありません。ましてや彼の弟子になることはなおさら難しいことです。

仏陀とは何でしょう。みなさん知っているように、仏陀とはブツダです。これは梵語（サンスクリット語）から訳したものです。梵語では Buddha です。Buddha は偉大な開悟した人を指しています。どんな人でも、いつであろうと、どこであろうと、大きな悟りを開いたら、私たちはその人を仏陀と呼びます。しかし、本人は自分で仏陀であるとは言いませんが、仏陀に間違いありません。

イエス・キリストは仏陀であると誰も言っていないませんが、彼は仏陀です。老子は仏陀であるとも誰も言っていないませんが、彼はやはり仏陀なのです。仏教徒はこんなことを言えないかもしれませんが、私はみなさんに話して真理をわかってもらわなければなりません。私は確実に分かっています。しかし、私がこれを他の仏教の僧に話したら、彼らは私のことを外道だと言うかもしれません。けれども、私はそんなことにかまっていられません。老子は称賛に値するので、私は彼を称賛するのです。イエス・キリストも称賛に値するので、私はイエス・キリストも称賛するのです。もしみなさんの中に偉大な開悟者がいて、イエス・キリスト、釈迦牟尼仏、あ

るいは老子のような大きな悟りを開いているとしたら、私はあなたを称賛し、礼拝し、あなたを仏陀と呼ぶでしょう。

仏陀とは一種の名称にすぎないからです。医者、介護士、警察官などと同じように、医者の仕事に携わっていて病人の治療をしていれば、誰であろうと彼を医者と呼びます。警察の制服を着て警察の仕事をして、警察の責務を担っていれば、誰であろうと彼は警察官です。世界中に警察官が一人しかいないことはありません。同じように、華陀（かだ：古代中国の有名な医者）だけが医者であるとも言えません。華陀があんなに有名であっても、あんなにすばらしい医者であつたにしても、いずれにせよ彼は過去の人です。現在依然としてたくさんの病人がいます。いつの時代にも病人がいます。私たちは華陀が救いに来るのを待つことはできません。病気にかかれば、現在の医者を探さなければなりません。もし私たちが華陀だけを尊敬して華陀だけを信じて、その他の医者信じなければ、私たちが病気にかかった時、華陀は救いに來てくれるのでしょうか。來てくれません。彼はもう往生したからです。彼の仕事はもう終わったのです。

同じ道理で、「仏陀」とは一人の修行者が修行して道（タオ）を得た人のことです。彼は「道（タオ）」とは何であるかを知っていて、この道（タオ）を私たちに伝えることができます。また、私たちがこの道（タオ）を見つめるよう導いてくれます。そういう人が「仏陀」です。釈

迦牟尼仏は何千億にも化身することができます。そういう人も何千億にも化身することができます。釈迦牟尼仏は人を天国、仏陀の世界へ連れて行くことができます。そういう人も人を天国、仏国土へ連れて行くことができます。釈迦牟尼仏の弟子たちは「普門品（ふもんぼん）…観音経のこと」を書きました。「普門品」「華嚴経」には、多くの弟子たちの修行体験が記載されています。そういう人の弟子たちも同じ体験ができます。釈迦牟尼仏の弟子には神通力があります。そういう人の弟子にも神通力があります。釈迦牟尼仏は天国へ行くこともでき、地獄を見てまわることができました。そういう人たちも同じことができます。釈迦牟尼仏の弟子たちが行く先々には福報がありました。誰でも釈迦牟尼仏の弟子と関係のある人は、多くの福報があるのです。そういう人たちもどこへ行ってもそこには福報があります。もし釈迦牟尼仏に光があり、智慧やパワーがあるなら、そういう在世の仏陀にも同じものがあります。

当然、全ての弟子が同じパワーを持っているわけではありません。釈迦牟尼仏の弟子たちも同じです。みな同じパワーを持っているわけではありません。もし現在そういった道を得た人がいれば、私たちは当然、彼を「仏陀」と呼ぶことができます。私たちは、仏陀は天国や極楽世界に住んでいて、彼らを見ることができないかと思っています。もしそうなら、私たちはどうやって彼らを知ることができるのでしょうか。どうやって彼らと会うことができるのでしょうか。仏陀は天国にいることは間違いないですが、しかし彼らは下へ降りて来て、人に化身することができます。

できます。彼らは何千億にも化身することができ、人間に化身して、私たちに見せることは容易いことです。もし彼が人に化身できなかつたら、私たちは誰から学ぶのですか。人だけが人を教えられるのです。そういう人は外見は人ですが内面は仏陀なのです。

私たちはよく、「どんな人にも仏性があり、仏陀は心の中にある」と言いますが、この言葉は間違っています。けれども、私たち普通の人はまだこの仏陀を見たことがなく、まだ自分の中の仏陀を自覚めさせていません。まだ見つけていません。けれども、在世仏はすでにそれを発見していて、自身の仏性がどこにあるかわかっていて、すでに仏陀になっています。彼は仏陀と一体です。ですから、もし私たちが仏陀を探したければ、そういう人を探さなければなりません。そういう人の内面は仏陀です。その人を拝むことは、その人の完全に発展した内面の仏性を拝むことで、その人を拝んでいるではありません。

例えば、どんな人でも医学を学ぶことができて、みな医者になれます。けれども、卒業した医者は、能力を十分発展させた人で、学び終わった人です。だから患者の病気を治すことができ、さるのです。私たちが病気にかかった時に、まだ卒業していない、未来の医者に診てもらったり、普通の人に病気を治してもらったりするわけにはいきません。そういう人は将来医者になる可能性がありますが、必ず一人の卒業した、豊富な経験のある医者を探さなければなりません。同じ道理で、仏陀は心の中にありますが、ある人はまだ心の中の仏陀を発見していません。

ある人はもう発見しています。なので、私たちが仏陀を探したければ、もう仏陀を発見した人を探すべきです。そういう人の内面には仏陀が存在するからです。

ですから古代から今日まで、修行したい人はまずそういうマスターに弟子入りをします。経典にも書かれているように、必ずそういう仏陀を探してこそ、仏陀になることができるのです。けれども、大部分の人は経典の意味を誤解して、木像の仏陀や石像の仏陀を拝みに行き、自分の内面の仏陀を探すのを忘れていきます。内面の仏陀は置き去りにされ、カビが生えそうです。見つけてくれないし、世話もしないで、洗ったり、見つめたり、拝んだりもせず、通じ合うこともないからです。外の木像の仏陀をばかり拜んでいるので、内面の仏陀は泣いて、孤独でカビが生えるほどです。そんなことをしても、私たちは依然として仏陀とは何か分かっていません。こういう人は道を求めることはとても困難です。なぜなら、木像の仏陀に引っぱられ、木像の仏陀に縛られ、経典に縛られ、本の虫、木の虫になってしまったからです。彼らの心の中には木像の仏陀や、経典しかないのです、彼らはそういったものと何の違いもありません。そういう人の心は開いていなく、態度も寛容ではないので、これではいつ解脱できるのでしよう。

雨が降っている時にレインコートを着ていないと、全身が雨に濡れてしまいます。同様に、一人の在世仏や大修行者の前では、目に見えないレインコートで自分を包まなければ、多くの福報が得られます。ある人は講義を聞きに來ただけでも、とても良い体験がありました。ある

人は大師を一目見ただけでも、家に帰るとすぐにとっても良い体験がありました。それは彼らの心は明るく開かれていて、彼らのレベルがすでにとても高いから、そのような福報を受け取ることができなのです。そうでなければ、たとえ仏陀の前に座っていても、地獄に落ちることがあります。釈迦牟尼仏が在世の時に、何人かは彼の目前で地獄に落ちてしまいました。それは「エゴ」がまだ断ち切れず、傲慢な心や悪い心をまだ断ち切れず、仏陀の前で尊敬の心も起きず、自分がとても偉大であり、多くの事を知っていて、仏陀より素晴らしいと思ったからです。

昨日ある人が菜食について聞きました。その人は肉を食べるのが大好きだそうです。私は肉を食べるのは良くありませんと言ったら、彼は気分を悪くしました。時には状況が許さないために菜食できないこともあります。これは傲慢とは関係なく、傲慢ではありません。時には状況により本当に菜食ができないこともあります。これは理解できません。でも、ある人は肉が大好きなのでやめられず、それでわざと口実を探したり、とても傲慢になったりするのです。そういう人は自分は何にも執着せず、修行は執着しないと思っっているのです。自分のレベルは釈迦牟尼仏より高く、イエス・キリストより高く、老子より高いかのように振る舞います。これらの歴代の大師はみな肉を食べていません。彼は自分が六祖慧能よりも高いと思っています。六祖慧能は獵人の一団に隠れて修行をした時でも、野菜しか食べませんでした。彼はどうして肉を食べないのかと聞かれた時に、お腹が痛いから、肉を消化することができないからと答え

ました。彼は自分が修行をしているとは言えませんでした。その時は逃げて隠れていたの、あまり人に言いふらすことはできなかったからです。その頃、六祖慧能はすでに衣鉢（いはつ）を授かっている、中国の禅宗の第六代目の祖師になっていました。なのに、彼はそんなに謙虚で、そんなに菜食に「執着」して、肉を食べませんでした。

昨日の質問した人は、きつと六祖慧能よりレベルが高いのでしょうか。だから私は彼を教えられません。私が伝えている法は、六祖慧能から代々伝わって来たもので、私は六祖慧能を尊敬しなければなりません。彼が肉を食べないなら、私も肉を食べません。釈迦牟尼仏が梵網経（ぼんもうきょう）の中で言っているように、菩薩の戒律を受けた人はみな肉を食べてはいけません。けれども多くのいわゆる仏教徒は、この点は重要なことではないと思っています。彼らは私に「どうして菜食なのですか、釈迦牟尼仏自身菜食していなかったですよ」と質問します。

釈迦牟尼仏が菜食でない誰が言っているのでしょうか。こういう質問をする人は、きつとインドに行ったことのない人です。見たことがないのに、どうしてわかるのですか。むやみな憶測です。もし、釈迦牟尼仏が菜食をしていなかったとしたら、どうして彼の弟子に菜食をすることを教えたのですか。梵網経（ぼんもうきょう）の中で、彼は絶対に肉を食べてはいけませんと言っています。楞嚴経（りょうごんきょう）の中では、肉を食べると魔になると言っています。楞伽経（りょうがきょう）の中でも、肉を食べると亡霊になる、魔になると言っています。

す。彼ははっきりと言っています。もし彼自身が肉を食べていたら、どうして自分の弟子に菜食をするよう教えることができるのでしょうか。

あなた自身がしていることは、あなたの弟子に教えることができます。他人にこうしなさいと教えておいて、自分が反対のことをしてはいけません。昨日の質問者は多くの経典を読んでいるなら、どうしてそんな小さいことさえ分らないのでしょうか。なのに自分は何でも知っていると言張し、修行者は執着してはいけないなど言うのです。彼から見れば、自分は歴代の大師よりもレベルが「高い」のです。過去の大師たちは「執着しすぎて」、自分だけは「執着しない」ことになります。彼ははたして経典についてどれくらい知っているのでしょうか。大胆にも大衆の前でこんな話をするのは、あまりにもレベルが低く、智慧が開いてないからです。あまりにも低いので、上へ引き上げることができません。頭の中は石でいっぱい詰まっています。石が多すぎて重すぎます。そういう人は私たちの法門は受けられません。まだその時期が来ていないからです。

私たちはどんな衆生にも仏性があることを知っています。けれども、どんな衆生も仏性を探し出せるわけではありません。それはまだ智慧が足りないからです。まるで外は雨が降っている時、レインコートを着て、自分を覆っていれば、どんなに大雨が降ったとしても濡れないようなものです。みなさんは白檀の木は品質がとても良いことを知っています。例えば山林の中に、

一、二本の白檀の木があると、白檀の香りが少しずつ広がって山全体に香ります。こういう植物は他の草木に影響をして、他の草木もとても香りがよくなります。最終的にはどれが白檀の木か、どれが白檀の木でないかを見分けることさえできなくなります。みな同じになるのです。

これは香水と同じで、香水店に入ると何も買いたいと思わなくても、とてもよい香りをおかぐことができます。時には店長が少し香水をつけてくれると、家に帰ってからも一日中いい香りがします。たとえ香りをかぎたくなくても、ずっと香りは続きます。したがって雨の時、自分の体をレインコートで覆ってしまえば、体は濡れません。または鼻が詰まっている場合も、香りを嗅ぐことはできません。

同様に、どんな衆生にも仏性はあります。けれども、ある人は探し出せませんが、ある人は探し出せません。私たちは完全に仏性を探し出した人を「仏陀」と呼びます。もし私たちが仏陀を探したければ、そういう人を探すべきです。その人は仏陀だからです。その人から学べば、私たちの仏性を探し出すことができ、私たちも同様に仏陀になれます。仏陀になれなかつたら、その人に従って学ぶ必要はないのでしょうか。もし毎日仏陀を拝み、仏陀の靴を洗い、仏陀の靴を磨くだけなら、当然仏陀になることはできません。いくら良い白檀でも、石にその香りを移せません。ですから、そういう石はすぐに取り除くべきです。家に持ち帰っても使いものになりません。木こりは決してこのような石は家に持ち帰って使うことはありません。た

とえ、その石が白檀の木とどんなに似ていても使いものにはならないのです。

どんな時代にも、そのような石のような人がいます。白檀の木と同じ場所にあっても、少しも影響されません。といっても、これは何も失望するようなことではありません。人々は元々そういうもので、レベルが同じではないからです。ですから、伝法をする時に人を見なければなりません。時にはマスターはとも慈悲深いので、多くの人が一緒に来て法を求めると、その中の一人を追い返すわけにはいかなくなるのです。分け隔てができないので、やむなくそのような人にも伝法するのです。しかし、マスターはそういう人に法を伝えても、無意味なことだとわかっていきます。釈迦牟尼仏は提婆達多（デーバダッタ）に伝法しましたが、後になって提婆達多は裏切りました。釈迦牟尼仏は決して分からなかったわけではありません。分かっています。ただ彼に言わなかっただけです。

私の弟子の中にもそういう人がいます。提婆達多と同じことですが、私は別に構いません。そういう人にはあまりにも多くの石が埋まっているので、徐々に取り除かなければなりません。けれども、彼らにも彼らの役目があるのです。一人の大師は人々のカルマをたくさん背負っているのです、もし大師を誹謗する人がいなくなったら、カルマを早く消し去ることができないのです。人からの誹謗がたくさん受けて、それに対して感謝の心でいれば、比較的早くカルマが軽くなります。もしみなさんが私を誹謗するなら、私はとても感謝します。ただ目の前で誹謗し

た方がより好ましいです。裏で言っても私には聞こえないので役に立ちません。そのような誹謗をする人は愚かものです。もし君子であれば、他人の目の前で言います。後ろでブーブー言っただけの意味があるのでしよう。子どもと同じで、また裏で人の善し悪しを噂する人と同じです。私に会う時はみな甘い言葉で「マスター、あなたはとても慈悲深いです」と言いますが、裏では極まりない誹謗をします。

インドや他の地域では、在世仏や、在世菩薩が現れると、弟子たちは彼をたいへん尊敬します。その弟子たちが大師に従い真面目に修行すれば、みな高いレベルの体験が得られ、弟子たちもその大師が誰なのかを分かっています。だから、そういう大師をとっても崇拜しています。彼らには見ることでできない仏陀や神は崇拜しません。そのような偉大な修行者は仏陀、神と一緒にいるからです。彼らは肉体がありますが、彼の本当の主人はこの肉体ではなく、本当の主人はとても高い境界（きょうがい）において、この肉体の言動を指揮しています。時には本当の主人が大師の肉体に戻ることがありますが、戻って来ない時もあります。この肉体は機械と同じように、指示に従って動いているのです。

私たちはUFOや飛行物体が地球に来たとよく聞きます。そして、それを見た人がいます。そのような宇宙人はとても背が低くて、頭から足まで衣服に覆われています。彼らはあちこち見て回り、資料を作成して、私たち地球の状況を参考にするのです。私たちは、彼らは天人か、

阿修羅か、高い境界（きょうがい）の人だと思っておりますが、違います。もし高い境界の人だつたら、とてもきれいであんなに小さくはありません。歩き方もあんなふうではありません。全身を覆い隠して目だけ出していることはありません。ですから、彼らは天人ではありません。

天人はとても美しく、とてもきれいです。私が講義をする時、あるいは七日間リトリートの時に、天人が私に会いに来ることもあり、私の弟子の中に見た人がいます。彼らはとてもきれいで、美しい服を着ています。それこそ本当の天人なのです。あの飛行物体から降りて来る人は、実際は人間ではなくロボットなのです。そういったUFOは人間の操縦士は必要ありません。ロボットでも操縦できるのです。ある場所に飛んで行ったら、ロボットは自動的に降りて来て各所を見て回り、資料を集めるのです。天人自身がUFOに乗ってここに来るのではなく、ありません。当然、彼らも来る時があります。最近ある高い境界の人が来ましたが、そういう人は普通の人の目には見えません。

仏陀になった人も同じです。彼自身、毎日体の中にいるわけではなく、彼はとても自由自在に、宇宙を回ることができ、どこにでも、どの境界にも存在できます。ですから、彼を「如来」と言います。来るが如く行くが如く。その意味は来ることもなく行くこともなく、どんな場所にもいるのです。来る必要もなく、行く必要もないのです。けれども、どんな場所でもどんな境界でも、彼を見ることができのです。そのような人を探し出すことは簡単ではありません。

もし、彼が在世の時に会えたら、私たちは彼を仏陀、菩薩と称賛しますが、彼自身は、決して自分は仏陀だとか菩薩だと名乗ることはありません。真の仏陀や菩薩は、自分は仏陀だ、菩薩だなどとは考えません。ただし、この世界の言葉を使って言うなら、または経典を使って照合すると、私たちは彼が仏陀や菩薩であることがわかるのです。ですから、彼らの弟子は彼を仏陀、菩薩であると称賛するのです。決して彼が自分で言っているではありません。その後一人から十人に伝わり十人から百人に伝わり、その結果多くに知り渡るのです。

そのような在世の仏陀や菩薩に出会った時、私たちが本当に尊敬し、崇拜するなら、真の福報があります。例えば、観音法門の修行者でありながら、そのようなマスターに対して尊敬の心がないというのは、その人のレベルが高くないことを示しています。最高でも三界以下の第三の世界までしか行けません。その世界にはカルマはありませんが、いつかは三界も破壊されてしまいます。というのは、三界以下は成、住、壊、空（発生、成長、破壊、消滅）のレベルの中だからです。三界を超えてこそ永遠に解脱することができます。

ですから、私たちが過去仏、未来仏陀、西方浄土の仏陀を尊敬して、毎日名前を唱えていても、在世仏を尊敬しなければ、何の役にもたちません。本当に何の役にも立たないのです。なぜなら、一人の在世仏は最も良いガイドで、私たちを連れて三界を出ることができません。もし私たちが彼について行かないで、ただそこで過去のガイドの名前を唱えているだけなら、何の

役に立つと言うのでしよう。もし私たちが地面に跪き百年、千年、一万年、一億年、飲まず食わず、遊ばず眠らずで、毎日ずっと阿弥陀仏の名前を唱えていても、阿弥陀仏は私たちを上へ連れて行ってくれません。けれども、一人の在世仏を礼拝すれば、本当に彼を信じていれば、それがたとえ一瞬であったとしても、彼は縛りつけられた縄を断ち切って私たちを助けてくれて、直ちに解脱させてくれます。レベルはすぐに解脱のレベルになります。これは私たちのレベルがどこかによつて、わかる人もいれば、わからない人もいます。

例えば私は今、最上階で講義をしています。みなさんは私に会いに来て、入口の外で立っていたとします。その時、誰かがみなさんの中に案内すれば、すぐに私に会うことができず。しかし、みなさんがまだ一階や二階に留まっていれば、誰かが中に入るよう引つ張つても、せいぜい三階位にしか上がれません。それでも私には会えません。みなさんが四階にいるとしたら、そこからさらに一階上るだけで、私のいるところに着きます。

ですから、時には一人の真のマスターを一目見ると、私たちはすぐに悟りを開くことができます。本来そうでなければなりません。印心を伝えなくても悟りを開きます。けれども、ある人は比較的レベルが低く、特に末法の時代で、衆生のカルマはとて多いので、仏陀や菩薩はたくさん加護して、相当引き上げないと開悟できません。だから 印心が必要です。人によってはマスターを一目見るとすぐに開悟します。直ちに開悟の体験があります。けれども、や

はり伝法しなければなりません。法を伝えてこそ、修行を継続することができます。この道はとても長いので、開悟してすぐに仏陀になることはありません。開悟とはただ小さい仏陀になったことです。まるで赤ちゃんが乳を飲み続け、おかゆを食べ続けてだんだん大きくなるようなものです。

釈迦牟尼仏が在世の時に、彼の目の前で何人が地獄へ落ちてしまいました。それは彼らのレベルかあまりにも低かったからです。彼らは仏陀を尊敬せず、一人の在世仏の重要性を理解せず、梵天、彼ら自身見えない神、経典の中で述べられた神だけを尊敬していました。それで十分だと、大したものだと思っていました。ですから、たとえ釈迦牟尼仏でも彼らを救う方法がありませんでした。

インドでは弟子たちは、神より彼らのマスターを称賛します。神は彼らをこの娑婆世界に送って来て苦しみを受けさせていますが、在世のマスターは彼らを上连接到行き、解脱させてくれて、この生老病死の輪廻から離脱させるので、弟子たちは自分のマスターを最も尊敬しています。彼らは神よりもマスターを最も尊敬しています。それは決して、弟子たちが故意に神を誹謗しているわけではありません。実際、弟子はあまりにも彼らのマスターを敬愛しているからです。

しかし、それも間違いではありません。もし神がいるとしたら、どうして神は私たちを救い

に出来ないでしょう。私たちにこんなに多くの苦しみを受けさせるのでしよう。マスターは私たちの苦しみや生死輪廻を見て、すぐに私たちを上に連れて行き、西方極楽世界、または至福の解脱の世界に連れて行くことを約束してくれるからです。在世のマスターだけがこれを約束してくれるのです。神は何も約束してくれず、何も言ってくれません。私たちは神がいるかないかもわかりません。しかし、インドの弟子たちはこの世界にはマスターたるもの、在世仏がいることを良く知っていて、彼と繋がれば、私たちを連れて、解脱させてくれることを知っています。この点は大変重要です。もし、これを忘れたなら、修行は困難になるでしょう。

というのは、私たちは誰が仏陀なのか、誰が菩薩なのか識別するのはとても難しいことだからです。私たちは、自分はとても聡明で多くのことを知っていると思いつつ、自分のパワーに頼れば十分だと思っています。私たちには確かにパワーがあり、何でも備えています。しかし、このパワーがまだ発展していない内は、すでにパワーを発展した人に頼って助けてもらわなければなりません。

子どもがまだ歩けないうちは、おとうさん、おかあさんに手をつないでもらわなければなりません。一人が片方の手をつなぎ、あるいは一人が子どもの小さな両手をもって、一歩、一歩とゆつくり歩くのです。それでも子どもは左右にふらつきます。そのうちにだんだん、自分で歩けるようになるのです。けれども、この時もやはりおとうさん、おかあさんは、やはり子ど

もの手をつないで歩かなければなりません。と言うのは、短い距離は自分で歩けます。問題ありませんが、遠い所へ行く時は、おとうさん、おかあさんが子どもを抱いて行かなければなりません。あなたが子どもを連れて芝居を見に行ったり、遊びに出かけたりしたら、まだ半分も歩かないうちに、子どもはもう疲れて抱いて欲しいと言って騒ぎます。抱かないと歩きません。それで、あなたは子どもを抱くか、または自転車、バイク、タクシーなどに乗せませす。

修行を始めたばかり人も同じです。尊敬の心がなく、謙虚な心がなければ、修行はとても遅く、とても苦しく、多くの障害があります。これはみな私たち自身が自分を妨害しているのです。時にはマスターたちはこのような状況を見ると、助けたいと思うのですが、私たちは自分でドアにカギをかけてものも言わなければ、人の話にも耳を貸しません。また、彼の手を取ろうとしても断ります。これではどうしようもなく、話しても通じないので、自分で自分の課題を学ばせるしかありません。私たちが英語を学ぶ時も、始めたばかりの時は話せません。毎日先生の所へ行つて、先生と会話の練習をしなければなりません。またはクラスメートと一緒に会話の練習をして、いつも英語の本を読んで、常に先生と一緒にいて、その後、英語が話せるようになります。英語を話すことを学ぶだけでもこんなに難しいのに、仏陀になりたいなら、仏陀のパワーに頼らず、どうやって仏陀になれるのでしょうか。自分に頼るだけで自分の仏陀に会うことができるのでしょうか。

私は今、仏陀のことについて話し、仏陀を称賛しています。決して私自身が仏陀であるとは言っていません。そうは言っていません。けれども、もしそういう仏陀がいるなら、必ず彼を敬愛してこそ、自分に利益をもたらすことになりません。第一目から今まで、私は仏陀を紹介し、観音法門を紹介しています。この造物主の大パワー、根源のパワーを紹介しています。これらは、あるものは私が本から学んだもので、あるものは私自身の体験です。あるものは私のマスターから学んだものです。今、私はこれらをみなさんに話しています。決してみなさんに私を尊敬しなさいと言うのではなく、みなさんは、自分自身の仏陀を見付けるのが最良なことだと言っているのです。

けれども、もし自分の内面の仏陀を探したければ、まずどの道を行くのかを知らなければなりません。みなさんが道を知りたいなら、私が教えます。ある人は急いでその道を知りたいと、もう何回も質問しました。みなさんは一週間、すでに努力して講義を聞きました。道を知りたいと思うなら、今日申し込んでください。けれども、必ず誠心誠意に本当に道を求め、本当に解脱したい人でなければいけません。好奇心ではダメです。仏陀と菩薩は私たちの心を知っています。もし私たちの心が誠心誠意でなければ、それは仏陀と菩薩を誹謗することになり、自分自身を誹謗することになります。もし、みなさんがもう何回も講義を聞いて、この法門を理解したなら、そして私が何を教えているのかもわかったなら、今申し込んでください。

Q マスターにお伺いします。卵は肉食ですか。菜食ですか。

M 卵は菜食ではありません。修行を始めたばかりの人で、もし本当に菜食できなければ、一、二個食べても構いませんが、その後は食べるのをやめるべきです。卵を食べると修行によくありません。こういったものはみな動物のお腹から出てきたものです。鶏卵がなければ鶏はいません。ですから卵も動物だと言えます。卵の中にはすでに生命があります。受精されていない卵もありますが、それにも半分の生命があります。メスとオスの交配がないのでニワトリにはなっていないです。一個の個体だけではヒヨコは生まれません。ですから、未受精卵と言います。ただ因縁が足りないだけで、生命でないとは言えません。

Q マスターにお伺いします。呪文を唱える時に、自分の声を聞くべきですか。それとも、呪文の内容を考えるべきですか。

M どちらも違います。それは観音法門ではありません。あなたはどんな法門を修行しているかわかりませんが、私たちの法門は呪文を唱えません。音を聞くのも、外面的な音ではありません。外面のものを追求することは役に立ちません。呪文の内容を考えることも役に立ちません。呪文を唱える声を聞いても役に立ちません。けれども、あなたがしたいことをすればいいのです。私たちが教えているのは別の種類の法門です。

Q マスターにお伺いします。もし、私の修行レベルが第三界に留まっていて、しかも私がマスターより早く死んだとしたら、マスターは私を上へ引き上げてくださいますか。

M はい、引き上げます。私はこの肉体ではありません。私はすでに第三界にいます。死んでから行くのではありません。もちろん、あなたを引き上げることができます。というのは、私は現在、すでにそこにいてあなたを待っています。(笑い) 私が死んでから、弟子たちを上へ連れて行くのではありません。それでは、誰も私より先に死ねないのではありませんか。私がみなさんよりも早く、明日にでも自殺して(笑い)、あの世でみなさんを待っていれば、みなさんは安心するのでしょうか。私の弟子にはもう八十歳の人もいます。これでは、あまりにも心配ではないでしょうか。そうなら老人はあえて私について学ばないでしょう。万が一、私はまだ死なないうちに、みなさんが往生してしまい、誰も連れて行ってくれる人がいなければどうするのでしょうか。

私はこの肉体でみなさんを上へ連れて行くのではありません。この世界ではこの肉体が必要です。第一界では第一の体を使い、第二界では、他の体を使います。マスターはあらゆる境界に存在しています。内面のマスターはこの外面の体よりもっときれいです。(もしマスターが先に死んだら、上の方で私たちを待っていてくれますか)(笑い) 今、もう待っています。どうして死んでから待つのですか。あなたは今、どの世界に行ってもマスターと会うことができます。

そうですね。(そうです) それならどうしてこんな愚かな質問をするのですか。(笑い) (私はみんなの代わりに質問しているのです) わかっています。けれども、そんなことをしないでください。これは内面のもので、あなたがこのような質問をすると、彼らに私が何であるかわかってしまうので、きまりが悪いのです。

Q 私たちが普段あまり気にしていなかったことが、座禅して十数分あるいは二十分経つと、それらのものがぞくぞくと中に入って来ます。これはどうしてですか。

M あなたが以前そういうものと関係があったからです。今、彼が挨拶に来たのです。集中すれば彼らは問題ありません。心が乱れている時にそうなるのです。例えば、この部屋は人が住んでいないとします。誰かが入って来ました。もしこの部屋に誰かが住んでいたら、誰も中へ入って来て物を盗みません。メデイーションの時に集中しないと、やはり多くの物が入って来ます。もつとたくさん修行したら問題ありません。七日間リトリートにもつと参加しなさい。

Q 私は多くの本に記載されている内容によりますと、ある人は大僧侶、例えば清朝の印光大師の指導した方法で念仏して、浄土に往生したとありますが、これは本当ですか。

M あなたはそれが確かだと思えますか。(よくわかりません) そんなに簡単なことではないでしょう。第一界は阿修羅の場所です。そこには至る所に「いわゆる」西方極楽世界の境界が

あります。もし私たちが真の極楽世界のことを知らなかったら、簡単に魔に騙されてしまします。実際、第一界へたどり着いただけです。第二あるいは第三界は言うまでもありません。第一界のきれいな境界を見て、それが極楽の世界だと勘違いしているのです。

阿弥陀仏を唱えるのも結構なことです。多くの人がいつもそういう質問をしに来ます。最高の法門を修行できるレベルに達していない人には、やはり彼らに南無阿弥陀仏を唱えるように言います。印光大師だけが人に念仏を教えているではありません。印光大師はその他の法門も修行しています。けれども、彼は広く伝法を行なっていません。ですから、あなたは知らないのです。もし、彼が南無阿弥陀仏だけを唱えていたら、なぜ普陀山（ふださん）にこもって十年も修行しなければならなかったのでしょうか。どうして家で念仏しないで、普陀山に行つて念仏しなければならなかったのでしょうか。彼は座禅にとっても精進したのです。

広欽老和尚は非常に苦しい修行しました。あんな長い間修行したのです。それで彼のレベルに達したのですが、私は彼のレベルは知りませんが、少なくとも阿羅漢のレベルはあります。というのは、彼はトラを善良に変えることができたからです。これは阿羅漢特有の能力です。その他のパワーについては話したくありません。彼のレベルは阿羅漢よりもっと高い可能性があります。たとえば彼があればほど苦しい修行をしなくても、浄土に行くことができたでしょう。したがって一人の在家者が何日か家で、仏陀の名前を唱えただけで、どうして仏陀になること

ができるのでしょうか。

私たちは観音法門を修行しています。私の弟子は出家者より在家者が多いです。釈迦牟尼仏が在世の時に、多くの在家の弟子がいました。楞嚴經（りょうごんきょう）の中で、二十五人の菩薩が彼らの修行の体験を述べています。その中にも多くの在家者の体験があります。出家者ではありません。私が在家の人々に念仏を教えたのは、彼らが観音法門を修行しながらないからです。念仏をするのはしないよりも良いからです。少なくとも少し心を平静に保つことができます。けれども究極ではなく仏陀になれません。西方極樂世界へ行くこともできません。

Q 聖書には、人は生まれながらに原罪があると書いてありますが、それは私たちの前世の因果を指しているのですか。

M そうです。私たちの前世の因果以外に、共通のカルマもあります。先祖の罪も共通のカルマです。私たちは父母と一緒に住んでいて、彼らはご飯を炊いて私たちに食べさせてくれます。これも私たちの共通のカルマになります。もし、私たちの先祖が不道德な事をしていたら、私たちが彼の残した財産を使うと、先祖の罪を分担しなければなりません。原罪、共通のカルマ、本来のカルマはみな同じ意味です。

Q 「八閔齋戒」の意味を説明してくださいませんか。

M それはみなさんに世俗の生活を手放し、一日くらい休んで欲しいと言う意味です。というのは、みなさんは戒律を、毎日守らないからです。八関齋戒は観音法門の修行と一緒に修行してこそ、意義があるのです。例えば、私たちは七日間リトリートあるいは三日間リトリートを行なう意義は、私の弟子にこの三日間、または七日間に、この世界のものを全部手放し、夫、子ども、奥さん、電話、親戚、友人、ビジネスを全部手放し、山へ行って私と一緒に集中して、何日かメデイテーションして修行することです。私の弟子だけ参加できます。この期間は本当に戒律を守ります。口は何も喋らず、耳はいざごさを聞かず、目はたらしめなものを見ないのです。ですから、その数日間には本当にしつかりと戒律を守ります。その時は自然に戒律を守っているのです。なぜなら一緒に共修しているのです、何のいざごさもなく、何も話したい事もないのです。言い争いも論争もありません。ですから、その時は自然に戒律を守っています。自然に念仏し、経を唱えています。というのは夜になると、私が経の講義をするからです。それこそ、みなさんが経を唱える時間です。「生きた経」を唱えるのです。朝は、私は弟子たちに修行について注意をしたり、必要なことについて指導したりします。あるいは弟子たちに自分の修行に付いて話してもらいます。これこそ本当の八関齋戒の修行です。

ただし、マスターが往生した後は、法を伝える人がいなくなつたので、經典を読むだけです。または人々は三日間リトリートの時に、口は何も喋らず、経の講義を聞き、念仏しているのを

見て、三日間リトリートとはこういうものだど勘違いするのです。マスターの指導がないので、真義が分からないのです。八関斎戒を守って、一日休むことも悪くありませんが、多くの福報にはならず、少しばかりの人天の福報（人間界と天界の福報）があるだけで、何の功德もありません。ただあなたの心が安らぎ悩みが少し減少します。一日中仏陀のことだけを考え、この世界のことを考えず、人と話をせず、多くのいざごさを避けるからです。けれども、智慧を開くことはできず、悟りを開くこともできません。ですから、八関斎戒は良いことですが、特別な功德はあまりありません。

Q マスター、私は一冊の本を読みました。イギリスのある博士がインドに行って一人のマスターに出会った話です。そのマスターは彼を暗い洞窟の中に連れて行って、修行をさせてそうです。彼は洞窟の中で体から光を発する人を見ました。その人は、自分は摩訶迦葉（まかかしよう）であると言ったそうです。これは本当ですか。

M 私はわかりません。自分の目で見なければわかりません。こういうことについて私は興味がありません。ある人は修行すると光を放つことができます。私の弟子でも発光できる人がいます。ヒマラヤの暗い山の洞窟に人が発光するのを見に行かなくてもいいではないですか。ここにも発光している人がいます。みなさんには見えないだけです。山の洞窟へ行く必要はあり

ません。台北の最もにぎやかな場所でも、発光してあなたに見せてあげられる人がいます。彼らは私について一年以上学んだだけです。多くの人は私について一、二カ月修行しただけなのに、もう光を放っています。摩訶迦葉だけが光を発つことができるではありません。あんなに長い間修行する必要はありません。釈迦牟尼仏の時代から現在まで修行して、二千五百年も経ってやっと少しの光を発することができたとしたら、そんな修行はみなさんする必要はありません。

私は彼が山の洞窟の中で何をしているか知りません。どうして出て来て衆生を救わないのでしょうか。衆生はあんなに苦しんでいるのに、彼はそこで少しの光を発しているだけで、(笑い)そのような仏陀を拝む必要はありません。ここでみなさん、このような生き仏を拝んだほうがいいです。今この会場に、光を発している私の弟子が何人かいます。ですから、そういうことは本当かどうか気にすることはありません。何の役にもたちません。私は彼が誰にあつたか知りませんが、冗談が上手な人もいるので、自分は過去の何々大修行者であると名乗ることもあります。私が思うには、もし摩訶迦葉だとしたら、彼は偉大な人で、決して暗い洞窟の中で少しの光を発するだけの人ではないと思います。

Q もし、最高の神がいるとしたら、私たちは彼に掌握されて、私たちは何も変えることがで

きないということでしょうか。

M 違います。私たちは変えることができます。私たちには「自由の意志 (Free Will)」があるからです。私たちは良いことと悪いことを知っています。私たちは善し悪しを知っているの
で、良くなることも、悪くなることもできます。そうでなければ、修行する必要はありません。
昨日、私は竹竿について話しました。私たちは上ることもできるし、降りることもできます。
神、または最高の仏陀はもちろんです。けれども私たちは自分を変えることもできます。こ
の最高の、根源のパワーがないとしたら、私たちはどこから出て来たのでしょうか。しかし、こ
ういうことはあまり、気にする必要はありません。と言うのは、実際私たちとあまり関係がな
いからです。私たちは偉大な人になれば良いのです。神がいるかどうかについては後の話です。
今、最も重要なことは、私たちは自分を変えなければなりません。この娑婆世界で私たちは
完璧な人にならなければなりません。全宇宙のことが分かり、如来（によらい）になること
です。もし誰かが、同じような人間になりたいとしたら、その人をも連れて行けます。これが私
たちの目的です。神がいるかいないかは私たちと関係ありません。今、神がいても私たちには
役に立ちません。なぜなら、私たちが神を拜んでも彼には聞こえないのです。もし彼に聞こえ
たら、世界はこんなに苦しみません。苦しみが好きな人はいないからです。彼らは毎日神に助
けてくれるように祈っていますが、神は助けくれません。マスターだけが助けるのです。ど

んなことかに係わらず、マスターに祈れば早いです。神はとても遅く、耳がきこえません。観音法門を修行していないからです。(笑い)

ですから、神がいるかいらないか、最高の仏陀がいるかいらないかということに気にかける必要はありません。こういったことは重要ではありません。私たちは自分の修行にはげみ、良い人、偉大な衆生、自由自在で、神通力あり、パワーに満ち、行きたい所に行けて、どんな人でも救える人にならなければなりません。これこそが私たちにとつて意義のあることです。私たちは多くの人が苦しみを受けるのを見ても、手助けする方法がないのです。ですから、私たちはパワーのある大衆生になり、そういう苦しんでいる人を助けなければなりません。これが私たちの目的です。最高の神云々については、気にすることはありません。



三界以下の概況

スプリームマスター チンハイ フォルモサ・台北

一九八七年三月十一日

今日はいくつかの境界について講義します。観音法門の修行者は伝法の時、たくさんの境界があることがわかります。しかし、私は比較的細かいことは話せません。ここでは概略を少し話せるだけです。私たちは往々にして頭脳や口を使って修行し、それで最高の境界にたどり着けると思っています。しかし、ある人が修行して三界を超え、さらには三界よりもはるか高い境界に到達した場合、修行の途中に多くの様々な落とし穴に出会います。従って、もし道案内、またはマスターの保護のパワーがなければ、途中でたやすく魔に連れ去られます。第一界に到達したばかりで、まだ第二界にも到達していない内にもう連れ去られるのです。第一界は阿修羅の場所です、これについては一日目に講義しました。今日は阿修羅の場所より上の境界について講義したいと思います。

阿修羅は第一界です。第二界まで修行した時、どんなものに出会うのでしょうか。当然他の

衆生にも出会います。第二界の衆生は比較的善良で、阿修羅衆生とは違って戦いは好きではありません。しかし、彼らも人を騙します。なぜ人を騙すのでしょうか。大変よく修行して大開悟した人を除けば、宗教の信者の大半はどんな宗教を信仰しようかと、どんな宗派に属していてもみな「三界以下の神」を崇拜しています。（「三界以下の神」は最高の神とは異なります。最高の神は最高のパワー、仏教で言う無上正等正覚を表します）

そのような三界以下の神は決して最高の境界ではありません。たくさんのレベルの神がいまですが、八割以上の宗教はみな、そういう低いレベルの神を崇拜しています。ですからマスターによる伝法のない宗教を信仰すると、最高でも第二界にしかたどり着けません。阿修羅の場所を通過することは容易なことではないので、第二界に到達した時、私たちは一旦そこで止まります。なぜでしょうか。それからの道はまだ大変長く、道案内がいなければ私たちは三界に出る道を見つけれないからです。

なぜなら、私たち普通の人はこの娑婆世界で生活していて、比較的苦しく、この世界は暗いため、第一界にたどり着いたら、すぐに不可思議な喜びを感じるからです。それぞれの世界にはみな、その世界の最高の教主、最高の神がいます。その教主の部下ではなく、その世界の最高の教主、最高の神に会った時は、私たちはとても喜びを感じます。私たちの個性、思想、生活様式すべてが、すぐ完全に根本的に変わります。このような変化は私たちには想像できません。

ん。私たちのパワーはぐんぐん大きくなり、すぐに智慧が開きます。なので、そこは最高の境界だと思ひ込むのです。その時はまだもつと高い世界があることは想像できないのです。

例えばこの世界では、多くの人は宗教信仰を持っていません。彼らは神も信じませんし、極楽世界も仏教もいかなる宗教も信じません。彼らはこの世界こそが唯一の境界であり、死後は何もないと思つています。

同様に第一界に到達した人が、第一界の教主に出会った時も、宇宙最高の究極の目的に達したと思うのです。時にはその境界の神は私たちに、娑婆世界に戻つて伝法し、教主になつて新たに宗派を作るよう指示します。すると彼は、自分は天使で神の使者であると思ひ込むのです。というもの、彼はその他の世界を知らないからです。さつき話すのを忘れましたが、第一界にいる衆生は寿命が大変長く、甚だしい場合は数千万年生きることが出来ます。彼らは死ぬ前に、そこが不老長寿の世界だと思ひ込むのです。

もしある人が良い法門の修行に精進し、しかも第二界のレベルに到達した先生がついていたとします。その先生は生徒を最高でも、第二界にまでしか連れて行くことができません。第二界に到達した時には、宿命通（しゆくみようつう：自分の過去世を知る力）という神通力があり、自分だけでなく、他人の過去、現在、未来を見ることが出来ます。

第二界には図書館に似た場所があるからです。この図書館の中にはあらゆる人の生活資料が

あります。生活の歴史、寿命の長さ、輪廻を何回繰り返したか、一回目の輪廻の時はどんな人だったか、どんな仕事か、どんな良い事をしたか、どんな悪い事をしたか、どこの国にいたか、何年生きたか、二回目の輪廻の時どんな動物だったか、どこの国にいたか、何年生きたか、三回目の輪廻は、四回目、五回目……。毎回の輪廻を詳しく記されています。過去の生活、現在の生活、未来の生活、全部記載されています。未来も記載されています。過去と現在の状況は変えることができませんが、未来は変えることができます。ですから、ある人は第二界に到達すると、自分の生活はどこが間違っているのかを知り、自分を変えることができます。

例えば、彼はもともと別の法門を修行していて、菜食をしていませんでした。というのは多くの師は弟子たちに菜食を勧めています。肉を食べると最高でも第二界に到達するだけです。彼がそのような生活を見て、そういう因果関係を見た時、すぐに菜食に変えます。その時、全ての因果を知ったからです。彼はたとえ仮にほんの少しの肉を食べたとしても、恐ろしい報いや刑罰が待っていることがわかったからです。そこで人に菜食を勧められなくても、彼は自然に菜食をするようになります。

第二界は因果の世界です。そこではすべての因果が分かり、過去、現在、未来の全てが分かります。私の弟子の中には肉を食べている人が一、二人位いました。その人は私と菜食すると約束したものの、耐えられず、外では肉を食べました。食べてから、メイデーションをする

と自分の行く先々が見えて来ます。たとえ卵一個食べたとしてもとても恐ろしい境界でした。もし何も知らず、誤って肉を食べたら、それほど大きな問題にはなりません。因果は避けられません、それほど恐ろしいことにはなりません。しかし、よく分かっているながら、故意に食べたのであれば、そのような刑罰は大変重いものです。

卵を一個食べた弟子がいました。今日、彼はいませんが、いたとしても彼の名前を言いません。彼自身、心の中ではよく分かっているからです。当時私は宜蘭（イーラン：台湾の地名）にいました。その弟子は体調が良くないので医者に診てもらいに行き、医者は彼に「卵を食べなければいけない」と言いました。彼は元々私の言うことを良く聞く人でしたが、私がいけないので、医者言うことを聞いてしまいました。（笑い）その医者は「あなたは卵を食べなければいけない」と言いました。彼は卵を手にとつて、しばらく眺めながら食べようか食べまいかと悩んでいましたが、ついに食べてしまいました。その夜すぐに魔に連れ去られ、ひどい罰を受けました。その時、彼は私に助けを求めたのです。さもなければ、彼は脱出することができなかったのです。マスターの他に誰も彼を救い出して、再び自由にさせることのできる人はいません。

なので、私は彼を救いに行くしかなかったのです。彼を救い出したため、宜蘭で講義をしていた時、私はもう少しで死ぬところでした。もともとは講義を予定していましたが、一日目の

講義も終わらない内に、死ぬほど苦しくて、講義を続けることができませんでした。余りにも痛くて、疲れきっていて、ほとんどの時間はベッドに横になって、死んだ人のようにでした。話も少ししかできず、ご飯も食べられず、何もできませんでした。

このように、彼は問題を起こして私に多大な迷惑をかけました。その後私が台北に帰って来ると、彼はまた私のところに来て、私が休んでいるところを、騒いで起こしたのです。懺悔したいというのです。私が講義する時には迷惑をかけ、私ที่บ้านに戻って休んでいると、また私のところに来て懺悔したいと言い、私を休ませてくれないのです。だったら、なぜ卵など食べるのでしょうか。戒律を破ったことで、私に面倒をかけ、その後懺悔したいと言って、また私を煩わせるのです。ですから、みなさんは戒律を破らなくてください。卵一つくらい食べても構わないと思っではいけません。大変深刻な事態になります。

もし私たちがはやくこの娑婆世界を離れ、早く仏陀になって自分を救い、親類や衆生を救いたければ、必ず戒律を守らなければなりません。修行者は「執着」しないなどと言っではいけません。「執着」すべきです。それぞれの国家には法律があり、私はイギリス国籍ですが、フォルモサ（台湾）に来ている間は、フォルモサの法律を守らなければなりません。フォルモサの法律を知らないで守らないなどと、言っではいけません。

例えば、イギリスでは車は左側通行です。私がフォルモサに来て、車で左側通行したとした

ら、被害を受ける人は誰なのでしょう。法律を知らなかったからと言って許されることではありません。左側通行すると必ず問題が起きます。というのは、車はみな右側通行だからです。私はイギリス国籍ではありませんが、ここでは車は右側通行しなければなりません。私たちは本来仏陀だからと言って、何をしても良いという訳ではありません。それは大間違いです。私たちが仏陀の世界に住んでいけば、もちろん問題はあります。しかし、この世界に住んだらこの世界の法律を守らなければなりません。さもなければ車の運転はできません。

例えば、私は元々イギリスに住んでいて、イギリスで仕事をしていて、イギリスの法律を守っていました。なので、何も問題はありませんでした。しかし、私がフォルモサに住んでいて、フォルモサの法律を守らないで、多くの罪を犯したとしたら、イギリスにも帰れません。フォルモサの警察に捕まるかもしれません。ひどい場合は銃殺されます。その時は、たとえイギリスに国籍でも関係ありません。

もし、三界を出たいなら、しっかりと戒・定・慧（かいじょうえい：戒律、禪定、智慧）を修行しなければなりません。昨日私は六祖慧能について話しました。彼は禅宗が中国伝来してから、第六代目の祖師で、その当時はまだ剃髪はしていませんでしたが、すでに衣鉢（いはつ）：法統を継ぐ者に師僧から衣と托鉢用の鉢を授けること）を受け継いでいました。彼は肉食者と一緒に寝泊まりしている時も肉を食わず、野菜だけを食べていました。彼らは慧能に「なぜ

肉を食べないのかい」と聞きました。慧能は「お腹が痛くて、お腹の調子が良くない。肉は消化に悪いから」と言いました。そのような困難な状況のなかでも肉を食べませんでした。その時、慧能は逃げて隠れていたので、「私は修行しているのに、肉は食べません」とは人に言えませんでした。やむをえず「お腹が痛いので、肉を食べられない」と言いました。六祖慧能でも「執着しない」とは言いませんでした。ましてや、私たちのような人間が、自分は「執着しない」などと言えるでしょうか。執着しない人はおそらくレベルが高すぎて、この娑婆世界に落ちて来て休憩しているのかもしれませんが。(マスターの冗談)

禪を修行している人は、よく「執着しない」ことを問題にしていますが、それは間違っています。「執着」してこそ自由自在になれます。実際のところ、これは執着とは関係ないことです。なぜなら、人間はもともと衆生の肉を食べてはいけません。これは自然界の法律です。みなさんは分かっているのか、食べても良いと思っっています。もし因果を分かっていたら、どれほど恐ろしいことが分かり、戒律を少しもやぶることができないでしょう。大口をたたくことはなおさらできないと思います。ですから、戒定慧(かいじょうえ：戒律、禪定、智慧)はとても重要です。修行したければ、きれいでなくてはなりません。分かりましたか。今、アイスクリームを食べたいですか。ビーガンアイスクリームなら卵が入っていませんので大丈夫ですが、でも、ケーキは食べてはいけません。

第二界の衆生は、第一界の衆生よりさらにパワーがあつて、私たちが彼らを超えて、さらに高い境界（きょうがい）に行こうとすると、彼らは私たちを阻止します。阿修羅の衆生よりも、さらにひどいです。私がヒマラヤで修行している時、魔に取り付かれた人と一緒に住んでいました。彼女は毎日四時か、五時に起きます。私も彼女と同じ時間に起こされて念仏しなければなりません。彼女はいくつもの声で念仏していました。ドレミファソのようないろいろな念仏の声は、実に恐ろしかったです。時にはかん高い声を出したり、犬が吠えているようだったり、実に「素晴らしい」かったです。（笑い）そういう時は観音法門などまったく必要ありません。というのは、外にいろいろな音楽が鳴っているからです。（笑い）当時、彼女は魔に取り付かれていました。それも小さな魔ではなく、第二界の魔でした。私たちはそれらを天人、または天神と呼んでいます。いずれも魔です。第三界以下はすべて魔です。

宇宙を一本の竹竿に例えるなら、上半分は陽に属し、下半分は陰に属しています。三界以下は、下の半分、つまり陰に属しています。道教の説明によると、彼らは、陽は上部、陰は下部といえます。第二界は当然、相変わらず陰の部分にあります。ですから、やはり彼らはやはり魔です。魔と言っています。実は魔ではありません。ただ彼らの仕事場は比較的低い所なのでたとえば私たちの世界では、外務省はもっぱら国際間での対話の仕事していて、比較的楽な仕事ですが、警察は悪人を捕まえる仕事です。彼らの仕事の特徴は人を捕まえること、人を

罵ること、人を牢屋の中に監禁して、彼らを取り締まることで、それが彼らの仕事です。そういう仕事をする人達も必要です。さもなければ、社会は秩序が保たれません。

同様にそういう魔も必要で、彼らは余り良くない衆生を抑制する役割をします。余り良くない衆生はそれ相応の場所に住んでいて、そこには彼らを管理人が必要なのです。その魔に取り付かれた友人は、元々良い修行者でしたが、彼女がそのレベルまで達した時、魔に捕まえられたのです。そして彼女の頭上には屋根が作られて、どうしても上に上って行けません。本来観音法門を修行していたら、絶対に問題はありませんが、彼女は前に、いろんな宗教を修行していて、私の先生のとこにたどり着いた時は、魔に取りつかれた状態は大変ひどいものでした。彼女は一人でそこで修行していて、パワーもあまりありませんでした。私のマスターは、彼女を病から救うように私をそこに行かせました。

しかし、彼女は毎日歌を歌っていて、それを聞くと私は鳥肌が立ちました。彼女の歌はあまりにも「素晴らしかった」からです。(笑い) 時々彼女は腹を立てます。わけもなく腹を立てたり、私が何もしていないのに、私を罵ったりしました。「あなたは私をやっつけようとしている。私を殺そうとしている。なぜ私の頭を押さえつけるのだ。痛くてたまらない」などと言います。私は「何もしていない。私はここに座っているし、あなたはそこに座っている。どうやってあなたの頭を押さえつけられるの」と言うと、彼女は「あなたはきつと神通力を使って私

の頭を押さえた」と言いました。私は「違います。私たちは一緒に念仏しました。私に神通力もありません。暇ありません」と言いました。しかし彼女はやはり信じません。魔に取りつかれ、魔が彼女にこのように思わせて、彼女を怒らせ、悪いことを思わせていたのです。

彼女にも少し他心通（たしんつう：他人の心を知る力）があり、時には少し天眼通（てんげんつう：すべての衆生の過去世を知る力）がありました。それらはまだ第二界のもので、神通力を得るために修行したからです。だから、これが原因なので、その結果が現れるのです。ある期間修行して、その世界に到達すると、その世界の人たちは彼女に代価を払うよう要求します。「以前、あなたは私のお金やパワーを使った。今それを精算しなさい。でないと上に行くことができない」と言います。もし、彼らに百元の借りがあったら、千元、一万元を支払わなければなりません。この因果の法律はこの世界の事情はよく似ています。他人に百元借りた時、決してただ百元だけ返せばいいのではなく、百元借りたら、千元返さなければなりません。この因果の法律は恐ろしいものです。その目的が良いか悪いかに係わらず、どんなものでも雪だるまを作るように、転がれば転がるほど、どんどん大きくなります。例えば銀行から一万元借りて、返済しなかった場合、利息はますます増え、あつという間に多額の借金になって、返済のしようもありません。

三界以下の因果はこのようで、オレンジの種を播けば、来年にはたくさんのオレンジが実ります。同じように小さな毒薬の種も、大量の毒薬になります。ですから、私たちはこの世界で良い種を播くと、良い結果を得るのです。悪い種からは悪い結果が生まれ、良いか悪いかに係わらず、倍増してとても大量になります。良いものは当然問題ないですが、悪いものは一定期間が過ぎると、悪い結果を引き起こして、そこに縛られて脱出できなくなります。これは実に厳しい法律です。

三界以下の因果律は非常に正確です。一点も、一滴も、一分も、一寸も差がなく、時には正確すぎて、私たちが何をして、ことごとくすぐに記録され、累積されて大きくなります。ですから、これは困った法律なのです。

例えば、私たちがある人に一元、施したとします。とても嬉しくて、他の人に「昨日私は彼に一元あげました」と話します。この時、私たちが施したこの一元は無いことになってしまいます。それは他の人に話したからです。この因果律により、この施しは無くなってしまう。明日嬉しくなって、また他の人に「私は一昨日、彼に一元あげました」と話すと、その時、彼に一元借金したことになります。また後日、他に人にその話をすると、今度は二元借金したことになる。もともと彼に一元施したのに、二回話したら、結局その人から二元借金したことになる。話せば話すほど問題が起き、話せば話すほど借金が大きくなるのです。

ですから、私たちがこの世界で施しをする時、慎重になるべきです。さもなければ大変危険です。施した後、自分は施しをしたと思うだけで、厄介なことになります。なぜなら、自分は施したと思っただけのため、また輪廻して来て、施した福報を受け取らなければなりません。要らないと言っただけでもダメです。必ず戻って来なくてはなりません。もし良く修行していたら、三界を超えていたはずですが、二、三元の施しをしたため、また「私」が施しをしたという考えのため、それだけでその二、三元を受け取るために戻って来なければなりません。布施した分を受け取ってから、初めて離れることができます。因果の法律というのはこのようにはつきりとしています。

金剛経の中で、釈迦牟尼仏は「施しをする時は何も考えないこと。『私』は施しをしていると考えないこと。これこそが、本当の施しである」と戒めています。というのは、仏陀は施す時、ほんの少しでも、自我の想いがあると、繰り返し輪廻しなければならぬことをよく知っているからです。ということ、三界を超えることは簡単ではありません。もし道案内がなく、マスターがいなければ、私たちは脱出しようがありません。なぜなら、私たちが何をしても全部間違っていて、何一つ正しくないからです。

地蔵経（じぞうきょう）には、地蔵菩薩が釈迦牟尼仏と天国に行つて、釈迦牟尼仏と法会をした時に、「全ての衆生を見た。一つひとつの思ひは、ことごとくカルマを作り出している。一

瞬たりともカルマを作らないことはない」（地藏経利益存亡品第七、地藏菩薩摩訶薩白佛言：「世尊、我觀是閻浮衆生、舉心動念、無非是罪。」と書いてあります。私も地藏菩薩と同じ考えです。私たちがしているすべてのことはみな間違っていて、正しい行いは何一つありません。ですから、マスターのパワー、仏陀のパワーの加護によって私たちを上に連れて行ってもらわなければ、どんな衆生もみな私たちを引きずり降ろし、私たちの肉を切り取り、私たちの手を切り取ってしまいます。そして、私たちの衣服をも持ち去られてしまいます。なぜなら、私たちは世々代々あまりにも、多く借りを作ったからです。私たちが間違ったことをしたことは、当然借りになります。たとえ、過失でも借りになって、同じように因果律により記録され、罪を犯したことになります。

なので、もしマスターがいなかったり、レベルの高くないマスターにしか出会えなかったりした場合、その人は最高でも第二界にしか到達できません。最高で第二界の教主か、第二界の神です。この神に到達した後、彼の生活は変わり、考え、志、考え方は根本的に変わり、聡明さや智慧も変わります。現在、知っていること、考えることは全て以前と違います。自分にとっても大きなパワーと智慧があると感じます。その時、第二界の教主は彼に「あなたは娑婆世界に戻って、衆生を救うことができる」と言います。そういう人は彼を信じて、自分が偉大な仏陀になった、すでに成就したと思ひ込むのです。

彼は、それよりもさらに高い境界があり、その教主よりもさらに大きなパワーを持っている神がいることは想像もできません。だから、その教主に対して少しも疑いません。ですから、もしその人が娑婆世界に戻って来て、人々に「何々教主は神であり、名は何々という。その神は宇宙で最高の代表である」と言ったとしても、それは、その人が嘘を言っているのでも、故意に人を騙しているのでもありません。なぜなら、彼は本当にわからないからです。ただ、真の大菩薩、真の仏陀、中国の老子のような聖人だけが、それよりさらに高い境界を知っているのです。

私たちは釈迦牟尼仏をととても偉大であると称賛しています。彼は大聖人、大開悟者、仏陀、最高の仏陀で、全宇宙のことを知っています。三界を超えてこそ仏陀と言えます。三界以下にいる人、または第四界に到達したとしても、まだ仏陀ではありません。菩薩なのです。高い境界に行ったことのある仏陀だけが、第一、第二、第三、第四、第五、第六などの境界を知っています。そして、どの境界にどんな教主がいるかをよく知っています。そのような人こそ、人々を最高の境界に連れて行けます。さもなければ、私たちはこの三界以下で輪廻を繰り返し、毎回、自分のいる境界が最高の境界だと思ひ込むのです。

阿含経（あごんきょう）の中には、釈迦牟尼仏が、それぞれの異なる境界について詳しく述べたことが書かれています。今日私が話した事とほとんど同じことを、はっきりと述べていま

す。阿含経で釈迦牟尼仏が述べているのは、良く修行しているヨガ行者のことで、彼は一瞬で梵天の境界に行くことができました。梵天は三界以下の最高の境界で、第三界の神であり、そのヨガ行者は一瞬にして梵天を見に行けたのです。彼はその時、梵天に「この宇宙で誰が最高ですか」と聞きました。梵天は答えません。彼は再び聞きましたが、梵天は答えません。彼はまた聞きました。梵天は「私はこの世界を造った。この世界がまだ存在していない時、私はすでに存在していた」と言いました。梵天はこう答えた後、このヨガ行者は一步近付き、「私はそんなことを聞いていません。この宇宙で誰が最高なのか、あなたに聞いているのです」と言いました。梵天は答えに困窮しました。

というのも、そこにはたくさんの彼の部下、弟子、女官がいたから、気まづくて正面から答えられず、このヨガ行者を外に連れ出して、「それ以上聞くな」と言ったのです。このヨガ行者は「なぜですか。私は知りたいのです。私は釈迦牟尼仏に聞きましたが、彼は謙遜して何も言わず、梵天に聞きなさいと言いました」と言いました。梵天は「ああ、あなたはすでに釈迦牟尼仏に会っているのに、なぜ他の人に聞くのですか。釈迦牟尼仏は最高で、すべての神より高いです」と言いました。

昨日私は、「大師、マスターこそ最高である」と言いました。最高の神と言っても、私たちが苦しんでいる時も構ってくれません。私たちが裕福でも気にしません。そして私たちがどんな

に輪廻転生を繰り返しても、構ってくれないのです。最高の神の本業は万物を創造し、成長させることであり、私たちの苦しみなどは構ってくれません。しかし、大師は構ってくれます。私たちは最高の大師を仏陀と呼びます。仏陀は私たちを構ってかれて、私たちを自由なところに連れて行ってくれます。なぜなら、仏陀は因果律の外にいますので、神も何も言えません。決して仏陀が最高の神より高いとか、神は仏陀より高いと言うものではありません。その境界においては、誰が誰より高いかと比べるようなことは全くありません。

仏陀は仏陀です。最高の神とは別の境界（きょうがい）です。神は、例えば最高の神、または創造主がいるとしたら、それはまた別の境界です。最高の神はいわゆる創造主で、中には輪廻があり、生、滅、垢、浄、陰、陽など相対的な状況があります。仏陀は別の境界で、そういう相対的な状況はありません。生老病死もなく、不生不滅、不垢不浄、不増不減（生じることでも減することもなく、汚いもきれいもなく、増えることも減することもない）はありません。ですから、私たちは仏陀をマスターと尊称します。もしマスターは最高の神より高いと言ったら、それも嘘ではありません。というのは、最高の神は人を導き、解脱させることはできません。神は私たちを成住壊空（発生、成長、破壊、消滅）の境界の中で輪廻させているだけです。しかし仏陀は人々にこの輪廻の輪から離れさせ、究極の解脱をさせてくれます。ですから、梵天はそのヨガ行者に「あなたが見たその人は最高です。彼に聞きに行かないで、私に聞きに来て

どうするのですか。彼は私より高いのです」と言いました。

そのインドのヨガ行者は梵天界まで修行していますが、これはとても珍しいです。ほとんど
のヨガ行者は第一界に到達しただけで、彼らはそこが最高の目的地であると思いきんでいます。
第二界に到達している修行者はとても少なく、たまたま第三界に到達できても、マスターが指
導してくれないと、三界を超えることはできません。もし、そういうマスターがいるとしたら、
彼らは必ず観音法門を教えます。なので楞嚴経（りょうごんきょう）の中では、仏陀は「観音
法門は最も究極の法門であり、十方三世仏（じっぽうさんぜぶつ：現在、未来の全ての仏陀）
はみな観音法門を修行してこそ成就できる」と称賛しています。キリスト教の聖書の中にも、
観音法門は最高であると書かれています。これについてはすでに話しました。なので本題から
離れないために今日は話しません。もし知りたければ、講義録を読み返してください。

私は昨日インド人にとつては、マスターは神よりも高いということについて話しました。彼
らの家では木像や石像の仏像を祭らないで、マスター、またはマスターのマスターの写真を並
べて置き、毎日花を供えています。しかし私たちの法門は、花や線香、あるいは他の物を供え
ることを推奨しません。しかし、私がどんなに禁止しても、みんなは言うことを聞きません。
やはり何かを供えたいのです。今日ある人に物を何も持って来るなど言うと、次の日じゃ別の
人が持つてきます。その人に持つて来るなど言うと、その次の日にはまた別の人が持つて来ま

す。だから、私は何も言いたくありません。ある人に礼拝（らいはい）するなど言っても、次の日にはまた別の人が来て礼拝するのです。

私は毎日、同じことを教えるわけにはいきません。なので私は今、ストライキをして何も言わないことにしています。礼拝したい人はしても良いし、物を持って来たい人は持って来ても構いません。ただし、私のところに物をたくさん持ち込まないでください。私はもう十分足りています。たくさん持ち込まれたら、私の車はいっぱいになって動けません。私の住んでいる山は高いので、お金を積み込み過ぎたら車は動かなくなります。（笑い） 私たちはお寺は建てないのでたくさんのお金は要りません。私が餓死しないかと心配しないでください。十分足りています。餓死しそうになった時は、新聞に掲載します。（笑い）「何々メデイーションセンターである僧が餓死しそうです」と新聞に掲載したら、フォルモサの人々はすぐに供え物を持って駆け付けて来るでしょう。私の弟子たちはよく私の面倒を見てくれるので、餓死することはありません。あまりにもたくさん物を持って来られると、かえって食べられません。食べきれないと浪費になります。ですから出家したい人は早く来てください。そして私の代わりに食べてください。今、物が多すぎて食べきれません。私も小食ですが、出家者たちも小食です。

しかし、この世界では人々は仕事が大変で、頑張つてやらなければなりません。さつき私が

ここに入って来た時、階下にビスケットの店がありました。店員たちはちようど朝ごはんにビスケットを食べていました。そういうものは動物性を含んだ食べ物で、私たちには食べることができません。彼らは大変忙しそうに見えます。ここに来る度に、彼らは忙しく動き回り、大変な様子です。このような小さな食べ物はいくらしらないと思います。利益はきつとそれほど多くはないでしょう。しかし、あんなに苦労しています。時には資金のやりくりで苦労し、食事もろくにできなく、着るものもままならず、ひどい場合は倒産してたくさんの借金を抱えることになります。これは実に憐れです。食べて行くために、生活していくために、また着るためにあんなに苦労するのは、私たち修行者は元々お金を持っていません。しかし、食べきれないほどの物があります。私はみなさんがなぜ出家しないのか理解できないのです。(笑い)

あれほど苦労してまでお金を稼ぎ、それでもいつもお金の心配をするのは、どうしてでしょうか。私にはわかりません。私たちはそんな苦労はしていません。毎日、仕事をしてメデイーションをしています。在家者のような苦しみはありません。私たちが仕事をしメデイーションするのはみな衆生を救うためです。私たちは寄付を求めて、新聞に載せたり、外に行つて托鉢に行つたりすることはありません。しかし使いきれないほどの物があり、着るものもたくさんあります。私たちにとっては、衣服は三、四枚で十分で、これも多すぎるほどです。食べる物もたくさんあります。私たちは多くの物を必要としません。私たち修行者はすぐ満足し

ます。お金がなくても借家に住んでも、自分たちの寺がなくても満足しています。身の回りにあるものですませます。すぐ満足する人は最も裕福な人です。

私が出家する前は、自分には托鉢に出かけたり、人に施しを求めたりする勇氣があるかどうか、出家したら、お金に不自由するのではないかといった心配がありました。心配はあったものの、修行者はやはり勇氣が必要です。お金がなければそれでいい、お腹がすいて餓死したなら、西方浄土に行ける、と思いました。今は使いきれないほど物があります。しかし、一般の人は朝から晩までお金儲けに勤しんでいます。忙しくて食事をする時間も寝る時間もないほどです。しかし、それでもお金に不自由していて実に憐れです。でも彼らの考え方を変える方法はありません。欲しいものを手に入れようとすればするほど手に入りません。自分の影を捕まえようとすると同じで、どうやっても捕まえられないのです。

例えば、私たちはある人がとても好きな場合、追いかけると、かえって逃げられてしまします。もし、彼のことを気にかけないでいると、自分からやって来ます。ですから、みなさん明日から試しに、飲食や、快樂などを追っつかないようにしてみてください。それらは自からやって来ます。なのであまり心配しないことです。創造主はたくさんのもを作り出し、私たち一人ひとりの面倒を見てくれています。草木はお金を稼いだりしません、成長して花を咲かせ実を付けます。動物も誰かに面倒を見てもらわなくても、たくさん繁殖し、魚も海の中で誰

にも面倒を見てもらわなくても、毎日、仕事にも行かなくても、(笑い)たくさんは繁殖します。世界の人口は四十億もいて、毎日たくさん魚を取って食べています。誰も魚の世話をしていません。けれども魚たちは元気に生きています。私たち人間はこの宇宙で、最も高貴な地位にいるのです。もし最高の神がいるとしたら、私たちの面倒を見てくれないはずはありません。

私たちが身・口・意(体、言葉、考え)をきれいにし、それを完全に神や仏陀や三宝(さんぼう：仏、法、僧)に捧げるために出家し、最高の神を信じていれば、最高の神はきっと私たちの面倒を見てくれます。仏陀を信じていれば、仏陀も私たちの面倒を見てくれます。そうではありませんか。(聴衆答える…そうです)だとしたら、みなさん出家してください。(笑い)出家するとすべてを手放すことができ、どんなことも気にかけません。そうなると、すぐ多くのがやってくる。ただ、みなさんはこれらのものを得るために出家しないでください。

私はまだ出家する前、銀行に預金があり、退職金もありました。私はドイツ政府の仕事をしていたので、退職金、保険金、社会福祉金、医療健康保険など、たっぷりありました。もし、私が一、二年仕事を続ければ、老後生活に困らないほどの積み立てができて、何も困らないほどのお金があったかもしれません。出家する前に、お金のことをしっかり計算していたら、もっと多くのお金を持って出家できたかもしれません。

しかし当時、私はこれらのことは一切構わず、決意したら、すぐ出家しました。お金のこと

など考えてもいませんでした。出家者は本来お金を使いません。そこで、そのときっぱり出家しました。もし後一、二年、または一、二カ月延ばしたら、何かが起こるか分かりません。何かが起こって、私は出家できなくなったかもしれないかもしれません。毎日多くのことが起こり、私たちは今日のことすら何が起こるか分からないのです。ましてや明日、または来年のことは誰にもわかりません。ですから、私は「もういい、決めたら行くのだ」と自分に言い聞かせました。出家すると言いながら、お金のことを心配するなんて、私は自分に腹が立ちました。

その時、私は少ししかお金を持っていませんでした。たぶん二、三千米ドル持っていたと思います。インド行きチケットを買ったら、本当に残り僅かになりましたが、やはり私は行きませんでした。二、三着の衣服と寝袋だけを持って、後は何もありません。チケットを買って残ったわずかなお金をしか持っていませんでした。それから、後にフォルモサに来るチケットを買ったら、お金は本当に全部なくなりました。当時私はフォルモサに行ってから、お金がなければどうしようと思いました。私はフォルモサに来た時、数百元しか持っていませんでした。一日ホテルに泊ったらお金は完全になくなりました。ちょうどその時、仏教会と連絡がとれて、彼らに私を泊めてくれるお寺を紹介してもらったのです。さもなければ、私は一人、誰も知らないフォルモサで餓死していたかもしれません。(笑い)

実際、フォルモサに着いた日に、仏教会のスタッフと連絡を取りましたが、相手は私の意図

を良く理解していなかったようで、私をホテルに連れて行って泊まらせたのです。私はホテルという文字を見て、お金が足りないのではと、とても不安になりましたが、口には出せませんでした。ただ、彼らに「このホテルは高くないですか」と聞きました。彼らは「大丈夫です。少しも高くありません。外国から来たマスターたちはみな、ここに泊まります」と言いました。しかし彼は、外国から来たこのマスターがどんな事情があるか、分かっています。（笑い）他の外国の僧がフォルモサに来た時は、大勢の人に囲まれ、多くの弟子たちが迎えに来て、そこで待ち受けていました。しかし、フォルモサには私を待っている人は一人もいませんでした。私がどこに行くにしても案内してくれる人や、送ってくれる人などいませんでした。その時は誰も私のことを知りませんでした。そこで、お金を支払う時に足りないのではないかと心配でした。

私は彼に「私はホテルに泊まりたくありません。私は出家者でホテル生活は慣れません。私をお寺に住まわせてもらえませんか」と言うと、彼は「とりあえず、ここに何日か泊って頂いて、後のことはゆつくり相談しましょう。（笑い）あなたはここに着いたばかりで、今すぐ住めるお寺を探すのは難しいです。今、私たちは受戒（戒律を授ける）のことでとても忙しいです。ですから、まずここに何日か泊っていただき、後のことは一週間後にまた話しましょう」と言うのでした。それを聞いて、私は心臓がドキドキしました。（笑い） どうしても、自分はお金

がないと言えませんでした。というのも私はその頃、出家したばかりで、衣服はとても新しく、清潔で良く見えたのです。

フォルモサの人々は私のことを大変親切にしてくれました。ホテルの人たちは私を大マスターだと思っていたのです。なぜなら、仏教会の紹介で来たので、彼らは私を尊敬し、大マスターと呼びました。しかし、彼らは私が少ししかお金を持っていないことを知りません。(笑い) 私は中にはいるとすぐ「一泊いくらでしょうか」と聞きました。彼は「とても安いです。心配しないでください。安いですから」と言いました。彼は私にとつてどれ位が安いのがわかりません。(笑い) 私は何回も聞いても、彼は答えてくれません。私はホテルの他の従業員に「私の部屋はいくらなのか知っていますか」と聞きました。彼は「部屋に行つて見てください。書いてあります」と言いました。私は見に行くと、部屋の中に札があり、そこに七百五十元と書いてありました。わあー。ちょうど足りません。(笑い) 私は次の日に、他のところに移ることにしました。フォルモサには私がお金を持っていないことを知っている人はいませんでした。

次の日彼が私に、住み心地が良いかどうか聞いたので、私は「この部屋には住みたくないです。すぐに他の住む場所に私を連れて行つてくれませんか。どのお寺でもかまいません。私は寝袋を持っているので、どこにでも住めます。外でも寝られます」と言いました。彼は「分かりました。今思いました。この付近にある講堂があります。そこに泊まってもらつてもい

いですか」と聞きました。私は「もちろん、いいですよ」と言いました。(笑い)

というところで、私の出家は一種の冒険でした。決めたらすぐに家を出て、何の準備もなく、お金もなく、フォルモサに来た時、誰一人知らず、どこにその勇気があったのか、私にも分かりません。みなさんは私の話を聞いて怖くなっていませんか。でもその時、私は少しも怖くなかったです。なぜなら、勇気を持つて本当に衣食住のことを手放したら、仏陀、菩薩は必ず面倒を見てくれることを私は知っていたからです。仏陀や菩薩は最後まで私たちに試練を与えることもあります。甚だしい場合は、最後に全く空気がない状態に追い込んでから、再び酸素を与えるようなことをするかもしれません。けれども結局は仏陀や菩薩は必ず助けてくれます。私が出家する前に、三日間餓死しそうなになった経験があります。ですから、出家しても餓死することを全く心配していません。もし、一、二週間何も食べなくても、死ぬことはありません。

インドでは多くの僧が一、二週間道を歩き続けることがあります。途中で誰もご飯をくれなくても、それでも彼らは大丈夫です。これは本当のことです。私はそういう人に「どうやって生きているのですか」と聞きました。彼は「お腹がすいたら、野草を採って食べ、喉が乾いたらガンジス川の水を飲みます」と言いました。ある人は野草も食べず、毎日お腹がすいたら、ガンジス川の水を飲みます。メデイーションが終わって退屈した時や、お腹がすいても、食べる物をくれる人がいない時に、またガンジス川の水をお腹いっぱい飲んで、またメデイー

シオンをします。(笑い) 住んでいる場所は一目見ただけ、お金を持っていないことが分かります。そこは自分で掘った洞穴で、彼はその中に座ってメデイーションしているので、お腹がすいても食べ物を持って来てくれる人は誰もいません。ガンジス川の水を飲むしかないのです。彼の生活は実に素晴らしいです。フォルモサに来た時、私は少しの不安もありませんでした。誰にも施してもらえなかったら、川を見つければ良かったからです。もちろんガンジス川ではありませんが、川さえ見つければ、その川の水を飲んで、修行しメデイーションもできます。(笑い) 今日まで私は飢え死にすることなく生きています。

私がフランスにいた頃、まだ学生で、あちこち見て回りました。ある時、三日間食べるものがなく、餓死しそうになったことがありました。仕事も見つからず、イギリスからの送金も届いてないので、持っていたお金を全部使ってしまった。パリの生活費がそんなに高いとは知りませんでした。イギリスの方が比較的安いです。パリは世界で生活費が最も高い都市の一つです。その時、私はパリに着いたばかりで、道も分からず、どこへ行ってもタクシーで行ったので、お金をたくさん使いました。パリのタクシードライバーには人を騙す人もいて、目的地がすぐ近くなのに、私を載せて遠回りし、ぐるぐる回って、退屈になった時、目的地に向かうのです。本当はすぐ近くでした。そこで私はたくさんのお金を無駄にしまいました。何も言えません。外国人なので、やたら怒ったりしても解決できないからです。

六祖慧能はもと木こりでした。ある日偶然、金剛経を唱えているのを聞いて、突然悟りを開き、解脱するために修行しようと、五祖弘忍（ごそくにん）を訪ねることを決意しました。当時彼はとても貧しく、また一人っ子だったので、母親の面倒をみなければなりませんでしたが、彼はどうしても出家したかったです。ちょうどその時、ある人からお金の援助を受けました。そのお金で母親の生活の問題は解決できたので、彼は安心して出家しました。ですから、私たちが本当に誠心誠意、仏陀になり、衆生を助けるために出家したいと思ったら、必ず、仏陀や菩薩が助けてくれます。ただし、本当に誠心誠意でなければなりません。なぜなら、仏陀や菩薩は私たち自身よりも私たちのことを良く分かっているからです。私たちは自分を騙したり、マスターを騙したりすることは出来ませんが、仏陀や菩薩を騙すことはできません。従って誠心誠意でなければなりません。そうすると何をしても成功するのです。純真な心と純粋な目的があれば、何をするにしても誰かが助けてくれるので、何も心配することはありません。

私が出家した後は、お金は使い切れません。みなさんご存知のように、たくさんの方が私に寄付しようと思いますが、私は拒否します。私の弟子以外の人からの寄付も拒否します。大金の寄付も拒否します。生活費が足りたら一切断ります。寄付をたくさんもらうので、生活費が足りるではありません。ほんの少ししか、受け取らなくても十分です。私は何も欲しくありません。毎日、経の講義に出かけ、帰って来るとメデイーションをし、時々みんなが私に会い

に来る、といった生活をしています。生活は極めて簡素で、私は歌もダンスもできませんし、お酒も飲みません。(笑い) 一日、三箱のタバコを吸うようなことはありません。私たちが特に必要とするものは、何もありません。私たちが住んでいるところはテレビも新聞もありません。出家者たちはみな静かに修行に精進しています。

ですから、たくさんのお金は必要ありません。毎月の電気代は多くて三、四百円で、外の人たちと話すこともあまりないので、電話代もほんの少しです。みんなが一緒に生活している場合、うまくやりくりすれば、お金はそんなに必要ないです。私たちは山の中に住んでして、ガソリン代を含めても、毎月二、三千元くらいで十分です。ただ、あの古い中古車が時々、お金を食っています。(笑い) いつも修理に出しているからです。もし、私が経の講義に出かけなければ、もっと節約できます。フォルモサではお米も野菜もとても安く、適当に作って食べればいいのです。出家者たちはあまり、食べないことに驚きました。若い人だからたくさん食べると思いましたが、みんなあまり食べません。ですから、私はあまり出費がないのです。さもないと、私は倒産してしまうかもしれません。(笑い)

したがって、出家しても何も心配ありません。出家するのは因果律を超え、三界を超えるためです。ただし良い法門がなければ、出家しても解脱できません。廣欽老和尚はかつて「出家しても、良い法門がなく、良いマスターもなく、または修行に精進しなければ、何の役にも立

たないので、残念なことです」と言いました。私も同感です。というのは、多くの人は高い理想のために出家し、目的もとても純粹ですが、福報が足りないために、良いマスターと良い法門に出会えません。現世の生活はとても簡素でカルマもあまり作っていないかもしれないが、前世のカルマは消し去ることは出来ません。レベルも高くならないし、智慧もそれほど開かないので、一生そのような生活を続けても、あまり役に立ちません。第一界か二界まで到達することは出来たとしても、死後そこに留まって、ある期間、楽しく過ごした後、また落ちて来ます。結局、究極の解脱は出来ません。これは大変残念なことです。

私は出家する前にたくさんのお寺を訪ね、多くの師に従って学びましたが、いずれも満足できませんでした。出家後の生活がそのようなものだとしたら、私は出家したくないと思いました。毎日、朝晩のお勤め以外に、一日中雑談をしたり、美味しい料理をたくさん作って食べたりするのは、彼らは、菜食は栄養が足りないのでたくさん食べなければならぬと思っっているのです。色も味も良いものを作ったくさん食べると体に良いと思っっているようです。出家してから栄養不足のことを心配して、食べることに神経を使っていました。修行者がこんなことにとらわれては、いつになったら自由自在になれるのでしょうかと私は思っただけです。何を食べてもいいのです。食べることにそんなに神経を使わなくても、体は自然に自己管理をしてくれるのです。栄養さえ足りればいいのです。修行ができていれば、そんなにたくさん食べた

くありません。廣欽老和尚は毎日何も食べませんでした。彼は元々あまり食べない方で、果物を少し食べるくらいでした。彼は山で修行していた時、誰も食べるものを持って来てくれなかったたので、彼は何も食べませんでした。時々猿が彼に果物を持って来てくれましたが、それもほんの少しだけでした。というのは、山にはそれほど多くの果物があつたわけではなく、彼自身、何も食べたくなかったからです。

修行がしつかりできていないと、たくさん食べます。なぜなら、空っぽだからたくさん食べたくなるのです。心を高い境界（きょうがい）に置かなければ、当然低い境界に置いてあるわけです。竹竿に上ると同じように、上に向かって上らなければ、自然と下に滑り落ちます。二つの道しかありません。上るか下るかです。心をここに（マスターお腹を指す）置くと当然、物が食べたくなります。退屈だからなのでしょう。普通の人は仕事がないと、良くないことを考えたり、悪いことをしたりします。

ですから、しつかり修行している人はあまりお腹がすきません。彼ら（出家者）は山の中で毎日七、八時間メデイーションをするのでお腹がすかないのです。本当に修行したい人は食べることをあまり考えません。食べるものが何もなくても問題ありません。もしある日、私たち観音法門の修行者は、食べることを面倒に思つて、今後断食しようと思つて何も食べなくても問題ありません。私は彼らが決して餓死しないことを保証します。ただし突然断食しないこ

とです。徐々に、毎日少しずつ量を減らしていけば、何の危険もありません。

危険といっても、実際は危険ではありません。体調が少しおかしくなるだけです。さもなければ、食べないと決めたら、食べなくてもかまいません。絶対に問題はありません。もし、ある日世界戦争が勃発して、みんなが食べることに困ったとしても、観音法門の修行者は心配ありません。水さえ飲めばいいのです。水がなくても死んだりしません。これは神通力でもなく、自然のことです。故意にやらなくても、特に何かをしなくても、何も食べなくても心配ありません。これは神通力でもなく修行法門でもありません。

観音法門の修行者は、しつかり修行していれば、何かも求めなくても何でもあります。体は自然に健康になります。最初は少しお腹がすくかもしれないし、しばらく経つとそれもなくなりません。観音法門を修行すると食べ物が必要なくも餓死しないし、着るものがなくても凍死しません。したがって観音法門を修行すれば、この物質世界においても、解脱の道においても、非常に安全です。私たちが故意に状況を作り出さなければ、本当の緊急事態には、マスターのパワーが助けてくれます。往生の時間になっていなければ、転んで死にそうになってもマスターは決して死なせません。その時はマスターが手助けをします。あなたはその時初めてマスターは誰なのか、どのように自分を助けてくれたのかを知りましょう。

ただし、本当にまじめに修行してこそ、保護のパワーを得られます。ですから、観音法門は

本当に安全です。たとえある日、本当に戦争が勃発したら、みなさんは今日私が言ったことを思い出して、慌てないでください。私の指示に従って真面目に修行する人は、必ず保護のパワーに護られます。

今日私が話した内容はいずれも三界以下のことです。三界以上のことは話しことは出来ません。またここで話してはいけないのです。後にみなさんはその話を聞く機会があるかもしれません。今日はもともと食べることについて、話をするつもりはありませんでした。これは私の弟子たちに言い聞かせようと思いました。私の弟子たちに話すつもりでした。ですが、今日はいれなくなって話しましたが、みなさん忘れてください。みなさんは一度もこんな話を聞いたことがないと思います。そうでしょう。さっきの話はみなさんの脳から、洗い流してください。

昔、ある立派な人がいて、国王は彼を国師（国王の参謀）と呼びました。それを聞いて彼はすぐ川へ行って耳を洗いました。みなさんは彼が誰だか分かりますか。私は彼の名前を忘れてしまいました。中国古代の物語に出てくる人物です。（注：許由）国王が彼を連れて帰って、官僚にしようとした時、彼はすぐ川に行つて耳を洗いました。もう聞いてしまったのでまったので、耳を洗うしかなかったのです。

彼には牧童の友だちがいて、ちようど川で牛を放牧していました。彼が耳を洗っているのを見て、牧童は「なぜそんなに耳を洗っているのか」と聞くと、彼は「さっき国王が私を連れて

帰って、官僚にすると言ったので、私の頭脳が汚染されないうちに、すぐに耳を洗ったのだ」と言いました。その牧童はそれを聞いてすぐ、牛を上流に連れて行って水を飲ませました。彼は「なぜ牛を上流に連れて行くのか」と聞くと、牧童は「あなたがここで耳を洗ったので、私の牛に汚染された水を飲ませたくないからだ」と言いました。そして、「あなたは、自分は智慧がある人だと、人々に見せびらかしている。あなたには名誉欲がある」と彼を叱ったのです。

今日、いろんな話をしました。多くの人は私が観音法門を教えていることを知っています。今日はまた、観音法門を修行すると、食べ物がなくても問題ないと言う話もしました。今日聞いた話は他の人に言わないようにしてください。さもないと、面倒なことが起きるかもしれません。それはあまり好ましくありません。(笑い)

Q 仏教の經典には、神は仏陀や菩薩の化身であり、私たちが修行すると助けてくれる、と書いてありますが、マスターはなぜそれらは魔だというのですか。

M 私がさっき話したように、彼らは魔ではありません。ただ、彼らの仕事をしているだけです。ですから、魔と言っても魔ではありません。先日私が他のところ、経の講義をした時は、衆生は仏陀であり、魔も仏陀であると話しました。先日また、それぞれの境界(きょうがい)には教主がいて、私たちがその教主を知っていれば、彼らは私たちにドアを開けて入れてくれ

ると話しました。

例えば、阿弥陀仏は最高の境界にいます。あなたは阿弥陀仏の名前だけを唱えて、それより下の境界の教主を知らないとしたら、その教主たちは当然あなたを通して、最高の境界に行かせることはありません。ですから、私が教えている念仏は他の人が教えているものと違います。阿弥陀仏だけを唱えるものではありません。下の境界から、一つひとつ上の境界に向かって唱えます。その日私はこれに付いて詳しく話しました。あなたは多分いなかったかもしれない。下の境界から上の境界に向かって念じてこそ、役に立ちます。しかし経典にはこういう話を書いてありません。だからみなさんには分からないのです。これは伝承しなければならぬことで、マスターが伝授して初めて分かるのです。経典にはそういった仏陀の名前は載っていません。



善行や施しだけでは解脱できない

スプリームマスターチンハイ フォルモサ・台北

一九八七年十月二十六日

「道（タオ）を求める」道を求めたいなら、ただ良い人であればいいということではありません。また、社会的奉仕活動にたくさん参加したり、多額の金品を施したり、多く場所に礼拝に行ったり、多くのお寺に寄付したりすることで、「道」を得られると思っただけではありません。それは不可能なことです。なぜなら、道（タオ）は道（タオ）だからです。つまり「路（みち）」ですが、言葉で表現することはできません。また、何かの物と交換したり、飾り立てたりして「道（タオ）」になるわけではありません。この「道」またはこの「路」はもともとあるもので、既に存在しているものです。この「道」にたどり着くには、まず外に出て「路」に向って進まなければなりません。家の中に座っていては、「路」を見付けることはできません。

例えば今、私たちが向かい側にあるお寺に行こうとしたら、まずこの門から出て（メデイエーションセンターの門を指す）行かなければなりません。そうでしょう。お寺に続く路はす

にあるので、そこに行くにはまずこの路（みち）を見付けなりません。道順が分からなければ、誰かに聞かなければなりません。またはそのお寺から出て来た人を見つけて、その人に頼んで連れて行ってもらわなければなりません。そうでしょう。路がどこにあるのか知らないのに、その路を探そうとせず、ただ毎日良い人でいて、お寺に行つて礼拝したり、貧しい人にお金を施したり、大金を寄付してお寺を建てたりして、目的地が見つかりますか。見つかりません。それは私たちが行こうとするお寺への路と全く関係ないからです。

同様に、私たちが「道（タオ）を求めて」、仏陀になるためには、必ずまずは「道」探さなければなりません。ですから、老子は「道可道，非常道。（道という道は、普通の道ではありません）」と言いました。なぜなら、この「道」はとつくに既にあるもので完璧なものです。なので、私たちがわざとそれを飾り立てる必要はないのです。なぜなら、それは自然な道だからです。この道に戻るには、何も特別なことをする必要はありません。普段私たちが道徳のある人間になるのは当たり前で、道を求めるための行為ではありません。道徳的なことをするのは人間としての基本的な責任であり、当たり前のことであり、そうすべきことです。私たちは小学校のから多くの道徳のモラルに付いて学んで来ました。例えば貧しい人を助けるとか、隣人と仲良くするとか、親孝行をするなどです。

私は小学校の時すでにこれらを学びました。例えば道路で盲目の老人に会うとすぐ、その人

を連れて道路を渡りました。これは私たちが思いやりの心を持つべきであることを示しています。オウラックにも「遠い親戚より近くの隣人」という、似たようなことわざがあります。これは私たちが隣人と仲良くし、お互いに助け合い、相手が必要とする時に助けてあげると、後に自分が助けを必要とする時に、人々に助けてもらえるということを示しています。これはごく自然なことであって、「道(タオ)を得る」とは何の関係もありません。私たちは貧しくて飢えている人を見ると、自然に食べ物あげます。これは一般の人でもよくすることです。

これは人間どうしの基本的な関係です。誰か困っている人や苦しんでいる人を見ると、私たちは自然と慈悲心がわいて助けてあげるので。多くの修行していない人でも、良くこういふことをやっています。もしかしたら、そういう人の方がもっとよくやっているかもしれません。彼らは「エゴ」で良い行いをするのではなく、道徳的なチャリティをしているとは、自分では意識していません。ただ自然にやっているだけです。私たちの手がやけどをしたり、怪我したりすると、すぐに薬を塗って包帯を巻くのと同じです、私たちは両手を大事にしてこそ、次の日引き続き仕事ができるからです。ですから手が痛くなると、私たちはすぐに手当てをするのです。

同様に隣人や誰かが困っていたら、私たちはすぐに助けてあげます。これはごく自然なことなのです。こうすると最高の神が私たちを良い人だと思い、上に連れて行ってくれるとか、魂

の故郷に連れて行ってもらえると、思ってはいません。そんなことはありません。最高の神、またはこの「道（タオ）」、この「仏性」は中立で、あなたが良いことをしようと、悪いことをしようと構わないのです。神は神であり、神を見付けたければ「正しい路（みち）」、すなわち神と通じる路を歩まなければなりません。この路は、善人悪人を問わず、行きたい人は誰でも行くことができます。

例えば外の道路ですが、多くの人が往来できません。そうでしょう。お酒を飲む人も、盗みを働く人も、善人も悪人も往来できません。私たちの大統領もこの道路を歩くことができます。この道路は誰が善人か、誰が悪人かなどは気にしません。しかし山に行くには必ずこの道路を通らなければなりません。ですから、私たちは小さな善行や、善行でたまった、ほんのわずかな福報で道（タオ）を得ることはできません。それはあり得ないことです。しかし、誠心誠意に「道を求める」人は、もちろん善人です。修行者の自伝を読むとわかるように、彼らはみな道徳的な人達です。

数百年前、オウラック（ベトナム）には賢明な国王がいました。彼は慈悲深く政治を収め、民を愛していました。人民にとって彼は最高の国王でした。彼はみんなに思いやり深い人でした。もともとそういう人でした。そしていつも国内を見て回りました。

ある日、彼はまた城門を出て外に行きました。道端で亡くなったばかりの貧しい人を見まし

た。その人は服を着ていなく、裸のまま道端に横たわっていました。国王はそれを見て、胸を痛め、涙を流しました。そして自分の服を脱いでその貧しい人にかけてあげました。国王の服はとても高級なものですが、その時彼は自分が国王であることを忘れていたのです。国王は死んでいる人に自分の華麗な服をかけてあげるのは、もったいないことだとも思わなかったのです。それは全く自然に慈悲心からでした。人の苦しみを目の当たりにして、自分が持っている物をすぐ与えることこそ、真の般若波羅密（はんにやはらみつ）の施しです。

みなさんは般若波羅密の施しとは何か分かりますか。その国王の行為が、なぜ真の施しなのか分かりますか。それは施す時に、「私」が施しているとか、この施しは何の役に立つのかとか、私にとって何の利益があるのかなどと全く考えなかったからです。ただ自然に心からあふれ出したものなので、これを般若波羅密の施しと言います。これは正しい施しです。もし私たちが人に物を与えながら、福報の見返りを待っていたら、このような施しは何の役にも立たず、福報もとても小さく栄養にはなりません。

私は小さい時たくさん間違いをしました。両親のお金や、食べ物を持ち出して貧しい人たちにあげました。当時まだ幼かったのですが、これは良くない行為であるとはわかりませんでした。お金を持っている人が人々に施しするのは良いことですが、お金や物を持ちだして施すのはいいなかったのです。ただまだ子どもだったので、物乞いの人が私の家に来るとかわいそうに思

ったのです。時にはたくさん物乞いが来て、両親も手に負えないこともありました。または忙しくて、彼らを構っていられなかったのです。そういう時、私はこっそりお金や食べ物を持ち出して彼らに与えたのです。

子どもながら貧しくて苦しんでいる人達を見ると、すぐに助けてあげたのです。両親の了解なしでは、持ち出してはいけななどと考えませんでした。その時は隣近所にも多くの貧しい人たちがいました。私はいつも、母親の分のご飯と他の食べ物も彼らにあげました。当時私は何も考えていませんでした。今思うと、それはあまり良いことではないような気がします。私の両親が今、そのことを知ったとしても、私が悪い子だったとは思わないでしょう。

ついでに私の小さい頃の話をしました。再びあの賢明な国王の話に戻ります。この国王は本当に慈悲深い人で、後に彼は出家しました。彼は二十代の若さの時にすでに出家して、仏教の教理を学び、修行して仏陀になりたいと思いました。ある日、彼はこっそり家出しました。というのは、彼は結婚したくなかったのですが、ある人が彼に無理に結婚させようとしたからです。先代の国王の命に従って、朝廷のある開国の功労者であり、先代の国王の時から元老が、この若い国王の世話役になりました。ですから、元老は態度が大きく、若い国王がやりたくないことをたくさんやらせたのです。

ある日その元老は、また心の優しい国王に、自分の親戚の娘と結婚するよう、強く勧めまし

た。国王は応じませんでした。当時彼はすでに出家する決意をしていたのです。そこで国王の地位など気にもせず、こっそり王宮を離れて山の中に入り、ある有名な禅師の弟子になったのです。しかし、出家して何カ月も経たない内に、宮廷の役人たちがみんな山に入ってきて来て、彼が出家した場所を見つけ、王宮に戻るよう要請しましたが、彼は応じませんでした。その時、例の元老は「いいでしょう。あなたが王宮に戻らなければ、あなたが住んでいるところに、朝廷を移します」と言いました。

彼のマスターもこの若い王様もどうしたらいいのかわかりませんでした。そこで彼のマスターは「いいでしょう。戻ってください。王宮でも修行できます。修行のことを忘れなければいいのです。もし何か問題があったら、また私のところに来て聞いてください。あせらずに修行することです。暇な時は私のところに来てもいいし、時間がたくさんある時は、しばらく政務を休んで、一定期間閉じこもって修行するのでもいいでしょう。王位を子どもに譲ったあと、私のところに来て出家してもいいでしょう」と言いました。後に彼は年老いて王位を若い王子に譲った後、出家して偉大な修行者になりました。智慧もレベルもとても高く、道（タオ）を得たのです。

この国王は、オウラックで民衆に最も敬愛された国王でした。彼の在位期間中、政治は透明で社会はとても安定していました。彼は修行しながら国を収めたからです。修行すると智慧が

發展します。彼は智慧で国を収めたので、間違いを犯すようなことはありませんでした。したがって、彼が在位期間中オウラックは黄金時代で、文学や政治、農業など、各方面で發展を遂げました。仏教も最盛期を迎えました。仏教以外の宗教も自由で、抑圧されることはありませんでした。

彼が在位期間中は法律を犯す人も少なく、貧富の格差も大きくありませんでした。というのは、彼はいつも各地を回って民衆が何を必要としているのかを良く調べたからです。彼は実に賢明な国王でした。けれども彼の父上は仏教徒でもなく、彼のような慈悲深い人ではなかったのですが、このことは重要ではなく、彼は誠心誠意に修行したので、大修行者になれたのです。

私の両親もキリスト教徒で、仏教とは何の関係もありませんでした。しかし両親にとつて、イエス・キリストは名前を覚えていただけで、宗教的なことについては、あまり関心がなかったようです。父はとても良い人でした。良い人といっても普通に心やさしい人で、何かを求めたり、真理を求めたりするような人ではありませんでした。母もそれほど施しをしませんでした。それでも、私は仏教の尼僧になっただけでなく、道（タオ）を求めたのです。

したがって私が言いたいことは、個人の背景と道（タオ）を求める心は関係なく、個人のレベルとも関係ないということです。主に前世で修行したので、現在「道（タオ）」を見付けることができ、良いマスターと良い法門に出会うことが出来たのです。両親の福報とは関係ありません。

せん。私たちに思いやりの心があり、慈悲深く、博愛の精神があるとしたら、それも私たち自身のもので、両親とあまり関係ありません。これらの道理を話すことは、みなさんを激励するためです。自分が貧しい家庭で生まれ、福報のない家庭、または仏教を信仰していない家庭で、全く宗教の信仰のない家庭で生まれたからといって、自信をなくす必要はありません。

ある人が私に、「自分は今まで仏教にふれたこともないし、仏教のことも修行のことも、全く分からないのですが、それでも修行できますか。成就することができますか」と聞きました。私は「出来ませう」と答えました。なぜなら、修行は過去や現在、未来とは絶対的な関係はないからです。今、仏陀に学び、修行し、道（タオ）を得たいと願うのであれば、すぐに実行することです。私たちの背景とは関係ありません。

さつきも話したように、道（タオ）を求めることは施しや道徳や美德といったことと関係ありません。といつても、全く関係ないとも言えません。なぜなら、道（タオ）を求める心を持っている人はきつと善良な人だからです。さつき話したあの国王はとても慈悲深く、博愛の心を持っていて、また修行にも精進したので道（タオ）を得たのです。これは彼の前世の修行と関係があります。もし私たちが、過去に美德もなく、道徳的なこともしなかったとしても、今日から良い行いをすればいいのです。ただ、これは修行とあまり関係ないことです。

この世界において、良い人になることは当たり前のことです。良い人になると親も友人も隣

人もみな喜ぶからです。彼らが喜ぶと私たちも幸せになります。そうでしょう。恨みに満ち、みんなが自分を敵視する、そんな環境では、私たちは生きて行けません。そういう環境で修行することはとても難しいです。ですから、私たちは良い行いをし、出来るだけ布施をし、持戒し、忍辱すると、これらはいずれも私たちの修行の助けとなります。ただし、布施（施しをする）、持戒（戒律を守る）、忍辱（苦難に耐え忍ぶ）だけでは足りません。金剛経には六波羅蜜（ろくはらみつ）、つまり布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧を一緒に修行しなければならぬといはつきり書いてあります。このうち五つだけを修行しても不十分だということを示しています。必ず、禪定もなければなりません。

禪定とは何でしょうか。メデイテーションする時、心は落ち着き、頭は雑念がなくなります。私たちの体には心を落ち着かせることができる場所があります。心をそこに安定させると心は乱れず外部からの影響も受けません。これを「禪定（サマデー）」と言います。禪定の時、私たちは自分の本来の面目、仏性と繋がります。この本来の面目、仏性は天国、最高の神のパワー、道（タオ）です。何と呼んでもかまいません。それ自身、大きなパワーがあつて、すべての問題を解決でき、すべての福報を備えています。

ですから、このパワーと繋がれば福報を作らなくても福報があり、わざわざ良い行いをしなくても自然に道徳的な人になります。なぜなら、それは自然のパワーが私たちを変えたり、私

たちの内面を浄化したりして、真の良い人にしてくれるからです。個人の内面を変化させるだけでなく、私たちの外面のことも面倒を見てくれます。例えば、私たちが困難にぶつかった時、そのパワーが助けてくれます。なぜでしょうか。その智慧は「般若波羅密（ほんにやはらみつ）」だからです。つまり仏性は大智慧であり、大パワーなので、私たちがこのパワーに頼ると、困ることはありません。

反対に外面の状況に頼って名利を求めたら、これらはもともと無常なものなので、今日お金があっても、明日は無一文になることもあるし、今日名声を博しても明日は誹謗されたり、落とし穴に落ちたりして、地位を失うかもしれません。周知のように、多くの過去の君主は一日のうちに国を侵略されたりしました。また、多くのお金持ちも陰謀や戦いの中で騙されたりして、無一文になることもあります。今日ある地位や財産は明日も必ずあると言えるでしょうか。

もし般若波羅密、大智慧、大パワーと通じれば、私たちは永遠に何かを失う心配はありません。なぜなら、このパワーは永遠に変わらなず、永遠に存在し、毎日同じように慈悲深く、愛にあふれ、優しく私たちを助けてくれるからです。それはこの世界で、最も良き友のようで、さらに良き友よりも頼れる存在です。友だちは私たちに背くことがあります。このパワー、この仏陀の力、あるいは般若波羅密は私たちに背くことはありません。永遠に最高の友になつてくれます。

だからイエス・キリストは「まず自分の内面の天国を見付けると、すべてのものが与えられる」と言っています。釈迦牟尼仏も「仏陀は心の中にある」と言いました。もし、仏陀が寺院の中にあるとしたら、彼は教えてくれるはずです。仏陀が寺院にあって、私たちがそこに行つて礼拝したり、その他の表面的なことをしたりしなければならぬなら、釈迦牟尼仏はきつと私たちに、「たくさん布施すると仏性が見つかる」、または「寺院に行つて礼拝すると仏性が見つかる」と言うはずです。そうではありませんか。釈迦牟尼仏は決してそうは言っていない。ただ「仏陀は心の中にある」と言っています。

仏陀は心の中にあるとはどんな意味でしょう。それは私たちの心の中にある仏陀を探し出すべきだということです。心とは何でしょう。それは私たちの心の中の最も内面の場所で、多くのもがそこにあります。他人にはまったく分からず、理解することもできません。これらとても神秘的で最も内面的で、ここが仏陀のある場所です。だから、イエス・キリストも同じ道理、「天国は道徳的な行為によつて見つかるものではなく、道徳から生まれたものでもない。天国はもともと、すでに内面にあるものである」と言っています。

この二人の偉大なマスターは同じ道理を言っています。釈迦牟尼仏は「仏性」と言い、イエス・キリストは「天国」と言いましたが、これは同じことであつて、用語が違うだけで意味は全く同じです。宗教間の論争はいずれもマスターたちの教理をよく理解していないから起きる

のです。マスターたちの無限の寛容な教えを狭く解釈し、狭い個人的な見解に変えてしまったので、仏教やキリスト教をとっても狭い宗教にしまつて、互いに言い争っているのです。これはすべてマスターたちの教えを理解していないからです。

だから釈迦牟尼仏は「仏陀を信じていても、仏陀のことを知らないのは、仏陀を誹謗することである」と私たちに警告しました。釈迦牟尼仏は私たちに注意をしたのです。しかし、私たちは依然として分かっています。イエス・キリストも「みなさんが毎日私を語り、私に礼拝し、私を尊敬し、主を敬うだけでは、決して道（タオ）を得て、天国を見付けられるというわけではない」と言いました。これは仏陀の言葉と全く同じ意味です。

「仏陀を知る」とは何でしょう。仏陀を知ることとは仏性を探し出すことです。この仏性がどこにあるのかを見つけて出すことです。仏陀は Buddha あり、サンスクリット語では悟りを開く、または毫光（ごうこう：体から発する莊嚴な光）という意味です。だから釈迦牟尼仏には毫光があり、仏画にも毫光が描かれています。イエス・キリストや他の多くの修行者たちも毫光を発していますが、この光は誰もが見えるわけではありません。高いレベルの修行者にしか見えません。ですから、私たちがこの仏陀を見付け、仏陀のことを知るためにはまず、仏陀になつた人を探し、彼に従つて学ぶと仏陀になれます。仏陀になつていない人にどうして仏陀が分かるのでしょうか。

ですから、私たちはいつも子育てをしていない人は、親の心が分からないと言います。仏陀を知ることには、これと似たようなことです。仏陀になる前には仏陀を知ることができません。釈迦牟尼仏が言っていることは、つまり私たちは自分が仏陀になるべきであって、仏陀を信じて、礼拝したりするだけではいけないという意味です。なぜなら仏陀を信じていても、仏陀を知らなくては、本当に信じていると言えるでしょうか。仏陀のことを何も知らなければ、何んなに信じていても、みな盲信です。なぜなら、知らないから盲信的になるのです。「盲信」は知らないから盲信します。ですから、仏陀を知るためにはまず仏陀にならないければなりません。道（タオ）を求めるためには、「道（タオ）」を得なければなりません。それ以外に方法はありません。

老子は「道（タオ）を得ると、すべてを得る」と言っています。しかしこの「道」は次第に失なわれていき、徐々に「徳」に変わり、後にまた、「仁・義・禮・智・信」などさまざまな社会的な道徳が生まれたのです。「道」は本来最高で、あらゆる道徳規範よりも高い存在です。ですから、この「道（タオ）」を見付けるべきで、これが見つかると私たちはあらゆる道徳が備わります。この「道」を失ったために、人為的に多くの社会的道徳規範が作りだされたのです。もし、本当にこの「道」が分かると、「道」を得れば、この種の人為的な小さな道徳は要りません。（道徳経第十八章 大道廢，有仁義，智慧出，有大儀。）

私たちが仏性を見付けて仏陀になれば、意識的に六波羅密（ろくはらみつ）：布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧）を実践しなくても、自然にできます。なぜならその時、私たち自身が大きなパワーになっていて、施しをしたいと思えばすぐできます。施しと言っても一、二杯のご飯とか、一、二枚の衣服くらいのことではありません。大きな福報を得られるものを施すのです。福報のある人は当然、食べるご飯もあり、着る衣服もあります。だから私たちは裕福な人は福報があるというのです。仏陀になれば無量無辺の福報を施すことができます。これはご飯や服など物質的なものを施すより、もっと大きな力があり、実質的な利益があります。だから仏陀になるべきです。

宗教や宗派によっては、施しをして家に帰っては仏像を拜むように人々に勧めています。彼らはこれで十分だと思っていますが、十分なはずはありません。仏陀を拜むことで仏陀になるわけはありません。仏陀を拜んでも結構ですが、なぜ仏陀を拜むのかを知らなければなりません。それは私たちの教主に対する尊敬の念を表すためです。釈迦牟尼仏がいなかったら、仏教もなく、私たちが「無量無辺の奥深い妙なる法」について勉強する機会もなく、修行したいと思うこともなかったはずです。だから私たちは釈迦牟尼仏を礼拝して感謝するのです。

釈迦牟尼仏に礼拝する時は、百の願い事を言っただけじゃありません。多くの人は礼拝を始めるや否や、「南無阿弥陀仏、南無波観世音菩薩、南無釈迦牟尼仏、私にこれをください。これをかな

えてください」と口々に言うのです。これではいけません。仏陀はそういったものはくれません。なぜなら、私たちに何を与えても無駄だからです。もしお金をくれたとしても次の日にはお金がなくなってしまう、富をくれても裕福な生活は私たちを傲慢にさせてしまい。多くの悪事を働き、さらに大きなカルマを作るからです。多くの裕福な人はたいして有意義な生活をしていません。お金を持っているとき多くの面倒なことがあります。

ですから、インドはとても貧しいところですが、高いレベルで高い修行をしている場所なのです。すべての大マスターはインドから来ています。またはインドに行つて法を学んだか、またはインドの修行法と関係があります。なぜなら、インドは世々代々にわたり聖地であり、イエス・キリストも十三歳から三十歳までの間、インドのヒマラヤに隠遁して、多くの大マスターに従つて修行しました。釈迦牟尼仏もインド人で、私のマスターの中の一人もインド人です。多くの有名な大師たちもほとんどインド人か東洋人です。

インドには昔からいつの時代にも、多くの有名な修行聖地がありますが、他の国に比べて裕福ではなく最も貧しいところです。しかしアメリカ、ドイツ、フランスなど裕福な国には真の偉大なマスターが現れたでしょうか。たとえ存在したとしても、釈迦牟尼仏やイエス・キリストの影響力には及びません。釈迦牟尼仏やイエス・キリストはいずれも東洋人です。東洋はもとも西洋より貧しいところですが、しかし東洋には多くの大思想家、大開悟者が現れました。

例えば釈迦牟尼仏、イエス・キリスト、菩提達磨（ぼだいだるま）、慧能（えのう）、百丈（ひやくじょう）、黄檗（おうぼく）、老子、孔子などです。

もし、施しが究極の解脱の方法だとしたら、釈迦牟尼仏は息子のラゴラに出家を勧めていなかったでしょう。ラゴラは当時九歳でした。将来王位を継承することになっていました。釈迦牟尼仏が出家した後、彼の息子が国王になりました。息子は釈迦牟尼仏に、私の遺産はどこにあるのかと聞きました。「あなたは私の父上です。私が継承すべき遺産はどこにありますか。私は今、遺産をもらいたいのです」と言いました。父親は息子のために財産を残すのが普通ですね。この時釈迦牟尼仏は「よからう。私について来るのだ。やがて後にお前の遺産が見つかるはずだ」と言いました。イエス・キリストも似たようなことを言っています。ある人が「マスター、あなたは国王だという人がいます。あなたの国土はどこにありますか」と聞きました。イエス・キリストは「私の国土はここにはない。天国にある」と答えました。

この娑婆世界のすべては無常で大した価値はありません。だから、釈迦牟尼仏やイエス・キリストはこの世界における財産を保有することを勧めません。人々に自分の内面の天国、涅槃の宝庫を見つけ出すことを勧めています。それは永遠の財産だからです。だから釈迦牟尼仏は息子に、出家して僧侶になることを勧めたのです。それは息子が出家したら、最も大きな富を得て幸せな生活ができることを知っていたからです。でなければ、釈迦牟尼仏のような大きく

悟りを開いた大師がまだ子どもである息子に、出家を勧めるはずはありません。決して害になるようなことはしません。

ラゴラはもともと国王の息子で、宮殿の中に住んでいて、世の中の富と栄華を楽しんでいました。何でも持っていました。そういう息子に、なぜ釈迦牟尼仏は出家して、苦しい修行を勧めたのでしょうか。当時の出家生活は今のような楽なものではありませんでした。毎日、釈迦牟尼仏と弟子たちは、歩いていろんな場所に行つて経の講義をしたのです。彼らは全員歩いて移動したのです。二、三枚の着替えしか持っていませんでした。寝る場所も決まらず、路傍など、どこでも寝ていたのです。とにかく、快適な場所は一つもなかったのです。こんな苦しい出家生活を、なぜ釈迦牟尼仏は息子に勧めたのでしょうか。息子に対して愛情がなくて、わざと苦しい生活を強いたのででしょうか。そうではありません。それは息子に、今後最も大きな富と最も幸せな場所を見付けて欲しかったからです。だから出家を勧めたのです。

もし施しが最高の法門、最高の方法で、これによって仏性を見付けられ、仏陀になれるとしたら、釈迦牟尼仏は息子に「帰って、良い国王になりなさい。将来、国の財産と最高の地位を使って衆生に利益をもたらし、あなたのお金を貧しい人に施して、民の面倒をよく見なさい」と勧めたはずで、す。しかし釈迦牟尼仏はそうは言いませんでした。たった一人の息子に出家して托鉢をする僧侶になることを勧めたのです。物乞いのようにどこでも托鉢をする僧侶です。

このように経典を通して、私たちは施しだけでは十分でなく、涅槃を見付けることもできないことを知ることができます。

仏陀を拜むと何の福報があるのでしょうか。釈迦牟尼仏が在世の時は仏陀を拜むと福報があります。なぜなら、「在世仏」は大きく悟りを開いた天界と人間界の導師なので、彼を拜むと私たちに福報を分けてくれるのです。だからその当時は仏陀を拜むと福報がありました。しかしここで、私はみなさんに本当のことを言わなければなりません。それは仏像を拜んでも福報がないことです。仏像はどのように私たちに福報を与えられるのでしょうか。私が「施しをしないう」いただきます、仏陀を拜まないでください」と言うと、ある人はすぐに私のことを外道（げどう）と言います。何が外道でしょう。道（タオ）を全く知らない人間が、どうして他人のことを外道だ、内道だと簡単に言えるのでしょうか。

それは自分自身が経典の意味も分からず、釈迦牟尼仏の「奥深い妙なる法」を知らないからです。だから、人が言っていることも理解できないのです。それなのに外道だ、内道だと言うのです。実際、内も外もありません。すべてが「道（タオ）」なのです。「道」を見付けられなかったら、すべてが道の外なのです。この「道」を見付けられたら、どんな人もキリスト教も、仏教も、儒教も、道教もみな内道（道）なのです。というのは、「道」は一つしかないからです。従ってどんな宗教の信者でも、道が見つかったら、みな内道（道）であり、見付けられなかつ

たら、すべてが外道（道の外）なのです。

従って私がさっき言ったように、この「道（タオ）」を見付けることと、良い行いをして施しをすることは何の関係もありません。仏陀を拝むことも関係ないのです。この「道」が見付かる前は何を拝もうと何をしようと、あまり意味がありません。「道」を見付けた後、仏陀を拝むと福報も多いのです。なぜならその時は、自分が拝んでいる仏陀が、どの仏陀でどの仏陀なのか分かっていて、どのように拝むのかも分かっているので福報があるのです。

釈迦牟尼仏は在世の時は、彼を拝むと大きな福報がありました。しかし、彼がこの世界を離れた後は、私たちは他の仏陀を拝むべきです。仏陀を拝むことは釈迦牟尼仏を拝むことではありません。もし大きく悟りを開いた真の仏陀に出会ったら、拝んでも構いません。でなければ、自分自身の仏性を拝んでもいいです。ただし、まずこの仏性を見付けてからのことです。自分の仏性を見つけてもいないのに「私は自分の仏性を拝む」というのはうそを言っていることになります。仏性がどこにあるのかもわからないで、何を拝むというのでしょうか。

インドでは自分が尊敬する人を礼拝する習慣があります。この習慣が中国に伝わってから、仏陀を拝む習慣に変わりました。もともとの習慣は生きている人間を拝むことであって、その人の彫像や写真などを拝むものではありませんでした。だから、釈迦牟尼仏は金剛経の中で「形で私を見て、音で私に祈求することは邪道であり、如来を見ることはできない（若以色见我，

以音聲求我，是人行邪道，不能見如來。」とはっきり言っています。

私たちは表面的な形に頼るのではなく、自分自身に頼らなければなりません。ただし、まずは自分自身の本来の面目を見付けることが先です。そうすると後にこの大パワールの仏性、大パワールの本来の面目、あるいはこの宇宙の阿耨多羅三藐三菩提（あのくたらさんみやくさんぼだい）に頼って、無上正等正覚（むじょうしようしようがく：この上ない最高の悟り）を見つけた後なら、拝んでもいいです。その時は私たちが何をしようと、みな内道（道）なのです。ただ、この「道」を見つけない前はみな外道で、仏陀を拝もうとイエス・キリストを拝もうと、どんな良いことをしようと、どんなえらい大師になろうと、みな外道です。

この真理である阿耨多羅三藐三菩提は、明日まで語っても語りきれません。マスターの手助けでなしでは阿耨多羅三藐三菩提を見付けることはできません。言葉では説明しきれません。ですから、ここまでにします。もしみなさんがこの本来の面目を見付け出したければ、午後に見つけ方を教えます。私はこの阿耨多羅三藐三菩提ではありませんが、どこでそれを見付けられるか、教えることができます。そしてみなさんは後から自分でそれを見付けることができます。とても簡単に即座にできます。

だから見付けた後も、必ず慎重にしなければなりません。なぜなら私たちは無数の過去世において形成された偏見に縛られているため、開悟しても、それに気が付かないことがあります。

前に何回も言ったように、ある人は死んでからも自分が死んだことも知らず、家の中を歩き回って、家族に話しかけたりして煩わせます。でも誰も自分の言うことを聞いてくれず、誰にも自分が見えないので、彼はとても失望し、苦悩して苦しみます。なぜなら彼は自分がすでに幽霊になっていることを知らず、生きている人には見えないことも知らないからです。ある人はこの世界を離れる時、特に強烈な不快感はなく、ただ眠りから目覚めたような、階下から階上へ上がるようにあまりにも自然だったので、自分が死んでいることに気付かず、人に話しかけたりするのです。

それで私たちは、人が幽霊に悪さをされたり、煩わされたりしたという話をよく聞きます。それは幽霊がとても腹を立てているからです。自分の奥さんが話を聞いてくれないとか、頭をなでても反応がなく、しかも男を家に連れて来て結婚するのを見て、自分がまだいるのに結婚するなんてと思い、とても怒るのです。よく幽霊が現れるとか、夜中に騒がしい音や怒っている声が聞こえるという家があることを、私たちはよく知っています。普通の人はみな「そこには魔障がある」と言いますが、それは本当のことです。嘘ではありません。というのはたくさん幽霊たちは自分がすでに死んでいることが分からないからです。

開悟の状況も同じです。とても柔和なのです。感電したように全身が震える感じではありません。ですから、開悟した後もそれに気付かないかもしれません。だから、古代の人たちは開

悟した後も、大マスターのもとに行って証明してもらうのは、そういう意味です。けれども、開悟の時は多かれ少なかれ、感じるものがあります。必ず何かが見えたり、確認できたりするものがあります。しかし、それらは大変、柔和なものです。ですから、みなさんが感電したような大開悟の体験を期待しても、そういうものはありません。開悟した後も慎重になって、修行を続けなければなりません。修行すればするほど自分が開悟したことが分かるのです。

先ほど死んだ人の話をしましたが、それと同様に、その死んだ人も徐々に状況が分かって来て、奥さんに係わるような事をしなくなります。その幽霊はどんなに悔しくても、どんなに嫌でも、そのうちに離れていきます。そして時間になると再び輪廻して、他の肉体に入るか、または自分が輪廻すべく路を歩むのです。

開悟した人も同じです。たとえ信じたくなくても、開悟したことは事実なのです。開悟していない状態に戻ることはありません。ですから、少しずつ修行を続け、私たちがその悟りを認識できるまで修行し、私たちの智慧を発展させ、完全に悟りを開くまで修行することです。その時になったら、私が言っていることが分かるでしょう。そして、自分は確かに開悟したことが確認できると思います。

本当の開悟は人に見せられるものではなく、売るものでもありません。ですから、言葉で説明することはとても難しいですが、感じることは出来ます。なぜなら自分自身の内面の変化を

感じることができ、智慧も開き心が穏やかになって、ますます安らぎを感じ、幸せで何をするにしても気楽で執着しません。こうなったら、自分は開悟したことが分かるのです。

開悟した後、私たちの魂は、仏陀の国土に行つて仏陀に会います。その時は、仏陀を礼拝し、拜んでも構いません。仏陀の国で仏陀を拜むことこそ、本当に仏陀を拜むことです。その時になつたら、私はみなさんがどんなに仏陀を拜んでも止めません。しかし、ここで拜んではいけません。ここでは本当の仏陀に会えないのに、何を拜むのでしょうか。開悟した後、すぐに宇宙全体のが分かるのではなく、智慧がすべて表れるのはありません。智慧はもともとそこにあるものであつて、開悟した後には表れるものではありません。ただ私たちは徐々にそれを見つけて発展させなければなりません。

例えば、私は今、何枚も衣服を着ています。シャワーを浴びる時は一枚ずつ脱いでから、シャワーを浴びます。同様に、開悟した後も、すべての真理が分かるわけではありません。釈迦牟尼仏やイエス・キリストさえも、何年もかけて修行をしたのですから。

「悟りを開く」と「道を得る」ことは同じ意味ではありません。「悟りを開く」は「完全な開悟」までまだまだ大きな距離があります。私はただみなさんの悟りを開くのを手助けするだけです。もしみなさんが完全に悟つて道を得たければ、長い期間絶え間なく、修行し続けなければなりません。常に私の経の講義を聞いて分からないところは質問し、それから自分で修行

をしながら解決するのです。約三カ月から六カ月の時間が経つと、自分が大きく変わったという良い結果に気付きます。長い時間かけなくても内面の変化が得られません。

今日、印心の時、みなさんはすぐ体験があり、「悟りを開く」ことを証明できます。自分がすでに初歩的な悟りを開いたということです。さもなければ、このような証明がなければ、その法門が本物かどうか、副作用があるかどうか、どうやって分かるのでしょうか。ですから、印心の時は即座に確認することができます。少し確認出来た後、徐々にそれを発展させ、ますます大きくしていくのです。これが「印心」です。印心は以心伝心することなので、言葉で伝えるのではなく（印心の時は無言で行います）、パワーで伝えるのです。だからみなさんは感じる事ができ、それに気付き、見ることも聞くことも、嗅ぐこともできます。もし言葉で法を伝えるとしたら、それは言葉でビスケットに付いて語るのと同じで、それは実際に味わうことではありません。

頓悟とは即座に断ち切るという意味です。何を断ち切るのでしょうか。私たちの体を切るのではありません。生死輪廻の鎖を断ち切ることです。ですから、印心後は二度と生死輪廻することはなく、来世もなく、現世は私たちの最後の一生です。だから、これを「頓悟」と言います。頓悟は即座に悟りを開き、即座に生死輪廻の鎖を断ち切ることです。私が言っている頓悟に付いて、みなさんは何か強烈な悟りを開く体験を期待しないでください。「悟り」はもともと、

すでにあるもので、私がみなさんの生死輪廻を断ち切ったため、「悟りを開く」というのです。



仏陀を拝んでも仏陀になれない

スプリームマスター チンハイ フォルモサ・台北

一九八七年九月十四日

修行というのは、まず法を伝授してもらってからするものですが、法を伝授してもみなさんがそれを受け取ることができるかどうかが、それを発展させ自分の宝庫から取り出して、使用できるかどうかの問題です。古代では、大師たちは伝法する時はとても慎重でした。まずその人が法門を受け取ることができるか観察し、受け取れると判断した時に初めて伝法しました。まだ法を受け取ることができない時は帰されました。

しかし今は末法の時代ですから、マスターたちはより寛容で、どんな人でも求めて来た人には伝法します。法を伝授することで大きな福報が得られます。これは間違いですが、ただし誠意のない人たちは法を伝授してもらっても、それを理解できず、外へ行つて人々に正しくないことを勝手に話すのです。私は後からそのことに気が付きました。この法門をまだ真剣に学んでいないのに、人々にいろんなことを話すのです。このマスターの法門は外道だの内道だの、

この種の体験は本物だとか偽物だとか、みんなで談義するのです。

本物か偽物か彼ら自身も分かっていませんし、他の老師も話しようがないことです。なぜなら、それぞれの法門の体験は異なり、それぞれのレベルの体験も同じではなく、一人ひとりの体験も違うからです。開悟していない老師だと、たとえ何を言っても分かりません。「いわゆる」開悟した老師でも、他の法門を修行していたら、その人の問題を解決することもできません。ですから、衆生を救うことはたいへん難しいことです。大師たちが伝法することを嫌がっている訳ではないのですが、彼らに伝法しても、あまり意味がありません。まるで宝石を子どもにも与えても、子どもがその宝石を持ってチョコレートを買っていくのと同じようなことなのです。私が子どもの頃、母は私にとでもたくさん宝石をくれましたが、私はそれらをみんな売ってしまいました。私は売ったお金で食べ物を買ってみんなに分けました。子どもが宝石を売りに行ったので、当然、売値はとも安いです。私にとっては、人に食べ物をあげることの方が、宝石を身につけるよりも良いことでした。しかし私の母にとっては、宝石はとても大切な物で、とても価値のある物です。当時のオウラックでは戦争をしていたので、貴金属を身につけておいて、万一、何か思いがけないことが起り、父親や母親が見つからないときには、貴金属を売って自分を守ることができるからです。しかし当時、私もそういうことにはまったく関心がなかったのです。ほとんどの子どもたちはみな同じで、宝石を与えると、それを売ってチョコレ

トを買うと思います。

衆生は本来みな仏陀ですが、しかし彼らにそれを言っても分かりません。大半の人はみな仏像を拝むのが好きです。未来の仏陀、弥勒菩薩、過去の仏陀、釈迦牟尼仏に拝むのです。釈迦牟尼仏は二千年余り前にすでに涅槃に入りましたが、人々は拝むのが好きで、まだ誕生していない仏陀をも、ずっと待ち続けているのです。しかし現在の仏陀には目を向けたがらず、自分の内面の仏陀も信じないので、これはたいへん厄介なことです。

なぜなら人々は執着心が強く、学んだものはみな頭に刻んでおいて、自分の考え方こそが一番正しいと思ひ込み、自分と考えと違っているものはなかなか信じません。なぜなら、大多数の人は念仏を強調して、念仏は最高のものだと言っているため、誰かが念仏は良くないと言っても、彼らはどうしても聞き入れられないからです。そして、なぜあなたはみんなと違った教理を話すのかと疑うのです。

私はみなさんに仏陀になつてもらいたいのです。ですから、みんなと同じ道理を話すはずはありません。大多数の人は外に行つて、仏像を拝むよう、外面的なものを拝むよう、教えていますが、私はみなさんに自身の内面の仏陀を見るよう教えています。そして仏陀を拝むのではなく、「仏陀になりなさい」と教えています。だから、どうして彼らと同じことが話せるのでしょうか。もし同じことを話せと言うなら、私には何も話すことはありません。山に入つて隠遁

して、一人で修行し、パワーを養った方がましです。あるいは世界各地を歩いた方が私のパワーを浪費しないですむと思います。

みなさんに念仏をするよう勧めることは、私にとって時間の浪費です。また人々の貴重な時間を浪費することです。人間の体を持つことはとても得難く、貴重です。これは大変目出たい事で、私は彼らが時間を浪費してまで、外に行つて仏像を拝み、まだ生まれてもない仏陀や過去仏を拝むよう勧めることはできません。それらは私たちと何の関係もないことです。それらはずでに仏陀になりました。私たちも仏陀にならなければなりません。それらを拜んで何になりますか。いつまでも病人でいたいなら、毎日医者にかからなければなりません。もし医者になりたければ、医大に行つて医学を勉強すべきであつて、医者を拜んだり、毎日医者を会いに行つたりすれば、医者になれると思つてはいけません。

医者のところに行くのは病気だからです。私たちは病人にならないで、医者になるべきです。私の仕事は人に医者になることを教えることです。だから、私は決してみなさんに医者に会いに行くよう勧めることはできません。私はみなさんに医者になつてもらい、後で自分や家族や他の人々の面倒もみられるようにするのです。

念仏をするのは仏陀になりたくないからで、仏像を拜むのは自分が仏陀であることを信じないからです。自分の中で「いつも私は凡人で、カルマが重く、軟弱だ、釈迦牟尼仏のような素

晴らしい善根（無数の過去世で積み上げて来た功德）もなく、弥勒菩薩のような大きな福報もないから、自分は修行ができない」と思うのです。これはいずれもエゴの問題です。「私」とは誰でしょうか。

釈迦牟尼仏も普通の人でした。彼ら生まれてから三十歳までの間、何も特別なことはしていません。飲んで食べて。遊んで楽しむばかりでした。後に外に出て、人々の苦しみを目の当たりにして、目が覚めて修行し、生老病死から解脱しようと思決意したのです。三十歳までは、彼は普通の人とあまり変わりませんでした。それに比べ私たちは一生懸命頑張っています。昼は仕事をしたり、学校に行ったり、夜は家に帰って両親の手伝いをします。釈迦牟尼仏はこういうことをしていません。なのに彼は仏陀になりました。みなさんのようなはこんなに素晴らしい人が、仏陀になれないはずはありません。釈迦牟尼仏は過去の仏陀です。何も特別なことはありません。

次は未来仏（まだ生まれていない仏陀）について話します。弥勒菩薩はサンスクリット語でマイトレーヤ (Maitreya) それは「愛」(Loving Buddha) という意味です。釈迦牟尼仏は弥勒菩薩と数えられないほどの長い時間、一緒に修行したと、経典に書かれています。ただ弥勒菩薩は美味しいものが大好きで、裕福なところで裕福な人たちと友だちになり、毎日彼らのごとで、一緒に居て美味しいものを食べ、きれいな服を着るのが大好きでした。苦勞して修行

しないので、釈迦牟尼仏の方が彼より早く仏陀になったのです。

これで分かるように、この二人の仏陀は何も特別ではありません。釈迦牟尼仏は三十歳になるまで、国や人々に利益をもたらすような事は何もしていません。楽しむばかりでした。彼の父上は彼に大いに楽しんでもらいたかったのです。多くの美しい女性たちを妻や王妃にし、多くの人が彼の世話をしました。彼は施しもせず、戒律もなく、メデイテーションもしませんでした。戒・定・慧（かいじょうえ：戒律、禪定、智慧）も何もありません。何も良いことをしませんでした。彼は仏陀になりました。これが釈迦牟尼仏です。

弥勒菩薩も特に何もしませんでした。彼は出家して修行した後も、いつも裕福なところに行つて楽しんでいました。それでも彼は仏陀になつて、毎日みんなから尊敬されています。二人はそれでも仏陀になれたのですから、私たちはどうして自分は凡人だと言うのでしょうか。仏陀になれないなんて、そんなことはありません。ですから、私はみなさんに仏陀になりなさいと言うのです。それらの仏陀を拝まないことです。彼らは大したことはありません。たとえ彼らが素晴らしくても、私たちとは関係ないのです。彼らがお金を持っていても、それは彼らが使うもので、私たちは自分を使うお金を見付けなければなりません。彼らを拜んで何の役に立ちますか。彼らには彼ら自身の仏陀があり、私たちには私たち自身の仏陀があるのです。彼らを拜んでも、彼らは決して私たちに仏陀を与えてくれることはありません。

私はこのように言うのは、決して仏陀を誹謗しているわけではありません。仏陀はそういうものではありません。仏陀は化身して現れ、このような生き方を見せて、私たちに修行するよう導いてくれるのです。彼らはすでに仏陀ですが、私たちと同じような姿に化身しなければならぬのです。もし、彼らが生まれた時から、完璧ですぐに仏陀になって、自由自在で神通力を持っていたら、私たちは自信が持てなくなり、修行して仏陀になる希望も持てなくなります。

彼は余りにも非凡で、生まれた時から、あんなにも偉大で、小さい時からみんなと比べものにならないほど優れているのを、私たちが見て、自分はとても仏陀になれないと自信を無くしてしまうのです。私たちはあまりにも障害が多いのに、彼はあんなにも素晴らしいからです。今私はみなさんにはつきりわかりやすく説明できたと思います。釈迦牟尼仏は私たちより特に優れているわけでもなく、弥勒菩薩も特別なところがなく、それでも彼らは仏陀になりました。だから、私たちも当然仏陀になれます。ぜひみなさんに分かって欲しいのです。

だから私は他のことは何も語りません。他の人と同じことも言いません。ただみなさんに仏陀になること、この最高の目標を目指さなければいけないことだけを語ります。「仏陀を拝んで福報をもらいたい」「仏陀を拝んで西方浄土に行く」と仏陀は私の修行を助けてくれる」などごく小さな願い事を祈るだけではいけません。自分が生きているうちに修行しないで、西方浄土でどのように修行しますか。そこは至福の世界で修行する必要性はありません。この世界には多

くの苦しみがあ、人々も多く、苦しみや悩みを抱えていて、私たち自身も悩みや苦しみがあ
ります。それでも修行しようと思わず、人々の苦しみをしても慈悲心がなく、修行して彼らを助
けようとも思わない人が西方浄土に行つて、何を修行しようというのでしょうか。

私は人々を軟弱にしてしまふ法門は好きではありません。なぜなら、人間は最も高貴で、天
使よりも、梵天よりも高貴な存在です。なのにどうして人々に神々や鬼神を拝ませるのでしょ
う。私たち自身が仏陀や菩薩なのです。この道理を知らないとしたら、先生や老師、または道
理を良く知っている人を訪ねて行つて、私たちの仏陀はどこにあるかを知っていますかと、
教えを乞うべきです。もし、その人が知らなかったら、また他の老師を訪ねて行き、その老師
もわからなかったら、三人目の老師、あるいは四人目……十人目、百人目の老師を訪ねるべき
です。そして「私はあなたの仏性がどこにあるかを知っています。私はあなたがそれを見付け
る手助けをすることができません」と言つてくれる人が見つかるまで、探し続けなければなりま
せん。ただし、それまでは安易にいわゆる仏陀を拝まないことです。その仏陀は私たちと何の
関係もありません。

人は一生懸命働くとたくさんのお金が入り、それを銀行に預けたり、家を建てたりでき
ます。ですから私たちも自分が使うお金を自分で見つけなければなりません。仏像を拜んで何
になりますか。私たちの自信をなくすだけです。私たちはそれらの仏陀と同様に目や鼻、耳、

両手、両足を持っていて、お金を稼ぐことができます。毎日のようにそれらを拝むばかりで、自分でお金を稼いだり、自分でお金を稼ぐことを忘れてはいけません。本当は毎日一生懸命働いて、自分でお金を稼ぐべきであって、お金持ちを拝んではいけません。自分で仏性を探すべきであって、すでに仏陀になった特定の人や、故人を拝まないことです。

現在生きている仏陀でも拝まないことです。それはその人はただの道案内をしてくれるガイドだからです。私たちはその人と全く同じだからです。その人のところに行つて法を求めただけでいいのです。礼拝したり、拝んだりする必要はありません。その人の仏性と私たちの仏性は全く同じで、異なる所はただ一つ、その人はすでにそれを見付けていて、私たちはそれを探している途中なので、自分の内面の仏性をどうやって見つかるかを、その人教えてもらうのです。礼拝しても何の意味もありません。ある特定の人を礼拝しないことです。現在生きている仏陀でさえも、人々が礼拝することを認めません。なのに、どうして二〇〇〇年前の仏陀を礼拝したり、弥勒菩薩の誕生を待ち続けたりするのでしょう。まだ生まれてもない仏陀を、私たちはすでに礼拝しています。これはあまりにも軟弱で、あまりにも自信のない行為です。

ですから、私は人々を軟弱にさせる法門は好きではありません。また「三元」的な法門、つまり衆生がいて、仏陀がいるという法門は好きではありません。私は仏陀であり、仏陀は私です。もともとこれは何の区別もありません。これをまだ知らなければ、引き続き探し、引き続き

き学ばなければなりません。そして考え続け、メデイテーションしなければなりません。何をしようと、「私は仏陀である」ということを知るべきです。これ以外のその他の法門は、いずれも外面的でまだ入口なのです。毎日入口で叫ぶだけでは、当然中に入ることはできません。私はみなさんを騙すことも、嘘を付くこともできません。みなさんが念仏をするのは、あまりにも時間の浪費です。みなさん自身が仏陀なのです。これこそ本当です。

私はみなさんにある特定の仏陀を拝むよう、勧めるわけにはいきません。外の仏陀は私たちと何の関係があるのでしょうか。もし仏陀を拝むことと関係があるなら、多くの人が毎日拝んでいるのに、なぜまだ苦しみ、なぜ生死輪廻を繰り返すのでしょうか。釈迦牟尼仏が在世の時、多くの人が彼を拝みました。しかし彼の目の前で地獄、生き地獄に落ちた人もいます。みなさんはこの話を聞いたことがあるでしょう。経典に記載されています。在世の仏陀を見ても地獄に落ちます。それは自分で修行しないからです。

私たちは仏陀のパワーに頼るだけはいけません。地獄にも地藏菩薩がいて、毎日地獄の衆生を教え導いています。彼らは毎日地藏菩薩を見ますが、依然として地獄で苦しみを受けています。したがって私たちが仏像を拝んで、どうして解脱できるのでしょうか。観音菩薩を拝み、観音菩薩の名を唱えると、どんな苦しみも消えるとしたら、なぜ今でもあんなに多くの苦しみがあろう、この世界は依然として混乱しているのでしょうか。それは究極の法門では

ないからです。ただの人間界と天界の一瞬の福報しか得られず、それがなくなると、何も残りません。自ら修行し、自分で仏陀になるべきです。さもないと生老病死は永遠に存在し、究極の解脱は、生死からの解脱はできません。

仏陀に祈り、十方三世仏を礼拝しても、或いは仏陀の目の前で礼拝しても、何の役にも立ちません。究極の解脱はできません。たとえ仏陀と一緒に住んでいても役に立ちません。阿難（あなん）は毎日釈迦牟尼仏と一緒にいて、釈迦牟尼仏の一番近くで多くの経の講義を聞きました。が、それでも開悟できませんでした。釈迦牟尼仏がこの世を離れた後、誰も彼を守り、彼を世話し、かわいがる人はいませんでした。摩訶迦葉（まかかしよう）に追い出された時、阿難は初めて修行に気が付き、メデイテーションしました。そして一晩メデイテーションしただけで、悟りを開きました。

前は釈迦牟尼仏に頼り切っていたのです。仏陀と毎日一緒にいて、修行をしなくても仏陀の一番近くについて、聡明で仏陀の話を誰よりも多く耳にした人でした。しかし、釈迦牟尼仏は彼に法脈を継承させませんでした。なぜならこの時の彼はまだパワーが足りなく、十分開悟していなかったからです。そこで釈迦牟尼仏は摩訶迦葉に法脈を継承させました。これで私たちは仏陀を拝んでも、たとえ仏陀と一緒にいて役に立たず、仏陀になれないことが分かります。す。ましてや仏像を拝んで何の役に立つというのでしょうか。もし私が他の寺院に行つて、この

道理を話すと、彼らは私のことを外道だと言い、それは違うと言うでしょう。ですから、どこでもこんな話ができるわけではありません。これは話すつもりはありませんでした。話す問題になるからです。しかし、真理と事実は話すべきだと思います、話さなければそれでいいのですが、話すとしたら、本当のことを言わなければなりません。嘘をついて、人々の時間を無駄にするわけにはいきません。人々がこの教理を理解できるかどうかは別問題です。大半の人は理解できないでしょう。

釈迦牟尼仏が現れた時も、ごく一部の人々しか救っていません。インドにはあれだけの人口がありますが、数万人しか救っていません。イエス・キリストが現れてからも、法を弘めた期間は三年余りで、すぐ殺されてしまいました。老子が救った人々もごくわずかです。誰も彼の話を聞き入れてくれませんでした。彼が隠遁するまで、たった一冊の「道德経」の本を書いただけです。

人間は外見がそれぞれ異なりますが、内面はみな同じパワーを持っています。私たちの本来の面目であり、創造主のパワーであり、または「道（タオ）」とも言います。この「道」は永遠に存在します。私たちはこの「道」と通じ合えばカルマは消され、私たちの源に戻ることができます。だから印心後はカルマがなくなり、印心した人は無数の過去世におけるカルマがことごとく消されます。例えば、このコップの中には水が少し入っています。もし、この中に毒を

入れたら、飲むことはできません。しかし、これをガンジス川のような大河の中に入れたら、そのような少しくらいの毒は大したことはなく、人々は相変わらず川の水を飲むことができます。そのコップの中の水は、大河の水に混じってしまい、もう毒はありません。大河の水はとつともなく大量で、なにもかもきれいに洗い流すことができるからです。

みなさんは信じないかもしれませんが、インドのガンジス川はとても靈的感応があり、インド人にとっては聖なる川です。なぜでしょうか。それは川の中に何を捨てても、ガンジス川は汚れないからです。ガンジス川は古代から今日に至るまで、いつもずっときれいな川です。水の温度が低いので、細菌が繁殖できないからだという人もいますが、私はドイツで七年間住んでいて、川はよく氷結しました。川の水はガンジス川の水より低いですが、川の水はそれでも大変汚れていて、たくさんの科学薬物を用いて水を浄化しなければなりませんでした。

私がアメリカに住んでいた時も同じでした。水はとても冷たく、たくさんの科学薬剤で水を浄化しなければ飲むことができませんでした。イギリスに住んでいた時も、フランスに住んでいた時も同じでした。オーストリア、イタリア、スペインにもたくさんの川がありますが、水はとても冷たかったです。ガンジス川のようなきれいな水ではありませんでした。ガンジス川は、何と言ってもガンジス川で、世界各国の川に比べると、確かに違います。なぜそのような話をしましょう。

インドは聖なる土地で、古代からたくさんの修行者がガンジス川で沐浴をしました。その修行者たちの体は汚れていますが、彼らのパワーは清潔で偉大です。だから彼らがそこで沐浴をするのは、その川を加護するのと同様で、どんな細菌も川で繁殖することができません。ですから水質は永遠にきれいなのです。これは私も実際に体験したことです。多くの修行者たちや一般人がガンジス川で沐浴するのを見ると、川の下流でその水を飲むのは非衛生的だと思わかもしれませんが。けれども、ガンジス川の水を科学計器で測ると少しも汚れていないことが分かります。

私がインドにいた時、ある所に住んでいました。そこは古代から有名な修行の場所でした。ガンジス川の岸辺にあつて、毎日岸辺の砂の上でメディテーションをする人がいました。そこは大変有名なところで、釈迦牟尼仏も行ったことがあり、修行者は誰でもそこに行きます。私はそこで、二カ月ほど修行しました。私が住んでいたところはガンジス川の下流でした。川の上流には村があつて、そこにはハンセン病の患者たちが集まって住んでいました。当然、彼らの排泄物はガンジス川に流していましたが、それでも水はとてもきれいでした。ただ、一番下流の水質はあまりきれいでないと聞いたことがあります。

インドの人々はあまり清潔ではありません。アメリカのような現代的なお手洗いもなく、大小便は外で適当にやっています。それでもガンジス川はきれいで細菌はありません。普通の水

は、瓶に入れて一、二カ月置いておくと水は変質し、腐い臭いがして、虫が湧いて来ます。しかし、ガンジス川の水を瓶に入れて、十年置いても水質は変わりません。水を瓶に入れた時と同じように新鮮できれいです。これはたいへん不思議なことで、現代の科学や知識では説明できない問題です。私は毎日ガンジス川の水を飲んでいました。体を洗いながら、この水を飲みましたが、今でも生きていて何の病気もありません。

この前、ある弟子が私に健康診断に行くように、しつこく勧めたので検診を受けましたが、何の問題もありませんでした。もともと私は病気などありません。修行者はあまり病気にしません。しかも私が教えている法門はどんな病気も治せます。けれどもこれを信じる人はあまりいません。それは修行しないので、そのような体験がないからです。

この法門はガンジス川の水と同様にパワーがあります。私たちはそれを仏陀のパワー、最高の神のパワー、創造主、道（タオ）とも言います。この法門はこのようなパワーがあり、私たちがこれと通じ合えば、そのパワーになり、偉大になり、外の影響を受けなくなり、無数の過去世におけるカルマも全部焼かれてなくなります。そのようなパワーが見付っていないからといって、その存在を否定してはいけません。

ガンジス川はどこにもあるものではありません。だから私たちはこのきれいでない水を飲むしかないので。この水は大変汚れているので、飲むためには何度も消毒して、清潔に

する過程が必要です。だから私たちはガンジス川の水質があんなにもきれいで、何を川に流しても、きれいに浄化されるということが信じがたいのです。

ガンジス川は確かに存在するもので、確かに不思議な浄化のパワーを持っています。私は自らそこに行ったことがあるので、そのことを知っています。たとえみんながそれを否定しても、私は信じています。なぜなら、それは私が自ら体験したことだからです。私はガンジス川を見て、ガンジス川の水を飲んだことがあるので、そのパワーを信じています。というのは、私自身そのパワーと通じ合っているからです。

私は無数の過去世において作ったカルマを焼きつくすパワーを見付けるまでは、そのようなものを信じませんでした。同様に、もし私たちが無数の過去世のカルマを焼きつくしてくれるマスターに出会わなければ、この世の中にはそういう大師がいることを信じないでしょう。また即座に開悟できる法門を見付けていない時は、そのような法門があることも、信じられないと思います。

しかし、自分が見付けていないからといって、そのような法門、またはそのような大師が存在しないわけではありません。なぜなら、他の法門はいずれもみな自分たちは「内道」と言っているのです、私の言っている「道（タオ）」はいかにも「外道」に見えるのです。しかし、彼らが言っている「道」の外でこそ、この真の「道」を見付けることができるのです。彼らと一緒に

に同じ道を歩いてどこに行くかというのでしよう。私にも分かりません。私は彼らが言っているいわゆる「内道」は歩きたくありません。(笑い) 私のことを外道と言っても構いません。なぜなら、私はその外道をはっきり分かっているからです。(笑い)

Q きつきマスターは念仏をすることは、心をすべて仏陀に委ねることであり、自分自身の力に頼るものではないとおっしゃいましたが、私の知っている限りでは、念仏は一種の精神統一であり、念仏だけに集中し、乱れている「心」を一つにして、またその一つを無の境地に導くことです。もう一点ですが、マスターは衆生が即座に自性を悟り、瞬間に自性を見ることができるとおっしゃいましたが、しかし普通の人間は頭脳が雑念にあふれていて、短期間では、動じない力と智慧を同時に備えることは出来ないと思います。マスターの法門は大変素晴らしいと思いますが、私はすぐ納得することができません。どうぞご説明ください。

M あなたの「一つ目の質問は正しいです。間違っていないです。問題は心を統一してから何をするかです。心が落ち着いた後も、引き続き仏性を探さなければなりません。心をコントロールして落ち着いた後、無になったとしても、仏陀になったということではありません。何の考えもないのは石と同じで、これはまだABCの初歩のレベルです。心が安定してから、引き続き修行しなければなりません。ですから釈迦牟尼仏は阿弥陀経の中で、西方浄土に行つてから

も、そこからまた徐々に修行して仏陀にならないと言っています。西方浄土に行ったからといって、仏陀になったわけではありません。

二つ目の質問ですが、私は彼らを手助けする方法があります。それは彼らに引き続き路（みち）を歩かせることではなく、私が彼らを車に乗せて連れて行きます。とても遠い道のりなので彼ら自身の手では到底歩くことができません。だから先生が必要なのです。先生のパワーを彼らに伝授して心を安定させます。するとますます心が安定して来て、心を安定させながら修行をするのです。さもなくば、先生がいたとしても役に立ちません。

なぜ先生が必要なのでしょう。私の法門は自性を見て、仏陀になるだけではありません。自性を見ることはそんな簡単なことではありません。ある種のパワーで乱れている心を安定させ、それから、彼らの無数の過去世のカルマを洗い流し、その後、彼らは自性を見て仏陀になるのです。これらは一瞬ですることと同時にいきます。長く待つ必要はありません。ゆつくり悟る方法は、あまりにも時間がかかります。小さな雑巾で拭くのはあまりにも遅いです。私は直接、川の水で洗うので比較的早いのです。

ですから、まずは先生のパワーによる手助けが必要です。その後、彼らは自分で歩くことができます。それもこのパワーに頼り切るといふことではありません。彼らが成長して力がついたら、自分で歩くことができます。歩きはじめた子どもと同じく、一人で歩くことはできません。

ん。最初は手をつないで歩く訓練をし、一歩二歩と歩き方を教えるのです。成長した後は、自分で歩くことができるのです。私の法門はいろいろな面を含んでいます。カルマを洗いながら、心を安定させ、智慧を開き、成長を手助けします。そして毎日彼らの面倒を見ます。この肉体で面倒を見るのではなく、化身で面倒を見ます。

印心した人には一人の化身のマスターついていて、面倒をみたり、どれだけ成長したかを見たり、何か問題はないか、障害はないかを見てあげて、毎日彼らを助けてあげています。人は一人で歩くことはできません。なので真の老師が必要なのです。大きく悟りを開いていない老師は私たちを助けることはできません。剃髪をした人はみな老師というわけではありません。真の老師は化身があります。その化身はどんな所にも行つて、弟子たちの面倒を見ることができません。もし化身がなければ、一人では大勢の人の面倒を見ることができません。

Q 法身に付いてですが、仏教經典の中では「すべての衆生はみな、法身、報身、化身があり、真の大修行者は本性の法身が見える。衆生は法身がないのではなく、カルマに惑わされて、自由になれない」とありますが、これは本当ですか。

M 法身は何千億の化身に変えることができます。法身を使えるのが仏陀です。ですから何千億の化身を持つ釈迦牟尼仏ということです。法身はすべての人にありますが、すべての人はこの

法身を化身にすることができません。ですから役に立ちません。私たちはすべての人は仏陀だと言っていますが、彼らはその仏陀を活用することができないのです。同様に、法身を使えばたくさんの方ができます。法身でさまざまな姿に変わることもできれば、何千億の化身に変わることもできます。私たち普通の人にも法身がありますが、何かに変わることも出来ません。法身の使い方がわからないからです。

Q 仏陀を拝んだり、念仏したりすることは人々を救う便宜的な方法でもあると思いますが、仏陀を拝み、念仏することはどんな利益がありますか。念仏は心を安定させるだけの効果ですか。念仏して仏陀になれますか。

M 仏陀を拝み、念仏することも利益があります。A B Cを唱えても少しは役に立ちます。心を集中するという意味では助けになります。ただし、これは「意」を安定させるに過ぎません。まだまだ他にも境界（きょうがい）はあります。眼、耳、鼻、舌、身、意が無になる境界です。そこにはまだ到達していません。もし念仏をして、心が一心不乱になったとしたら、それは「意」つまり、「心」が安定したことを意味します。「心」は意であり、心は意と同じで、心はすなわち意です。

ですから私たちは、よく心が落ち着かないと言います。これはすなわち心が乱れて、雑念が

入り混じっているという意味です。念仏するのはこの「意」を落ち着かせることに過ぎません。しかし、もう一つの境界があります。眼、耳、鼻、舌、身、意が無になることです。「意」さえ無いのです。念仏して心を安定させることだけでは、その境界には到達することができません。必ず高い法門が必要です。そこに行くには念仏だけパワーでは足りません。私に従って学ぶと、そこに行くことができます。なぜなら、私の法門は眼、耳、鼻、舌、身、意を用いないからです。ですから、「意」で修行することはできません。そこには修行する意はありません。

Q 人生の目的はなんですか。

M 自由自在で幸せなことです。これはすなわち解脱を求め、二度と生老病死の輪廻を繰り返すことなく、心と魂を浄化させて、全てにおいて自由自在で幸せになることです。これは修行に頼るしかありません。マスターに付いて修行してこそ解脱することができます。自分で修行する場合は、そのような能力がないため、多くの時間をかけても何も得ることができないか、ほんの少ししか得ることができません。マスターがそばに付いて、私たちを指導し、路（みち）を導いてくれると、とても早いです。

Q 人々はこの世界で、世俗的な生活をするべきですか。それとも脱俗世界の生活をした方が良いですか。もし世俗的な生活をするとしたら、この俗世界の罪と悪とに、どう接していけば

いいですか。自身の純粋さを保つことができますか。つまり俗世界の汚れた環境にしながら、どうしたら汚染されずにすみませるか。

M 例えば雨が降れば、私たちはレインコートを着ます。しかし、レインコートがネズミにかじられ、あちこち穴が開いていたとしたら、そこから水が入ります。しかも他のところまで、濡れてしまい、体全体がずぶ濡れになります。ですから、レインコートがあってもあまり役に立っていません。この世界には、自分を保護する服があります。この服が破れたら、マスターがなおしてくれて、すぐ使えます。ですから、どこに行っても汚れることはありません。

山に行けば、体が健康になるとは限りません。また一人で閉じこもって修行しなければならぬ、ということもありません。それも少しは役に立ちます。悩みが少なくなるからです。もし、メデイテーションをしている時に、テレビの音や子ども泣き声にじやまされたり、禅定（サマデイ）に入ったばかりなのに、誰かにじやまされるなど、こういった状況は確かに修行に差し支えます。しかし、山でしか修行できないということではありません。家でも静かな場所で行うことができ、純粹な人になれます。というのは印心のとき、マスターはみなさんの破れたレインコートを修復してくれるので、印心した人はマスターの修復のパワーと保護のパワーを同時に得ることができるからです。

Q もし出家して、仏陀になったら、どのように人々を罪と悪から救い出すのですか。

M これは修行して、仏陀になると、どのようにするか自然に分かります。結婚もしていなく、子どももない人が、どのように子どもを産むのか、なぜ子どもを育てなければならぬのか、と言ったことを心配して、おかあさんに質問するのと同じです。しかし結婚すれば、自然に子どもができて、子育てをするのです。これはとても自然なことでも誰かに教えてもらわなくても分かることです。

Q 法を弘めて人々に利益をもたらしたり、修行をしたりする時は、「空」と「有」の状態に居ながら、どうしたらそれにとらわれずにすみませうか。普段、仕事をしたり、修行したり、あるいは人々に利益をもたらすことをする時に、修行と実際にやっていることのなかで、どうしたら執着せずにできますか。

M 人々に利益をもたらすなどと思わないことです。私たちは何者でもありません。何をもつて人々に利益をもたらすと云うのですか。毎日、朝昼晩、三食食べては、今日私は自分のためにご飯を食べた、私は毎日自分の体を洗っている、だから「私」は素晴らしい人で、えらい人だと思つたことがありますか。私は自分の体を世話しているだから「私」は素晴らしい人だと思いませんか。そんな人はいません。完全に自然にしていることです。

同様に人々を助ける時も、「私」は人を助けていると思つてはいけません。必要であれば助け

てあげればいいし、必要でなければ助けなくていいです。助けるのと助けないのは同じです。人々を助けるのは自分の手を洗うのと同じです。自分の手を洗う時に、自分はどんなに素晴らしいかなど思ったりしません。手を洗うことは素晴らしいことだ、偉いことだと思ったりはしません。ただ自然にするだけです。

同様に人を助けることも特別なことではありません。何も考えないことです。お腹がすいた人があなたのところに来たら、あなたはすぐに食べる物をあげます。衣服の無い人には服を与えます。そしてそれをすぐ忘れることです。昨日私はある人にご飯を食べさせたとか、一昨日、人に服をあげたなどと考えないことです。何も考えることはありません。毎日自分の髪をとかしては、自分はよく自分の世話をしていると考える人はいません。あまりにも日常的なこと、人々を助けるのは当然やるべきことです。自分で自分の歯を磨くのと同じで、特別なことではなく、自慢するようなことはありません。

Q 阿弥陀仏は衆生を救うために四十八の願をかけ、地藏菩薩は「地獄が空っぽにならなければ、永遠に仏陀にならない」と願をかけました。これらの壮大な願に付いて、マスターはどのように解釈されますか。

M それは彼らがまだ完全に開悟していない時にかけて願で、彼らが悟りを開いて仏陀になったからは、そういうことは考えません。全く自然に人々を救うのです。おかあさんが子どもに、

ご飯をと食べなさいと言うと、子どもは言うことを聞きます。というのには、ちゃんと食べないと、大きくならないとおかあさんが言ったからです。しかし、大きくなつてからは、自分でご飯を探して食べるようになります。何も考えていません。お腹がすいたからご飯を食べるだけです。地藏菩薩がまだ菩薩になる前に、まだよく分かつてないためにそのような願をかけたのです。「私」が衆生を救おうと願をかけたのです。しかし彼らが仏陀や菩薩になった後、自然にするようになりました。自分は菩薩だから、このような願をかけるのだと考えていません。金剛経には「ある仏陀や菩薩が、自分は仏陀だ、菩薩だと思つていたら、それは真の仏陀、真の菩薩ではない」と書かれています。何も考えないことです。疲れたら寝て、お腹がすいたら食べて、やることがあつたらやる。これは自然なことです。

Q 智慧の形態は「空」であり、「有」でもありません。仏陀になつた仏祖、または大菩薩の智慧は終始、空の状態にあつて、しかも縁ある人々を救い出すことができます。つまり本性の智慧は本性の空を悟ることができます。その後、様々な事柄の表面的現象と万物の変化を知ることができます。つまり仏陀の智慧は空の状態から離れることなく、有の状態をも離れないのです。ということをおは言いたいのです。

M あなたが言っている意味はよく分かりますが、仏陀はそんな複雑なことを考えません。仏

陀は疲れたら寝るし、お腹がすいたらご飯を食べます。仏陀は鏡のように人々の有様をそのまま映し出します。仏陀は何も考えません。本当です。仏陀は普通の人と同じで、何も変わりもありません。仏陀は大きなパワーを持つていますが、彼自身は決して自分は大パワーを持つていると思ったりしません。しかし、人々が助けを必要とする時はそのパワーを使います。私は真実をみなさんに話しています。仏陀は何も考えません。太陽と同じで、自分はえらいとか、毎日人々を照らし、万物を成長させているなどと考えません。太陽があるから、花が咲き、私たちが大きく成長でき、子どもたちは健康でいられるのです。ビタミンDは太陽から来るもので、これがないと私たちは成長できません。皮膚病になります。万物が生き生きとしているのはいずれも太陽のおかげですが、太陽はそういうことは何も考えません。

偉大な人は自分が偉大だとは思いません。仏陀の智慧は高いですが、彼は自分が智慧が高いということは考えません。もし一瞬たりとも自分が高い智慧を持っていると思ったら、仏陀はすぐ凡人になります。その時、その瞬間は、彼は凡人なのです。しかし仏陀は決してそのような思うことはありません。例えば私の弟子に付いてですが、言葉の表現上、必要なので、私は弟子と呼びますが、あなたは「なぜ、あなたは私には弟子がいるのですか」と言うかもしれません。その呼び名に執着する必要はありません。私にはもともと弟子などいません。本当です。しかし、時にはこの言葉を使わなければならないこともあります。

例えば、私の弟子は、私の化身が彼を教え導き、彼を助けたことを見て、私のところに来て、「あなたが仏陀であると、私は今はつきり分かりました」と言います。またある人は私が観音菩薩に化身したのを見て、「マスター、あなたは観音菩薩の化身です」と私に言うのです。昨日、ある子どもが私に「マスター、あなたは大勢至菩薩の化身です。私は知っています。そうでしょう」と言うのです。

彼らのレベルはそれぞれ異なるので、彼らが見たものも同じではありません。それぞれ私の違うパワーを見たのです。彼らが使える私のパワーもそれぞれ違うのです。彼らはそれぞれ違うこと言っていますが、しかし私は大勢至菩薩でもなく、観音菩薩でもなく、釈迦牟尼仏でもありません。私は自分が大勢至菩薩の化身であるとか。観音菩薩の化身であるとは、一度も思ったことがありません。私が彼らを助けることは、彼らの求めを反映していることです。

太陽はたった一つですが、大きなパワーがあり、私たちはそのパワーを使いきれません。木は太陽のパワーで育ち、ある人は太陽をエネルギーに変えて、太陽の力でご飯を炊きます。私が入道にいた時、太陽のエネルギーでご飯を炊いたり、野菜を煮たり、サツマイモを煮たりしました。しかし太陽は私がサツマイモを煮るのを助けたとか、ご飯を炊くのを助けたとは、決して考えません。私は必要なだけ使います。なぜなら、太陽は無量無辺のパワーがあり、何にでも使えます。そのパワーでご飯を炊く人もいれば、サツマイモを煮る人もいます。また、

皮膚病をなおす人も入れれば、野菜を作る人もいます。太陽がなければ野菜も育ちません。

仏陀のパワーもマスターのパワーも同じです。彼らは決して自分は大きなパワーを持っていると思ったりしません。しかし、みなさんは好きなだけ使うことができます。これが仏陀のパワーです。仏陀は無形、無相、無量、無辺です。

例えば、発電所は電気ではありません。しかし、電気はみなそこから来るのです。そこには大きな電力があつて、私たちがその電力と繋がれば何でもできます。照明用にする人もいれば、本堂に使う人もいます。それでご飯を作る人もいます。しかし電気は、私はこの人がご飯を作る手助けをしたとか、扇風機を廻したとか、電話を繋げたとかは考えません。

仏陀も同じです。仏陀は釈迦牟尼仏でもなく、スプリームマスター チンハイでもなく、阿弥陀仏でもありません。仏陀は無形、無相、無量、無辺で、私たちが必要とするものをすべて与えてくれます。ただ電気と同じで、ある媒体を通さないと、電気を使うことはできません。電気はふれることも見ることもできませんが、使うことができます。

したがって、仏陀のパワーも直接使うことはできません。肉体を通してそのパワーをみなさんに使ってもらうことができ、そのパワーをみなさんに提供することができます。だから釈迦牟尼仏、弥勒菩薩はこの世界に現れる必要があつたのです。観音菩薩の化身も、慧能、菩提達磨、百丈などの大師たちがこの世界に来て、人々を助け、教え導く必要があつたのです。



ビーガン（完全菜食）がもたらす利益

情報はアソシエーションメンバーによる編集

生涯ビーガンであることは、観音法門の入門である印心のための絶対前提条件です。ここでいうビーガンとは、植物性食品を食べることです。卵を含む動物性食品は一切食べてはいけません。その理由はいろいろありますが、最も重要な理由は、第一の指針からきています。つまり、すべての生きとし生けるものの命を奪わないこと、すなわち、「汝殺生するなかれ」ということです。

殺生しないこと、他の生命を傷つけないことは、もちろん動物にとつても良いことですが、同時に、私たち自身にとつても利益になります。というのはカルマの法則に基づいているからです。「汝のまいた種は、自ら刈らねばならない」のです。殺生する時や、肉を食べたいという願望を満たすために、他の人に殺生させた時、みなさんはそのカルマの負債を背負い、そして、結局そのカルマの負債を支払わなければならないのです。

ビーガンであることは、実は自分自身へのプレゼントです。私たちは心地よく感じ、重いカ

ルマが少なくなるにつれて生活の質も向上し、新しい内在の体験による天国への扉が開かれるでしょう。それはみなさんが支払わなければならないわずかな代償より素晴らしい価値があります。

靈的観点から肉食に反対している人々もいますが、ビーガンでなければいけない大きな理由は他にもあります。それらはすべて一般常識に基づいています。つまり、個人の健康、栄養、生態、環境、倫理、動物への被害、そして世界の飢餓などの問題によるものです。

健康と栄養

人類の祖先がもともとベジタリアンだったことは、人類進化の研究がすでに証明しています。人間の体の構造は肉食には適していません。この点はコロンビア大学のG・S・ハンティントン博士の比較解剖論文の中に書かれています。肉食動物の小腸と大腸は短く、大腸はまっすぐで滑らかなのが特徴です。対照的に、草食動物は小腸、大腸ともに長いと同氏は指摘しています。というのは、肉類は繊維質が少なく、たんぱく質の含有量が多いため、腸はその栄養を吸収するのに時間がかからないのです。ですから、肉食動物の腸は草食動物より短いのです。

人間は他の草食動物と同じで、小腸と大腸が長く、その長さは合わせて約八・五メートルです。小腸は折りたたむように納まって、腸壁は滑らかではなく、波状のひだになっています。

肉食動物より長いので、肉を食べると肉が長時間腸にとどまるため、毒素が発生し、その毒素は結腸ガンの原因ともなり、また解毒作用がある肝臓の負担となり、出血をも引き起こします。肝臓出血は肝硬変、さらには肝臓ガンを引き起こすのです。

肉類にはたくさんのウロキナーゼたんぱく質と尿素が含まれているので、腎臓の負担が増加し、腎臓機能を壊します。一ポンド（約四五〇グラム）の牛肉には十四グラムのウロキナーゼたんぱく質が含まれますが、もし、生きている細胞を液体ウロキナーゼたんぱく質に浸けたら、新陳代謝の機能は低下します。さらに、肉には繊維質が少ないため便秘になりやすいのです。よく知られているように便秘は直腸ガン、痔を引き起こします。

肉類のコレステロールと飽和脂肪は、心臓血管の病気を引き起こします。この病気はアメリカとフォルモサ（台湾）で現在死因の第一位になっています。ガンは死因の第二位です。実験によれば、肉類を焼くと発ガン物質メチルコランズレンが発生します。

ほとんどの人は、食肉が衛生的、安全で、当然食肉処理場で検査されていると思っていますが、毎日扱っている牛や豚やニワトリの数は非常に多く、一匹ずつガンがあるかどうかを検査することはとても困難です。今の食肉業者は、頭部に問題があればそこを切り捨て、疾患がある足を切り落とします。問題のある部分だけを切り捨てて、残りをまた売っているのです。

有名な菜食者で医師であるJ・H・ケロッグ博士は「私たちが菜食料理を食べる時、その食

べ物がどんな病気で死んだのか心配する必要はないのだ。楽しい食事ができるのである」と言いました。

この他に飼料の問題もあります。抗生物質に加え、ステロイドや成長ホルモンを含むその他の薬品が動物の飼料に添加されたり、直接注射されたりしているのです。人間がその動物の肉を食べると、その抗生物質が体内に吸収されてしまうことは、すでに報告されています。肉の中に入っている抗生物質は、人間が病気の時、病院で調合される抗生物質がまったく効かなくさせる可能性があります。

菜食すると栄養不良になると心配する人がいます。アメリカ人の外科医であるミラー博士はフォルモサで開業して四十年間、彼が創立した病院では患者はもろんのこと、職員たちもみな菜食を続けました。彼は、「近代科学のお陰で医学は飛躍的に進歩したが、医学は病気を治療するだけであつて、健康を維持できるのは食べ物があつてこそだ」と言いました。「植物性の食べ物、動物性の食べ物よりも直接的な栄養源となっている。人間は動物を食べるが、その動物の栄養源は植物である。ほとんどの動物はみな寿命が短く、ほとんどの人間の病気は他の動物にも発生している。人間の病気の原因は、病気の動物の肉を食べることによるものだ。どうして人々は植物から直接栄養を摂り入れようとしないのだろうか」と言っています。ミラー博士は穀物、豆類、野菜類だけを摂っても、十分に健康を保持できる栄養が摂れると提案しました。

大多数の人は、動物性のたんぱく質の方が植物性のものより優れていると思っています。前者は完全たんぱく質で、後者は不完全たんぱく質だからです。実は、植物性たんぱく質の中にも完全たんぱく質があります。そして、いくつかの不完全たんぱく質の食べ物を組み合わせると、完全たんぱく質にすることができます。

一九八八年三月にADA（アメリカ栄養学会）は「ADAの見解としては、適切に組み合わせれば、菜食は健康的そして栄養的な食事である」と発表しました。

肉食者は菜食者より強いと、よく誤解されています。けれども、エール大学のアービング・フィッシャー教授が三十二人の菜食者と十五人の肉食者に対する実験から、菜食者は肉食者より持久力があることを明らかにしました。実験は腕をできるだけ長く上げていることでした。十五人の肉食者のうちたった二人だけが十五分から三十分間腕を上げていられました。それに引き替え、三十二人の菜食者のうち二十二人が十五分から三十分間、十五人が三十分以上、九人が一時間以上、四人が二時間以上、さらに一人の菜食者は三時間以上も我慢できたのです。

多くのマラソン選手は試合の前はビーガン食か菜食です。ビーガンと菜食のセラピーの専門家であるバーバラ・ムーア医師は、一一〇マイルを二十七時間三十分で完走し、若い男性の出したすべての記録を破ってしまいました。五十六才のこの女性は、「このことから、完全な菜食の食事をする者こそが健康な体で、頭もさえ、そして純粋な生活を楽しめることを、実例とし

て示したいのです」と語りました。

ビーガン食で十分なたんぱく質が摂れるでしょうか。WHO（世界保健機構）は、毎日摂るカロリーの四・五％はたんぱく質から摂ることを勧めています。小麦粉のカロリーの一七％はたんぱく質で、ブロッコリーは四五％、米は八％です。肉を食べなくても、たんぱく質が豊富な食事をするのはとても簡単なことです。そして、高脂肪の食事が引き起こす多くの病気、例えば心臓病、あらゆるガンを避けられるおまけつきです。ですから、ビーガンは明らかに優れた選択といえるのです。

飽和脂肪の高い肉や動物性の食べ物を食べすぎることと、心疾患、乳ガン、結腸ガン、卒中に関係があることはすでに証明されています。低脂肪のビーガン食で防ぎ、治せる病気は腎臓結石、前立線ガン、糖尿病、消化性腫瘍、胆石、過敏性腸症候群、関節炎、歯周病、にきび、膵臓ガン、胃ガン、低血糖、便秘、多発性憩室症、高血圧、骨粗鬆症、卵巣ガン、痔、肥満、喘息です。肉食は、喫煙を除いて最も個人の健康に危険をもたらすのです。

エコロジーと環境

肉を食べるために動物を飼育することは、熱帯雨林の破壊、地球温暖化、水の汚染、水不足、砂漠化、エネルギー資源の浪費、そして世界的飢餓を招きます。それは食肉を生産するために

土地、水、エネルギー、人力といった地球の資源が効率的に使われないからです。

一九六〇年以來、中南米の熱帯雨林の二五%が、肉牛を飼育する牧場を造るために焼かれて開墾されました。たった一〇〇グラムかそこらのハンバーガーを作るために、約五平方メートルの熱帯雨林が破壊されることになります。その上、牛を飼育するのはある意味で、地球温暖化を引き起こす三種類のガスの発生を促進させる一因ともなっています。牛の飼育は水の汚染を引き起こします。また一ポンド（約四五〇グラム）の牛肉を生産するために、約九三二七リットルの水を必要とします。けれども、一ポンドのトマトの生産にはたった三・七リットル、一ポンドの全粒粉パンの生産には五二六リットルの水が使われるにすぎません。つまり、アメリカのほぼ半分の水量が、肉牛や他の家畜の飼育によって消耗されているのです。

肉牛を飼育する資源が穀物の生産に使われたら、さらに多くの人を養うことができます。一エーカー（約四、〇四八平方メートル）の土地で麦を生産した場合、それで人間を養うと、肉牛を養うよりも、たんぱく質は八倍、カロリーは二十五倍も得られ、また一エーカーの土地でブロッコリーを生産した場合、同じ面積で牛肉を生産するより、たんぱく質、カロリー、ナイアシンは十倍も得られます。このような比較統計はたくさんあります。家畜に使用される土地を人間を養うための農地に変えたなら、世界の資源はもっと有効に利用できるはずで

す。ビーガンになることは、みなさんにもっと地球を慎重に歩かせることです。その上、みなさ

んは必要な分だけ食べ、余分を減少させ、毎回食事する時に生き物が死なずにすむなら、気分も良くなるでしょう。

世界の飢餓

この地球では、現在十億人近くの人々が飢餓と栄養不良に苦しんでいます。毎年四千万人が餓死しています。そのうちほとんどが子どもです。にもかかわらず、世界の農産物収穫の三分の一以上は、人間ではなく家畜のために使われています。アメリカでは農産物の七割が家畜によつて消耗されているのです。もし、家畜の代わりに人を養つたら、飢える人はいなくなるでしょう。

動物の苦難

アメリカでは毎日十万頭以上の牛が食肉用として殺されているのを知っていますか。

西洋諸国ではほとんどの動物が「飼育工場」で飼育されています。設備は、最小限の費用で最大限の動物を生産するために設計されています。動物たちは密集しているため、変形し、飼料から肉へ変換される機械のように扱われています。それは私たちのほとんどが、決して自分の目で見ることにしない事実です。それで、「誰でも食肉処理場を訪れば、一生ビーガンになる

だろう」と言われているのです。

レオ・トルストイは言いました。「食肉処理場がある限り戦場がある。菜食は人道主義をはかる厳密な基準である」。私たちのほとんどは殺生を許しませんが、いつも食べている肉、食べた動物に何をしたのかという事には気づかずに、社会に流され、肉食の習慣を身につけてきたのです。

聖人とその他の仲間たち

最も古い歴史的記録を見ても、野菜は人類の自然な食べ物だったことがわかります。古代ギリシャ神話とユダヤ神話では、人類が果実類を食べていたことを描写しています。古代エジプト聖職者は決して肉を食いませんでした。多くのギリシャの偉大な哲学者、例えば、プラトン、ディオゲネス、そしてソクラテスは菜食主義を提唱していました。

そしてインドでは、釈迦牟尼仏は不殺生の重要性、生きとし生けるものを害さないという道理を強調しました。肉を食べてはいけないと弟子に警告しました。さもないと、他の生き物が彼らにおびえるようになるからです。釈迦牟尼仏は次のことを観察しました。「肉食は後天的な習慣で、肉への欲望は生まれつきのものではない」「肉食者は彼らの内在の偉大な慈悲の種を断つ」「肉食者は互いに殺し合い、食べ合うのである。――現世で私はあなたを食べ、来世であなた

は私を食べる。―そして絶えずこのように続くのだ。どうやって幻の三界から脱出できようか」

多くの早期の道教徒、キリスト教徒、ユダヤ教徒たちは菜食でした。この点は聖書の中に記録されています。「神は言いました。私はあなたがたに食べるためのあらゆる穀物、あらゆる果実を与えた。しかし、野性の動物とすべての鳥たちには、食べ物として草と葉の多い植物を与えた」(旧約聖書、創世記 1:29)。聖書の中に肉食を禁止する別の例があります。「血を含んだ肉を食べてはならない、生命はその血にあるからだ」(旧約聖書、創世記 9:4)「神は言った。誰があなたがたに雄牛と雌山羊を殺し、私に捧げよと教えたのか。罪なき血をこれ以上流すな。そうすれば、あなたがたの祈りを聞くだろう。さもないと私は顔を横に向けるだろう。というのは、あなたがたの手は血に満ちあふれているからだ。悔い改めなさい、そうすればあなたがたを許すだろう」。(旧約聖書、イザヤ書 1:16) イエスの使徒の一人である聖パウロは、ローマ人に当てた手紙の中で「肉も食べなければ、ぶどう酒も飲まず」(新訳聖書、ローマ書 14:21)と書きました。

最近、歴史学者たちは古書をたくさん発見しました。その中に、イエスの生活と教えについて新しい理解を与えるものがあります。イエスは言いました。「動物の肉を食べる人は、彼ら自身の墓を造る。あなたがたに正直に伝える。殺すものは殺される。殺生して肉を食う者は、即ち死者の肉を食べるのと同じだ」

インドの宗教も肉食を避けています。「人々は生き物を殺すことなしに、その肉を得ることはできません。生きとし生けるものを傷つけるものは、永遠に神の加護を得られないだろう。だから肉食を避けなさい」（ヒンズー教規）

イスラム教の聖典、コーランも「死んだ動物、血や肉を食べること」を禁じています。

中国の偉大な禅師、寒山も肉食に反対する強烈な詩を書いています。「慌ただしく肉と魚を買い、妻と子に食べさせる。己れを生かすが為、他の命を殺す必要がなぜある。これは天国との良縁ではなく、まさしく地獄の屑になるだけ」

多くの有名な哲学者、科学者、著名な指揮者、アスリート、作家、芸術家といった優秀な人たちは菜食かビーガンでした。以下の人はみな熱心に菜食主義を受け入れました。釈迦牟尼仏、イエス・キリスト、モハメッド、ツォンカパ、アリストテレス、バージル、ホラチウス、プラトン、オーピッド、ペトラルカ、ピタゴラス、ソクラテス、ウイリアム・シェークスピア、ボルトレル、ラビンドラナート・タゴール、レオ・トルストイ、サー・アイザック・ニュートン、チャールズ・ダーウイン、アルベルト・アインシュタイン、アルベルト・シュヴァイツァー、ニコラ・テスラ、レオナルド・ダビンチ、ベンジャミン・フランクリン、マハトマ・ガンジー、アブドウル・カラーム、ヤネス・ドルノウシエク、マルチナ・ナブラチロワ（ビーガン、テニス）、カール・ルイス、パーヴォ・ヌルミ、エドウィンC・モーゼス、ジョルジア・フマン

テイ、トビー・マグワイア（ビーガン）、ナタリー・ポートマン、レオナ・ルイス、マイケル・ジャクソン、ブライアン・グリーン、ジョン・ロビンズ（活動家、作家）などがいます。

アインシュタインは言いました。「肉食がもたらす情緒面での変化と浄化は、人類に対して非常に多くの利益をもたらします。ゆえに、肉食は人類にとつて非常に幸運な、平和なことです。人類は肉食をすべきです」。歴史上の多くの偉人や賢人が共通して助言していることです。

質疑応答

Q 動物を食べることはもちろん殺生になりますが、植物でも殺生に違いないではありませんか。

M 植物を食べるのはもちろん殺生であり、カルマもあります。けれども、カルマはかなり軽いので、毎日二時間半のメデイーションをすれば、カルマを取り除くことができます。生きていくためには、食べなければならぬのです。最も意識が低く、最も苦痛もあまり感じないほど少ない生物を選んで食べましょう。植物は九〇%以上が水分で、その意識レベルも苦痛を感じられないほど低いのです。その上、私たちが食べる多くの野菜に対して、根を切らないで枝や葉を切れば、かえって無性生殖を促すこととなります。その結果、実際には植物にとつては有益になります。ですから、園芸家は花や木を常に刈り込んでこそより大きく、より美しく

育つと言っているのです。

果物についてはもう言うまでもありません。果物は熟すと香りを放ち、美しい色、味などで食べてくれるよう誘い、それによって種を広い範囲にまいてもらうという目的を達成しようとしていきます。もし、私たちが採って食べなかったら、果物は熟し過ぎて土に落ちて、腐ってしまおうでしょう。木の下に落ちて腐ってしまい、その種もその木で太陽の光を遮られ、枯れてしまいます。ですから、野菜と果物を食べる事は、一種の自然の成りゆきで、彼らに苦痛を与えないのです。

Q ほとんどの人が、菜食の人は比較的小柄でやせており、肉食の人は背が高く大きいと考えますが、そうでしょうか。

M 菜食の人がやせていて小柄だとは限りません。食事のバランスが取れていれば、同じようにたくましくなります。大きい動物をご覧下さい。例えば、ゾウ、ウシ、キリン、カバ、ウマなどは野菜と果物しか食べません。彼らは肉食動物よりも強く、そしておとなしく、人間の役に立っています。けれども、肉食動物は凶暴で役に立っていません。人間もたくさんの動物を食べれば、動物の本能と資質に染められてしまうでしょう。肉食者についていうと、必ずしも大きいとは限りませんし、平均寿命は非常に短いのです。エスキモーは肉食を主としています

が、彼らは大きいですか。長生きですか。この点みなさんははっきりとわかっていると思います。

Q 菜食者は卵を食べてもいいのでしょうか。

M いけません。私たちがもし卵を食べれば、やはり殺生になります。現在市場で販売されている卵はみな受精していない卵なので、食べても殺生にならないという人がいますが、これは正しいように思われますが、正しくありません。受精のための適切な環境が整わなかったとき、卵はニワトリになるという自然の目的を遂げることができません。ニワトリにならなくても、ニワトリになるための生まれつきの生命力を持っています。私たちは、卵は先天的な生命力を持つていることを知っています。そうでなければ、なぜ卵は受精できる唯一の種類の細胞のですか。人間の体にとって欠かせない栄養を含むのなら、たんぱく質は豆腐から摂取できますし、リンはジャガイモなどの多くの野菜から摂取できます。

古今の高僧には肉や卵を食べなくても、長寿だった人はたくさんいます。例えば、印光大師は毎回の食事は一皿の野菜とご飯だけでしたが、八十歳という長寿でした。その上、卵の黄味には非常に高いコレステロールが含まれていて、心臓血管の病気を引き起こす最大の原因です。この病気はすでにフォルモサ、アメリカで第一の死亡原因になっています。疑うまでもなく、私たちはその病気の患者の大部分が卵を食べていることを知っています。

Q 豚、牛、ニワトリ、アヒルなどの動物は、人間が飼育して大きくしたのに、なぜ、食べてはいけないのでしょうか。

M 人間も父母に大きく育てられるのです。父や母に子どもを食べる権利はありますか。すべての生き物にはみな生存する権利があります。どんな人間であれ、生きとし生けるものから生存する権利を奪うことはできません。香港の法律は自殺を犯罪と規定しているくらいですから、殺生は非合法的なことです。

Q 動物は本来人類の食用となるために生まれるのであり、もし、これを食べなければ世界中動物でいっぱいになってしまうのではありませんか。

M それはおかしな考えです。私たちが動物を殺す時、動物に殺されたいかとか、食べられたいかと聞いたりしますか。生き物はみな生きたいと望んでいて、死ぬことを恐れています。私たちがトラに食べられたくはありません。それなのに、なぜ動物は私たちに食べられなければならないのでしょうか。人類がこの地球上に存在してからたった数百万年です。けれども、人類が現れる前には、すでに多くの種類の動物が存在していました。動物は地球上にいっぱいになりすぎたでしょうか。生き物は自然の生態上のバランスを保っています。食料がほとんどなく、空間も制限される場合には、急激に動物の数が減少します。これは動物の数を保っているので

す。人口が適切な量に維持されることにつながります。

Q なぜビーガンでなければならぬのでしょうか。

M 私はビーガンです。それは、私の内在の神がそうしたいからです。わかりますか。肉食は殺されたくないという宇宙の法則に反することです。自分自身は殺されたくない、盗まれたくないと思っっています。それで、私たちが他の人々にそのような行動を取ると、自分自身に背くことになり、結局自分を苦しめるのです。他の人に対して行うすべてのことが、自分自身を苦しめるのです。自分を傷つけてはいけません。同様に殺生してはいけません。というのは、生命の法則に反するからです。わかりますか。殺生することは自分自身を苦しめることです。してはいけません。それは私たちを制限することを意味するのではなく、私たちの生命をすべてに生命まで広げることを意味しています。私たちの生命はこの肉体だけに限られているのではなく、動物、そしてあらゆる生きとし生けるものすべての生命にまで広げられるのです。それは私たちをより高貴に、より偉大に、より幸福に、そして無限にしてくれます。よろしいですか。

Q ビーガン（完全菜食）の食事のことと、このことがどのように世界平和に貢献するのか、お話しくださいませか。

M はい。ご存じのように、世界の戦争のほとんどが経済的理由から起こります。考えてみましょう。飢餓が起きたり、食料不足になったり、各国家間の食料配分が不均等であったりすると、国内の経済困難はさらに切迫したものになります。時間をかけて雑誌を読んだり、ビーガンのことを研究したりすれば、ビーガンはともいいということがわかるでしょう。肉の供給のために牛や動物を飼育することは、あらゆる面において私たちの経済を破綻させる原因になっています。世界的な飢餓を引き起こしているのです。少なくとも第三世界の国々においてはそうです。

これは私が言っていることではなく、あるアメリカ市民がこれについての調査を一冊の本にしたのです。みなさんはどの本屋に行っても、ビーガンの調査や食品の生産過程調査についての本を読むことができます。ジョン・ロビンスが書いた「ダイエットフォーニューアメリカ」を読んでも結構です。彼はとても有名なアイスクリーム大富豪です。彼はビーガンになるため、すべてを捨て、彼の家の家風と家業に反するビーガンの本を書きました。彼はたくさんのお金、名声、そして事業を失いましたが、彼は真理のためにそうしたので。とてもいい本です。他にもたくさんのお本や雑誌があり、それらはみなさんにビーガンについての情報や事実を提示してくれます。そしてビーガンがどんなに世界平和に貢献しているかということも。

おわかりのように、牛を飼育することによって、私たちの食料供給は破産に追い込まれまし

た。人間の一回分の食事として提供できるまで牛を飼育するのに、どれほどのたんぱく質、医薬品、水の供給、人力、車、トラック、道路建設、そして何百何千エーカーの土地が浪費されているのかわかりますか。これらの物が均等に開発途上国に配分されたら、飢餓問題は解決するでしょう。ですから、ある国が食料を必要とするなら、自分の国民を救うため、おそらく他の国を侵略しなければならなくなるでしょう。長い目で見れば、このことは悪い結果と報いを生み出すでしょう。わかりますか。「汝のまいた種は、自ら刈らねばならない」のです。もし、私たちが食べ物のために誰かを殺したら、私たちは後で食べ物のために、何か別の形で次回、次世代に殺されるのです。気の毒なことですね。私たちはこんなにも聡明で、文明化されているのに、私たちのほとんどは、なぜ隣国が苦しんでいるのか、その原因を知りません。それは、私たちの味覚や食欲によるものです。人間一人の体を養うために、私たちは多くの生き物を殺し、私たち人間をも飢えさせるのです。私たちは動物についてだけ話しているではありませんか。わかりますか。

この罪は意識的であれ、無意識であれ、私たちの良心の重荷となるでしょう。それは、私たちにガン、結核、そしてエイズを含む様々な不治の病からの苦しみを作るのです。なぜ、アメリカがエイズに最も苦しんでいるのか自問してください。アメリカは世界で一番ガンの罹病率が高いのは、アメリカ人はたくさん牛肉を食べるからです。なぜ、中国や社会主義国ではガ

ンの比率が高くないのか、自問してみてください。彼らはそれほど肉がないからです。わかりますか。これは調査によるもので、私が勝手に言っていることではありませんので、ご了承ください。私を非難しないでください。

Q 私たちがビーガンになって得られる、精神面の利益とは何でしょうか。

M あなたがこのような質問をしてくれてとてもうれしいです。というのは、あなたが精神面の利益だけに注目し、関心を持ったからです。ほとんどの人はビーガンについて質問するとき、健康、ダイエットの方に関心があるのです。ビーガンになることは精神面にとって、大変汚れがなく非暴力的です。神が私たちに、「汝殺生するなかれ」と言ったのは、人間を殺してはいけなと言ったのではなく、この世の生き物すべてを殺してはいけなと言ったのです。神はすべての動物は私たちの友達で、私たちの手助けをしてくれるのだと言いましたか。私たちに彼らの世話を頼みませんでしたか。神は、彼らの世話をせよ、彼らを支配せよと言いました。国民を統治するとき、彼らを殺し、食べたりしますか。そして、まわりに誰もいない王様になるのですか。

そういうことで、神が言われたことがわかったでしょう。私たちはそうしなければなりません。神に質問をすることはありません。神ははっきり語りました。けれども、神以外にいった

い誰が神を理解できますか。ですから、神を理解するために、みなさんは神にならなければいけないのです。

再び神のように、本来のあなたに、唯一無二のあなたになるようお勧めします。神にメデイーションするのは神を拝むことではなく、あなたが神になることを意味しています。自分が神と一体であることを認識するのです。イエスは「私と私の父は一つである」と言ったではありませんか。彼が彼の父と一つなら、私たちも彼の父と一体になれるはずです。というのは、私たちも神の子だからです。そして、またイエスは、私たちはイエスがしたことより良いことができると言いました。ですから、私たちは神より良くなることもあるのです。もし、神について何も知らないなら、なぜ神を拝むのでしょうか。どうして盲目的に信じるのでしょうか。

それは、ちやうど私たちが結婚する前に相手のお嬢さんがどのような人なのか知るべきであるようなものです。今日では、相手とデートする前には結婚しないのが習慣になっています。それなのに、どうして私たちは盲目的に神を信頼し、拝むのでしょうか。私たちには、神が現れるように、そして神のことをわかるように求める権利があります。どの神に従いたいかを選択する権利があります。ですから、聖書ではつきり述べられているように、私たちはビーガンであるべきです。あらゆる健康上の理由から、私たちがビーガンであるべきです。あらゆる科学的理由で、あらゆる経済的理由で、私たちはビーガンであるべきです。あらゆる慈悲の理由

で、私たちはビーガンであるべきです。同時に、この世界を救うために私たちはビーガンであるべきです。

西側の人たち、そしてアメリカの人たちが一週間に一回だけビーガンの食事をすれば、毎年一、六〇〇万人の飢えた人々を救うことができるのです。ということ、ヒーローになりました。ビーガンになりました。これらすべての理由のために、たとえ私に従わなくても、この同じ法門を修行しなくても、自分自身のため、この世界のため、ビーガンになってください。

Q もし、みんなが植物を食べたら、食糧不足になってしまうのではないですか。

M いいえ、そんなことはありません。食糧用の穀物を生産するために土地を使うと、同じ土地で動物の飼料を生産するより十四倍も多く穀物を供給できます。一エーカーあたりの植物が生産するエネルギーは八〇〇キロカロリーですが、もしこれらの植物性の食べ物を動物に食べさせて食肉にすると、たった二〇〇キロカロリーしか生産できません。その過程で六〇〇キロカロリーが失われてしまいます。ですからビーガンは肉食よりも効率よく、経済的です。

Q ベジタリアンは魚を食べてもいいのでしょうか。

M 魚を食べなければ食べても構いませんが、菜食をしたいのなら、魚は野菜ではありません。

Q 人間として善良な心があれば、ビーガンになるまでもないと言う人がいますが、これには道理がありますか。

M 本当に思いやりのある人なら、どうして他の生き物の肉を食べるのでしょうか。彼らが苦しんでいるのを見たり、食べたりすることに耐えられないでしょう。肉を食べるのは無慈悲なことです。善良な人にこんなことができるでしょうか。かつて蓮池大師は「その身を殺してその肉を食べる。この世の中にこの人よりもっと残酷で、陰険で凶悪な人は誰もいない」「それで、どうして彼は自分自身を善良だと主張できるのか」と言いました。孟子も「其の生を見れば其の死を見るに忍ばず。その苦しむ声を聞けば其の肉を食うに忍ばず。是を以て本当の君子は厨房を遠ざくるなり」と言っています。人間は動物より知能が高いので、武器を使い、動物を抵抗できなくさせるので、動物は憎悪を抱いて死にます。このような小さく弱いものをいじめる人間は、紳士という資格はありません。動物は殺される時、極度の苦痛、恐れ、憤りに襲われます。このことが毒素を発生させ、肉の中に残って、人間が食べると害を及ぼします。動物の振動周波数は人間よりかなり低いため、私たちの振動力もそれに影響され、智慧の発達に悪影響が及ぶのです。

Q いわゆる、ご都合主義のベジタリアンになるだけで構いませんか。（それは厳しく肉を絶

つのではなく、肉料理に混ぜられている野菜を取り出して食べることです

M いけません。例えば、食べ物を毒に漬け取り出したら、それは毒だと思いませんか。それとも毒ではないですか。涅槃経で迦葉が、「いただいた食べ物が肉と混じっている時、この食べ物は食べられますか。何か浄化する方法はありますか」と釈迦牟尼仏に聞きました。釈迦牟尼仏は「水で洗い流し、肉と分けた後なら食べてもよろしい」と答えました。このことから、肉と一緒に野菜は水で洗わなければいけないことがわかります。まして、肉を食べることなど言うまでもありません。この話から、釈迦牟尼仏と弟子たちが菜食をしていたということも簡単にわかります。けれども、釈迦牟尼仏を誹謗して、釈迦牟尼仏はご都合主義の菜食をしていた、肉の布施があつたら彼も肉を食べたなどと言う人もいます。これはまったく根拠のない作り話であり、経典の勉強不足か、経典を理解していないことからきている誤解です。インドでは九〇%以上の人が菜食をしています。彼らは黄色の僧衣を着た人が食べ物を求めに来ると、菜食の布施をしなければならぬことを誰もが知っており、また、ほとんどの人々にとつて、布施できる肉などないことは言うまでもありません。

Q 私は以前に他のマスターが、「釈迦牟尼仏が豚足を食べて、おなかをこわして亡くなった」と言ったのを聞いたことがあります。それは本当ですか。

M 絶対あり得ません。釈迦牟尼仏はキノコの一種を食べて亡くなりましたが、そのキノコを表すバラモンの言語を直訳すると「豚の足」となるのです。けれども、それは本当の豚の足ではありません。それは、ちょうど私たちががある果物を指して「龍眼」と言うのと同じことです。植物の名前がついていなくても、実際はベジタリアンの食べ物だということがたくさんあります。「龍眼」がそうです。このキノコがバラモンの言語で「豚の足」「豚の喜び」となるのは、豚と関係があるからです。その種のキノコは古代インドでは見つけにくく、しかも山海の珍味となっていました。それで誠意のある人がそれを取ってきて、釈迦牟尼仏に供養したのです。その種のキノコは地表では見つからず、地下に生えるものなので探す時は、必ずこの種のキノコが好きな年老いた豚を使って探さなければなりません。豚は鼻でその場所をかぎだし、足で土から掘り出して食べるのです。豚の大好物なので、インドではその種のキノコのことを「豚の足」とか「豚の喜び」と言うのです。この二つの名前は同じ種類のキノコのことを指しますが、翻訳する時慎重さが足りず、またその由来を正しく理解していなかったために、後世の人の誤解を招いてしまい、釈迦牟尼仏を「肉をむさぼる仏陀」にしてしまったのです。これはとても悲しむべきことです。

Q 肉が好きな人たちは、食肉処理場の職員が殺した動物なら買ってきて食べても、殺生の戒

律を犯したことにはならないという人がいますが、これは正しいですか。

M これは不幸な間違いです。肉を食べたい人がいるために食肉処理場の職員が殺生するのだ、ということをおわかってもらいたいのです。楞伽經の中で釈迦牟尼仏は、「肉を食べる人がいなければ、殺生は起こらない。だから、肉を食べる側も殺生する側も同様の罪を犯していることになる」と言っています。殺生があまりにも多いので、天災や人災が私たちに降りかかるのです。戦争でさえ、殺生があまりにも多いことにより引き起こされるのです。

Q 植物そのものは、尿酸やウロキナーゼなどの有害物を生成しませんが、果物や青果は業者が植物に殺虫剤をたくさんかけるので、それが我々の健康を害すると言う人がいますが、そうなのですか。

M 殺虫剤や他の毒性の高い化学薬物、例えばD D Tが使われた農産物は、ガン、不妊症、そして肝臓病を引き起こします。D D Tのような毒性物質が脂肪に浸透していき、通常動物の脂肪に貯えられます。そうすると、肉を食べる時には、それらの濃縮された殺虫剤と、動物のその脂肪に蓄積された他の毒物を同時に食べることとなります。動物に含まれるこれらの毒性蓄積物は、果物、野菜、または穀物の十三倍です。果物の表面の農薬はまだ洗い流せますが、動物の脂肪の中に堆積した農薬はどうしようもありません。殺虫剤は累積するので、蓄積過程が

できてしまうからです。こうしてみると、食物連鎖の中でトップに立つ消費者は、最も被害を受けることになります。アイオワ大学で行われた実験では、人体の内から殺虫剤が発見されたのは、ほとんど肉食者であることを示しました。また、菜食者の体内殺虫剤含有量は、肉食者の半分以下であることも発見されました。実際には、肉に含まれる毒性物質は、単に殺虫剤だけではありません。動物を飼育する過程で、早く成長させたり、肉の色や味や身の締り具合を変えたり、また防腐の目的でほとんどの飼料に化学薬品が使われています。例えば、硝酸塩から作られた防腐剤は毒性がとて高いのです。一九七一年七月十八日、ニューヨーク・タイムズは「肉の中の見えない汚染物には、鮭の中にある細菌、残留殺虫剤、防腐剤、ホルモン、抗生物質並びに他の合成添加物と同様、肉食者の健康にとって大きな危険性が隠されている」と報道しました。

その上、動物はワクチンを注射され、それもまた肉に残るでしょう。これに対して、果物、ナッツ類、豆、コーンのたんぱく質は、水に溶解しない不純物を五六%も含む肉のたんぱく質よりも、もつと純粋です。研究によると、それらの合成添加物はガン、その他の病気や胎児の奇形を引き起こします。ですから、妊娠した女性にとって胎児の肉体的、精神的な健康を確実にするためには、ビーガンになることが最善です。豆からたんぱく質を、そして果物と野菜からはビタミンとミネラルを摂取できるのです。

印心—観音法門

スプリームマスターチンハイは真理を知りたいと心から望む誠実な人々に、印心を通して観音法門を伝授しています。中国語の「観音」とは音の振動を観るという意味で、この法門には内在の「光」と「音」の双方を観ることが含まれています。こうした内なる体験は、古代より世界中のさまざまな宗教的文献やスピリチュアルな文献に何度も述べられてきました。

聖書には「初めに言(ことば)があつた。言(ことば)は神と共にあつた。言(ことば)は神であつた」(ヨハネ1:1)と記されています。この言(ことば)が内在の音であり、ロゴス、シャブド、タオ、音流、ナーム、あるいは天上の音楽などとも呼ばれています。マスターチンハイは「それはすべての命あるものの中で振動し、宇宙全体を支えているものです。この内なる旋律はあらゆる傷を癒し、あらゆる望みを満たし、あらゆる世俗の渇きを癒すことができます。それは非常に全能であり、愛そのものです。なぜなら、私たちはこの音から創られているので、交流すると心に平安と満足感をもたらされるのです。この音を聞くと、私たち個人のすべてが変わり、人生観が大きく変わります」と述べています。

内在の光と神の光とは、「悟り」という言葉で呼ばれる同じ光を指しています。その光の強さ

は、かすかな光から何百万個の太陽の輝きにも及ぶものです。内在の光と音を通して、私たちは神を認識するのです。

観音法門の印心は秘密の儀式とか、新しい宗教に入るための式典といったものではありません。印心の間に内在の光と内在の音のメデイテーション（座禅）について特別な注意事項が指示されません。そしてマスターチンハイがスピリチュアルな伝達をします。この最初の神聖な体験は沈黙の内に行われます。あなたのためにこのドアを開けるのにマスターチンハイがその場にいる必要はありません。このスピリチュアルな伝達は法門にとって欠くことのできない重要な部分です。マスターの恩恵なくして、方法それ自体何ら利益をもたらすものではありません。

印心の最中に即座に内在の音を聞くことができたり、内在の光を見ることができたりするため、「即刻開悟」と呼ばれます。

マスターチンハイは、さまざまな背景や宗教を持つ人の印心も受け入れます。現在信じている宗教を変える必要もなければ、信仰を変える必要もありません。組織に入ることを要請されることも、現在の生活にそぐわない方法で活動するよう求められることもありません。

しかしながら、ビーガン（完全菜食）になることが求められます。生涯を通してビーガンを貫くことが、印心を受けるために必要な条件なのです。

印心は無料で提供されます。

印心を受けたあとで課せられることは、毎日観音法門のメデイテーション（座禪）をするこ
とと五つの指針を守ることだけです。指針とは、あなた自身と他のあらゆる生き物も傷つけない
ようにするための指標となるものです。こうした実行が最初の悟りの体験をより深く、より
強くしていくことでしょう。そして、結局は、あなた自身が最も高い悟りのレベルに、また神
性に達するのです。日々の修行を怠ると、悟ったことをまったく忘れてしまい、普通の意識レ
ベルに戻ってしまいます。

マスターチンハイの目的は、私たちに自力で成し遂げることを教えることです。ですから、
私たち誰もが自分でできる法門を教えているのです。何の小道具も、装置もありません。マス
ターチンハイは追隨者や崇拜者、弟子を求めているわけではありません。会費制の組織でもあ
りません。お金や贈り物を受け取らず、礼拝されることも望みません。そうしたことをする必
要はまったくありません。

マスターチンハイはあなたの日々の生活においての誠実さと、聖人へと向上したいというメ
デイテーション（座禪）の修行の誠実さだけを受け入れるのです。

五つの指針

- 一 殺生をしない
ビーガン（完全菜食）を守ること。肉類、乳製品、魚介類、家禽類
- 二 嘘をつかない
卵（有精卵、無精卵も）は食べてはいけない。
- 三 盗みをしない
- 四 邪淫をしない
- 五 酒を飲まない
酒類、麻薬、タバコ、ギャンブル、ポルノ、過度の暴力映画や書物、
テレビゲームなど、心身に悪影響を与えるものは用いないこと。

出版物の紹介

日々の生活において、私たちの霊性の上昇と靈感を得るために、スプリームマスター チンハイの教理の貴重な出版物を、書籍、ビデオテープ、音楽カセット、DVD、MP 3、CDとして入手できます。

出版されている書籍、テープに加えて、インターネットで多種多様なマスターの教理に、無料でアクセスできます。例えば、いくつかのウェブサイトでは、頻繁に発行されているニュースマガジンを紹介しています。(下記の「観音ウェブサイト」をご覧ください) 他のオンライン出版物はマスターの詩、霊性を鼓舞させる甘露法語、ビデオ、オーディオの講義もあります。

更に広く、出版物が供給されていて、現在インターネットから80カ国語以上が入手できます。それはマスターの紹介の小冊子です。どうぞ、下記のウェブサイトにもアクセスしてください。

<http://sb.godsdirectcontact.net/> (Formosa) (U.S.A.)

<http://www.direkter-kontakt-mit-gott.org/download>(Austria)

書 籍

即刻開悟の鍵 スプリームマスター チンハイの講演集

オウラック語 (1~15 巻) 中国語 (1~10 巻) 韓国語 (1~11 巻) タイ語 (1~6 巻)
英語 (1~5 巻) インドネシア語 (1~5 巻) 日本語 (1~4 巻) スペイン語 (1~3 巻)
モンゴル語 (1, 6 巻) ドイツ語 ポルトガル語 ポーランド語 フランス語 (1~2 巻)
ハンガリー語 チベット語 スウェーデン語 フィンランド語 (各1巻)

即刻開悟の鍵 問答集 スプリームマスター チンハイの問答による講演集

オウラック語 韓国語 (1~4 巻) 中国語 インドネシア語 (1~3 巻)
英語 (1~2 巻) 日本語 フランス語 ドイツ語 ポルトガル語 ポーランド語
ロシア語 ブルガリア語 チェコ語 ハンガリー語 (各1巻)

即刻開悟の鍵 特別編 1993 年 世界講演ツアー

1993 年スプリームマスター チンハイ世界講演ツアーの講演集 全6巻

英語 中国語 (各1〜6巻)

即刻開悟の鍵 特別編 禅七 1992年フォルモサ三地門、禅七での講演集

英語 オウラック語

即刻開悟の鍵 マスターと弟子の往復書簡

中国語 (1〜3巻) オウラック語 (1〜2巻) 英語 スペイン語 (各1巻)

即刻開悟の鍵 神奇感應 中国語 オウラック語 (1〜2巻)

マスターが話す「物語」

中国語 英語 オウラック語 日本語 韓国語 スペイン語 タイ語

生命を彩るために 靈性の教理精選集

中国語 英語 オウラック語

神はすべての面倒を見る スプリームマスターチンハイによる智慧の漫画集

オウラック語 中国語 英語 日本語 フランス語 韓国語

光輪がきつすぎる！ スプリームマスターチンハイ 悟りの笑い話集 CD付

中国語／英語

気軽に修行する秘訣 中国語 英語 オウラック語

平和への道 神と直接つながる

1999年スプリームマスター チンハイ ヨーロッパ講演ツアー講演集 英語中国語

神と人間と 聖書物語からの洞察

この特別な選集は、様々な機会にマスターが話された13話の聖書物語が含まれている

中国語 英語

健康を理解するー自然な正しい生き方に戻る

英語 中国語

I Have Come To Take You Home マスターの特別な講義の引用集

英語 ドイツ語 ポーランド語 韓国語 オウラック語 イタリア語 ハンガリー語
インドネシア語 ブルガリア語 フランス語 チェコ語 トルコ語 スペイン語 中国
語 ギリシャ語 アラビア語 ルーマニア語 ロシア語 モンゴル語

甘露法語 1 マスターによる永遠の智慧の宝石

中国語/英語 韓国語/英語 日本語/英語 ドイツ語/フランス語
スペイン語/ポルトガル語

甘露法語 2 マスターによる永遠の智慧の宝石

中国語/英語

スプリームキッチン 1 世界のベジタリアン料理集

英語/中国語 日本語訳 (別冊) オウラック語

スプリームキッチン 2 家庭料理集 英語/中国語

音楽を通して、平和な一つの世界を ロサンゼルスでの慈善コンサートの

インタビューとミュージカル作品集 中国語/英語/オウラック語

スプリームマスター チンハイ 芸術創作集 中国語/英語

セレスチャルクローズ集 (6) 英語/中国語(1~6 巻)

ドッグ イン マイライフ 1, 2

マスターが彼女の犬の仲間について愉快な実生活を出版 2冊の本は500ページ
オウラック語 英語 中国語 日本語 韓国語 スペイン語 ポーランド語 ドイツ語

バード イン マイライフ

美しいイラスト集 マスターは動物の霊性世界を開かせる秘密を示す
英語 中国語 オウラック語 フランス語 ドイツ語 韓国語 モンゴル語 ロシア語
インドネシア語 アラビア語

気高い野生動物

マスター自ら愛情込めて撮影した写真によって構成 美しい詩、素晴らしい写真が満載 奥深い記録物語の中で彼女の湖畔探索を話し、動物の友が生まれ持つ気高い品性について啓示

英語 中国語 オウラック語 フランス語 ドイツ語 韓国語 モンゴル語

セレスチャルアート

セレスチャルアートは作者が真実と徳、天上の美を反映するため、スピリチュアルな視点から芸術創作を解き明した卓越した作品集です 読者はスプリームマスターチンハイによるアートの無限の世界へと招待され、神の共鳴を通して引き上げられます 詩人としての奥深い感情、画家としての精妙な筆使い、デザイナーとしての独創的なアイディア、そして音楽家としてのロマンチックな心に、深い感銘を受けます。何にもまして靈性の師としての智慧と慈悲心とを祝福と共に知るでしょう 中国語/英語

危機から平和へ

オウラック語 中国語 英語 オランダ語 韓国語 フランス語 ハンガリー語 インドネシア語 日本語 ノールウェイ語 スペイン語 スウェーデン語 タイ語 ポルトガル語ポーランド語 ロシア語 ルーマニア語

Thoughts on Life and Consciousness Dr. Janez 著 中国語

The Real Love 英語, 中国語, オウラック語

珍愛沈黙の涙 英語, 中国語, オウラック語

詩 集

<書 籍>

沈黙の涙 マスター著作の詩集

ドイツ語/フランス語 中国語/英語 オウラック語 英語 スペイン語 ポルトガル語 韓国語 フィリピン語

- 無子詩 マスター著作の詩集 オウラック語 中国語 英語
- 胡蝶の夢 マスター著作の詩集 オウラック語 中国語 英語
- 過去の足跡 マスター著作の詩集 オウラック語 中国語 英語
- 懐かしき日々 マスター著作の詩集 オウラック語 中国語 英語
- Pebble and Gold マスター著作の詩集 オウラック語 中国語 英語
- 失われた思い出 マスター著作の詩集 オウラック語 中国語 英語
- 世紀を超えた愛の人 マスター著作の詩集

オウラック語 中国語 英語 フランス語 ドイツ語 韓国語 モンゴル語 スペイン語

<MP3, MP4 & DVD>

- 時空を超えて(オウラック語の歌唱) MP3 ,MP4&DVD
- A Touch of Fragrance (著名な歌手によるオウラック語の歌唱) MP3
- That and This Day(オウラック語の朗読) MP3
- 夜の夢(オウラック語の歌唱) MP3,MP4&DVD
- T-C-L Please(オウラック語の歌唱) MP3
- Please keep Forever(オウラック語の朗読) MP3
- スプリームマスターチンハイ歌曲集 英語 オウラック語 中国語 MP3

愛の歌 英語 オウラック語DVD

Good Night Baby 英語 MP3

珠玉の詩(著名なオウラック語の詩から オウラック語の朗読)

MP31、2,MP4,DVD1、

2黄金の蓮(オウラック語の朗読) MP3&MP4,DVD

スプリームマスター チンハイの美声を通して、Thich Man Giacの美しい詩の世界に誘う 黄金の蓮、さよならの2曲を朗読

Ancient Love(オウラック語の朗読) MP3,MP4&DVD

過去の足跡(オウラック語の朗読) オーディオテープ&MP31、2、3 ビデオテー

プ1、2 (17カ国語字幕)

A Path to Love Legends オーディオテープ&MP31、2、3 ビデオテー

プ2 (著名なオウラックの詩 オウラック語の朗読)

*A Path to Love Legends、Ancient Love、時空を超えて、夜の夢、Please keep Forever、That and This Day、過去の足跡、珠玉の詩、黄金の蓮、T-C-L Please は、彼女自身曲をつけ、歌唱している

音楽カセットテープ&MP3

マスターから私たちへの音楽の贈り物は、琴、琵琶などの伝統楽器で演奏された、仏讃、詩、オリジナル曲が含まれます。多くの音楽曲や講義はカセットテープやMP3共に入手できます

仏讃 CD1、2、3(メディテーション 仏讃)

Holy Chanting Hallelujah

マスターの作曲による作品集 MP3(1-9) オリジナル曲はdulcimer

ハープ、中国琴、電子ピアノなどで演奏されています

私たちへの連絡方法

スプリームマスター チンハイ インターナショナルアソシエーション

中華民国 36899 苗栗西湖郵政九號信箱

P.O.Box730247, San Jose, CA95173-0247, U.S.A

スプリームマスターテレビジョン

Eメール: Peace@SupremeMasterTV.com

Tel: 1-626-444-4385 / Fax: 1-626-444-4386

書籍部

Eメール: divine@Godsdirectcontact.org

マスターの出版物を各国言語に翻訳してくださる方を大歓迎いたします

ニュースグループ

Eメール: lovenews@Godsdirectcontact.org

S.M. セレスチャル社

Eメール: smclothes123@gmail.com; vegan999@hotmail.com

Tel: 886-3-4601391 / Fax: 886-3-4602857

<http://www.smcelestial.com> <http://www.sm-celestial.com>

スピリチュアルインフォメーションデスク

Eメール: lovewish@Godsdirectcontact.org

スプリームマスター チンハイ インターナショナルアソシエーション出版社

フォルモサ・台北

Eメール: smchbooks@Godsdirectcontact.org

Tel: 886-2-23759688 / Fax: 886-2-23757689

<http://www.smchbooks.com>

オンラインショップ

Celestial Shop: <http://www.theCelestialShop.com>

Eden Rules: <http://www.EdenRules.com>

ラビングハット インターナショナルカンパニー

Tel: 886-2-2239-4556 / Fax: 886-2-2239-5210

E メール: info@lovinghut.com

<http://www.lovinghut.com/tw/>

観音Webサイト

神と直接繋がる…スプリームマスター チンハイI.A.の観音Webサイトにリンクしてください

<http://www.godsdirectcontact.org.tw/eng/links.htm>

こちらから各国語の観音Webサイトにアクセスできます。また24時間放送のネットTV「SMTV」「芸術と靈性」などの番組をご覧いただけます。各国語の「即刻開悟の鍵」小冊子のダウンロード、「ニュースマガジン」の購読、電子版をダウンロードができます。ライン上で閲覧もできます。

スプリームマスターテレビジョン

スプリームマスターTVは主にポジティブな番組を放映するチャンネルで、新しい靈的視野を提供し、あなたの人生を充実させます。24時間放送の「スプリームマスターTV」は次のWEBサイトでご覧ください。

<http://www.suprememastertv.com>

《即刻開悟の鍵》各国語の小冊子 無料ダウンロードサイト (80カ国語)

<http://sb.Godsdirectcontact.net>

<http://www.direkter-kontakt-mit-gott.org/booklet>

即刻開悟の鍵 1

著 者 スプリームマスター チンハイ
翻 訳 日本翻訳グループ
発 行 所 スプリームマスター チンハイ
インターナショナル アソシエーション出版社
住 所 台北市中正区忠孝西路一段 72 号 8 楼之 16
電子書初版 2016 年 3 月

本書は著作権を所有していますので、許可なく転載することを禁じます。

私たち The Supreme Master Ching Hai に学ぶ者は、究極の真理を探求するなかで、苦難を経験してきました。ですから、私たちはもともと内在している智慧を目覚めさせ、この真理を認識させる最高の法門を教えてくれる、完全に開悟した在位のマスターをみつけることが、どれほど困難で稀なことかを理解しています。そして、この法門は古代よりあらゆる真のマスターたちによって教えられてきたのです。この法門を実行することで、深い利益が得られることを体験してきた私たちは、一世での魂の永遠の解脱を心から望んでいる真の探究者や、人生や生死、精神修行や真理に関するさまざまな疑問に答えを見いだそうとしている人々の手助けとなるよう、The Supreme Master Ching Hai が世界各国で行った講演集をここに贈ります。